王様のいないナザリック (完結)

紅絹の木

主(女性、原作知識あり)がいなくなったモモンガさんを探しつつ、NPCを愛で モモンガさんのみ別の場所に転移してます。 ナザリックでは 42人目の転生オリ

以下、ご注意ください。

オリジナルNPCが多数います。至高の御方が 4 人帰ってこられる予定です。

酷い目に遭っています。)ウェブ小説、原作小説、ア

ります。ご都合主義あります。 Ll 、 Cl 表現あります。 ニメ、特典小説、ドラマ CD、コミックなどネタバレ含みます。オリジナル設定あ

(それぞれ異世界に来る前に、

他作品のキャラクターがNPCとして登場します。

【CP 表記】

デミウルゴス×コキュートスです。オリNPC×オリ主です。増える場合は、随

時書き込ませていただきます。

数話まとめて投稿する方針です。

ハーメルンでは初投稿になりますが、皆様と同じくオバロを楽しみたいと思って

Pixivでは「モモンガの夢」を置いております。 いただいた感想、批判、誤字報告などは、すぐに返信できない場合がございます。

おります。何卒よろしくお願いします。

ご容赦ください。

「完結」しました!長い間ありがとうございました。

今後はちょっとだけ小話を投稿させていただきます。

世界	前菜	燃え	パイ	準備	それ	完璧	帰っ	村を	ナザ	みん	宝物	自作
級を得ろ		燃え上がるは勇気の炎	パインの部屋	準備をしよう。	それぞれの関係	完璧超人始祖	帰ってきた!	村を救え!	ナザリック側始動。	みんな集まって。	宝物殿へ。 …	自作NPC …
世界級を得ろ!謎の鎧との戦闘					係				始動。	~ :::		
との戦闘												
!!												

失う日常	さらば、カルネ村!	続いた夢の先	ナザリックが大切で、大事なんだよ。	お迎えまでのタイムリミット	シャルティアに許可もらってますか?	希望の星	アインラードゥン	大仕事を終えたナザリック	新たなる英雄たち	冒険者組合での話し合い	ブレイン・アングラウスさんの入社試験。	報告会

	シリーズメモ2 少なめ	パインとメイドたちの日常。	シリーズメモ。	赤い君と青い君。	魔女の館、メイドたちのメモ。	恋のススメ	こぼれ話	感謝と謝罪とか言い訳とか。	楽しかったんだ
--	-------------	---------------	---------	----------	----------------	-------	------	---------------	---------

459 452 447 439 434 423 423 419 411

最終日

DMMO-RPGとは、 簡潔に説明すると、体感型ネットゲームのことである。

えば各クラスをレベル1ずつ取得することが可能なゲームなのだ。 ない限り、 ベルは、最高 基本職、 誰かと被ることはない、自分だけのキャラクターを作れるのだ。 上級職は合わせて 2,000を超えている。そして職業(クラス) !で 15 まで。プレイヤーの上限レベルは100。つまり、やろうと思 意図的に行わ のレ

種族のレベルはないが、ほとんどペナルティを受けない人間種(人間、ドワーフ、 これらは、 大きく3種類に分けられる。

やドワーフ、エルフ以外にもモンスターを選ぶことができるのだ。

加えて〝種族〟は基本と上級を合わせて700種類に及ぶ。プレイヤーは、人間

一緒にいました。

1

エルフなど)。

2 種族レベルがあり、外見は醜いが、人間種よりも性能が優れる亜人種(ゴブリン、

オーク、オーガなど)。 こちらにも種族レベルがあり、最も性能は良く、モンスター効果を持つものの

様 々なペナルティを受ける、異形種 (ビジュアル)だって、別売りのクリエイトツールを使用すれば自分好みに (悪魔や天使、ゾンビ、ゴーストなど)。

所の詳細な設定など。プレイヤーの外装や、特定条件を満たすことで得られる自作 武器防具、 装備できるものはもちろん、それらの内包するデータ。住居となる場

変更できる。

のNPC(ノンプレイヤーキャラクター)の外装も。プレイヤーが作れるものは、

職や外装だけではない。ゲームの世界も広かった。

すべて変更できるのだ。

トゥンヘイム。 アースガルズ。アルフヘイム。ヴァナヘイム。ニダヴェリール。ミズガルズ。 ニヴルヘイム。ヘルヘイム。 ムスペルヘイムの9 つの世界。 彐

広大な世界、 把握しきれそうにない種族と職業、いくらでも弄ることができる外 3

だ。日本でDMMO―RPGといえば゛ユグドラシル゛を差すほどの評価を得たの これらは、凝り性な日本人にニトロをぶち込む結果となり、爆発的な人気を呼ん

`かし、約 10 年前サービスを開始したDMMO―RPG ″ユグドラシル# は、

今日で終わりを迎えようとしていた。

だ。

装。

「お久しぶりです。 「お久しぶりです、ヘロヘロさん」 おかえりなさい」

「おひさーです。モモンガさん、パインさん」

灯りがない夜のように黒い色を放つ巨大な円卓を、囲む〝42人分〟 の豪華な椅子。

そのうちの、 3 席に怪物の影があった。

一人は肉が一切付いていない真っ白な骨が美しい骸骨、 種族:オーバーロード。

な黒色の

ガ

ゥ

名はモ

4

ガ。

種 モン 族 B .. 工 ル 体は黒いスライムで、一秒も同じ姿を保たず、どろどろとうごめいて ダー・ブラック・ウーズ。どろどろとうごめくのは、ゲームの仕様 なの

は 浮 帽 でやめることはできない。 金で縁取られている。 かんでいる。 最後は、 を被 気ってい この中で唯 上着は白く、 る。 そし 一の女性。 襟は長めで、顎下まであり、 名は て肩か 非常に丈の短 ヘロ 顔は ら上部分がない―つまり首が ^ 真っ黒で、 ロ い―鎖骨あたりまでしか 凹凸のない球体。 ない 首が隠れてい な い 大きな な た い。 め た。 ″魔女の 体 その 頭部 :のラ 裾 が

杖を所 法職。 先端 持して |が二股に分かれ、その中央に直径10cm程の丸いエメラルドが浮かぶ いる。 名はパイン • ッ ij

インに

沿う赤のドレスは腰辺りから、少し膨らんでいる。

現在は、

種族:魔女で魔

口 ヘロがリアルで転職して以来の再開に、 モモンガとパインははしゃ い でいた。

「えー…もう2年ぐらい会ってないんですかね?」

いな…。最近残業が続いて、時間の感覚が変なんですよ」 「それぐらいになりますね。 2 年かあ…うわ。もうそんなに経つんですね。やば

「それ危なくないですか?体大丈夫ですか?」

「医者にかかるほどではありませんが、かなりやばいです。」

三人が所属するギルドは、社会人のみで構成されている。そのため、 会話は自然

と会社の愚痴へと変わっていった。

レ 残業が ッドと評価されていた。今聞こえてくる声も重く、疲れていることがわか :続くと言ったヘロヘロは転職できたものの、以前から健康診断で内臓が

やがて、ヒートアップしだしたヘロヘロに対し、モモンガとパインは聞き役へシ

フトしていった。

5

一緒にいました。 会話から読み取れるだろう。 なことを思い出したくないからだ。 ゲームの世界で、現実の話はあまりされない。楽しいことをしている最中に、嫌 リアルは厳しく、希望がない。それは3人の

6 ル・ゴウンは、社会人であり、異業種を選択した者が加入できた。その為、よくリ このギルド―プレイヤー仲間で構築され、組織運営されるチーム―アインズ・ウー

·かし、三人はリアルの話に対して忌避感はない。

アルの話はされていた。会社の愚痴の言い合いは、日常であり…今では懐かしい思

かしんだ。

い出である。

モモンガは、

まだギルドメンバーが大勢ログインしていたころを思い出して、

懐

話 にし始めて数十分後、ヘロヘロの熱がようやくひいてきた。

「すみません、俺ばっかり愚痴言っちゃって…。リアルじゃ言えないんですよね、

こんなこと」

頭部がプルンと揺れた。多分頭を下げたのだろう。

「ん?彼女いないんですか?」 俺が声をかける前に、空気の読めない声が飛び出してた。

ビキリ。

男たちにヒビが入った。

て、次もお互いが忌避なく会えるようにしないと…。 ませんか? お疲れなのは理解できます。でも…ユグドラシル最終日だし、久しぶ りにヘロヘロさんに会えたし、もうちょっと喋りたいというか」 「…パ、パインさん!」 「いや、 「失礼なこと聞いてしまって、すみません。それから、あの、今日は最後まで残り この人はなんでデリケートな話題を、前振りなくぶっ込んでくるんだ!! 相手の都合も考えて話してくださいってば」

るのがこれきり…そんな悲しい終わり方は耐えられない。どうにかこの場を収め を引いてくれる人なのに今日は強引だ。ゲームの最終日に嫌な思いをさせて、会え 前のめりになる魔女は、骸骨の制止を聞かない。たまに暴走するが、止めれば身

一緒にいました。 「パインさん相変わらずですね。ふふ…前に会ったころと全然変わってない」

モモンガは頭を抱えた。しかし、ヘロヘロが「あはは」と明るく笑ったことで杞

「そうでしょうか?んー…大きな変化が訪れていないせいですかね」

憂に終わる。

7 「私にも、大きな変化は訪れていません。あー…モモンガさんは、どう、ですか?」

「私は……私も、ないですよ」

8

「そ、そうですね」

「そうでしたか。はは…みんな独り身ですね」

嫌な思いをしているわけではないようだ。ほっと息を吐く。 沈んだ声になるが、相手も同じだと少し安心できた。なにより、ヘロヘロは特に

「ですねー。 パインさんがグイグイと攻める。はっきり口にしていないが、「残りますよね」と …それで、どうでしょう。残りますか」

…本当に、今日は特に押しが強いなあ。どうしたんだ、この人。まあ、 その質問

強要していた。

は 俺も聞きたかったから、止めないけど。

「えーと、その。すいません。本当は最後までご一緒したいんですけど…さすがに

残れないのか、そっか。…寂しいな。

眠くて」

感情が声に乗らないように気をつけて、 努めて明るく言っ

「……そうですよね。お疲れですもんね。ゆっくり休んでください」

「…引き留めてしまって、すみません。温かくして、寝てくださいね」

んですか?」 「こちらこそ、愚痴ばっかり言ってしまってすいません。…お二人は、どうされる

「私はサービス終了の強制ログアウトまで残りますよ。ギルド長も残られますよね」

「ええ、そう考えています。もしすると、他のメンバーも来てくれるかもしれませ

んから」 「そうですか。…でも、正直ここがまだ残っているなんて思っていませんでした」

な いから、ヘロヘロに知られることはないだろう。そして、こみ上げた感情を見せ 現実のモモンガの顔が、歪む。しかし、ゲームのアバターに表情を変える仕様は

る訳にはいかないから、声を出せない。 人生で、はじめてできた仲間たちと作った場所だから、必死に維持したのだ。残

·緒にいました。 業して疲れていても、次の日の出社が早くて少ししか眠れなくても。パインさん だって、一緒に頑張ってくれて。俺以上に、ギルドに必要な維持費を集めてくれた。

形容しがたい感情が胸で渦巻いていたが、次の一言で霧散する。

仲間の一人から、そんな言葉なんて聞きたくなかった。

最終日 こうして最後にアインズ・ウール・ゴウンに帰ってくることができました。…感謝 「モモンガさんとパインさんが二人で、維持してくれたんですよね…おかげで俺は、

10

します」

「ヘロヘロさん…」

ド長として当然ですよ」 「…パインさん。モモンガさんがギルド長だったから、俺たちはあれほどにゲーム

「……皆で作ったものですからね。誰が戻ってきてもいいように維持するのはギル

を楽しめたんですね」 「ですです。モモンガさんがギルド長だったから…皆さんと一緒だったから、私は

このゲームを楽しめました。…次に、皆さんと会うときは、ユグドラシルⅡだとい

いですね」

「それ、俺も同じことを考えていました。また集まれたらいいんですけど」 ゚ユグドラシルⅡですか…噂を聞いたことはありませんが、本当にそうだったらい

いですね」

「そのときはぜひ!じゃ…そろそろ寝落ちしちゃいそうなので、アウトします。…

最後にお二人にお会いできて嬉しかったです。 お疲れ様です」

「私も嬉しかったです。…お疲れ様でした」

「体、壊さないように気をつけてくださいね。…お疲れ様でした」

すく感情を表現するため、このゲームには感情(エモーション)アイコンがある。 3 人それぞれの頭上に、笑顔のアイコンが浮かぶ。プレイヤー同士でわかりや

その言葉を最後に、ヘロヘロの姿が消えた。ログアウトしたのだ。

「またどこかでお会いしましょう」

42人のうち、37人が引退した。そして今日来てくれた、3人のメンバー―その

最後の一人がログアウトした。 これで本当に、俺とパインさん2人だけになってしまった。

「ヘロヘロさん、今日はゆっくり休めるといいですね」

一緒にいました。 「そうですね。一人暮らしだと、体壊したら大変ですし」

11

気休め程度の言葉を交わし、俺たちは黙った。

12

正

確には、

俺が黙った。

彼女はモモンガを見ておらず、キョロキョロと頭を動かしていた。 ゆっくりと、ヘロヘロがいた席からぐるっと見回して、最後にパインを見る。

「…何度も見てますけど、ここに人がいないって変な感じですね。今にも皆さん

帰ってきて、大騒ぎになっちゃいそうです」

「あはは、そうなったらいいんですけどね」

本当にそうなったらいいのに、という気持ちを込めて言う。

「だといいんですけど。…モモンガさん、どうします? 残りますか? 」

ズ・ウール・ゴウン。最後まで悪のギルドっぽくありたい」 いいえ。最初に決めていた通り、玉座で最期を迎えましょう。…私たちはアイン

魔王様、玉座にてお会いしましょう」 「わかりました。…では、ワタクシはこれから宝物殿へ赴き、支度して参ります。

待っているぞ、人任せの魔女よ」

宝物殿へ転移したのだろう。 頭部 の球体が上下した後、 魔女の姿がかき消えた。

į, ک

一緒にいました。 それぞれ効果が違う宝石を一つずつ咥えている。

テムは、誰かがこのアイテムを設置した部屋に入ると、中に書かれているメッセー 円卓の中央に、あらかじめ用意しておいた手紙を置いた。この手紙に見えるアイ

ジが浮 す。 モモンガとパインより」と書かれている。もしかすると、来るかもしれな :かぶという物だ。中には「来てくれたギルドメンバーへ。玉座 一の間 に いメ いま

ンバーへの手紙だ。

向 「それじゃ、行くか」 皆が かう先には、我らのギルド武器がある。各ギルドに1つしか所持できないもの。 褒めてくれた「魔王」に相応しい装備に着替え終わると、席を立ち上が つ た。

ギルド長しか所持できないもの。

ギ アインズ・ウール・ゴウンの象徴、七匹の蛇が絡まった複雑な形をした杖。蛇は、 ・ルド武器:スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン。

手を伸ばし、 黄金 の杖を掴 汲取 る。

13 その瞬間、 赤黒いオーラが揺らめき立ち上がった。

14 杖に内包されるデータ―アイテムの効果、スキルなどの力は、ゴッズを遥かに超

「ヘロヘロさんが来る前に見たけど、作り込み凄いな」

えて世界級(ワールド)に匹敵する。

アイテム。ゲームバランスを崩壊させかねない効果を持っているワールドアイテ 全アイテムの頂点に位置する物。ユグドラシル上に200種類しかない、至高 0

「パインさんと今日まで探してみたけど、 、ービス開始から約12年も経っているのに、すべてのワールドアイテムが 11個から増えなかったんだよな」 · 発見

ム。

悪態を言いつつ、モモンガは円卓(ラウンドテーブル)と名付けられた部屋を後

されてないってどうなってんだよ。ユグドラシル広すぎ。運営は糞すぎ。

[亜の宮殿。神々が住む王宮。

そんな称賛こそが、最も似合うナザリック第九階層を歩く。

この妥協がない作り込みこそ、彼らが本気でユグドラシルを遊んだ証になるだろ

一緒にいました。 引 事 き &

15

「お待たせしました」

う。そして、その思い出は、すべてが輝かしいナザリックの黄金時代である。

皆で休日を合わせて、攻略不可能と言われたボスに挑んだ。

り一層強まった。お喋りだけで、一日がつぶれた。馬鹿な話ばかりした。 かつてダンジョンだったナザリックを、初見で攻略でき、おかげで皆との絆がよ

サーバーきっての大軍、 約1500人のプレイヤーに攻められ、そして全滅させ

「(もう終わるのか。 ……すべて、なかったことになるのか。)」

るという伝説を作り上げた。

沸き上がる寂寥感は、 サービス終了を止められないという無力感によって、さら

に

!膨れ上がった。

引き連れて玉座の門を開けた。 事も行う執事セバス。その部下で計 6人の戦闘メイド、チーム名プレアデス―を 途中、第10階層で待機していたNPCたち―家令(ハウススチュワード)の仕

最終日 「さほど待っていませんよ。

ギルド長」

16 くつもの豪華なシャンデリアが釣り下がっている。それは7 色の宝石で作り出さ 玉 座の間。 数百のシモベを並べても、なお余る広さ。見上げる高い天井には、い

れ、幻想的な光を放っていた。

壁には、 天井から床まで大きな旗が計 42 枚、一定間隔で飾られている。一枚ず

それぞれのギルドメンバーを表していた。

B つ違う模様は、 たれ 部屋 が天井までありそうなほど高い玉座があった。その背後の壁に、 の最奥、 十数段の階段がある。その上に水晶から切り出されたような、 背

ウー 玉座の前には一体のNPCと人間がいる。 ル・ゴウンのギルドサインが施された深紅の布が下がっている。

〈間がパインさんで、美しい黒髪の美女がアルベド(NPC)だ。

い。この条件を、満たして得られる特典だからだ。配置したNPCは、拠点を守っ ルドの本拠地にNPCを配置するには、"城以上の本拠地を所持する、

しかな

てくれる戦力になる。

ギ

そして、拠点NPCには2つに分かれる。

できな いが、殺されてもギルドに出費がない。POPできるのはレベル 30 までと 自動 (で湧き出る(POPする)NPCがいる。これらは外装、AI を変更

決まっているため、最高レベル100のユグドラシルでは使い物にならない。 とは別に、完全に一から自作できるNPCがいる。拠点によって違うが、最

る。 が4人といった具合に作るのだ。 アルベドというNPCだ。 「でも700レベルポイントを割り振る。例えばレベル100が5人、レベル50 な POPするものよりも遥かに強い警備兵を配置することができる。 我らアインズ・ウール・ゴウンの本拠地、ナザリック地下大墳墓は7 外装、レベル、種族、職業構成、所持武器などが それがセバスたちであり、玉座の傍で待機する V

「セバスたちも連れてきたんですね。どこに並ばせますか?」

00レベルポイントではなく、もっと高いポイントを獲得している。

緒にいました。 姿どちらにでも変更できる。そして種族を変更すると、取っている職業も変化する 玉座 の下にしようかと思っています」 は宝物殿に預けてい

た

"魔女専用アイテム』を使うことで、人間、

魔女の

17

18 く、肩より少し上で切り揃えている。前髪は目元にかかり、右端から 4 割を耳に し丸めで、優しそうな雰囲気を醸し出す、可愛らしい美女だ。エメラルドの髪は 20代の女性。緑色の目は、植物の生命力を感じさせる色をしている。目元が少 短

を広げたようなモチーフの膝当てをつけ、先端だけ茶色の真っ白なブーツを履いて からズボンに変わっていた。体のラインに沿った作りはそのままである。 かけ、 6 割はそのまま流している。装備品は、人間の姿になったことでスカ まるで翼 1

がくっつくように、ぴたりと収まっている。 武器 は、 杖から巨大な〝ハサミ〟に変わっていた。ハサミは背中に、

いる。

イベントで〝見た目が人間になれる〟職業と種族を手に入れ、現在の見た目になっ

パインは元々、スケルトンウォーリアーだった。しかし、魔法少女の職が取れる

つまり、 人間種に見えるが、本当は異形種なのだ。

「できますよ。魔女の姿は見た目固定ですけど、こっちは変えられるんです」 「久しぶりですね、人間の姿。それだと、他の装備に変更できましたっけ?」

は、外せますけどね」

玉座の前でセバスたちを待機させると、自らは階段を上がっ

モモンガは、

「あー、本体ですか?これは外れないんですよ。さっきみたいに魔女になるとき

「たしか頭に付けてるアクセサリーは、別なんですよね?」

ンガ パインが が :玉座に座り、やっと最後の瞬間を迎える準備が整った。 :アルベドから離れ、ちょうど彼女と対になる玉座の反対側に立つ。 モモ

「はじめは私たちと、アルベドだけの予定でしたが、いいですね。セバスたちがい

一緒にいました。 てくれると、グッと雰囲気が重厚になります」 ピョコン。モモンガの頭上には笑顔のアイコンが出た。 ピョコンと、サムズアップする笑顔の感情アイコンが、パインの頭上に出てくる。

「そう言ってもらえると思って、連れてきました。それで、なぜアルベドがワール

19 「タブラさんが、持たせたのではないでしょうか。見たときは驚きましたけどね」

ドアイテムを所持しているんですかね?」

「タブラさんが…」

20 アインズ・ウール・ゴウンは多数決を重視していた。だからこそ、皆で頑張って

手に入れた宝を、勝手に持ち出していいとはずがない。

のまったく気にしていない様子。ならば、このままでいいか。 軽 い不快感から、アイテムを奪い取ろうかと考えた。しかし、今ここにいる仲間

キストコピーして家でも読めるようにプリントアウトしてるんですけど、 「あ、モモンガさん。アルベドの設定をちゃんと読んだことありますか ?私はテ 長いです

よね。さすが設定魔のタブラさん。細かい!読むのめっちゃ楽しかったです」 「設定にやたらと凝る人でしたからね」

そして、その本が一冊できそうなほど長いテキストを、飽きずに読んで楽しむの

構成にするためにレベル 80 以上も落として、元のスケルトンウォーリアーか がパインさんだ。 パインさんも凝り性というか、自分の好きなものを曲げない人だよな。今の職業 ?ら作

ユグドラシルでは、体力が 0 になると "ゲームオーバー" になり、デスペナル

り変えたんだ

んから。

後回しにしちゃって…ははっ」 なる時期を外してクラスチェンジが行われた。あの時のパインさん、熱かったな~。 承 時的だが、戦力外になるためギルドメンバーの迷惑にもなりうる行為だ。それらを るので、これを繰り返せば手間と暇がかかるものの、職業構成を選び直せた。 ティを受ける。その1つに〝レベルダウン〟がある。死ぬと5レベル分ダウンす のも最後ですよ」 「……なら、今読みませんか? アルベドと会えるのも最後ですし、ナマで読める 「そういえば、アルベドの設定をちゃんと読んだことがないんですよね。 |知の上で、彼女は仲間に頼み込み、話し合いの結果、イベントなど戦力が必要に)かし、レベルが高くなれば上がりにくくなるので、大変面倒くさい。そして一 長いから

てもらえますか?」

「なんですかナマって。でも、そうですよね。最後だし読んでみます。少し待って

一緒にいました。 俺は急いでアルベドの設定を開く。テキスト量が量なので、斜め読みならぬ頭文 いですよ」

21

22

字読みになってしまう。 詳細は

パインさんがプリントアウトした物で確かめよ

ようやく訪れた終わりの一文で、モモンガの思考が止まった。

『ちなみにビッチである。』 「え、なにこれ」

「あ、最後の一文読みましたか?」

「ええ。これって、つまり…そういう意味ですよね?」

プ萌え〟だとしても、ナザリックにいるNPCの最上位にいるのに、これじゃあア 「罵倒の意味のビッチでしょうね。…正直、少し引いちゃいました。いくら ゙ギャッ

ルベドが可哀そうで…」

俺もそう思う。斜め上の方角に飛んで行った設定を考えるタイプの一人であっ

た、タブラ・スマラグディナという仲間。ギャップ萌えを愛する男だった。

でも、タブラさん。幾らなんでもこれは酷くない?

「うーむ」

ギルドメンバーが作ったものを、個人の感情で勝手に変えてしまっていいものか。

「あの、 設定変えちゃいませんか?女の子にこの設定は、やっぱり酷いですよ」

「ふむ…うん。いいですよ。俺も酷いなって思いましたから」

現メンバーの後押しで、自らの迷いを打ち砕く。 スタッフをアルベドに突きつける。本来、NPCの設定を変えるにはクリエイト

ツー すぐに最後の一文が消え去った。 ルでなければ操作できないが、ギルド長特権を行使すればその手間はなくなる。

「はい、消えましたよ」

「 は ?

「ありがとうございます、 モモンガさん。では、空いた隙間に打ち込みましょう」

ち着かないっていうか。埋めたくなりませんか? 」 「だってみっちり容量いっぱい書き込まれているのに、隙間があるってなんだか落

一緒にいました。 「"ちなみにビッチである。、と文字数がぴったりなんですよ。ぱっと思いついた文 「゛モモンガを愛している。゛ 「まあ、そうですね」 「は?……はあ!!」 なんてどうですか?」

にしてはイケてると、思います!」

「でも、えーそれって。すごい恥ずかしいですよ!」

24

「いいじゃないですか。それぐらい遊んだって。別に悪いことをしていませんよ。

ただ、社長に恋する秘書というシチュエーションをこの場に作っていただきたい

と、私はそう思うのです」

れる相手がくっつく。その関係性は、結婚後も続くハッピーエンドの布石ですよ」 「大好きです。大好物です。だって素敵だと思いませんか?尊敬できる相手と、 「…好きですね、上司と部下のセット」 頼

「ハッピーエンドですか」

いつまでも栄光と共に。そんな意味も込めている、つもりです」 「ハッピーエンドです。……ユグドラシルが終わっても、ナザリックは終わらない。

俺 彼女の真剣な言葉に、胸が打たれた。 "たちはナザリックがなくならないように、毎日走り回った。実際 42 人でする

作業量を2人だけでしたのだ。

サーバー内を遊ぶより、ギルドの維持費用を稼ぐ時間の方が長かった。 面白くな

ザリックが好きだから、無くなってほしくない」と、そう零したことがある。 か った作業に、彼女は文句一つ言わず。自ら進んで稼いでくれた。「皆が作ったナ

俺も同じ気持ちですよ、パインさん。

ンを愛している。、にした方がいいんじゃないですか? 部下に慕われる上司たちっ 「ナザリックが終わらないか。良いですね。でも、それなら俺じゃなくて〝ギルメ

て感じで」

「それじゃオフィスラブじゃなくなりますよね?」

「ふふっ、そうでした。上司と部下の組み合わせがいいんですよね」

"モモンガを愛している。" と打ち込む。

た。 まるで、理想の恋人の設定を作って恋愛話を書いたような気恥ずかしさに悶絶し

緒にいました。

「はっ恥ずかしい!」

「あはは、 ナザリック万歳! モモンガさん万歳! アインズ・ウール・ゴウン万歳

25 顔を手で覆い隠す隣で、両手を何度も大きく上げ下げする。

せっかくパインさんが喜んでいるのだ。水を差す真似がしたくない。 あまりの恥ずかしさに消してしまいたくなるが、このままにしておこう。

直視ができないので、設定はすぐに閉じる。

「ひれ伏せ」

硬質な声が響き渡り、NPCたちが跪く。

「(え、今の声誰だよ)」

かいない。答えはわかっているが、あんな真面目そうな声ははじめて聞 いたぞ。

モモンガは自分から見て、左側に立つ女性に顔を向けた。プレイヤーは 2 人し

「うんうん、皆に臣下の礼をとってもらった方が、この部屋には相応しいですね」

「たしかに、ぐっと雰囲気が増しましたね」

「でしょう?ナザリックにぴったりです」

パイン・ツリーは片手を大きく広げ、視線を前方へ誘導する。

42人のギルドメンバーの旗が見えた。

「モモンガさん、たっち・みーさん、死獣天朱雀さん、餡ころもっちもちさん、

ロヘロさん…」

一人一人、名前を淀みなく挙げていく。 決して忘れることはない、 俺のはじめて

の友達。そして仲間たち。

と色んな配合を試したい。もっと続けばいいのに、 層の森に植えて、綺麗な花畑を皆に見てほしい。それで作った紅茶も香水も、 だまだ冒険したりない。もっとお金集めしたいです。もっと花の種を集めて第六階 「……最後に、私。あー本当に、楽しかったですね。ユグドラシルは広すぎて、ま 私は何にもできませんでした。

ら。今日でここの糞運営とおさらばです。それは良いことですよね?」 た。 私は 無力でした。当たり前です、何のコネクションもないプレイヤーなんだか

サー

ビス終了が発表されてからも、

結構課金したんですよ。

ユグドラシルが続

けば か っ

い

なーって、

続編の発表来ないか

なーって。

何もありませんでした。

次は な

感情の嵐が、言葉の濁流となってモモンガに問いかけた。 女の気持ちは狂おしい程、 男と同じだ。

か な この場所を残しておけない。 い。 なんて |悔しくて、不快なことだろうか。当たり前だ。誰も仮想の中では生 一瞬で消え失せる時間を、 ただ黙って受け入れ

27 きていけない。

人は必ず夢から覚める。

一緒にいました。

28 会っているのだ。そのときも、 は 男に 仲が良かったから、オフ会をしたことはある。何人かのメンバーとは、 は、 夢の中でしか友人がいなかった。 馬鹿な話で非常に盛り上がった。内容は忘れてし アインズ・ウール・ゴウンの リア メンバ ルで 1

まったが、ずっと笑っていたことは覚えている。

しかった。

「…本当に、楽しかったですね」 ユ グドラシルを引退し、

い 「パインさんがいたから、最後まで面白く遊べました。それに今の状況は、俺の理 だが、 な į, 彼女が いてくれた。 疎遠になってからは会っていない。今は俺と、 彼女しか

くれた 座で終末を迎える。悪の組織らしい、俺たちらしい迎え方です。あなたが提案して 想の終わり方だと思います。仲間たちがいてくれないのがちょっと寂しいけど、 と連絡 見合い お かげです。 ましょうね。 ありがとうございます。 あなたが言い出しっぺなんですから、以前みたいに忘れ 次に遊ぶゲームどれにするか、 ちゃん 玉

ないでください」

「はい、約束です」

「もっと、一緒に遊びましょう」

ませんからね。」 査済みなので、あとはモモンガさんに確認してもらうだけ。…あ、先にプレイして とメモしてるし…。連絡もちゃんとします! いくつか気になる物があって事前調 り言っちゃいました。あと、もう集合日を忘れたり、間違えたりしません。ちゃん

「それは私だって…。ありがとうございます。ごめんなさい、さっきは愚痴ばっか

「信じてますよ。パインさん」

終わりの時 あと20秒…。 が迫る。

一緒にいました。 明日は 4時起きだ。サーバー停止の午前 0時を迎えたら、すぐに眠らなきゃい

俺たちは黙って、 視界の端に映る時計を数えた。

29

け

な

い。

10 ::5, 4, 3, 2, 1_| 00 ... 00 ... モモンガは目を閉じる。 9 8 7 ::

まだ時計は動いていた。

ぐらりと軽く上半身が揺れるが、踏みとどまる。

「(これが〝異世界へ転移する〟瞬間なんだ…)」

ちょっと気持ち悪いが、これからを考えれば苦痛にならない。

だって、新しい日々が待ってるんだから!

さよらな、社畜!

こんにちは自然、ナザリック地下大墳墓、 オーバーロード!!

そして我らがギルド、アインズ・ウール・ゴウン!!!

「モモンガさ……んん?」

スターが座っていた。

誰もいない。

そのはずだった。

「……モモンガさん?」

男はいなかった。

代わりに空っぽの玉座だけが残った。

【つづく】

女が立っている右側には、玉座があった。そこには心から尊敬できる、ギルドマ

モモンガさん休暇中。

コンコン、と誰かにノックされた気がした。

「…ここは?」

目を開ける、

肌を風が撫ぜている。

モモンガはオーバーロードの姿のままだった。

何にも妨げられず月光が満ちている。その灯りでスタッフ・オブ・アインズ・ウー 青臭く、暗い森の中、ちょうどモモンガがいる場所だけ木がなく開けているため、

相変わらず風は吹いている。その度にバサバサと、ローブの裾がうるさい。

ル・ゴウンが輝いていた。

ありえない!!: 「青臭い?……匂いを感じてる!!?」

る程度制限されているが、 脳法 によって、仮想現実では、嗅覚と味覚は完全に削除されている。 これらは現実と混同しないためだと言われている。

触覚もあ

モモンガさん休暇中。 なのに、今モモンガは、木々や草の青い匂いを嗅ぎ、風が肌を撫ぜる感触を確

か

に感じてい

た。

34 大墳墓の玉座にて、パインと一緒にサービス終了時間を待っていたはずだが、 なんだこれ、一体何が起こっているのだろうか?大体、 わ めきたくなった瞬間、ふっと意識が落ち着くのを感じた。 自分はナザリック地下 なぜ

こんなところにいるのだろうか?

「……パインさーん」

呼んでみるが返事がない。 辺りには森と生い茂る草、あと自分が座っている岩し

か :なかった。どうして彼女は近くにいないのだろうか。 視界には何も表示されていない。 コンソールも、現在時刻を表す時計も存在して

ΙΙ に 移 行 Ũ たのではないの か?…Gコールもできな

い

な

い。

何故

穴だ?

i ル を動かせないので、ゲームマスターに連絡できない。

П に手を当てて、這い上がる感覚に眩 量がした。

「ありえない…なんだよ、コレ。一体何が…」

そこで再び気づく。口が動いているのだ。

唇がないので、正しくは顎が動いてい

る。

モ モンガは、しっかりと歯に手を当てて、 顎を動かした。

思 ガチガチ… っ た通 りに .動く。ゲームでは、これも再現が不可能だった表現だ。 でなけれ

モ モンガは上半身、 骨しかない体を見る。

アイコンなんて開発側は用意しな

ば、感情

声 がは出 た。 口や喉、 肺もないのにどうやって自分は声を出せているのか。 まった

く訳がわからない。

…いや、分からないからこそ冷静になるんだ。 焦りは失敗 の種であり、冷静な論理的思考こそ常に必要なもの。心を鎮め、視

野を広く。 かつて、 ギルドの諸葛孔明と呼ばれた男、ぷにっと萌えの言葉を思い出す。 考えに囚われることなく、回転させるべきだよ、モモン ガさん。

モモンガさん休暇中。 は 再び、 一体なんな 感情の波が収まる。 のだろう。 さっきといい、どうにも抑圧されているようだ。これ

せて。 頭を振る。 今はそんなことを考えている場合ではないだろう、と自分に言い聞か

36 い。魔法がちゃんと発動するかわからないが、試してみよう。 体の中に意識を向けると、杖から力を感じた。まるで自分を使えと主張している

製作会社と連絡が取れなくても、一緒にいたパインには連絡できるかもしれな

「(そういえば、ギルド武器持って来ちゃったよ。これやばいよな…、 なんとかし

ようだ。

て守らなくちゃ)」 ギルド武器が破壊されれば、ギルドは失われてしまう。このアイテムだけは、ど

んなことがあっても死守しなければならない。杖を握る手に力を込めた。 「「オオ 突然獣 の雄 オオオオオオオオオッ!!!!」」 たけび が、大地に響い

幾十にも重なったこえから、相手は複数いる。 モモンガはすぐに自らに完全不可

た。

ど、いくつもの魔法で自身を強化していく。 ジ れるだろう。 が消えたように見えるはずだ。看破されない限り、ワープを使ったと勘違 知 佗 ック・キャスター)≫、≪上位全能力強化(グレーターフルポテンシャル)≫な の魔法をかけ、近くの茂みの中に隠れた。これで、相手はあの岩から突然自分 続けて≪飛行(フライ)≫、≪魔法詠唱者の祝福(ブレス・オブ・マ 相手は自分より強者だと仮定して、念 いしてく

たり前 ユ グドラシ か きし ñ ル な ではレベル100が、ここではレベル1,000や10,000が当 lì の だ。

入りに行っ

人の悲鳴が聞こえてくる。それから物がぶつかり、壊れていく音もしている。…ど 慎 重 |に行動しなくてはならない。 モモンガは息を潜めた。…ちょうど背中側 か Ę

モモンガさんたち。 果が きて こかが襲われているの どうしよう。 あ á な 0 か全くわ 何より、 戦力の見極めはするつもりだったが、早すぎる。心の準備なんてで か 今自らを強化・隠蔽した魔法だって発動はしたが、 か? Ġ な い ・のだ。 相手に効

37

度離れるべきだろうか?

考える間もなく、≪敵感知(センス・エネミー)≫に引っかかる対象が、

モモン

モモンガさん休暇中。 ガの前方から迫っていた。スピードは速くない、敵とは直線状にいる訳ではない。

「(しかし、やはり魔法が効かなければ、敗北はあり得る。…クソッ!)」 モモンガは杖から「月光の狼(ムーン・ウルフ)」を5匹召喚し、大きく迂回さ

レベルが自分より10以上低ければ、十分に戦える相手かもしれない。

38

せてから接敵を命じた。

銀色の狼たちは召喚者の命令通りに、まず自分から離れる

ように走

り出

「した。

ーン・ウルフたちと主従としての、意識的な繋がりを明確に感じる。 モモ ンガ

は、ユグドラシルと違い―召喚したモンスターは敵に向かっていくものだが

て強くはない、 か今のように命令ができるとは驚いた。 ゲームでは、 モモンガからすれば弱すぎた。それでも、ウルフたちが倒されれば ただ非常に足が速いだけの奇襲要因である。レベル 20 なので大し

「(すぐに会敵するだろう。果たしてどちらが勝つか

逃げるつもりでいた。

背後で絶え間なく人々が「助けてくれ」「逃げろ」と叫び続けている。 家か、

森

あと、 が見えている。しかし誰と誰が戦っているか、 が れたら集中できないぞ。苛立って背後を振り返った。モモンガの方からでも赤い光 緊張を緩めたつもりは 「助けて!助けて、お父さん!」 は燃えているのか炎の音までしてきた。辺りが焦げ臭くなっていく。 しかしたら、囲まれて逃げ場がない可能性もあるのに、そんな風にうるさくさ ぼんやり光の方を見ていた。 可哀そうに子どもが死んじゃうのか。まるで映画のワンシーンみたいだな なかったのに、 モモンガは周りが変化してから気が よくわからなかった。

モモンガさんたち。 る。何十本も、 されていた。 こんな異常を起こせる何かがいる。 が 切られている。 ゆっくりと時間が動き出し、数秒の間をもってやっと木が倒れ始め 同時にだ。 木々は倒れるそぶりを見せなかったが、それらは 感情は爆発し、そして瞬時に収まった。慌て 切断;

い た。

イヤーだけだ。 れだけ の荒業を成せるのは、ユグドラシルではワールドのクラスに付い 彼らはモモンガが自身にかけた隠蔽魔法を見破る術を持っている。

ず思考ができるのは、本当に有難い。

…ちょっと不気味だけど。

手持ちには隠れるための課金アイテムがないので、ここから無事逃げ出すこともで

モモンガさん休暇中。

きな

彼は覚悟を決めて、立ち上がった。盾役として長く愛用している「死の騎士(デ

「……このまま身を低くしても、意味ないな」

40 ス・ナイト)」を4体召喚し、 「(これなら、攻撃されても一瞬は耐えられるだろう。 前方と後方、左右に配置する。 …その一瞬に殺されるかも

が、ムーン・ウルフを送った方角は切れていない木がある。 れないけど)」 七 モ ガ は 周りを見る。子どもの声 、が聞こえた場所の近くはすべ て倒 れ 7 い る

つまり、

中心地はあち

らなのだろう。 「(なるほど…人の村がビーストマンに襲われていたのか。 あの立っている奴がやっ

たのかな)」 約100 m先で家屋がいくつも燃え、それが巨大な灯りとなり真昼のように周

を見回 [せた。 防壁代 、わりの柵は壊され、 大小様々な影が大地に伏せている。 人間が ŋ

多いのは、ここが人間の村だったからだろう。

剣と盾をそれぞれの手に装備していた。彼の周りには、人ではなくビーストマン― く、フルプレートを装い、肩から足元に届きそうな長いマントがたなびいている。 たった1人、炎に照らされ剣を持つ戦士が立っている。 体格は男性的だ。 背が高

狼によく似ている―が5~6体倒れていた。 体長 mもありそうな筋肉質の体が

されている。腹や頭から中身が出ているのが、少々汚い。

「(汚い ? あんなグロい物を見ていれば、俺なら叫んで逃げ出すの

?

"両断;

感情の抑圧だけじゃなく、心も変わってしまったのだろうか ここがどこな 0 か、 俺はどうなってしまったのか、考えるのはすべて後回しだ。

「……お、おお…お父さーん!! 」

今は生き伸び

なきゃいけな

モモンガさんたち。 たらしい。まだ燃えていない家屋から男性が現れた。子どもは父親に抱き着き、父 子どもが戦士の足元から、飛び出した。どうやらあの子をビーストマンから助け

41 「(いやいや、そこは泣いてお礼いうところだろ! なんで黙って行っちゃうかな…

が、

親子はそ

のまま家の中に入ってしまう。

親は子どもを抱き上げた。感動

の再開シーンである。あの騎士は命の恩人なのだ

せ 0 6丘く削れているものがいた 中から哀愁を漂わせている気が 中から哀愁を漂わせている気が 中から哀愁を漂わせている気が は 中から哀愁を漂わせている気が しょう いるよな〜お礼言わない人)」

中から哀愁を漂わせている気がしたので、心の中で合掌した。 顔が見えないので今戦士がどんな顔をしているのかわからない。 なんとなく、背

20 %近く削 その時、 接敵を命じたムーン・ウルフが帰ってきた。5匹全員無事だ。体力が れているものがいれば、 無傷もいる。どうやらレベル 2数体で勝

42 相手だったらしい。なんだ、 現 状 センス ・エネミーに引っ 弱くて助かっ かかる相手はい た。 ない。 残る懸念はあの戦士だけだ。

「人助けするぐらいだし、対話して、こちらに敵意がなければ見逃してくれな いか

な」

交換条件としてアイテムやお金を求められるかもしれないが、ある程度は 念のためスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンはアイテムボックス b いだ

に モモンガさん?」 しまい、敵 の目に入らないようにする。これでいいだろう。

「はい」

名前を呼ばれて、 つい応えてしまった。一体誰が呼んだのかと、 顔を向ける。

「お久しぶりです、たっち・みーです」

「……お久しぶりです」

驚いた。

ンバー、たっち・みーだった。かつてモモンガを助け、生涯の宝となる仲間 目の前にいる虫系の異形種は、間違いなくアインズ・ウール・ゴウンのギルドメ たちに

バ ターの姿のままモモンガの目の前にいた。 ここは仮想現実のままなのだろうか?匂いや口が動くので、てっきり現実になっ

出会わせてくれた恩人である。

彼はゲームを引退したはず、それなのにゲームのア

しましたが、懐かしい声が聞こえたので、そうじゃないかと思ったんです!」 てしまったと考えていたが、 「…ああ、よかった。本当にモモンガさんだ。デスナイトが急に出現したので警戒 違うのか?

完全不可知化を自分にかけていたはずだが、ワールドの称号を持つ戦士職のたっ

嬉しそうに声を弾ませている。表情は動かず、口を開いてないが言葉を話せてい

モモンガさんたち。 ちならば見破れる。 看破のスキルを使用し、確率で相手の居場所を探し出せるのだ。

43

た。

モモンガさん休暇中。 「えっと、もしかしてあちらにいたのって…」

子どもを助けた戦士と同じ装備をしている。つまりあの摩訶不思議な出来事をお

「あちら?ああ、そうです。さっきまで村の方にいました。」

こしたのは、たっちさんだった。それなら納得できる。 「そうですか。俺はたっちさんだと気づきませんでした。ちょっと混乱していまし

「私もです。スキルで周辺に敵がいないことはわかっているんですが、ここから離

44

て…」

頭を上下に振った。

れませんか?落ち着いて話がしたいです」

「俺もです」

「では、あそこ。あの崖の上に行きませんか ? 上からなら見渡しもいいですし、

木々が生い茂っているので見つかりにくいかと」

「では、そうしましょう」

不可視の魔法をかけ飛び上がる。 念じると、召喚モンスターたちは消えた。そして、全体に≪飛行(フライ)≫と

モモンガさんとたっちさん。

うな出っ張った部分もある。それらは侵入者を妨げ、また選別してくれるだろう。 る斜面は、表面がつるつるしていてほとんど凹凸がない。 まるで円錐のような山に、俺たちは降り立った。地面からほぼ直角に繋がってい 途中にはネズミ返しのよ

「灯りを付けなければ、誰かに見つかることはなさそうですね」 い部屋には慣れているので、むしろ落ち着く。

休むことにした。≪センス・エネミー≫に反応はない。奥行きは約 mしかないが、 そして山の頂上付近には、二人が入っても余裕がある広さの洞窟を見つけ、そこで

46

狭

「そうですね。 一応、隠蔽魔法をかけておきますけど」

「お願 い します。でも私もスキルで索敵をしますので、できるだけ魔力を温存して

くれますか」

つわ

かりまし

モモンガは最低限の魔法を発動させる。

たっちもスキルを発動させていた。ゲーム時代の名残で、二人ともスキル・魔法

ある。 名を声 技名を声に出すのも、 、に出している。仲間との連携において「誰が何をしたか」を把握する必要が そういう理由があるからだ。

まるで昔に戻ったようだ。 胸が温かくなる。 俺たちは洞窟の入り口近くから外が

ン 0) 見えるようにしつつ、対面する位置に座った。)基本 敵 ガさん の対策はこんなものですね。…灯りがなくて不便かと思いましたが、 能 も取得 力に 層視 L 7 い (ダークヴィジョン)、があるので夜でもよく見えます。 ま したよね ? 私は種族

モモ

「そうですよ。

さっきまでいた森がよく見えますね。

あの襲われた村も…」

は森が生い茂っていた。(たっちが切った周辺のみ、木々が倒 自分たちがいる山が村をぐるっと囲み、 上. 一から村周辺を見ているからわかる。 天然の要塞と化している。山と村の間に が

約 30 軒あ った家屋は、 6 割 が崩壊するか燃えていた。 無事な家には、襲撃から れている

47 モモンガさんたち。 生き残っ 生々しい光景だった。 た人

間

が負傷者を運び入れている。

「…これは、すべて現実ですよね」

頭から漏れ出した呟きだっ

「信じられませんが、認めるしかありません。私たちはユグドラシルで作ったアバ

たが、たっちさんは同意してくれた。

に使えている。この体が、まるで元から自分のものだったように馴染んでいます」 動するところですが、このような状況になっては恐ろしいです」 ターの姿で、異世界にいる。森の青臭さ、この洞窟の湿った匂い…リアルでなら感 「それにゲーム時代に取得したスキル及び魔法、種族・職業の基本的な能力も自然

えば、モモンガさんはデスナイトと…ムーン・ウルフでしたか? 召喚されていま したね。どんな感じで操っていたのですか?」 「不思議ですね。スキルの範囲・効果の調整が感覚でわかるというのは…。そうい

そして主従…のような繋がりを感じて、それを手繰り寄せて命令します。ムーン・ ウルフに〝大きく迂回してから接敵しろ〟と命じたところ、その通りに動きました」

「えーとですね。まず、どちらもユグドラシルと同じエフェクトで出現しました。

¯敵に遭遇したんですか !モモンガさんケガは…」 身を乗り出し、 アンデッドの体に異変はないか確かめようとする。

¯ありません。私は大丈夫です。レベル2のムーン・ウルフ5体で戦闘しまして、

慌てて骨の手を激しく左右に降った。

多少体力は削られましたが余裕で 3 体の敵を倒せました」 「そうですか……無事でよかったです」

じっとこちらを伺う視線は、本人が納得したことで外された。元の場所に座り直

し、「そういえば…」と話を続ける。

「…召喚したモンスターは、ゲーム時代より自由度が上がっていますね」

「はい。

AIを組み込めば、先ほどのような簡単な命令なら実行できるでし

ょう。

だ

けど、 ムーン・ウルフにはそんな AI を組んだとメンバーからは聞いてないし… J

「そうだと思います。まだまだ不確定な案件ですけどね」

「ここが現実だから、できたことでしょうか」

49 らの生活レベルに驚く。まるで映画で見た中世ヨーロッパ風の生活だ。 20人ほどの男たちが鍬や鎌を持ち、村を警備していた。 さらに観察を続けて、 井戸から水 彼

モモンガさんとたっ ちもできるでしょうか?」 「ですねー。 「自然がほぼ崩壊してしまったリアルでは、 映像に残っていれば、見ることはできるでしょうけど。あれって俺た まずお目にかかれない光景ですね」

「練習すればやれそうですよね。やってみたい気もしますが、 少々面倒臭いという

50 か ランタンを使えばいいだけですし、飲み物なら永遠に水が出せるピッチャ 「たしかに、灯りなら≪永続光(コンティニュアル・ライト)≫が収め られ 7 が い あ る

村の外れに穴があけられ、死人が運び込まれている。 体が繋がったもの より、バ

る…」

が ラバラになった死体の方が多かった。…それにしても、家の数に対して村人の総数 少少な 気が するな。

「…モモンガさん、少しよろしいでしょうか」 ま だ燃えて いる家も多いですから、 死体を運び出すのは難しいでしょうね」

ーは い、何ですか?」

^{*}あの村を襲っていたのは狼に似たビーストマンです。あいつらは人間を食べてい

ました」

カン、と手の平に握った手を当てた。

「なるほど。だから村人の数が不自然に、少なかったんですね」 「―そうです。そして…私は最初、彼らを助けようとは思いませんでした」

「戦闘を恐れていたわけではないんです。村人も、彼らを襲うビーストマンたちも たっちさんはまっすぐ俺を見据えている。俺も彼の顔をまっすぐ見る。

強く見えませんでした。むしろ余裕で勝てるだろうと感じました。」

視線が村に移る。まだ埋葬は済んでおらず、大人も子どもも穴を掘り続けている。

「…何も感じなかったんです。いえ、可哀そうだと思いました。―それだけです。

見過ごすことはできなかった」 私がビーストマンを倒したのは、子どもが襲われていたからだ。我が子を思えば、

モモンガさんたち。 話 すにつれてどんどん感情がなくなり、言葉遣いが素に戻っていく。彼は拳を握

51

り震えていた。

モモンガさんとたっちさん。 しみすら浮かんでこない。今も、彼らに対して憐憫を感じない。 男の言 こいたいことは、身に覚えがあった。人が襲われていても、 焦りも憤怒も悲

「…俺だって同じですよ。人が襲われていても、助けようとは思いませんでした。 る敵がこちらに来ないことを願うばかりで…襲われていた子に対しても同じ

間

【をあけて、モモンガは話し出す。

です。まるで虫同士の殺し合いというか、テレビで弱肉強食を眺めている感覚でし

感心すらしていました」

「…私たちは、 人間を同 _族ではないと判断しているのでしょうか? 」 52

た。

映画

のワンシーンだと、

っちさんと目が合う。

昆 |虫特有の眼には何体もスケルトンが移っている。…俺だ。人間ではないが、俺

がそこにいる。

「…そうかもしれません。でも、人間でなくなったわけではありませんよ」

ンガ 「アンデッドは疲労無効なのに俺は疲れています。 ぎゅっと胸元のローブを掴む。肉体がなくなり、心臓も脳もないはずなのにモモ í 苦 Ĺ か った。 あのまま森にいるより、

やってたっちさんと話している方が落ち着くし、楽だと感じている」

「私たちが元人間だったから…その感覚が残っているのではないでしょうか」

「元って…死んだわけではありませんよ」

「それは少なくとも、私に当てはまりません」

彼は "人間に対する精神的な変化』を吐露するより、 おかしなほど平凡な声で告

瞬何を言われたのか分からず、たっちをぼけっと眺めてしまった。

白する。

「私は死んでいます」

モモンガさんたち。 「ちなみにウルベルトさんも亡くなっています。私の意識がはっきりしている内に 「……は?」

モモン ガは眩暈に襲われ そして異世界にきてしまったこと。 た。

死亡を確認したので、間違いありません」

53 仮想現実の現実化、

身体と精神の劇的な変化。

そして本人から聞かされる、たっちとウルベルトの訃報。

会えたこと。

54

ちょっとうっとうしくなってきた。

「モモンガさんはどうしてここに…?」

脳内から発された気がする。そして精神の波が平らに戻される。便利だと思うが、

度に不可思議なことがおきすぎて、頭がパンクした。プシューと間抜けな音が

グアウトを待っていたら、ここにいました」

「ユグドラシル最終日?それって八ヶ月後ですよね?」

「………ちょうど日付が変わったので昨日のことですよ」

「えっ

難問が積み上がり山となる。

「俺は、死んだわけじゃないんです。ユグドラシルの最終日、パインさんと強制ロ

さっきまで傍にいたパインは消えており、数年会っていなかったたっち・みーに

自らの体がゲーム時代のアバターに変わったこと。

【つづく】

俺たちはこれ以上、山を作らないために近状を話し合った。

く。

モモンガさんとたっちさん。2

通り情報交換が終わったのは、ちょうど日が昇る頃だっ た。

朝だ――。そう認識したとき、自然と体が洞窟の入口へ向

かった。

瞬くまに表情を変えるのである。月夜に照らされて輝いた草花さえも、変わってい 夜空がだんだんと薄い青へ変化していく様に、目を奪われる。 色が、鮮やかさが、

のはたった一つ。 やがて地上を青白く照らしていた星はゆっくりと姿を消し、地平線の彼方に輝く

「(太陽…なのか?)」

映像や写真でしか見たことがない燃える星が、その顔を出した。

う。閃光はすぐにおさまった。 その途端、 一瞬強烈な光が世界を真っ白にした。思わず顔の前に手を掲げてしま たっちは再び世界を見るべく、手を下ろす。

朝 :日が照らす場所は、新たに生まれた生命の輝きのごとく、きらきらと輝いてい

た。

そして朝日に照らされた自分も、 力が沸いてくる気がする。

夜とはまったく違う、 朝。

私は世界の、

黎明期を見ていた―のか?

目 これほどの感動を味わったのは、あの子が生まれた日以来だと、 ·から脳へ、そして記憶に、心にこの光景が焼き付いていく。

たった一瞬で、 自分を取り巻くすべてが変わった。

「(……2人にも、見せてやりたい)」

家族の笑顔が浮かび温かくなるも、眼下に広がる森がたっちの心臓を締める。

胸

が苦しくなっ

た。

「たっちさん?」

こちらの様子を気遣う―今はオーバーロード姿の― -青年に声をかえられた。

「モモンガさん、 朝はこんなにも、力強 いものなのですね」

モモンガさんたち。

たっちは握った手から力を抜く。

相手 ,は少し黙った後、 同じように朝日を眺 がある。

57 「本当に、そうですね。…ブルー・プラネットさんとパインさんにも、 見せてあげ

たかった」

「……皆さんと、見たいですね。ここで、この鮮やかな草の香りを吸い込んで、朝 彼 の惜しむ姿が、自分と重なる。さらに胸が苦しくなっ

日照らされる世界を、一緒に眺めたい」 日はさらに上る。すべてを照らそうとしている。眩しすぎる光に目を細めた。

瞼

の裏で、ギルドメンバーの姿が浮かぶ。そして、1人の男が残った。 「この世界に来たのは、俺たちだけなんでしょうか…」 青年 -が沈んだ声を発する。 騎士は頭を振った。

「わかりません。 だから、 モモンガさん。探しに行きましょう。 それを確かめま

しょう!」 大空を鳥が飛んでいく。

「ギルドメンバーをですか? こちらに来ているのか、わかりませんよ」

ツリーさんはあなたと一緒に、最終日の強制ログアウトを待ってい 「そうですね。けれど、私たちと同じように来ているかもしれない。特に、パイン・ たのでしょう?

それなら、他のユグドラシルプレイヤーを含めて、この世界にいてもおかしくはあ

!?

!顔を見て、 りま いせん。 なによりも、 問 い詰めたい!なぜ、事件の場所にいたのか!あそこで何をしてい 私は会いに行きたい。ウルベルトさんに、会いたいんです

たのか!そして…お前がやったのか、と」

モモンガは胸が詰まる思いだった。

それ

は、

もの。 たっ ち ・みーが警護担当した場所で、 テロリストを思わせる姿をしたウル ベベル

たっちが先ほど教えてくれた事件。彼と悪魔が死ぬ直接の原因になった

ト・アレイン・オードルが侵入。直後、 彼らのすぐ傍で爆発が起きて、 両者は死亡

した。

「…それを、 騎 (士は「誰が仕掛けたのか、 聞いてどうするんですか?」 なぜ爆発物が起動したのかわからない」と言った。

「罪を犯したんですから、償ってもらいます」

59 鳥は翼を広げて、その小さな体で高く高く飛んでいく。

それを見たたっちが頷く。 太陽が地平線を上りきると、 村人たちが荷車を引いて動き出した。

ら、今度は人の役立ってもらう!」 「そうですね…人々のために働いてもらいましょう。大勢に迷惑をかけたんだか っと拳を握る。そして、勢いよくモモンガを振り返った。

く た原因 ゙モモンガさん一緒に行きませんか! ギルドメンバーを探して、それから転移 'n n ば、 [を探 非常に心強 しにいきましょう! ギルドでも随一の魔法の知識を持つ い。 ゲームを数年離れていたので、 戦闘は若干心配ですが… あな た が 7

墓 |の霊廟に保管されている。装備が少々不安だが、それらが無くとも、 ワールドチャンピオンの称号は飾りではない。今、あ の鎧はナザリッ 彼のステー ク地下大墳

盾役とし

しては

申し分ないでしょう」

が は タス あ 負 it は ても、 超一級プレイヤーのものだ。 な いだろう。しかも、スキルと魔法は十分使える。たっち・みーはブランク 充分頼 りになるプレイヤーだ。 装備に左右されるものの、レベル 80 台の敵に

なにより、 仲間なのだ。

の方から誘ってもらえて、安心した。彼はアインズ・ウール・ゴウンを忘れていな ちから 〝ギルドメンバーを探しに行こう〟と言ってもらえて嬉しかっ 彼

「もちろんです!一緒に探しに行きましょう。みんなを探すとなると、2人では効

かったのだ!

率 が 外 V るの に行動できるかわ .悪いので、まずはナザリック地下大墳墓を発見しましょう。こっちに転移して か は、 わかりません。見つかったとしても、NPCたちが命令を聞くのか、 かりませんが…彼らに動いてもらえれば、今よりもずっとギル

メンを見つけやすくなります!」

る可能性があります。それでいきましょう」 「では、次にナザリック地下大墳墓をどうやって見つけるかですが…」 「拠点があった方が行動しやすいですからね。 それに、他の人もギルドを探してい

モモンガさんたち。 「それもいいと思います。あと、彼らについて行きます。 |村人に たっちは、村人を指さした。モモンガは顎に手を当てる。 聞くんですか?」

村を襲われた彼らは、

お

「私にいい考えがあります」

61

能性がある。つまり、街に行くはずです。そこで情報を集めます」 そらく国に身柄の保護を求めるでしょう。 役所は、ここより人が多い場所にある可

ル、ユグドラシルについて、プレイヤーとナザリック地下大墳墓の情報を求めて。 まず、この世界について学ぶ。平均レベル、魔法、スキル、言葉、文字、生活レベ

人が多ければ、情報も収集しやすい。

62 くんじゃないですか?」 「なるほど。でも、それなら彼らが行く方向へ魔法で飛んでいけば、 すぐに街へ着

ちの身が安全な内にね」 街に入る前に、魔法やスキルが人間相手に効くのか確かめたいんです。 …自分た

を見られる前に逃げ出せる自信があった。 眼下にいる人間たちは、確実に私たちより弱い。隠蔽系魔法が効かなくても、姿

「私は、あいつを見つけるまで死ぬつもりはありません。見つけ出して、包み隠さ

ず話してもらう」 「…私は、パインさんと約束しました。 また、遊びましょうって…仲間との約束は

破れません」

モモンガさんたち。 す。 害などの魔法はお任せします」 普通の人間なら大声をあげて逃げ出す程怖いが―楽しそうに。 ておきますね」 「任せてください。俺もたっちさんの後ろにいますから、何かあればサポート 「行きましょう、モモンガさん。私はスキルを使って気配と音を消します。 騎 たっちの緩んだ空気を感じ取り、モモンガも笑う。ガパッと口が大きく開いて― あと、音を消すと話せなくなるので、常に《伝言(メッセージ)》を発動させ ?士は少々驚いたが、モモンガが笑ったのだと理解して、口角を上げた。 ちは頬を緩めた。モモンガはユグドラシル時代でも、今も仲間想いな男だ。

探知阻

しま

れは 「お願いします。私も《伝言(メッセージ)》が使用できるようにしておきますね」 アイテムボックスから、赤い球がついたネックレスを取り出し、首にかける。こ 《伝言(メッセージ)》の魔法が込められたアイテムで、使用制限なく発動で

「…もう少し装備を整えてから行きますか?」 村人の列は、まだまだ長い。簡単に見直す時間はあるだろう。

備は万全に整えてから行きましょう」 「問題ありませんよ。俺も見直しますから。これから長くなるかもしれません。準 「モモンガさんを待たせてしまいますが、少し時間をもらってもいいですか?」

モモンガさんとたっちさん。2 【つづく】

64

「よろしくお

願いします」

天気は晴れ。 青空に伸びる雲が太陽に反射してより白く映る。 その中をモモンガ

とたっちは飛んでいた。 草木を刈り地面をむき出しにしただけの道いっぱいに列を作り、 眼下には村人たちが歩いてい る。 彼らは数日間

き続けた。目的地は領主がいる街で、今日中に到着予定だ。

村人たちの顔には疲労が滲み出ており哀愁漂う。自分たちのように飛べたら楽だ

ろうになあ、とその様子をぼんやりと眺めていた。

その和やかな空気が終わる。

隣を飛ぶたっちの方へ顔を向ける。「モモンガさん、反応多数、右側です」

「行きましょうか。 降りたらすぐに渡しますね」

空ける。モモンガはアイテムボックスから奴隷が付けていそうな太い鉄製の首輪 二体の異形種は右手の森の中へと降り立った。まず装備品をいくつか外して枠を

王たちの旅路 備するごとにデバフがかかり体が重くなる。これは、これから戦う者へのーレベル 首輪と鎖で繋がった腕輪を二セット取り出して、たっちと分ける。一つ装

差がありすぎてまったく意味がないけれど一応ーハンデである。

66

「では始めます」

「よろしくお願いします」

み見る奴ら用にカウンターも用意して準備完了だ。 ちに気づか たっちが前衛、 'n ないように周囲を隠し、 モモンガが後衛の位置につく。モモンガの魔法で防音など村人た 見た目は静かな森のままにした。 たっちが挑発スキル 念のため盗 を発動させ

そして二人はじっと待つ。

る。

やがて森を駆け抜ける足音が聞こえてきた。茂みからゴブリンたちが勢いよく

閃

たっちに襲い

かかった。

剣を抜 く瞬間すら見えず、まったくバラバラの位置にある首を切る。 二つになっ

た肉塊が地面に若干跳ねて転がった。

うにたっちに突撃する。今度は高速で動き一匹ずつ盾で攻撃を受け、生じた隙にモ モンガが杖を振ってマジック・アローを発射した。ゴブリンたちの頭にヒットして その様子を見ても後続のゴブリンたちは止まらない。まるで操られてい 、るか の ょ

爆ぜる。 計十三体のゴブリンの死体ができあがった。

再び静寂が訪れて、たっちが頷く。

「うん、 以上ですね」

「はは、 「相変わらず、 ありがとうございます。これお返ししますね 目にも留まらぬ速さでしたね。 たっちさん」

モモンガに返した。戦闘のたびに使うなら持ち歩けばいいのだが、たっちのアイテ 剣 に 血が ついていない事を確認してから鞘に収める。 借りた腕輪と首輪を外して

ムボックスが満杯なのでこうしてモモンガのアイテムボックスに入れているのだ。

装備を戻しつつ二人は話す。

今回 もあっさり済んじゃいましたね。この数のゴブリンなら村人たちに任せても

67 モモンガさんたち。 良 たっ か つ た ちは首を振る。 か į しれません」

王たちの旅路 したまま戦闘すれば死者が出てしまいます」 いいえ、みんな疲れてますから今までのように戦えなかったと思いますよ。

たっちは正義感から行動するが、モモンガは違った。 暇だったし、何よりも友人

68

0)

ために

戦っ

「でしたら、 「ええ、 行こうとすぐに言ってくださって嬉しかったですよ。 俺たちが出てよかったですね」 モモンガさん」

「時間 が空い 7 いましたから á

どっと笑 'n がおこる。 装備を整えた二人は、また 〈不可視化〉 と〈飛行〉 をかけ

て村人たちの上へ飛んだ。 戦闘前と同じように並んで彼らを見守る。

やがて、空が闇の衣を纏い始めた頃。村人たちはようやく大きな街にたどり着い

あ た。 正 芳形 村 に街を囲む城壁は堅牢だが、道路は整備が済んでおらず地面が 人たちは三メートルほどの門の前で兵士らしき人物と何 !か話 してい むき出 ゃ

がて門が開かれて彼らは内側へと入っていく。どうやら今晩は屋根のある場所に泊

「よかった。 それにしても、 魔法がある世界でもあまり発展していないんですね」

「そうみたいですね。ゲームの街のように石畳が敷かれていることが普通だと思っ

ていました。ところで、あれは何でしょうか?」

口 ーブを着て直径百七十センチぐらいの杖を持った集団が透明な板を出現させ、

その上に兵士が荷物を乗せていく。

モ モンガはその様子を凝視した。

「……見たことがありません。

この世界特有

の魔法でしょうか」

「モモンガさんが知らないならユグドラシルの魔法ではありませんね」

「いえいえ、そんな言い過ぎですよ。俺なんてまだまだ把握しきれていませんから

モモンガさんたち。 に 持っているので暗闇でも人々がよく見えた。透明な板は荷物を乗せて、術者の後ろ 追従する。 おしゃべりしながらも視線は下へ向いている。二人とも暗視のパッシブスキルを 持ち運ばれる以外に使われていない。

69

「もしかして、

荷運びするだけ?」

王たちの旅路 b っと強い魔法を見せてもらえたら、この世界のマジック・キャスターのレベルが それだけなら、ユグドラシル基準だと第一位階の魔法に該当しますね。

70 低 断は禁物。 レベル 街に入るのももう少し様子を見てからにしましょうか」 のモンスターしか出現しないなら強者は存在しないでしょうけれど、 油

わかるんですが」

ず見晴 い そうしますか。では今日は、あの山の頂上なんてどうでしょうか。 い ですね、 らしが いいので遠視で街の様子を確認できますし」 行きましょうか」 街から近すぎ

一体は 目的 地へ加速した。十分がたった頃、 突然たっちがモモンガの前に出た。

「モモンガさん、 何か来ます」

モ モンガはすぐに何十種類ものバフを二人分発動し、念のためマジックアロ

「……補助入ります」

頼も 仕: 掛 しく思い、 けておく。 自分も負けてられないと、 たっちは舌を巻いた。現役時代と変わらない状況判断力と理解力を スキルを上乗せしてい ーを

何かはギリギリたっちの目で追える速さで空を飛んでいた。

あの姿はバード

モモンガさんたち。 さん」 動きはまさしく魔法によるものだろう。 か 「私と彼の名前はわかりますか?」 「二人とも、どうして臨戦態勢なんですか?」 すぐに近寄ろうとしたモモンガを騎士が

それは突然、五十メートル先でピタリと止まった。慣性の法則をまるで無視した

その物体の姿がはっきりと目に映り、 驚愕した。

「ペロロンチーノさん!」

「待ってください!」

て「いくつか質問させてください」と言った。

止める。

男はじっとバードマンを見つめ

「ええ、どういう状況なんですかこれ? 答えますけど……たっちさんとモモンガ

手のひらを向けてそれぞれを示す。たっちは頷き、質問を続けた。この時にはモ ガにも状況を理解しており、あのペロロンチーノが本物であることを願ってい

71 た。 偽物ならば殺す。仲間のイタズラならば笑って許す。

王たちの旅路 「ウルベルトさんでしょ。よく喧嘩してたし」 「では次に、私の一番仲が悪かったと言われるメンバーは?」

72 「まだ続けるんですか? たっちさんのは、執事のセバスでしょ」 「正解です。では……私が創ったNPCについて答えてください」

の姿を見たプレイヤーはギルメン以外にはいない。 これは決まりだろう。第九と第十階層は誰にも攻め込まれていないため、セバス

ゕ たっちは用心深く質問した。

「最後です。 アインズ・ウール・ゴウンで最もNPCを創ったメンバーを、言って

「パインさんでしょ。ガチャでNPC作成アイテムを引き当てたとはいえ、十一も

筋肉ばっかり創ったときはちょっと引きました」

「……たしかに、ちょっと多すぎるかもしれませんね」

に肺 から息を大きく吐き出して、吸い込む。今度は三人が飛び、ちょうど中間

「お久しぶりです、すみません。変な質問して」

で落ち合う。

モモンガさんたち。 う。 はないと感じたというか」 も会いましたか?」 でユグドラシルのアバターでこんな場所にいるんですかね 「しましたよ。でも大丈夫だと思ったので……なんて説明すればいいのかな。敵意 「俺たちのこと警戒しなかったんですか?」 「……ペロロンチーノさん、もしかして今さっき起きられましたか?」 「ふーん、色々あったんですねえ。ところでここが何処だかわかりますか? なん 「いえ会ってはいないんですが、疑心暗鬼になっているというか、あはは……」 「お久しぶりです、たっちさん。本当ですよ、どうしたんですか? 俺の偽物にで 「そうですよ?」 たっちとモモンガは顔を見合わせる。それからもう一度ペロロンチーノに向き合 ?

73

「わかります」

だ。

二人は首を縦に振った。魔法やスキルでそういった感覚はすでに掴んでいたから

「あ、そうですか?よかったー」

バードマンは胸を撫で下ろした。

D	扩	依	F	Ź

王たち	の旅路

74

へつづく>

暗いが一番星が美しく煌めいていた。

そしてモモンガたちは笑顔で再会を喜んだ。視界の端は赤く、頭の先はすっかり

魔法で防壁を作り、不可知化する。明かりはマジックアイテムのランタンを利用 三人が出会った山の頂上。そこにモモンガ、たっち、ペロロンチーノは

した。モモンガが魔法で椅子と机を創造し、それに座る。

「へえ、モモンガさんたちはお互いに近かったんですね」 眠る必要がない三体の異形種たちは、お喋りをした。

「転生ですね。まさかユグドラシルのアバターになっちゃうなんて、驚きですよう。 「ええ、近くに転移したんですよ。いや、転生ですか?」

モモンガさんたち。 「……エロゲーがリアルになったら、それはもう現実であって、ゲームじゃないで

どうせならエロゲーの主人公になりたかった」

「それは嫌だな。やっぱりゲームはゲームでいいや!」 こうしたたわいもない話を続ける。まるで昔に戻ったみたいだ。

すよ?」

彼女は大丈夫だろ

76 謎の少女は案内役? のだろう。なぜ俺が。出口のない水は、ぐるぐると脳みその中で渦巻いた。 それは終わりを迎える。 骨だけの手を見る。なぜユグドラシルのアバター姿なのだろう。なぜこの世界な 眩しく輝

き地上を照らしている。 「あれは一体……?」 遠 い夜空の向こう。巨大な魔法陣らしき模様が、真っ暗な空に現れた。 俺たちはすぐに武器を手にとり、立ち上がった。

っちが首を傾げている。 ペロロンチーノは首を捻っていた。

「どこかで見たことあるような気がする」 モモンガは頷いた。それもそうだと。

「……魔法少女の必殺技ですよ。ほら、マギアっていう名前の」 「あっそれだ。パインさんが昔に見せてくれたやつにそっくりだわ」

た。 魔法 たっちが前衛に、モモンガとペロロンチーノが後衛に移動する。 陣 .からいくつもの光が地上に降りていく。その内の一つがこちらに飛 モモンガは全 んでき

光は彼らから少し離れた所に降りて、ローブを羽織った少女の姿へ変わる。

員に何重もバフをかけ、たっちとペロロンチーノも続けて自己を強化した。

高 ローブの下には丈の長いスカートがのぞいている。手にはカンテラを持ってい |校生から大学生ぐらいの歳にみえる。顔立ちは美しく、髪を短く刈り上げてい

に済ませるわ 「なんですっ 「こんばんは。私はアインラード 少女は、モモンガたちの警戒を気にせず、まるで友人かのように語りか て? ね。 あなたたちを、 ・ゥン。案内役の魔法少女よ。時間がないから手短 リアルからこの世界へ導いたのは私」

|本当ならパインちゃんの元まで送りたかったんだけど、力が足りなかった 声 一げる ペロロンチーノさんを、アインラードゥンは手 で止め の。ご

モモンガさんたち。 イ あっちよ。真っ直ぐ向かって。ナザリック地下大墳墓の周囲に張り巡らされた、パ めんなさい。でも近くまで下ろせたから、あとは自力で進んでちょうだい。方向は ちゃんの使い魔が気づいてくれるはずだから」

77 を知っているのか。もしかして本当に、自分たちをこの世界へ導いたのは彼女なの

思

ぃ

が

けず渇望していた情報を得て、

鷩

いた。なぜこの少女はナザリックのこと

か。

だからといって、鵜呑みにはできない。

「どうやって、それを信じろと?」

モモンガは聞いた。

78 少女は眉を下げた。

「証拠はある。でも、あなたたちが確認できない以上、意味をなさないわ。だから、

私の言葉を信じてもらうしかない」

真 (摯な態度だった。三人はアイコンタクトをとり、信じられるのか考えるより

ŧ, 「パインさんは無事ですか?今どこに?どうやって俺たちを、この世界へ連れて 質問することを選んだ。モモンガが口を開く。

来たんですか」 「パインちゃんはナザリック地下大墳墓でみんなといる。この世界へ転生したきっ

か ゖ は わ からない。私は拾って、連れてきただけ。パインちゃんが望んだから」

「パインさんが望んだ?だから、 私たちはここにいるんですか?」

っちさんが半歩前にでた。

「あなたたちは、リアルとこの世界の境界に落ちていた。そこへ私が行って、

いが望んで承諾する。私は魔法を行使して、この世界へ案内できた」 ペロロンチーノが苛だたしそうに頭をかく。

しているのに、それじゃ、ちょっとわかりにくいですよ」 「あの、プレイヤーなら、まどろっこしい表現やめてくれませんか。只でさえ混乱

アインラードゥンは眉を釣り上げて、声を荒げた。

「急いでいるから、こんな言い方になるんです。パインちゃんの友達だから、こん

なに融通を利かしているのに!」

その姿を見て、たっちが体を少し屈めた。言葉が子供向けへと変わっている。 まるで癇癪を起こす幼子だ。もしかしたら、見た目よりも精神年齢が幼いのか?

「失礼なことを言ってしまい、すみません。私たちを、助けてくれてありがとう。

パインさんとは、ユグドラシルで知り合ったんですか?」 「……そうです」

モモンガさんたち。 「あなたはプレイヤーですか 優しい声色で話しかけたおかげか、相手の調子が落ち着いてきた。 <u>~</u>

79

フレンド登録だってし

謎の少女は案内役? て、最後までイベントクリアもした仲なんだから」 「それは、仲良しですね」 魔法少女イベントは、魔法少女になることで参加できるイベントだった。アイン 魔法少女イベントで出会ってお友達になったの。

80 法少女たちと行動を共にしていたはず。その中の一人なのだろう。 ズ・ウール・ゴウンからはパインさんのみ参加した。たしか、イベント中は同じ魔 「お友達だから、 願いを叶えてあげたかった。ちょっとズレたけど、 同じ世界の同

インラードゥンは再び、向こうの空を指差した。

じ時間に存在している。

だから、

また会える

も

ずっと会いたがっているから」

゙あっちよ。まっすぐ向かって。必ずパインちゃんに会えるから。パインちゃんも

モモンガが、さらに質問しようと考えた。しかし、少女は前触れもなく光の球に

戻ってしまい、空へと帰っていった。

口 ンチーノが弓から力を抜

「行っちゃいましたね。アインラードゥンさん」

光の球は次々に、 一空へとのぼっていく。

「……とりあえず、 情報を整理しましょうか」

その話し合いは朝まで続いた。

三人はまず、得た情報を整理した。

よってこの世界に案内された。そこにパインさんの意志が関わっている。 一、自分たちが転生した、そのものの理由は不明。しかし、アインラードゥンに

ニ、ナザリック地下大墳墓がある方角が判明。

三、「みんなといる」という発言から。パインさんはおそらく、他のギルドメン

それから、この情報をもたらした少女、アインラードゥンを信じるのか意見を交

バーと再会している可能性がある。

わした。 結果、示された方角へ進むことになった。他に手がかりはない。可能性があるな

81 モモンガさんたち。 ら、 三人は、太陽が顔を覗かせてすぐに空を飛んだ。 確 かめておくべきだ。

行は飛んでいた。途中に大きな街や村が見えたが、あまり注目せず。 案内役と自らを呼んだ魔法少女、アインラードゥン。 彼女が指差した方角 まっすぐ飛ん

ナザリックらしき影が見えず、ペロロンチーノがぼやいた。

「本当にこっちでいいのかな」

で行く。

良 のだろうか。 いペロロンチーノが見つけられないのだ。ナザリックはまだ遠くにあるのだろ モモンガも同じ気持ちだった。焦がれた存在が、会いたい人が誠にこの先にいる 疑惑は空っぽの胸の中でもやとなり、たちこめる。この中で最も目が

モモンガさんたち。 た つ ちが沈む空気を入れ替えるように言葉を発した。

う。

んじゃないですか?とりあえず、夕方まで進んでみましょう」 たしか、私たちをナザリックから近い場所に落としたんですよね。案外すぐ着く

隣りを飛ぶモモンガが頷く。

「そうしましょう」

そして夕方まで飛ぶと、村の外壁を木材でぐるっと囲んだ、村に着いた。

「あの気持ち悪いネズミ、パインさんのネズミだ!」

あっ、とペロロンチーノが驚く。

84

「村の内外、そこら中にいるよ」

どこに?」

たっちはスキルを、モモンガは魔法で目を強化しよく見てみる。 いた。 間違いな

パインの使い魔であるネズミたちだ。

い。つまり、 はキョ ネズミたちは村を守るように、あちこちを走り回っている。時々、立ち上がって ロキョロと周りを警戒している。どうやらこちらには気づいていないらし ネズミたちの索敵能力よりも、ペロロンチーノさんの目のほうがいい

んだ。

きれていない。 モモ ンガが二人に問いかける。その声は探し物が見つかった喜びで興奮し、抑え

「本当にパインさんのネズミですかね」

「わかりません。どうしたら確認できるでしょうか」

「向こうが俺たちに気づいてくれたら楽だけど、敵だったら危ないですよね」

三人は一度話し合うため、元来た方角へ反転した。

森の中、魔法で防壁を築き、その中に腰を下ろす。 モモンガが再びランタンを取

り出し、 灯りをつけた。 おぞましい異形の姿が闇夜に浮かぶ。

「隠れている方が安全だよ。 「どうしましょうか。こちら もし敵で、 から接触するか。味方だとわかるまで隠れてい 戦闘になったらどうするの ?怪我したら 、るか」

モモンガさんたち。 今の俺たちじゃ死ぬかもしれないし」 「ヒーラーいませんもんね。アイテムにだって限りがありますからね」

頑丈だし、防衛設備が整っているし。 「そういえば、あの村……他の村とは違ってやけに発展していましたよね。 もしかして、プレイヤーが力を貸しているん 造りが

85 「ということは、あの村を見張っていればいいんですよ。もしかしたら、 ナザリッ

じ

ゃ

ない

ですか

?

初日ということで、まずはペロロンチーノさんが見張り役をかってでた。次はモ

うに息を潜めて過ごす。大変息がつまる日だった。 モンガさんで、最後にたっちさんの順番だ。敵かもしれないので、気づかれないよ

「あ、パインさんとルプスレギナ見つけた!」

頭上からそう聞こえてきて、すぐペロロンチーノさんの側まで飛ぶ。

86

か

:し、昼頃。事態は動いた。

「村の中ですか?」

「そう、今村人と話してる」

魔法で目を強化して、パインの姿を探す。

〈身代わり姿〉のパインさんと、ルプスレギナがいた。 いた。村の中で一番大きな家の近くにいる。そこに人が集まっていて、中央には

たっちも上ってきて、パインたちの姿を確認する。

「今行ったら警戒されませんかね?」 「二人で間違 【いないですね。どうします? 今出ますか? 」 モモンガさんたち。

87

す。 準備できたら、姿を隠さず接近してみましょう」

「それよりも、本物のパインさんか確かめないと。最悪戦闘になる可能性もありま

「了解」 「了解です」

ない。

三人は地表に降りて装備を見直した。特にモモンガの気合の入れようは半端では

やっとパインさんに会える。

偽物ならば、友を騙った奴を殺したかった。

へつづく>

ナザリック地下大墳墓側

ナザリックでは。

プレイヤー名:パイン・ツリー。(女性)

小学校を卒業し、現在の会社に就職。 小説版、オーバーロードの世界に転生。

ン】の前身であるクラン(集団)【ナインズ・オウン・ゴール】に加入した。

リアーを軸に戦士系クラスを習得する。数年後、ギルド【アインズ・ウール・ゴウ

ユグドラシルはサービス開始時からプレイしていた。

異形種、スケルトンウ

オ

少女』を習得、種族とクラスを変更する。 さらに数年後、ユグドラシルにて〝魔法少女イベント〟が開催された際に ″魔法

それからサービス終了時まで、金貨の貯蓄と課金、アイテム収集を趣味とし、 ナインズ・オウン・ゴールに加入し、前世の記憶が本物であると確信する。

ユ

グドラシルをプレイ。

クでは。

前世で見た、自然をもう一度見るため。

小説で読んだ、彼らと会うため。

ナザリッ

そして大事件は起こった。 モモンガともっと遊びつくすために、パイン・ツリーは最後まで残った。

90

「モモンガさんがいない!!」

する異世界生活(カオスモード)】が始まるっていうのに、魔王様が消えたってど ハァアンッ!:私にとって【ナザリック地下大墳墓より。 ナマで魔王生活を応援

ういうこと!??

るよ。原作読んだのが数十年前でもこれは覚えてるよ、やったー! あのね、モモンガさんは後に魔王様じゃなくて〝魔導王様〟と呼ばれることにな

ラサラ長髪美女で悪魔のアルベドさんの胸をもっみもみするよ!ウェブ版では、 そして、異世界にギルド拠点ごと転移した直後、魔導王様は、ここにいる黒髪サ メ

イドにパンツ見せるように命令するよ!!!

紳士淑女みんなが気になるネタバレ

91

本当にいなかったら、

誰がナザリックを運営していくんですかね?私ですか?

パンツの色は白だよ

!!

白やったー!

「姿を隠した?」

「どうなさいましたか、パイン・ツリー様」 アルベドって綺麗な声だよね。あの時見ていたアニメと同じ声…だと思う。この

状態だった) \exists のために、 けど、 NPCたちと話していた(ゲーム時代なので、人形に話しかけている 聞いたのは数十年前だから、 自信ないです。

「モモンガ様 「白…じゃなくて、 でしたら、 モモンガさんがいなくなってるの…」 先ほど姿を御隠しになられました」

たしか、 ナザリックのNPCの間で使われる隠語だよね? なんて意味だっけ ?

ませんので、 て、ナザリック地下大墳墓から至高の御方々に共通されます至高の輝きを感じられ ーは まり、 い。まるで転移を行われたように、瞬時に御姿が見えなくなられたこと。 ログアウトか。 おそらく、姿を御隠しになられた。 異世界の 転移に合わせてログアウトは、やばくな のだと愚考致します」 加え

クでは。

そんなバカな。

「(…モモンガさーん! 聞こえますか? モモンガさーん!)) モモンガさんに電話するように、脳内で話しかける。

ナザリッ 私から見えない糸が出て、意識の中を彷徨う。どんどん先に伸びていくが、相手

が見つからない。 これ≪伝言≫(メッセージ)は発動できているけど、相手が見つからなくて繋

92

がってないな。 ギ ルマスに連絡がつかないので、現在ナザリックを動かせるのは私だけ。

ありえない、ありえない、信じたくない。 。モモンガさん不在でナザリックと世界征服、という可能性に背が凍った。 嘘

症ろ…?

アインズ・ウール・ゴウンの中でも〝馬鹿〟な私だけで、ナザリックを守れるワ

るの?守れなかったら?決まってる。 なら、ここはどうなるの? 敵に攻められたら、ここにいるNPCたちはどうな

ケがない。

ク地下大墳墓側

ならば行動しましょう!

その可能性を忘れていた。そうだよ、希望はまだあります!

「あ、そうか」

ダメじゃん!

だもの

「(でも、今はモモンガさんいないよ。私ひとりだよ…)」

奈落の底に落ちそうになったとき、大声で叫ぶ〝私〟がいた。

ふざけるな、まだ決まったわけじゃない!! モモンガさんがいてくれたら大丈夫

私の、せいで?

みんな、

死 ぬ。

なくても、こっち(異世界)側に一緒に来ているかもしれないじゃん!探さなきゃ

今はそうかもしれないけど、見つかるかもしれないでしょう! ナザリッ

クにい

93

ンガさん探索ホ

について話し合いたい

から、

集まってもらおう。

"警備レベル上げること;

゛゛゛モモ

とりあえず、守護者全員に「異世界に来たこと」

「アルベド、今から各階層の守護者を集めてくれる? 6階層の円形劇場(アンフィ

クでは。 私から伝えておくから、二人のことは気にしなくていいよ」 テアトルム)に集合させて欲しい。今から一時間後に来てね。 アウラとマーレには

ナザリッ 恭しく膝をつく姿が、綺麗だ。私もこんな風に、魔導王様に跪拝したい。モモン

「かしこまりました、直ちに行動致します」

パインは頷くと、次にセバスに命令した。 ならば、私はアルベドを模範とし、恥ずかしくない自分になろう。

ガさんにとって、美しい所作の模範がデミウルゴスだった。

94

「セバスは、プレアデスの中から一人連れて……いや、取り消します」

すでに、原作とは違う流れになっている。 もしかしたら、セバスはナザリッ

クの

外で戦闘になるかもしれない。だったら、ユリたちじゃ戦力不足になる可能性もあ

る。

ンで学んだことだ。

この世界のほとんどはレベルが低く、 レベル 30 程度のザコが英雄級と人々に称

一画は用意周到であれば、確実に敵を殺せる。それはアインズ・ウール・ゴウ

された。

ック地下大墳墓側

ナ ザリックで屈指の強さを誇るセバスでも、 負ける可能性があることを考える

レベル100と思われる強敵もいた。

中

崩

確 ち

に ろ

h

例 外は

あり、

ほとんど見かけな

いが

:レベル 50 以上もいる。

はされていないが、

い と…ある程度強くて、 魔 が ちょうどいいか レベル100同士の戦闘にも役立つ味方が必要か。 な。 …私の使

セ バ ス はこの子たちと、 地表部分を見てきてちょうだい」

スキ ,な?

私は、 ぶっつけ本番、 自ら の内側 に語 ルはち りか け ゃんと使えるか た

、出て来 ≪使い い 喚・上位≫

,魔召

スキルを唱える。体の中心に応える者がいた。

それらは玉座の階段下、セバスたちがいる目の前 に現 れる。

暗 にく淀 み、 心の底から恐怖を呼び起こそうとする真っ黒 がい沼。

そこか

:ら這

い上 あ

ナザリ が っ たのは、 一匹の巨大なカニだった。 その胴体は、 セバスの身長 と同じくら

95 る。 体は茹でられたように赤く、目は見たものの恐怖を呼び起こそうとする気配に

ナザリッ クでは。 悪な作りをし 方 満 のハサミが異様にデカい。 ちた黒だっ た。 ている。甲羅部分に一際目立つ、氷柱上の突起物が見えた。 全身がとげとげしており、シオマネキと呼ばれる種類のように片 中肉中背の成人男性を一度に数人断ち切れそうな、

凶

96 1 5 次に天上から物音がした。 ニが完全に姿を現すと、 C ネズミだ。 mぐら いだろう、 炭 のように黒い体、 決し そして小さい何 沼は元からなかったかのように、 て強くない― 赤い月を連想させる目をして 弱そうな―見た目をしてい かが降 ってくる。 消え失せたのだ。 い た。 るネズミは、 体長 10 (

味悪 の上を カニ をしながらも、その仕草はただのネズミだった。―強さを感じ取れない、妙な気 の上に落ちようとしていた。 さが小さな生き物にはあった。 滑 言った*。 し ゕ まるで曲芸を見せられたようだ。 そうはならなかった。 このままでは、 ネズミは空中でくるりと体を回 あの氷柱状の物で体を突き破 普通ではありえない身のこな 氷柱 られ

薄紫、 模しただろう人形だった。 そして空中 だい に花弁が浮かび上がり、床に落ちず漂った。 · . . 様 々な花弁が密集し、膨らみ、弾けた。 髪は薄い桃色で、春を思わせる生命の喜びに満ちた輝く そこにい 赤、ピンク、 たの は、 少女を 白

97

ね。 る相手 ら…大体

戦闘になった場合は、そこのネズミが隠密に長けてるから、そいつに情報を絶

―と遭遇したら、できるだけ穏便に…ナザリ

ッ

連 話 れ てきて が でき か

そのぐらいで帰ってきて、私に直接報告すること。

ナザリ

知的生命体

50

分かな。

ク地下大墳墓側 の地表部分を確認してきて欲しい。召喚した使い魔が消える前に戻って欲しい

「―うまくいった!セバス、この3体を連れて、ナザリックを中心とした半径1k

m

に気づかず、パインは使い魔の召喚に成功し、軽い調子で言った。

たく がフラ

か

っ

た。 ュバ

足元が崩れ落ちそうな危うい浮遊感が、

セバスを襲う。

他

の な

Ñ

P

たちも同様に、

困惑してい

る。

る。

この人形

セ

バ

その

人形

の闇を目にすると、彼の創造主たっち・みーが去っていく瞬間

ッ ス

シ は

ックした。

固く目をつぶる。できることならば、

あ

の日を思い出

している。それだけならば、ただの可愛らしい少女の恰好をさせた人形であった。

の皮膚…肌が見える顔などの部分がすべて、禍々しい闇

膝下からは白いソックスを履いており、ショートブーツはプラチナの輝きを発

細かいフリルがあしらわれ、腹部に大きなリボンが飾られた膝丈のワンピー

色だ。

スも桃色だ。

髪を一つにまとめているリボンと、

腹部の物は同じ赤い色をしてい

98 ナザリッ りせずとも、ここにいるプレアデスたちでも任務をまっとうできるかと…」 「はっ、かしこまりました。しかし、パイン様自ら御創りいただいたしもべをお借 あー、やっぱりセバスたちNPCは、ギルドメンバーが召喚したNPCを自分た

ちより上に見ているのか。私としてはギルドメンバーが心を込めて創った、自分た

「プレアデスたちは、 そう考えながら喋ったため、気持ちが表面化した。 9 階層で侵入者の警備についてほしい。それに、

至高の存

ちをもっと大事にして欲しい。

ちだと思うな。…お前たち、セバスがリーダーだ。従え」

在が創ったシモベが尊いなら、このナザリックにおいて最も尊いシモベはセバスた

震えていた。 な い嗚 なんと、幸せな日だろうか。至高の御方から直接「尊い」と仰っていただけるな 咽 セバスは、視界が滲み、そっとハンカチを取り出した。隣から、押 が聞こえてくる。アルベドは微笑みを絶やしていないが、翼がプルプルと 薄っすら頬も赤く染まっている気がする。 し殺せ

ナザリ

従うってさ。

ĺ か

~な?」

る。あの人形を見る。闇は身を潜め、ただ黒い肌がそこにはあった。力を抑えたの だろう。 てられた。パイン様が御創りになられたシモベたちが、私に向かって姿勢を低くす で命令される。 皆の 心が浮き上がる中、 再び創造主との記憶が蘇ることはない。 自分たちに下されたわけではないが、身を引き締める衝動 御方の声で目が覚めた。いつもより低く、 威厳 が に駆り立 あ る声

「(これがパイン様の御力、そして御創りになられたシモベの実力…)」 御方のシモベの能力に押された不甲斐ない我らを許し、 気遣ってくれた このだ。 な

んと、

お優

Ū い

・御方だろう。

至高の存在に感謝し、

その恩に報いるため、

より

層

忠義に励むことを誓 っ た。

命令する。 召喚した使い魔たちとの精神的なつながり…見えない絆を手繰り寄せる感じで、

意 を表していることが、絆から伝わってくる。 3)体はそれぞれセバスの前に並び、姿勢を低くした。彼らにできる精一杯の敬

99 良いもなにも、 我らは至高の御方の忠実なるシモベ。 その御言葉に異議はござい

の御心遣い、心より感謝致します。その御恩に少しでも報いれるよう、このセバス、 ません。……出過ぎた真似をしてしまい、大変申し訳ありませんでした。パイン様

全身全霊をもって任務をまっとうさせていただきます!」

100 ナザリ の勢いに押されて、思わず後ろに引きかけた。 目力すごい、やる気に満ち溢れてるよお! 意気込みがすごく伝わってくる。そ

ちゃおうか。 「プレアデスたちはさっき言った通り、 勢い ありがとう」 あり過ぎて心配になる。でも水を差す真似はしたくないから、このまま進め 9 階層で警備につくこと」

「かしこまりました、パイン様!」

代表であるメガネ美人なユリ・アルファが返事をした。プレアデスたちもやる気

に満ちている

「では、行動 開始

「「「承知致しました。 深く頭をたれると、 一斉に立ち上がり扉へと向かう。 我らが主よ!!!」」」 最後にアルベドが扉を閉め

て、玉座の間が静まり返った。

やったー!モモンガさん、褒めてくれー!…あ、今いなかったや。

『回ながら、うまくNPCに指示できた気がするー!!

初

顔からあらゆる感情が削げ落ち、ガクリと崩れた。 東の間、 達成感に包まれていたパインは、ある失態に気づいた。

「″素゛だった」

思い

出したのだ。

威厳がある支配者っぽい話し方なんて、一回もやってねえ。 ユグドラシル時代と同じ感覚で、NPCたちと話してた。

めっちゃ気さくに話してしまった…!

めとくべき? 「…やってしまった! 前言撤回します、モモンガさんごめんなさい!! 」 今からでもやるべき? それとも急なキャラ変更は、不信感を煽るだけだからや

101 うんうん唸り、 スポンジ脳みそをぎゅうぎゅうに絞ったが、どうすればいいかわ

からない。

例え、私が支配者らしくなくても、ナザリックは私を見捨てないだろう。 確信していることがある。

ナザリッ そこまで考えたところで、ナザリックに相応しい主になろうと奮闘していたモモ

102 ンガさんを思い出し、パインは自己嫌悪の航海に出た。 「見捨てられるかどうかの話じゃない。自分がどうなりたいか…ですよね。舐めた

頑張らなくてはならな

こと言って本当にごめんなさい」

この栄光あるナザリックのギルドメンバーの一人として。

「えーと、スキルは使えたから、私が使用できる能力は問題なく発揮できる。

守護者が集まるまでやっておくべきことは?」 原作通り、レメトゲンの間にいる悪魔たちの動作確認 ? スタッフ・オブ・アイ

ンズ・ウール・ゴウンがない私では動かせないよね? 侵入者の警戒?それは外にいるセバスが、最も早く感知できるだろう。

えたネズミは隠密もでき、索敵もそれなりにできる。音を拾うだけなら数 ㎞の離

彼に与

あとやっておきたいこと…ワールドアイテムだ!

れていても、

知覚できる。大丈夫だろう。

「そうだ、外に出るメンバーにワールドアイテムを持たせたい!」

ニグンを手に入れた後、漆黒聖典たちからアイテム奪いたい !…いや、これっ

て今すぐに必要ではないな。

―そう、 でも、パンドラズ・アクターにモモンガさんがいないこと伝えておくべきだし。 力を借りたいんですよ!アルベドに仲間として頼られる頭脳の持ち主だか

ンドラならモモンガさんに気づくだろうし、モモンガさんも、モモン、 5 めっちゃ頭 いいはず。第六階層に連れて行って、皆に紹介しよう。 の外装を使 それで…パ

内政は君にしかできないから、残ってください…。ごめんね。お詫びに、モモンガ ドラに冒険者やらせよーっと!アルベドも行きたがるだろうけど、ナザリックの の部屋に入っても何も言わないからね。モモンガさんにも内緒にしておくね。

えばパンドラに…少なくともナザリックに気づいてくれると思うから。うん、パン

さん 良 い 匂 ゙がするって言ってたし…うん、ナザリックの未来は明るい。 問題な

結局、以前から考えていた【モモンガさんを説得して、初期からパンドラを参加

クでは。 ナザリッ 会したら、謝ろう。そんで言い訳させてもらおう。 いよお。モモンガさんに相談したいけど、ご本人いないから仕方ないよね?…再 させよう!】案が実行になった。…人の黒歴史を勝手に掘り出すって、ありえな

あと、宝物殿をからっぽにできないから、あいつ呼んで警備させよう。

104

【つづく】

パインはアイテムボックスが無事に作動することを、

確認した。

…やることいっぱいだから、メモしとくか

105 ック地下大墳墓側

> パイン・ツリーが自作したNPCは、 第5階層・氷河に いた。

この階 層は、 かつて地球を襲った *氷河時代*を思い浮かべてくれれば、 わか ŋ

やすいだろう。

う。 ジ、スタミナの低下、 対策をしていなければ、 雪で覆われた真っ白な世界。 移動速度の低下など。様々なバッドステータスが侵入者を襲 身動きが取れず、 常に激しい吹雪が吹いており、それに準ずるダメー たちまち体力が 0 になってしまう階

層だ。

今回、 この階層には、 用が きある のは魔女の館だ。 階層守護者の住居、 氷結牢獄、 そして魔女の館が ある。

・ツリー は 玉座から、 第5階層のある雪山に転移した。

前に広がる自然にくぎ付けになる。 リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで転移できて嬉しいが、それよりも眼

しているようだ。例えデータでも、記憶の中の雪とよく似ている。この作り込み、 オッと吠える吹雪。ずっと先に見える巨大な氷山は、自然の恐ろしさと雄大さを表 こちらのリアルでは失われた自然に、感動した。雪のサクサクという音。ゴオオ

そして身を縮める。

作成担当をしたメンバーは本当にすごいと、改めてパインは感心した。

してい 寒冷地エリアの対策は元より、よく足を運ぶエリアなので必要なアイテムは装備

「さっむ。寒さを感じないけど、見た目が激しくて寒い」 か リア ルになった第5階層は、とっても寒そうだった。

感覚で、決して痛覚を刺激するものではない。これがアイテムの力か!偉大だなァ 不思議な感じなのだが、体に吹雪が当たっても痛くなかった。綿が当たるような

約20cm大の雪だるまを作ってから、雪山の中にある祠に入った。 天然でできた洞窟っぽい見た目に、中央に館へ直接入れる転移門が設置 されてい

!

る。 そして転移門を中心に円状に柱が 6 本置かれていた。柱には特に装飾はされ

祠 は 観覧車一台が入れるぐらい天井が高い。その天井には、ライトブルーのクリ

縦にまっすぐ何十本も筋が入れられているだけで

ない、

スタルが素材にした大きなシャンデリアが下げられている。

「(綺麗 ちなみに、このシャンデリアは侵入者を撃退するアイテムである。 ヤンデリアの細か ャンデリアは自ら輝きを放ち、祠を淡い青色の光で照らしていた。 !あー、青い光のおかげで心が落ち着く…)」 いクリスタル一つ一つが、氷属性のビームを打つ。

属性 蔚 陛 上があ っても、 凍結による動きの束縛、足元が氷り滑 って動きにくくなるな 侵入者に

他にもペナルティが敵を襲う。それら、すべてに耐性がなければ戦いにくくな

シ

ゴウンのメンバーに対して作動しないことに安心した。パインはどうどうと足を進 っと小賢しい罠だ。この罠がユグドラシルと同じく、アインズ・ウール・

める。 転 移 『門は無人ではなく、常に2体のしもべに警備させている。

の攻略掲示板にも記載されていないモンスターもいた。ここまで来る侵入者は少な 数十 ・体の虫系モンスター が日替わりで交代するため、

アインズ・ウール・ゴ

108 自作NPC

いので、あまり情報が上がらないというのもある。

武器は装備していないので、格闘タイプかな? 今日は、腕が4本、足が2本のクワガタとカブトムシがいる。

ど、本当にこのタイプの異形種は、どういう体の作りになっているのだろう。 パインに気づき、顔だけをこちらに向けて凝視している。恐怖公も当てはまるけ 傍に寄ると、2体は腰を低くした。

「これはパイン様、魔女の館入口へようこそいらっしゃいました」

´ ワガ タが話しかけてきた。

「こんばんは、ヘドラはいる?」

あ、また素で喋っちゃった。ひえ、私って本当におバカ。

「はい、館にてグリーフキューブを生産されています」

「そう、ありがとう」 お礼を言うと、ガチンと固い物同士がぶつかった音が反響した。

威嚇じゃないよね? 喜んで鳴らしたんだよね? クワガタが下顎を鳴らしたのだ。 かわい

「至高 の御方のご質問にお答えするのは当然でございます。 ですから、 そのような

お言葉は不要でございます」

すっごい嬉しいけど、恐縮しちゃうらしい。萌える。でも、そう言われてもなー。

「教えてくれて、有り難いから。ありがとうって言いたい」

…ハハッ!また素だよ。 全然気をつけてないな、私。困ったな。

これ以上ボ 口を出さない内に、 またね」

急ぐから、

視界がすべて真っ白くなるが、 返事を待たず転移門に入っ すぐに終わってしまった。 た。

床は大理石、壁は木造である。室内には中央より奥に転移門を置き、対面に両扉

景色は変わり、パインは室内にいる。

がある。 る。そして、壁一面ほど大きな絵画が目に入った。 部屋の隅に一人用のソファと、傍に赤い薔薇が入った白い花瓶 少女が花束を持ち、 が置 父と母と か れ 7

共に笑う姿が描かれていた。

「(リアルになると、 ゲームの時より、 ちょっと薄暗い気がする。 この部屋はこんな感じになるのか…)」

仲間 ゲ ´ ー ム .から ״ナザリック地下大墳墓オタク〟 の世界が、現実になれば何かしら変化があるのか気になってい と呼ばれたパイン。今度すべての階層を た。 か つて

見て回ろうと、心に決めた。

そ

れか

Ę

もう一つ決めていく。

ハッキリ、 堂々と話すこと。言葉にしやすい丁寧語を使う」

深く吸い込み、 大きく吐き出す。 浅く吸い込み、 腕に力を込めた。

両扉を開けると、大広間に入った。

1 0 · O体ほどなら問題なくシモベを配置できる広さがある。一番奥には結界が施 左

右に二階へ続く階段があった。 された、 縦 m横 2の両扉がある。 2階建ての造りで、パインが立つ位置から、

が たあっ その階 た。 段 う の 一 シルバーで円柱の、スタイリッ 番下、パインから見て左側に、 シュ 館の雰囲気に合わない鉄制 なゴミ箱だ。 実に、蹴り飛ばしたく のゴミ箱

なる。

111

まさに絶美と称賛されるべき作り込みだ。

出来上がった時もそうだが、

このメイ

装担

当のメン

バ

ーは悲鳴を上げながら作ってたね…。

|刺繍は、舌を巻く。この細かすぎる刺繍をそのまま再現した、外

にエプロ

ン部分の

下大墳墓側

て」と豪語した仲間が、原画を描き起こしただけあって、驚くほど精巧である。 スカート部分は長く落ち着いたもの。「メイド服は決戦兵器、メイド服は俺

ナザリックにいる他のメイドと同じメイド服を着ている。エプロン部分が大きく

のすべ 特

体

のメイドがこちらにやってきた。

性使用人が

い

る。

か

奥

の

扉

、から戻ってきていないようだ。呼びに行くかと考えたところで、

しお目当てのNPCは

いな い。 広間

ろに引きかけるが、目的を思い出してその場に踏みとどまる。

にいるNPCを見渡す。ほとんどが虫系モンスター、ちらほらとメイドと男

すごいプレッシャーだ。あんまこっち見ないでほしい、緊張しちゃうよ。

足を後

いる。

広

間

には仕事中のシモベたち―およそ20体―が、足を止め、

パインを凝視して

しい。

自作NPC ド服を直に見れて嬉

たちと同じく、絶世の美女だ。

髪を片側にまとめ、耳の下から流している。名前は「クレンチ」。名づけ親は、餡

こちらへやって来たメイドは、身長は約170cmで、華奢な印象だ。

彼女は黒

ころもっちもちさんだ。

なみに、

魔女の館の食料は奥の扉にある畑ですべて作られている。

な

のでナザ

むしろ食料が必要な階層に、お裾分けしてい

悪い影響は一つもない。

終わるかしら」

ていくことが肝心だと思うので、このまま支配者ロールやろうね。

〝毅然〟とした態度を目指したけども上手くいかない。グッダグダやけど、やっ

「はい、もうすぐ終わるかと思われます。ヘドラ様の部屋でお待ちになられますか

6 IJ

「パイン様、ようこそいらっしゃいました」

|挨拶は、いい。ヘドラに用がある…あります。そろそろグリーフキューブ生産は

そして、そのメイド服を着るメイドも、9、

10 階層に配置された美しいメイド

ク地下大墳墓側

がとう。

「いいえ、 迎えに行きます」

「かしこまりました。では、すぐに護衛の準備を致します」

メ 、イドの背後に、ザッと虫系モンスターが並ぶ。その数15体、この部屋にいた

めっ

ちゃ過

「必要ない。 大体…ヘドラだけでも倒せるように造ってあるも

保護じゃない?そんな鬼畜仕様にあの部屋を作ってないから大丈夫だよ。 すべての虫系だ。今ここにいる戦闘系しもべを全員を出動させるとか、

庭に出る感覚だけど、襲ってくる敵がいるから心配なのね。心配してくれてあり か 至高 の御方が護衛もなく、 あのような場所に行かれるの ;は…」

でも味方が多いと、動きづらいからねえ。

再度、 1 体の神父姿の男が、 丁重に断ろうと口を開こうとして奥の扉が開いた。 5体の虫系モンスターを従えて現れた。

く被っている。 男 ?はある宗教の祭服にそっくりなローブを着込み、 十字架が描かれているはずの場所が、 上着に付属するフードを目深 アインズ・ウール・ゴウンの

113

ナザリ

自作NPC ギルドサインに変わっていた。

種族・二重 |の影(ドッペルゲンガー)、それがパインのNPCだ。

114 ぽっかりと空いた空洞が3つ、目と口の位置に空いている。黒く塗りつぶした、そ らしかない。 名前は「ヘドラ・ファンタズマ」、髪も耳もないつるっとした卵型の頭部。 眼球も鼻も唇も歯も、 削ぎ落とされたようになくなっている。ドッ 顔は

数 種 類 の 外装を持ち、 普段は複数の部下を連れて戦闘するため、 指揮官の クラ

ペルゲンガーの姿そのままだ。

ス ・ス を多数習得している。

〝祭服〟を着せたのは私の趣味だ。聖職者の服って、きっちり隙なく着込み、信 マンダーやジェネラルなど指揮官クラスには軍服がよく似合う。 しかし、あえ

仰の尊厳さ、 神聖さが滲み出て美しい。それがとても良い。

ンと同じくら い使用頻度が高い "グリーフキューブ』の生産を任せたNPC。

と性癖を混ぜて、パインにとってはリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウ

趣

味

魔 女の館を守護する 魔女の特別な使い魔として創造されたNPCである。 〝領域守護者〟、使い魔の指揮系統を一切担う "結界の管理 れてい

るから、

余計に違和感を感じる。

ショックだ、でもカッコ良

い

步一 歩床の感触を確かめるように、 ゆっくりとした動作でパインの方へ歩いて

くる。

緩やかで指先まで神経を張る所作は、 非常に美しく。そして彼が着る祭服が、

連 の 動きをおごそかな雰囲気に昇華していた。

綺麗 現実では少 だった。 時でも、 し違う。 仲間たちが心を込めて創ってくれたヘドラはその見た目に反し、

やがて充分な距離をとり、ヘドラはパインの眼前で頭を浅く下げた。

作 綺

り物では

い、命あされる。

る動きが、何度も私を揺さぶる

のだ。

に麗で、

はな田

ごきげんよう、我が創造主よ。ようこそ我が館へ、歓迎しよう」 ぎゃあ!渋い ,声が埴輪顔と合ってないー! パンドラの高い声が記憶に刷り込ま

私は全然気にならないけど、クレンチは眉を吊り上げている。 ょっと上から目線な感じなのは、そう話すように設定したからだ。 何も言わないの

116 自作NPC とって、ストレスの多い職場ではないことを祈る。 は、ヘドラがそう創られた存在であることを、知っているからだろう。 いく素晴らしい声だと思う。(…正直に言おう、MGSのスネークの声だ。渋い声 最初はびっくりしたけど、ヘドラの声は低めで深く渋い、耳に心地よく浸透して

…彼女に

あー、こっちに来てよかった。 が .好きなんだ)想像していた声の通り、ヘドラが喋っている。 ず と聞きたかっ たNPCの声が聞けて嬉しい。胸に熱いものが、 こみ上げる。

「…まるで、)ゃったというのに、あなた様の目には、 はじめて出会ったころを思い出しますね。 私しか存在していなかった」 傍にはヘロヘロ様が いらっ

フフンと、片頬を上げている気がする。多分。こっちは胸もお腹も一杯だが、

ぱ :じめて会った、 は間違っていない。二次元と三次元の壁は大きいもの。

ドラは余裕があるらしい。

「そうな のかな。…これから宝物殿へ向かいます。付いてきなさい」

「御意。

では、準備

しよう」

ヘドラはアイテムボックスから、毒無効など複数の効果が付与されたネックレス

ナザリッ

を取 り出

ブ・アインズ・ウール・ゴウンをヘドラに渡す。これがないと、宝物殿に行けない 私もアイテ 、ムボックスを開き、モモンガさんから貰ったもう一つのリング・オ

んです。

さあ行くぞ、と動く前に気になったので聞いてみよう。

「…ヘドラ。あなたが いない間、この領域は誰が守るの?」

されたレベル85以上のシモベが、

指揮を執ります。

そして規定

「私の副官に配属

通り、 彼らだけでも戦えるように魔獣のレベルを下げます」

「…問題ないわね。行きましょう。じゃあね」 なるほど。ゲーム時代に決めたことと、 同じルールで動いているのか。

皆、仕事中にお邪魔しました。 またね ١

転移するとき、 その場にいたしもべたちが一斉に頭を下げたのを見た。

重たい。

【つづく】

117

は

魔

女

への館

で行えるの

で、

簡単に稼げて、

モモンガも合流しやすか

、った。

宝物殿へ。

魔女の館から転移して、宝物殿に転移した

宇宙 に 届くだろうNPCたちの忠誠 の一端を見たパインは、 精神的にかなり疲れ

てしまった。

頭 の中は、今後の予定でいっぱいである。周りを見る余裕がなくなり、 眼前 に輝

く金貨や財宝が見えなくなった。

と言っても、ギルドメンバーが二人のみログインするようになった頃から、金策

たわ だ。見慣れすぎているから目を引くようなこともないのだ。 は パインがしていた。転移して目の前にある金貨は、ほぼパインが投げ入れ けではなく、モモンガより早くログインできたからやっていただけである。 ちなみに、担当してい た物 金

私はこれからパンドラズ・アクターと代わり、宝物殿の守護を任され

「あ…ええ、それでいいわ。 私は変身していくし……」

良

いか

[^]ね?

宝物殿へ。 「モモンガ様が? ふむ、そうかね。モモンガ様は最近、リアルが忙しいと仰って 「いいえ。モモンガさんがいないから。<u>」</u> 「変身を?…外に出られるのか?」

120

い

たから、先にログアウトなされたのかな?」

「……多分?」 えーと、ヘドラにはどこまで伝えていいのかな?守護者に言っていない事は言

・?組織の情報は上から順に伝えるものだし、セバスたちに命令した内

えないよね

容は黙っとこうか。 いった精神で、もやもやと考える。パンドラに話すときも、守護者と同じタイ

ている可能性は未知数だ。何もわからないのに伝えていいものだろうか。 でも本当に終了間際にログアウトしたのかもしれないし、そうなればこっち側に来 ミングでいいのか? …創造主がいなくなったのだから、先に話すべき? うーん、

創造主よ、 多分とはどういう事でしょうか ?

制ログアウトを待つと仰っていたわ。だけど、私より先にいなくなってね…驚いた 「ううん…えーと、今日は…といっても日付が変わったから、もう昨日の話 ね。 強 1)

今ナザリックにいないから、アルベドが正しいと思う…」 突然の敬語ビビるからやめてね。その低い声に敬語とか最高だから、また聞かせ 確かに、

の。でも、アルベドはログアウトしたんじゃないかって。

モモンガさんは

て欲しいです。

それにしても、モモンガさんがログアウトしたら……異世界転移できないんじゃ

ね? こっち来られるの? 別ゲームからの転移者いるのか? モモンガさんがこちら に転移するゲームをする確率とか……、そんな偶然あり得るのかな。 「…御身の静寂を破ることをお許しください。パイン様、少々お時間を頂戴しても

よろしいでしょうか?」

気分が沈み気味だ。あと、他のことを考えている余裕はない。 「話? それは急ぎの件なの ? そうじゃないなら、今は用事があるから…」 敬語ありがとうございます!なんて浮かれたいけど、嫌な予感に心が引かれて、

「失礼いたしました。では、後ほど」

121 「畏まりました」 「 うん。 じゃあ、速く着きたいから走って行きましょう」

による風の冷たさや痛みを感じない。 少しドキドキした。 頑丈な体が羽のように軽い。 これが今の私な

から霊廟に辿り着くまで、私たちは風よりも速く宝物殿を走り抜け

た。

高速

長 い廊下を抜けると、 明かりがほとんどついていない広い空間 に出た。

「パンドラズ・アクター、出てきて」

静寂を破る声は、普通の大きさでも室内にこだまする。 やがて、 反対側の通路か

ら姿を現す人影があった。

いや、異形種だ。

人型体の体、 頭に歪んだヤギの角。顔を縦で割り、その半分を隠す仮面。

ギルドメンバーのウルベルトさん。

け算したような、 おおう、ウルベルトさんのアバターって現実になると、悪意と憎しみと恐怖 雰囲気醸し出すのか。 すごく怖い。 けど、迫力があって超絶かっ を掛

いぞ。

1) 踵 をカツンと鳴らし、 うう、 モモンガさんの事を話したいけども…。「……後でまとめて話します」

ーオーバーアクションで敬礼を決めたパンドラから視線を感

123

と言って顔をそらした。ごめんね、今はそれしか言えないの。残り数十分の我慢と

は、 何 か 異常事態ですかな?」

ド

ッ 重

朖

にヘドラと同じ卵頭で、

唯一顔を飾る目と口がぽっかり空いた闇に見える。

挨拶もなしと

ペルゲンガーだ。

に戻っ

た

ドラズ・アクターの間に立ち、声を上げる。

「パンドラズ・アクター、急ぎパイン様に従い行動してもらえるかね」

有無を言わせない友人の声に応えるように、悪魔の姿がぐにゃりと歪み…元の姿

ど怖くて言い出せないやつ。しかし、今目の前にいるのはウルベルトさんに変身し

:顔から見える体毛がフサフサで柔らかそうで触ってみたいなー、

なんて思うけ

お

たパンドラなのに、こんなにもオーラあるとか…悪魔だから?

第六階層に付いてくるように言えないでいると、ヘドラが動いた。パインとパン

宝物殿へ。 にオーバーアクションの衝撃がくる。 は言え、 罪悪感がすごい。息子さんの顔がまともに見れねえ…!あと、 敬礼はかっこいいけど、心の奥に巣くう 想像以上 //

二病゛が発病しそうで危ない。

124 「まとめて、ですか。わかりました。その時を待ちしましょう!」 仰 々しくコートを翻すのやめよ? 脳内でモモンガさんが「ぐわああああ」って

悶えちゃうよ。 「わ、 わかってくれてありがとう。じゃあ、 "変身』してくるからちょっと待って

₽ 「おお!いつもの御姿になられるのですね!パイン様の神聖な お使いいただけますよう、私が全身全霊で清掃しております! あのパイン様専 "寝具; は いつで

用 君 アイテムは、この世に二つとないのですから、その希少さからして……」 わあ、パンドラズ・アクターのマシンガントークだ。 この熱 い話は聞きたかったんだよね。私は、アイテムや登場人物の細かい設定、

他者

の考察とか、自分にはない視点を見れるから好き。だけども、今は急いでいる

からタイミングが悪いね。

「…頼んだ。また後でね、パンドラ」 「はい。行ってらっしゃいませ、人任せの魔女様」 ----パイン様。指輪 ドラが区切ってくれた。 は預か 助かった。 りますので、 お急ぎください」

足音が聞こえなくなったころ、パンドラズ・アクターは友人に向き合う。い い演技っぽさを感じない。ナザリックでも、現在ヘドラしか知らないだろう つも

熱が引いたパンドラとヘドラに見送られ霊廟奥へと消えて行った。

奥方様を怖がらせるつもりはありませんでした。心より謝罪します。」 「……ヘドラ・ファンタズマ、すみませんでした。至高の御方であり、 我が親友の

れから、あまり気負わなくて大丈夫だ。パイン様は怒っていない。この件でパンド 「ありがとう、パンドラズ・アクター。 卿を罰するつもりはない。」 卿の謝罪、丁重に受け取らせてもらう。そ

125

「左様ですか…」

126

ないと思っている故である。

か

・し、パインとヘドラは違う。それは、2人が〝夫婦〟だからではない。

魔

の思考を読み取るなど、愚行だ。それはNPCたちが、至高の存在の足元にも及ば 至高 !の御方々は神のごとき存在であることは、NPCたちの常識だ。そんな方々

胸に溜めた息を吐く。

ドラ・ファンタズマは自らの王、創造主であるパイン・ツリー 女と使い魔という魂の根幹から繋がるもの同士だからこそ、分かりえるのだ。 から直に流れてくる

"感情; を汲み取った上で、「パイン様は怒っていない」と発言してい

パンドラズ・アクターも、その事情を知る一人だ。ヘドラが断言するならば、信

じられる。

け れども、 彼が至高の存在を怖がらせてしまったことも事実だ。

と、笑って褒 た私を見て゛よく似ている。まるで本人のように恐ろしく、威厳があり、 「ヘドラ、貴方は覚えているでしょうか?パイン様は以前、ウルベルト様に変身し めて下さいまし たし 邪悪だ。

「覚えている。そして、理解しているとも。 卿があの日のことを想い、今日もウル 構

祭服 の異業種は創造主に定められた口調で、友人に応えた。

ク地下大墳墓側 り、 卿が 悲しむことを望まれていな

ナザリ

「の御方の御心を知ることができ、安心しました。

す

!! …至高

であり、

ナザリック地下大墳墓にお

「ありがとうございます。

ヘドラ・ファンタズゥーマッ!さすが、私

の無二の友

いてただ一人、至高の御方と心を通わせる者よ

教えてくださり感謝

しま

葉とお

ル

ト様に変身したのだ。パイン様を驚かせ、

喜ばせるために。 なぜなら "恐怖" と

至高

の言

"感嘆』の両 なる御方

方

卿の変身は大変素晴らしかったよ。

を感受されたのだから」

ドラが言い終えると同時に、パンドラズ・アクターはコートをオーバーアク

シ

ョンで翻し、

演技

かかった口調

で言う。

わないとも。私はある程度パイン様の御心を口外する許可は頂いている。何よ い

「パンドラズ・アクター、パイン様の護衛を引き継ぐ卿に、 ちらりと霊廟奥 へ続く通路に目を向けた。 伝えておくべき報告が

127 上がっている」

「お聞きしましょう」

「現在、 ナザリック地下大墳墓の周辺は沼地ではなく…草原となっている」

らに奥に 壁の窪みにいる像は、 ワー ルドアイテムと一緒にパイン専用アイテムも置かれてい 仲間たちの姿に似せて創られたレメゲトンたちだ。 た。 そのさ

ない。 天上も床も壁も白銀の部屋。 天井は中央から優しい光が降り、眩しくて直視でき

幻惑、猛毒、魅了、盲目などなど……敵を状態異常にかける真っ黒な光に変わる。 この太陽にも似た光は無属性の光だ。太陽の光のように優しいが、いざとなれば

私, がやるからさ。

なぜ侵入者を攻撃するアイテムを設置していないのか

?

部屋の壁際には一つ一つが小さな祠を模した台座がある。 その上にはワールドア 魔

0)

体

としか書

いてなかったし…怖いことは何も起きないよね?)」

と心配だが、

もう眠たくて仕方が

な

い。

が、どれ えられ、赤、白、ピンクを中心に様々な色が鮮やかに咲いている。 その中心に、 も最高級の香水、食事などに必要な、 場違いとも取れる花が植えられてある。花は半径 20の円の中に植 希少な素材でもある。 種類は まばらだ

A

が

鎮

座してい

方形 木製 パインは、 Ő の棺桶 形 を は、 その花の中心に置かれた棺桶 てい この神聖な場所には合わない た。 だが、何 この装飾も施されていないというところが、 に用事が ほど な あった。 んの 装飾 もなれてい 少し特 な い長

い っぱ 持 ち 主 いに敷き詰められている。まるで花のベッドにパインは足を入れ、 |が近づくと棺桶 の蓋は、ゆっくりと横にずれ た。 中には周囲と同じく花が 座り、 仰

別

か

₽

ħ

な

い

向 (転移してから身代わりの体に移るのは、 けになった。 光が眩しい。普段なら眠れないが、だんだんと瞼が重くなる。 はじめて。フレーバ ーテキス トには、使

パ イン・ツリー は目を閉じた。遠くで何かを引きずる音がして、 同時に天井から

の光が遮られていくのを感じた。

んだけど、合ってるかな

?

体 が沈んでいくと思った後、 誰かに腕を引かれた。「起きて」って意味だと思う

ワー Ø ル っくりと "瞼" ドアイテムが置かれている台座。前方には、パンドラズ・アクターとヘドラ を開く。そしてすべてが白銀の部屋、 白い光が降り注ぐ天上、

が 待 つ部屋と繋がる通路がある。

私 左手を上げてみた。 は 立って Ņ た。 背後 真っ黒な線のように細い手だ。右手には先端が二股に分か には、 蓋が閉じられた棺桶が置かれ てい る。

れ、その中央に直径10cm程の丸いエメラルドが浮かぶ杖を所持している。

パインは今、ナザリック地下大墳墓が異世界に転移する前、円卓でヘロヘロに見

せた姿に変化していた。

常に丈の短い―鎖骨あたりまでしかない―。 か でら上 顔 ĺ 部分が 真 っ黒で、凹凸のない球体。大きな '魔女の帽子' ない 一つまり首がない ため―、 頭部が浮かんでい その裾は金で縁取られている。 を被っている。 . る。 上着は 白く、 そして肩 襟は長 非

魔法 少女の姿で、魔女の力も扱うことができる。 ね。 から、少し膨らんでいる。 パイン・ツリーは、あるイベントをクリアして、〝魔法少女まどか☆マギカ〟 なによりも…よかった、 ふむふむ、どうやら体の動かし方は人間の頃と大差ないらしい。これは楽でいい 少女の力と体を手に入れた。そして、、円環の理に導かれし者、 顎下まであり、 ない首が隠れていた。 無事に発動できたようだ。 体のラインに沿う赤のドレ なので、

魔法 0) スは腰辺り

下大墳墓側 派遣されているから、ユグドラシルにいられたし、こうしてナザリックにも留まる きていたか―というと、女神様に許可を貰っているからだ。つまり、円環 ことができた 導かれたのに、なぜ地上にいるのか―他のプレイヤーのようにゲームをプレイで の理から

131 パンドラたちに告げた「変身」とは、

スキルや魔法の名ではない。《魔女の身代わ

魂

132 は そのもの)を装備させ、乗り移るスキル。 本体を棺桶に寝かせる必要がある。 、ルに !合わ せてステータスがダウンする。 このスキルを使用中は、乗り移った使い魔 回数制限はない。 使用できるスキルや魔法も制限され、 スキルを発動させるに 0

ま

た

変化

しする。

そして、

装備

は使い魔ごとに固定されているので、

変更は

不可能。

さらに、

本体

の時よりアイテ

ム所持数が減る。

4 させていたソウルジェムは使い魔たちが回収してくれるらしい。 色 使 々 い魔 制 イヤー 限 は の装備品はランダムにドロップしてしまう。 あ ではな るが、 いからだ―というメリッ "死亡時にレベルダウンしな ŀ がある。 い。 回収されたソウルジェム 死 ちなみに、 ぬ のは使 他 使 い魔 の所持 い 魔 の体 ア に装備 イテ で あ

は、パ 魔 女 の 代 ンに届けられる。それまでは復活できない。 わ ŋ に使 い 魔 が 死 ぬ ス + ル

n が 1 • ッ IJ ĺ ナ Ŧ IJ ッ ク唯 の魔法少女の能力の一部である。

彼女はこのスキルを気に入っていた。

営様

ありがとうございます。

ち

な

み

に変身シーンは、

自分じゃ見れ

な い。

なので、ギルメンに録

画しても

6 面 5 め 0)

ちゃか

っこい

į,

んだよ!!!

私やギ

ルメンが

やったんじゃないよ? 元からそういう仕様なんだよね

! 運

まどマギファンにはたまらないサービスです!

体に変化する。そして最後に、私の〝魔女の口付けのマーク〟

が浮かぶ。

それが い球体

ラキラっと星のエフェクトが輝き、使い魔の体から、この顔が真っ黒

だよ!

身代わりに乗り移るとき、

使い魔の体が、こう……魔法少女みたいに変身するん

キ

姿も、

ク地下大墳墓側 私が

が 暗くなり、

何もわからない。そこだけが残念です。

た映像見せてもらっ た。 自分の視点からは、 さっきのように棺桶に横になると画

異形種らしくて可愛いし、大好き! ちょっと不気味な感じが、ファン心を このスキルを「変身」と呼ぶ理由は、変身シーンがお気に入りだから。この

ナザリ 掴 ま によ ħ る…! りも、 ユグドラシルがすごい。

133

魔法少女の力を手に入れたプレイヤーごとに能力や、

姿が違うのだ。一人一人違

宝物殿へ。 たんだ…。 うんだよ? これらにかけた時間と労力は、計り知れない。一体どうやって用意し

テムボックスから手鏡を取り出す。そして自分の顔を見てみた。 クからしようか。「さてさて、現実になったこの姿はどんなものかな?」と、アイ 間 いけない。今は考え事にふける時間なんてないんだった。 .題がないなら、2人のところへすぐに戻らないと。まずは、身だしなみチェッ

134

ユグドラシルで見た、いつもの自分だ。おかしなところは何もない。

「……特に変化なし、

か

少し残念に思いながらパインは、ヘドラたちが待つ場所へ歩き出した。

ふと、己のキャラクターで一番重要な設定を思い出す。

ているのかな?…私の体にはなんともないけど」 「そういえば、転移後の円環の理ってどうなっているんだろう。こっちでも機能し

136

与え、第六階層へと転移する。

みんな集まって。

宝物殿はヘドラ・ファンタズマに任せ、彼の指輪をパンドラズ・アクターに貸し

へ向かう。黙って歩く私に追従するパンドラは気を利かせてくれたのか、静かだ。 まず、目に入るのは石造りの廊下だ。人工的な灯りが先から見える大きな格子戸

パインは感動していた。

「(ここはよく通った道だ。ゲームで何度も、ぶくぶく茶釜さんとやまいこさんと

餡ころもっちもちさんたちと一緒に歩いた)」

第六階層でおしゃべりをしたり、自分たちが創ったNPCたちを集めては着せ替

えて遊んだ。

前進すると青臭さと土の匂いが鼻腔いっぱいに香る。今生では嗅げなかった懐か

は覚えていない。 しい匂いだ。前の人生なんて、あまりにも古い思い出という感じなので詳しいこと

137

は友達になれた。

けれども、オバロファンなのに原作を忘れてしまったことが情け

い思い出だし、

遊んでくれたメンバ

ا ح

楽しく初心者時代をプレイできたのはい

と頭 0 中から抜け落ちてしまう。ぽんこつな私は 1年以上アインズ・ウール・ゴ

そうして未知の世界を楽しんでいるうちに、モモンガさんたちのことはすっぽり

シ

少

々穴抜け

ながらもオー

バ

ルをプレイし始めた。

ち、ギルドメンバーたち。

今生でSNSでユグドラシルのロゴを見たとき、それらだけは明確に蘇ったの

オーバーロードだけははっきりと思い出せた。

:かったように遠く、輪郭を失っている。

モモンガさん、アインズ・ウール・ゴウン、ナザリック地下大墳墓、

N P C た

リ・エスティーゼ王国、バハルス帝国、スレイン法国…。

ーロードを思い出したら彼らに会いたくて、ユグドラ

きなものは?好い人は?

性 莂

は何だったか、

確か人ではあった。

それから他はどうだったか。

家族は?好

霞がか

ウンとは

まったく関係ないプレイヤーと一緒に遊びまわる。

なくてし、ばらく落ち込んだ。

パインは、今回は大丈夫だと思いたかった。

みんな集まって。

138

からみつくようだ。

ンガさんがいない。私が残り、彼がいないことがとても怖い)」

何度も押し寄せる不安は引いてくれず、じわじわと前を向いて歩もうとする足に

「(原作の流れは紙に書き出しておいた。だから大まかな流れはわかる。

でもモモ

技場は昼より明る

私は守護者たちの到着を待たず、

コロッセウム広場の一角―低い舞台―に向か

が座っていた。

「(うん……。転移する前と特に変わりないかな)」

いろんな場所に永続光(コンティニュアル・ライト)の魔法がかかっており、闘

上がりきったところで潜り抜ける。二人は円形闘技場(コロッセウム)へ入場した。

やがて格子戸の前に立つと、それは自動ドアのように上へ持ち上がった。完全に

広大な広場を囲む高い壁、その上には客席が見える。客席のほとんどにゴーレム

「お待

う。 で、 "忠誠の儀』ができるのは、 あそこだけだし。

「パイン・ツリー様!」

ズボンが目印の守護者がいた。彼女は本で見せたように、 高 い声は貴賓席から聞こえた。そちらへ顔を向けると、金髪に、白色のベストと 貴賓席から跳躍

傷で着地をしてみせた。 なんて軽業だろうか。「お~」と思わず感嘆の声が漏れた。 私も、 レベル100

像で見た体操選手よりも美しい回転をし、六階建ての建物に相当する高さから、

無 映

小走りで―― それでも獣の全速力のように速く――こちらにやって来る。

だし、

同じようにできる

かな。

私たちの | 距離はあっというまに縮まった。両足で急ブレーキをかける。 ≪ザザザ

ない。 ≫と広場が削れて、土煙が上がった。そして煙はパインに届かない。煙たさも感じ ……これは、どのように調整すればできるんだろう?

護階層へようこそ」 第六階層守護者、 双子の姉、 アウラ・ベラ・フィオーラ。 金髪に薄黒い肌を持つ

たせいたしました。パイン・ツリー様、パンドラズ・アクター、

あたしの守

職業は魔獣使い(ビーストテイマー)と野伏(レンジャー)。活発な女の子だ。

140 みんな集まって。 いる。 そして彼女の口から色のついたブレスが漏れた。 とってもかわいいです。 いつか、アニメで聞いたあの可愛らしい声の女の子は、目の前でニコニコ笑って

るだけだ。その様子に疑問に思ったアウラが口を開ける。 「パイン様、アタシの息が何か?」 まるでピンクの綿菓子のようなカラーが綺麗で、手ですくおうとしても息は逃れ

これは彼女

の能力で効果は精神異常だったか

な。

「ピンクの綿菓子みたいに綺麗な色だったから触ってみたくて……気に障ったかし

アウラはバタバタと両手を振る。

「まさか 耳がゆるりと垂れ下がり少し赤いので、お世辞ではないと結論付ける。 !アタシの息を気に入っていただけてすごく嬉しいぐらいです」

しかし、

恥ずかしかったのかブレスはそれ以上見れなかった。

「こんばんは、アウラ」 そういえば挨拶がまだだった。

「こんばんは、パイン・ツリー様!」

「ごきげんよう、アウラ殿。お久りぶりですね」

彼女はにっこり笑ってくれる。笑顔いただきました。嬉しいです!

「久しぶりだね、パンドラズ・アクター。今日は、パイン・ツリー様の護衛を任さ

れたの?」 「ええ、左様でございます」

NPCのやりとりを見て、頬が緩む。生でNPC同士の交流を見て興奮した。目

の前で大好きなアウラとパンドラがニコニコしていると、とても嬉しい。幸せ! ようにしないと。口調と動きには注意しつつ、自然体に、それでいて私らしくする かし落ち着いて。気分が上がるのはいいけど、上司のロールプレイを崩さない

こと。 お菓子配らないと。

141 私らしくだと…そうだ。日付変わったから、

142 「いつも、ありがとうございます! あたし、パイン・ツリー様がくださるお菓子 アウラとパンドラは菓子を丁重に受け取り、各々の喜びを表現した。

し、アウラに渡した。そしてパンドラズ・アクターにも渡す。

直接 「ありがとございます!いつも頂いているとはいえ、やはりパイン・ツリー様から いただけるのは、大変嬉しいものですね。このクッキー、 大事に頂戴します」

が大好きなんです!やったー!!」

「そう言ってもらえると嬉しいわ。また、持ってくるね」 そんなに喜んでもらえると、渡しがいがある。

ユグドラシル時代では、当たり前だけど渡したお菓子の感想を聞けなかった。今、

配るようになった。みんなが寂しくならないようにと、そして自分の寂寥感を紛ら

私とモモンガさんしかログインしなくなった頃から、私はNPCたちにお菓子を

わ

すため

こうしてこの子たちと話すことができて、心が満たされていく。異世界への転移で、

ナザリ 自分が飛び降りた貴賓席を指差した。

143

たし

か、マー

「そう。うん、じきに来るだろうし、私たちは先にあそこへ行きましょう」

レの登場が遅れたのって、階段を使って降りようとしたか

らだよね。

ク地下大墳墓側 はもう一人渡す相手がいる。 「そういえば、マーレは?」

び、パインはアウラとパンドラの横に

い 幅

た杖をアイテムボックスにしまう。

!は5cmほどで、女性の手の平サイズの大きさだ。手帳の入れ替わりに、持って

そしてパインはアイテムボックスから、赤い皮の手帳を取り出す。見た目は薄く、

モモンガさん

の行方も知れず、

不安が積るけれど、頑張っていこうと思うのだ。

ページを開

いた。

一番左には今日の日付、

その右隣に

р́

r e s e

n t f

O r Ν 手帳

にはいくつかの付箋が貼られている。その中でクッキー型のものが貼られた

PC〟というタイトルが見える。ページの左端にはNPCたちの名前が縦一列に並

ő

を書き込んだ。

パインは手帳をアイテムボックスに戻そうとして、やめた。ここに

「マーレはあそこです」

 $\dot{\exists}$

ッセウム広場の一角にある低い舞台-

口

みんな集まって。

144

「かしこまりました」

「あそこで皆を待ちましょう」

「かしこまりました。…あの、パイン・ツリー様。皆というのは? 」

「階層守護者たちだよ。彼らにここに来るよう呼んだの」

それぞれ立場は違うけれど、

「なんでもない…。そうだ、

パンドラズ・アクター。私の事は呼び捨てでいいよ。

同じナザリックの仲間なんだしさ」

「おや、どうされましたか?アウラ殿」

|.....はあ」 「そうだよ」 「そうですか。

がくりと、

肩と耳が垂れるアウラ。さっきまでの元気はどこへいったのか。

「ううん、必要ないよ。

―ということは、シャルティアも?!」

1時間も経たず、来るでしょうし」

「なら、

歓迎の準備を―」

ク地下大墳墓側 思われているでしょ…多分。 出すことができる。そうすれば、ナザリックはより繁栄すると思ったのだ。 パンドラを表に出しておけば、異世界に転移した後も、彼を早い段階で宝物殿 ラ"とお ただろう。 ても、ゲーム中は私がNPCを使ってお人形遊びしているようにしか、見えな せている。モモンガさんの許可を得て、私が彼を連れまわしたからだ。こうやって 「うん、オッケー。これからはそう呼ぶね」 「そうですか。 パンドラズ・アクターは、ほとんどのNPCたちとユグドラシル時代に顔を合わ マ呼びください。それが愛称なので」 まあ、 では、そのようにしましょう。 ヘドラを作った当初からやっていたし、「よくやるなー」程度に よろしければ、 私のことは

と

か つ つ から

パパンド

マーレは3人が目的の場所に辿り着くちょっと後に、やって来た。 パイン・ツリー様」

145 「お、お待たせしました。 「それ 彼の本気の走りはアウラと比べるとずいぶん遅かった。 ほ ど待ってない

ょ

マーレ」

途中でアウラが我慢しき

みんな集まって。 れず「はやくしなさい!」と声を荒げたほどだ。

る。 た。そう、男の娘というやつだ。堂々とした双子の姉とは違い、おどおどとしてい アウラにそっくりなダークエルフは、男の子のはずなのに、スカートをはいてい

うで申し訳ない気持ちになる。 「さっき、二人にも渡したの。これはマーレの分ね」 彼は設定故に弱気な態度なのだとわかっているけど、私が怖がらせてしまったよ あ、そうだ。

146

ても甘くて美味しくて、ぼくは大好きです」

「あ、ありがとうございます! パイン・ツリー様からいただくこのお菓子、

といっても、顔が真っ黒だから表情なんてないけど。顔があったら、にこにこなの ょ かった、笑顔になった。「嬉しい。また持ってくるからね」と私も笑顔で返す。

「お姉 、ちゃん、今日もパイン・ツリー様からお菓子が貰えたよ」 よ ?

「よか 「そ、そうなんだ。こ、こんにちは、パンドラズ・アクターさん」 :ったね、マーレ。あたしもパンドラもさっき貰ったんだよ!」

「ごきげんよう、マーレ殿。お久しぶりでございますね」

「かしこまりました。これからはマーレと呼びましょう。階層守護者たちを第6階 「お、お久しぶりです。呼び捨てで結構ですよ。き、今日はどうしてここへ?」

層に集まるようパイン様がご命令されました。時期に皆さん集まるでしょう」

「そ、そうだったんだ」

ま 3 人と話していたら、そのかわいさに口元がにやける。例え表情がわからなく こくりと頷く。動作が一つ一つ丁寧で、かわいい。ああー胸がキュンとしてます。 しかし、このままではいけない。私は仰ぎ、第 6 階層の夜空を眺めた。このま

は実験を行おう。私の攻撃の要、召喚は無事にできた。 ても、声でわかるだろう。意識を彼らから、そらさなければならない。うん、ここ

「アウラ、マーレ、藁人形を用意してくれる?」

「わ、藁人形で何をされるのですか?」「え?はい、すぐにご用意できますけど」

147

「私の能力の確認よ」

表情が

みんな集まって。 語った。「今確認しておきたいの」と伝える。 二人から不思議そうに見つめられる。なぜ、そうする必要があるのかと、

が「すごい!」と驚く。たしかに魔法詠唱者がこんな芸当ができるのは珍し 形を二つ、私から五十メートル離れた場所に設置した。彼らが離れてから行動する。 一つは、 杖を剣のごとくふるい、斬撃を飛ばして人形を真っ二つにした。マーレ

手帳に書き込んでいる間に、筋肉隆々の人型をしたドラゴンのモンスターが藁人

ろう。

下ろしたのだ。まさか戦士の真似事がやれてしまうとは思わなかった。

力の繋がりを明確に感じとれるので、それを引き出すつもりで杖を剣のように振り

私も驚いた。できちゃったよ!と心の中で騒ぐ。宝物殿に置いてきた本体との

だ。 体の身体能力は高いと考えられる。必要があれば囮として時間を稼げそう

ちょっと調子がのってきたので、今度は攻撃を創作してみる。これもできる気が

した の だ。 なのでアニメを思い出して、もっと自由に攻撃方法を考えてみた のだ。

杖の先、二股の間にある宝石にエネルギーを込める。ボワァと輝きはじめ、その

状態を維持しつつ杖を藁人形に向ける。エネルギーはビームのように真っ直ぐ、当

たれば弾け飛ぶとつよく想い、そして発射した。

は細く大した反動はなかった。けれど瞬きの間も無く

バア

ン!!!

まるで風船のごとく、広場全体に藁を飛ばして人形は華やかに弾ける。 攻撃は人

形 にの の成功にパインは胸をなでおろした。 み 作用 ï 施設は傷ついてい な Ň

実験

その周りでは拍手が起こる。

「パイン・ツリー様すごいです!あのビーム最初は強くないものなのかなって思っ

たんですけど、藁人形が闘技場中に吹き飛んじゃいました!」

「さ、さすがは至高の御方。ぼ、ぼく杖で斬撃を飛ばすところはじめて見ました!」 お見事でござい ます。どれもはじめて見る攻撃ばかりでした。後学のためにぜひ

教えていただきたいものです」

「んん、ありがとう。楽しんでもらえたのなら嬉しいわ」 めっちゃ褒めてくれるじゃん!ありがとう、 照れ臭いよ。

150 みんな集まって。 鍛錬次第だろう。 戦士職のNPCたちを練習に誘ってみよう。 攻撃の幅は広がった。果たして器用貧乏になるか、使いこなせるのか。すべては まだ空中をパラパラと散る藁を見上げる。

言い、かぶってしまった藁を取り除いてくれたのだ。 ど、声をかける前に三人に囲まれてしまった。アウラが「お手伝いいたします」と さあ次はアウラとマーレにパンドラを含めて召喚で楽しませようと思ったんだけ

「三人ともありがとう」 ユグドラシルの頃と同じ感覚で、藁を払うなんて考えはなかった。気をつけない

そう考えながら双子のの頭についた藁を落としていく。パンドラは背中に回って

となあ。

ク地下大墳墓側 いるので藁を取ってやれないのだ。 「ありがとうございます ! パイン・ツリー様」

151 「かしこまりました」と三者の声がする。 「やらせてくれたら嬉しいな。あと、私のことはパインと呼ん……呼びなさい」

「申し訳ありません、ありがとうございます」

152

が

登場する。

輝く髪、白磁を思わせる白く美しい肌、

何よりも目を奪われ

るのはそ

少女と女性の間、限られた時間のみ見られる移り変わる美を閉じ込

言葉通り、五十メートルほど離れた場所にゲートが現れた。そしてシャルティア

の美貌だろう。

めた結晶

それ

がシャルティアだ。

深

のド

レスを身にまといゆっくり歩く姿はまさしくお嬢様で、貢ぎたくなるぐ

5

・かわ 紅

パインは顔

のない顔でにこりと笑う。

「(ふふ、私は何年も前から彼女に貢いでいるけどね)」

誰への当てつけなのか、得意気に胸の内側で呟いた。

られずにこにことシャルティアの到着を待っているとこちらを向

いた彼

女の

顔 に しも知

か

ら表情がなくなった。

なんだろうと不思議に思う。

シャルティアは距離を近づけるごとに困ったような

誰

こうして順番に互いの藁を取り除いた。

おかげで空気が和やかなものになり、

N

PCたちに接する態度が自然体になる。

「そろそろみんなやってくるわね」

「どうしたのよ、シャルティア。そんな顔でいつまでもパイン様を見つめるなんて

める。すると怪訝そうな表情を浮かべたアウラ質問した。

不敬よ!」

表情を深

「だって……だって……」

アに答えるようお願 答えにくい質問 なのか言い淀んでいる。私は好奇心が勝ってしまい、 い した。 彼女は後ろめたそうに白状する。 シャルティ

パイン様の ピシリ、 と空気が固まる。 御胸が、 ないんですもの 至高 の存在を囲むシモベたちの顔はシャ ル

敬さに怒っていた。そして場違いな笑い声が中心でおこる。 ティアの不

向けられるなんて、ファンとしては嬉しい。いつものシャルティアならば、転移に 「ふぶ、あっはっはっは……胸がないからね、そっかあ」 笑い転げたいくらい面白い。まさかあの迷セリフ「胸がなくなっている」が私に

153 会ったかしら?」 よる 私 は 精神異常など問題はないと判断できる。なんども深呼吸をしてゆっくり話す。 怒 って ない ٠ پ むしろシャルティアが無事でよかった……他の守護者には

ぽ かんと薄く口を開けていたシャルティアの目に理性が戻ってくる。

「オ待タセイタシマシタ」 闘 図技場 の出入り口からコキュートスが歩いてきた。

「いいえ、会っておりません」

よく心の中で呟いた愛称をはじめて口にした。 コキュートスは顎を鳴らす。

「よく来てくれましたね、ナザリックの剣よ」

彼の口 か ら漏れる冷気に反応して空気中の水分がバキバキと音を立てて凍ってい

「オ呼ビトアラバ即座ニ、御方」

てくるメンバーには冷気耐性や対抗手段を持っているため何かしら困ることはな 彼が傍にいるだけで並みの人間は凍えるがここにいるメンバー、これからやっ

むしろ小さな氷の粒は灯りに反射してシャンデリアのようにキラキラと輝く。

「コキュートス、あなたも変わりありませんか?」

「ハイ、健康体デアリマス」

「それは

なによりです」

話した様子からアウラたちにも異常はないだろう、残る一人も無事ならいいが。

マーレがおずおずと声

後ろにデミウルゴスがいた。二人は十分にパインに近づくと、深くお辞儀する。 「皆さんお待たせして申し訳ありませんね」

甲殻に包まれた尻尾が異形種であることを示している。 、間の男性となんら変わらない細身で高身長の姿をしているが、銀色の滑らかな なにより彼が纏うオ ーラが

155 ₽ 邪 悪 のだが。 で、 パ 「インは少しだけ背筋に悪寒を感じていた。それも気のせい程度の小さな

ナザリ 「はっ。では皆、至高の御方に忠誠の儀を」 「(き、きたあ~~~!)」

156 誤ってスキルを解放してしまった。闘技場にはパインが眠る結界内のように花吹雪 その重圧に耐えられず、私もモモンガさんと同じ道を辿った。 一人ずつ名乗りを上げ、至高の四十一人に忠誠を誓う。 つまり混乱から

が舞 い散る。 花びらは地上に落ちる前にふっと姿を消す。

彩られた空を眺めて改めて心に決める。

「(支配者ロールなんて人間らしさが残るこの種族では難しい。それでも私らしく

答えはもう貰っているので、あとは同じように行動するだけでいい。

最善を尽くすんだ)」

パインはモモンガのように努めて冷静に、守護者たちに向き合う。

でしたね

でくださるとは……本当に慈悲深い御方です」

守護者たちは和やかな空気に包まれた。だが、広い視野をもつコキュートスだけ

「まったくその通りですね。日々鍾愛いただいているというのに、まだまだ慈しん

ク地下大墳墓側 がる。 休息 「ま、まるでパイン様のような慈悲深い、ボクたちを癒してくれる温かい雨のよう 「マサシク」 「それでは、今日はこれで解散としましょう。……いつ休めるかわからないから、 ----パイン様が降らせた花吹雪、とっても美しかったわ」 余韻 パインはそう言って転移した。 は数時間ごとに取るように。 各々服 にしたり頃合いをみてアルベドが立ち上がった。 や羽根、尻尾についた砂を払い落とす。 同時に花吹雪は消え、 おやすみなさい」 続いて他の者たちも立ち上 辺りは静まり返る。

が辺りの様子に違和感を覚えた。 トコロデ、 気ニナッテイタノダガ闘技場ハ常ニコノヨウナ姿ナノカ?」

ておりとても片付いているとは言えない。アウラが両腕を頭の後ろで組む。 コ キュートスは計六つの眼で闘技場をぐるりと見渡す。あちこちに藁が飛び散っ

パンドラズ ・アクターが頷く。 、らね」

「確かに、パ イン様から藁を払う方が優先でしたか 158

「しょうが

な

いじゃん、掃除する間なんてなかったんだもん」

至高 の御方 のお世話と聞き、 セバスがいち早く反応

「パンドラズ・ .パンドラでけっこうですよ、セバス様。パイン様がその御力をお見せになられた 何があったのでしょうか?」

アクター様、

させて照射、 のです。さも戦士のごとく斬撃を飛ばし、またマシンのビームのように魔力を圧縮 藁人形は木端微塵に爆ぜました。スキルを使わずあのような芸当がで

きるとは私、 の場 E い た者は 感服 いたしました」 何 度も頷き、 V なかった者は羨望の眼差しに少しの嫉妬 をのせ

た。 直接お世話しただけでなく、 特殊で複雑と考えられる『人任せの魔女』 様の、 仕 事

い

いでありんすか?アルベド」

コ

キ

コト

スの提案にすぐには応えず、守護者統括に顔を向ける。

1) ょうし、 の後であ パ イン様 れば文句はな もその事には いわ。 お それに追々ナザリックの強化は必須になるで 気づきのご様子。

守護者たちは互いの顔を見合わせる。 ところで、 誰

か

モモンガ様を見なかっ

た?

私

の方から伺ってみま

Ĵ Ł

最後にアルベドの方を向いてデミウルゴス

159

が 「誰もお姿を見なかったようですね」と言う。守護する階層に至高の御

てくれば姿を拝見できずともいらっしゃったことを感じられる。 いということは、どの階層にも現れなかったということだ。

誰も名乗り上げない至高の御方がやっ

る。 アルベドは眉を下げて最後に愛する殿方の被造物に、まるで縋るように声をかけ

とされ 「パンドラズ・アクター」 私に f た時と全く同じ感覚が最後だということです。 わかりません。たしかな事は一つ、パイン様にご報告したとおりろぐあう 魔女様の仰るように、 もし ゕ

したらナザリック同様こちらの世界に転移されている可能性はあります」 悪魔が悲し気に息を吐く。

- 私も捜索チームにいれていただきたいものだわ。適任者がヘドラ・ファンタズマ

だと知っているけれども、やっぱり愛しい御方は自らの手で探しだして御守りした

いわ」 仕方 ありませんよ、 アルベド。私たち守護者はこのナザリック地下大墳墓を守り

抜くことを厳命されました。必ず帰ってくるためには家が必要だ……こう仰られて

は、ここから離れ て探しに行くことは

難しい」

「そうね……気持ちを入れ替えるわ。 みんなもね」

つもりだった 数人がアルベドと同じように、パインに探索チームに入れてくれるよう願い出る のか目を逸らした。

「……では、

仕事に取り掛かりましょうか」

ナザリックに異常なし――

その報告に安堵しつつ、一週間ほどパインは奔走した。

消費アイテムの製造をストップし、アイテムの効果が変更していないか実験をお

からの報告書のレベルの高さに悩み、ギルドの指輪を守護者たちに渡せな こない、支配者らしい振舞いの参考書や映画などをピックアップし、アル 出 し しては ! バタフライエフェクトにびびってモモンガさんの帰還を願 い

オブ・ビューイングでカルネ村を探し、三十以上の儀仗兵を減らし、いつでもどこ

ミラー い事を思 ベドたち

ナザリ そのものだが一腰にくる。 「(これがオーバーロードと魔法少女の違いかあ。人間に近いもの、 しょうがない

自身の召喚スキルについて研究して……疲れた。支配者ロールは―実際には健康体

に

162

間 あ楽 な 視させている。 い。 にいてサボ 今は九階層 ではある。 こうやって〝支配者ロールしながらここにいるだけ〟も仕事にな れる者などいないのだ。 の一室で、ミラー・オブ・ビューイングを使いシモベにカ 離れたところで私はのんびりティータイムだ。けっしてサボ ちなみにシモ べの横にはセバスがいて、 ビシッと立つ彼と同じ空 ル る 0) ネ村を監 だ。 りでは ま

ジには 返す。手帳 パインはアイテ 週 間 には が バ 日記 1 ェチ ムボックスから手帳を取り出してこれまで自分がした行動を読み カルタイプとなっており、行動をまとめて確認しておきたいパ のように一日一ページで記入できるタイプだ。最 初 の方 のペ 1

ここまでの経緯を整理しよう。

インには見やすかった。

程度

ッ

ク地下大墳墓に近いのですぐに助けにいけるということで、多少安心して村作

で行き来できる距離に、なおかつトプの大森林沿いに村を建設してい

る。 から一日

ナザ

163

ŋ IJ

に励んでもらっている。

ク地下大墳墓側 たので本番いけます」ということ、ニグンさんから傾城傾国の話を聞ける日も近い 入れ 助 ij た村人はいつかカルネ村とも交流してもらうことを考えて、かの村 げで情報収集がうまくいき、隊長クラスを手に入れられたらさらに情報 られると、デミウルゴスが約束してくれた。つまり「予習をばっちり済ませ

どさぐさにまぎれ

て何人かを攫って拷問にも

かけた。

お

か

でい

たしてもらった。途中、

隠

殺されたフリをしてもらう。暴行されてしまうことも考え、敵に幻術をみせて一人

森の中にいるモンスターたちに彼らを襲ってもらい、

|密に特化したシモベたちに村人を隠させ、そのかわり村人に変化したシモベに

非常に気分が悪かった。そこで村人を助ける方向へ変更した。

カルネ村以外を無視するつもりだったが、いざ目の前で惨劇が起こってしまうと

数日、ニグン率いる陽光聖典に狙われる村を救うべく、奔走していた。

最初

は

救援チームのリーダーはヒーラーのルプスレギナ・ベータだ。村人はけっしてお

₽ ちゃではない、客人のように扱うよう耳にタコができるほど言い聞かせた。

> 私 0

ナザリック側始動。 母に「子供は五十回、大人は七回言わないと伝わらないよ」と言われて育った経験 からしつこく言い聞かせた。そのためか今のところ報告が滞ることはなかった。 善行と悪行、両方をこなしつつカルネ村救出作戦を進める。

164

【つづく】

「パイン様、 またあの一団が村を襲いはじめました」

「わかったわ、ルプスレギナ・ベータを呼んでちょうだい。 セバスに言うと彼は深く腰を折った。 では手筈どおりに」

そして村の近くにすでに張っているナザリックのシモべたちに連絡するべく部屋

姉妹を見つけ パインはミラー・オブ・ビューイングを覗きこみ、映し出された先の端に逃げる ر ده

ク地下大墳墓側

を出ていった。

「かしこまりました」

「あ、ここだわ」 「全軍に連絡しますか?」

165 「御意」 「いいえ、やる事はいつもと変わらないのだから、必要ありません」

板についてきた支配者らしい緩慢な動作で首を振 る。

そうこうしている間にルプスレギナが部屋へ入ってきた。 生き残った人だけを助ける、という流れは変わらない。 例外はあるけどね……。

「では、行きましょうか」

目的地は、逃げ惑う姉妹の目の前へ。

エンリは攻撃されないとわかると、固く閉じた目をあけて敵の視線を追いかけた。 一人の兵士が異変に気付いた。つられて他の二人組もそちらに目をやる。

なんだ?」

その先には花が束ねられて空中に浮かんでいた。

そして瞬く間に姿が変わり、一人の女性が現れる。

誰だろう。

姉妹は年齢 のほとんどを村で過ごしており知っていることは少なかった。でも、 ク地下大墳墓側 ガシャン。

「眠れ」

けたたましく金属音が鳴った。 振り返ると兵士たちが全員倒れている。 彼女が言

う通り眠ってしまったのかもしれない。 「は、 「大丈夫ですか?」 は S.

だってこんなに美しいものは生まれてはじめて見た。きっと両親だってはじめて

例え王様でもきっと答えは見つからない気がした。

見るだろう。 丈が短すぎる白く輝く上着、生地をたっぷり使った赤いドレス、まるで魔法使い

らかろうじて女性だとわかるぐらいだ。 のようなつばの広い帽子、真っ白い仮面と真っ白は手袋をつけた姿で、体の凹凸か

彼女は緑色の宝石がついた二股の杖を手に持って いた。

地 に足を付けるとすぐに杖を兵士たちへ向けて振

妹と私は助かったのだ。

167 涙が出て止まらなかった。

ネムに返事ができず、手を強く握った。

「おねえちゃ

「うう……ふっ、く……」 女性は少しの間動かないでいだが、突然杖を空中に振った。眠らされるのかなと

思ったが、どうやら違うらし

価 たそれ な物だとわ 今度は、空中にフード付きローブが出てきた。まるでその場で魔法で生み出され は、 女性が着用しているものよりも劣るが、自分の服より何倍も質が良く高 かる。 ローブは光沢がない白で、縁取られた金が高価な物であること

を証明してい た。 胸元のボタンは透明で透き通っている。

彼女はゆっくりと、本当にゆっくりと私たちに近づいて、そのローブを肩にかけ

てくれた。

「もう大丈夫ですよ。ルプスレギナ、回復魔法をかけてあげなさい」

「はっ」

い つの間 に い たのか、赤毛 'の絶世の美女が杖を持った女性の後ろに控えていた。

活力に満ちた浅黒い肌は玉のように輝いており、赤毛は編みこまれている。

使用人

教会の聖印をそのまま武器にしたみたいな物を背負っている。女性の命令を聞いて が :着る服 に似た衣服を身にまとい、背中には彼女の背丈ほどある大きな……ま るで

いるという事は、彼女の使用人なのだろうか ルプスレギナはエンリたちに近寄り、手をかざした。

≪中傷治癒(ミドル・キュアウーンズ)≫

温

一かな光をともなって魔法が発動する。

「これで怪我をしていれば治ります。 ルプスレギナ、 あの兵士達を縛って暫く起き

られないようになさい」 「かしこまりました」 次に腰に巻いた鞄から微光を発している縄と覆面を取り出した。それらを手際よ

く兵士たちをまとめて縛っていく。 「これで彼らは無害になりました。では、次に村の方は行きましょう」 仮面の女性はエンリ達に説明する。

視線が自分に集まる。 深く息を吸って想いを二人に伝えた。

「まって、ください」

村を救え!

170 「ありがとうございます」 「助けてくださって、ありがとうございます」

「図々しいことは承知です。でも、どうか村を、お母さんとお父さんを助けてくだ

さい!あなたしか頼れる方がいないんです。お願いします!」

妹のネムと一緒に頭を下げる。

女性はすぐに大きく頷いた。

「ちゃんとお礼が言える方は好感が持てます。これを差し上げましょう」

やけに細い手の中には二つの角笛があった。

が現れてあなたを守ってくれます。何かあれば吹きなさい。ご両親は生きていれば 「これはゴブリン将軍の角笛というマジックアイテムです。吹けばゴブリンの軍勢

助けましょう」 「あ、ありがとうございます!ありがとうございます!本当にありがとうござい

ます!あ、あの、それと、お名前はなんとおっしゃるんですか?」 女性は美しく佇まいを正して言う。

「パイン・ツリーよ」

ク地下大墳墓側 還する。

中家の裏手に回り、手帳を取り出してTodoリストにチェックマークを記入する。 エ ンリ姉妹 の救出とアイテ ムの譲渡。

今は村の中を歩き回りつつ、負傷者がいればルプスレギナに回復させている。

途

「(はあ、なんとかなったかな)」

やるべき事はクリアできた。

あとは王国戦士長を待って、法国の覗きにグーパンして、ニグン君ゲットして帰 法国の兵士の捕縛・逃がして情報を持って帰らせる。

村人の救出、

村長から情報

収集。

「よし、 もう少し頑張りましょうね。ルプスレギナ」

「はい、パイン様

171 らも頭を下げている。 頭を下げる彼女の後ろにはエイトエッジ・アサシンが十体身を低くしており、 加えて、玉座の間で召喚した使い魔よりも下の―下位の召喚

彼

.た―カニも控えている。

村の周りはアウラとマーレに任せて、ナザリッ

172 だ。しかしアンデッドの労働力は、かなり便利で魅力的なのでほしい。 い 使 5 い魔は、時間経過で消えなかった。死体のような媒体がなくてもずっとこちら `れ続けるらしい。つまり小説のように大量の死体を求めなくてもいい 少し後ろめ

わけ

たい

けれど死

一体は積極的に第五階層で保存してある。

と変身をといたときアンデッドが案山子状態になるので、今回は頼んでいな せず、モモンガさんにお願 アンデッド召喚はそのスキルを持つシモべたちにやらせている。どんどん召喚は いする分は別に貯めている。 パンドラに召喚してもらう

魔 磨 い。縦に横に、前後にも大きく一・八メートルほどあった。背中はつるんとまるで 法 いた盾 使い魔召喚・下位で現れたカニは、全体が絵の具でべっとりと塗られたように青 0) が耐性 のようにツヤがあり鋼のように固い。防御力もそれなりにあるが、さらに が高 かった。片方の腕はシオマネキのように異様に大きいハサミで、

こちらは

人が二人ほど挟めそうだ。

こちらの世界では十分な脅威になると先ほどの兵士戦で見せてもらったので、今

後彼らをメインに召喚するだろうなとパインは考える。 んな騒ぎになるか、考えたくもなかった。 「すみません、ルプスレギナと二人だけで話したかったものですから。あの、私に パインは空を見上げる。もうすぐ夕方から夜に変わる。つまり頃合いだ。 全員が了解の意を示し、シモベたちは周囲に散開した。ルプスレギナを連れて村 いかった、パイン様探しておりました」 の道に出るとすぐに村長さんは見つかった、というか彼は私を探していたよう 中位や上位を召喚したらど

「実はこの村に馬に乗った者たちが近づいてきているそうで……」 村長 0 い眼は おびえていた。またあんな惨状が起こるかもと不安なのだろう。

何かご用ですか?」

「ええ、そうなんです!」 一武器を所持 れしてい ましたか

?

173

げなさい」

村を救え! ただいて、村長さんは私と共に来てください。ルプスレギナは村人を守って差し上 「わかりました。では村人の皆さんは一ヵ所に……そうですね村長宅に集まってい

174 そう指示を出すと、年老いた彼は深く頭を下げて何度もお礼を口にした。

進んでくる。 馬に 準備がすべて完了した頃、数十の騎兵の姿が見えてきた。 乗 る彼らの武器や装備に統一性はなく、しかし訓練された動きで村の広場 まるで傭兵集団だと印象をうけそうな見た目ではあるが、 彼らは間

違

男性が 彼 .前に進み出た。男は村長を流し見ると、私に射抜くような鋭い視線を送って 使 い魔のカニを警戒しつつ、二人の前で見事な整列を見せる。一番先頭 0

い

なく王国の

戦士たちだ。

くる。レベル差ゆえか、私は「(目つき悪いのかな)」程度にしか思わなかった。

私は、 IJ · エ スティーゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノー

男

7性はやっと口を開

い た。

彼はこの近隣を荒らしまわっている帝国の戦士たちを討伐するためにきた、 と聞

いて背後の村長宅ではざわめきがこちらまで聞こえてきた。

ク地下大墳墓側 お

精鋭兵士たちを指揮する人。 では ――」と簡潔に説明してくれた。かつて王国の御前試合で優勝した、 王直属

村長に「ご存知でしょうか?」

と聞くと「噂でしか知りません。

商人たち

の話 0

事前 の情報と変わりないね。

村長さんから説明を受けた時点で、 私の方から名乗る。

「はじめまして、王国戦士長殿。私はパイン・ツリーと申します。

この村が襲われ

てい たの で助り けにきたマジッ ク • キ ヤ スター

戦 \pm 長 は 馬 って か Ņ ら降りて深く頭を下げ ただき、 た。

「この村 「気になさらないでください。この近隣を歩くものであれば、ああした脅威は取り 救 感謝の言葉もない」

除きたいものですから」 聞きしたいんだが、あなたは冒険者なのか?」

「……それに近いですね

ナザリッ 実際に今、 異世界で冒険してます か 5 ね。

私はパイ

「そうだったのか、見たところかなり腕が立つようですな。……しかし、

175

「ふむ、

ン殿の名は存じ上げませんでした」

「来てから間もないので、そのせいかと」

しいが、村を襲った不届き者について詳細をきかせていただきたい」

なるほど。旅の途中なのか? だとしたら恩人に時間を取らせるのは心苦

「もちろんいいですよ。どうやって私が戦ったのか、そしてこちらの召喚したモン

スターについてもご質問がおありでしょう?」

後ろのカニの方を向く。命令したとおり大人しくたたずんでいた。

「あなたが召喚したの ?

か

「そのとおりです、戦士長殿」

「私にとって必要なものです。こちらのモンスターを使役できるのもこの仮面が 「そちらの仮面は?」

まるで国宝級だな」

あってこそ、できる芸当なのですよ」

……そうなの?カニちゃん下位だから大して強くなんて、 いやデスナイトが伝説

級に値するのだからカニちゃんもこの辺だととんでもない怪物扱いになるんだね。

面は外せないんですよ」 「ええ、似たようなものです。だからこのものが暴れ出してはいけませんので、仮

「ありがとうございます、戦士長殿」 「ならば、取らないでいてくれた方が良さそうだ」

たとき、一人の騎兵が凄い速さで馬を走らせてきた。

少し打ち解けてきた辺りで、そろそろ椅子がある場所で腰を据えて話そうとなっ

駆けこんできた騎兵の息は大きく乱れており、ことの重大さを物語る。

【つづく】 「戦士長! 周囲に複数の人影。村を囲むような形で接近しつつあります! 」

帰ってきた!

すべては予定通りに、滞りなく進んだ。

と位置を交換する。

ガゼフと知り合い、

彼はニグンとしばらく戦った後に、

課金アイテムによって私

ニグンと遊んでもよかったが、再びメモと向き合う方が大切なのでさっさと拘束

「お前は何者なんだ……」

し、アイテムボックスから手帳を取り出して記入していく。

「魔法少女ですよ」

大きく空間が割れた、 愕然とする相手を放置して、そのときがくるのが待つ。夜が空を支配したころ、 まるで陶器を割ったように。異変はすぐに元どおりに なり、

ニグンたちは 困惑 してい た。 私は今日という日を滞りなく進める方が重要なので、

その様子に気づかなかった。

よし、 法国からの覗き見に対しパンドラが唱えた対情報系魔法の攻性防壁が起動して、 用事も済んだし撤収 !

一かしこまりました」

「いってらっしゃいませ」 ルプスと二人で泣きわめくそれを見送ったら、今度は帰還だ。

「いってらっしゃい」

二応 村には声をかけておくべきですね。ルプスレギナ、先導しなさい」

ね」という内容を丁寧な言葉遣いで言い、別れの言葉もそこそこに村を出た。

、れから村に脅威は去った事を報告して、「もう夜も遅いからさっさと帰ります

帰 り道の草原にて、後方でサポートしてもらっていたパンダラズ・アクターと護

でうまくいけば法国からワールドアイテムを二つとゴッズアイテムの装備品を インはほとんどのイベントを原作通りに進められたことに満足していた。これ

衛

のルプスレギナを連れてナザリックへ帰路へつく。

179 つか手に入れられるはずだ。 漆黒聖典に会うためには、 冒険者のブリダを見張り、

180 帰ってきた! リダ ガさんがいつから冒険者になったのか不明なので、彼がまったく関与していないブ 冒険者になりンフィーレアが誘拐されるタイミングを狙うことも考えたが、モモン あのブレインがいる盗賊たちのアジトへ案内してもらう方法が一番いいと思った。 の行動に注目したのだ。

う。

ざとなれば、ナザリックによるローラー作戦で敵を見つけちゃえばいい、と思

がきた。 とにかく、 大仕事が一つ終わって気分良く家に帰る道中だった。そこに〈伝言〉

「ーーアルベド、どうしたの?」

何 !か問題でもあったのだろうか、と背中に冷や汗がつたう。

『ご報告します。至高なる御方、ウルベルト・アレイン・オードル様がご帰還され

ました』

「……おう」

ロールプレイも忘れて素で返事をしてしまった。

シ ナザリック入り口でアルベドに預けていた指輪を返して貰いつつ、彼は自室に ャルティアに慌てて〈転移門〉を開いてもらい、すぐにナザリックへ と帰還

ありがとう、 アルベド。 皆とりあえず通常業務に戻ってください。 私は ウルベル

トさんを訪ね

ます」

いるのだと教えてもらう。

前 第九階! で待機しているメイドさん。 層 ウルベルトさんの部屋へ近づくとすでに警備の僕が 名前なんだったかな、ごめんね、まだ覚えきれてな い た。 そして扉 0

ク地下大墳墓側 「お待ちしておりました、パイン様。ウルベルト様がお待ちです」 なぜ私 の帰宅時間がわかるのかは知らないが、さすがナザリックのメイドさんだ

少し目を大きくしたのち、 キリッと顔を凛々しくさせる。 とても美しかった。

外用に付けていたマスクは外して、真っ黒な球体の顔を晒した。

メイドは

181 案内しなさい」

ナザリ

と思う。

いんだ。

帰ってきた!

ぱ

る。客人が一番最初に足を踏み入れるのは執務室だった。 メイドに続いて部屋の中に入った。第九階層のスイートは自室の中に執務室があ

182 ゥ ・ルベルトさんは白シャツにズボンとラフな格好で、応接用のソファに座って何

ウルベルトさん、こんばんは……」

か

が

きか

れ

た紙を見ていた。

「こんば んは、パインさん。あー、彼女と二人きりで話がしたいんだが?」

「かしこまりました。ご用があればすぐに参上いたします」

んの向かい側に座る。ソファに負担をかけなかったので壊れることはなかった。 そういって彼女は退出した。私はレベル百の戦士の軽やかな動きでウルベルトさ

「うお、びっくりした」

「ウルベルトさん! どうしてこっちにいるんですか! もう、もう私びっくりしま

したよ!!!」

「俺だってこんなことになって疑問だらけですよ」

会えて嬉しい、なぜギルメンが帰ってこられたのか驚き、 色んなものが胸で混ぜ

パインはできるだけ、これまでの事を簡潔に話した。

なぜかここにいるのは私だけなんですよね……」

⁻待ってくれ、順を追って話してくれませんか。ユグドラシルのサービス終了がど

「モモンガさんがユグドラシルのサービス終了時に残っていたはずなんですけど、

「そんなに歓迎してもらえるなんて、嬉しいですね。ところで他のギルドメンバー

「よかった!ギルメンが帰ってきて嬉しいですよー!!!

よかったー!」

いが。

涙が溢れ出した。と言っても球体の頭では涙なんて出な

は

?

こぜになり、

ガの姿は消え、自分はナザリックに残っていること。他のメンバーはいないこと。 ユグドラシルのサービス終了と同時に転移したこと。その時、一緒にいたモモン

今は自分がナザリックの経営責任者だということ。

「そして、現在はモモンガさんを探しつつ、この未知の世界を既知に変えるべく冒

険してるんですよ」 「具体的には何をしているんですか?」

183

モ モンガさん の捜索は、アルベドを責任者において僕たちと私が召喚した使 私は前線に出て情報源……つまりこの世界の人々を助けたり い魔

184 捕まえたりして、情報を貰っています」 たちに任せています。 「助けたり捕まえたりっていうのは?」

襲わ れていた村人を助けたり、襲撃者を捕縛して今は第五階層の拷問部屋に放り

込んでいます」

「グッジョブ」

ザリック側

の話が済んだら今度はウルベルトの

番だ。

「俺は、リアルで死んだ。色々あって、まあ今は話したくありません。 死んだ後……

ここへ転移する前に声を聞きました。ナザリックへ行きたいかって。どうやってそ

たら円卓にこのウルベルトの姿で座っていました。その後メイドの一体に見つかっ の声を聞けたのかはわからないがとにかく俺はあの頃に戻りたくて、頷いた。そし

て、今に

いたります」

死んだ……死 んだんですか !??

「そうです。 理由は言えませんよ」

「それ はいいですけど、今怪我とか、体に不調はありませんか?大丈夫ですか?」

·それはまったく問題ないな。リアルの頃より快調なぐらいだ。ここじゃ空気も美

「なら、よかった」

味いですからね」

ほっと息をつく。今が無事ならそれでよかった。男の方は困惑していた。

「他にも気になりませんか?不思議な声とか」

「あ、気になります」

マイペースですね」と零した。

教えてください、と頭を下げると悪魔はやれやれといった雰囲気で「相変わらず

「不思議な声は、多分女性だと思います。声色が高かったので。それ以外はわかり

ません」

「……神様でしょうか」

「だとしたら、 おお 過激ですね あのとき殺しておけばよかった」

185 「悪魔ですからね。 神様なんてクソッタレなものは殺してなんぼですよ」

き ウルベルトが身を乗り出す。

「忠誠心MAXでしょう? ふふ、すごく重たいんですよ」 「あのNPCたちの様子なんですけど」

186 「あれは俺たちがギルドメンバーだから従っているんですか?」

のような存在だからですね」 「そうです。私たちが彼らにとっては王様のような、いえもっと尊い存在: 「神様 か、まあたしかに創ったが……神よりも親の気分なんだよな」

ゥ ルベルトさんのため息には同意する。私だって彼らといるのは楽しいが、 口 l

ルプレイには限界がある。

「ウルベルトさんは私がここに来るまで何をしていたんですか?」 そこでテーブルに広げられた紙に目が入った。

「転移してからのナザリックの活動情報を見せてもらっていました。

アルベドが

「アルベドから……」色々教えてくれましてね」

そういえば今のアルベドってどんな気持ちなんだろう。ギルメン帰ってきて殺

ク地下大墳墓側 し、それに自室のベッドで寝てみたい」 「そうですか。それじゃ、何かあれば呼んでくださいね。……差し出がまし - 俺は部屋にいますよ。追加の報告書があれば持ってきてくれって言っています

187 しれませんが、よかったらメイドたちには明日の朝まで下がるように言っておきま 「そのくらい俺が伝えますよ」 ょうか

?

「なら、 いえ、

出る

うい

でなの

で

そして彼女が去った後、ウルベルトは再び書類に目を通し始めた。ギルド拠点の

維

持と防衛体制に関して言えば完璧な対応だと思う。

転移してすぐ、俺ならばここまでできただろうか。NPCたちがどこまで考えて

かは不明だが、なんだかこのやり方はパインさんよりもモモンガさんっぽ

やれる

Ō

い

気がする。

そんなことをぼんやり考えながら、

読み進めていく。

絵画を飾っている。

執務室

はデフ

ォルトで用意された家具や室内の雰囲気はそのままで、

数点

特に、 の壺や

客人が見ない部屋はさらに家具を増やして飾っていた。

パイン自室。

「いいですよ」

お願いしてもいいですか?」

ド 『が満杯になるまで買い込んだ衣装や調度品を入れていた。 スルームはみっちりとタンスやクローゼットを詰め込み、その中にもアイテム

まれている。おかげでギルドメンバーの誰よりも物を溢れされてい い つか守護者たちの褒美に当てようと思い、良いと感じたアイテムが中に詰め込

、イテム整理しないとヤバイ、そう思ってからすでに半年は経過している。

- 夜遅いのに、呼び出してごめんなさいね」

「いいえ、とんでもございません。パイン様」 応接室のソファにはパインとアルベドが座っていた。それぞれの前に紅茶が入れ

られたカップが置かれ、良い香りを放っている。パインは一口、できるだけ優雅だ

「アルベド、今日もナザリックを守ってくれてありがとう。あなたたちNPCがい

と思う所作でゆっくりと飲む。そして机の上に置いた。

て、家を守ってくれるから安心して帰って来られるわ」

恐悦至極でございます。ですが私たちが至高の御方に仕えるのは当たり前ですの

女神が花が咲くように笑った。

189 で ・

190 帰ってきた! アルベドは目に涙を浮かべて「もったいないお言葉です」と言う。 「そうだとしても、いつも感謝していることを伝えたいの。本当にありがとう」 さて、ここからだ。背筋がヒヤリとするし、何も得られないかもしれないけど、 とびっきりの笑顔を向けるーことはできないので最大限に心を込めて言うーと、

今日も「(表情が読み取られにくいアバターを所持していてよかった)」と思った。

「今日は特に助かったわ。だってウルベルトさんが帰って来たんだもの」

頑張ってアルベドの気持ちを確かめよう。

「彼がナザリック地下大墳墓に帰還できたということは、今後もギルドメンバーが

彼女の微笑みに変化はない、と思う。

ちらりと伺う。

帰ってくるかもしれない。モモンガさんの帰還に希望が持てたわ」 「はい、とても喜ばしいことでございます」

からね 「アルベド、これからもナザリックとギルドメンバーを守ってね。私も一緒に守る 笑みが深くなった。今度は星のように目を輝かせている。不安を感じることはな

いけれどなんだか違和感を感じる。

「うんうん」

声色に含みはない。もしかして悪いことなんて起きないんじゃないかな? 直接

ーは

い、必ずやご期待に沿えるよう尽力いたします」

聞 「ありがとう。ところで、アルベドはギルドメンバーのことをどんな風に思ってい いてみてもいいんじゃないか?

るの?私はみんなのこと大好きだけど」 「はい、 このナザリック地下大墳墓のいと尊き主人であり、正当なる支配者であら

正当なる支配者だって!よかっ た、これは謀反なんて起きそうにないね!

れます」

「特にモモンガ様は私の愛する御方でありーーー」

「パイン様はいつだって我等を愛してくださる慈母のような御方ですわ」

「そうかな?照れちゃうわ、ありがとう」

本当は大変恐縮なのですが、ここは支配者ロールして部下の賛辞を素直に受け入

しばらく談笑

れる。 彼女の言葉を信じてギルドメンバーに危機がないと判断した私は、

191

【つづく】

いいことが彼女を緊張状態から解き放しってしまった。そして思い立った。 さらに見かけるようになった。それはパインも同じだ。もう一人で背負わなくても íν ベルトの帰還によりナザリックは浮ついている。 皆がやる気に満ちて笑顔

を

完璧超人始祖

たのだから、自分のやりたいことをしよう。 「休みが欲しい」 今日を休日としよう。良いではないか! こちらに転移してから休みなどなかっ

といってもメイドたちに正直に「休むね」なんて言わない。

側で仕える人数を増

1

言いつけて暇をなくしてあげた方が喜ばれるね。あとはウルベルトさんに連絡入れ 「魔女 (の館に篭ると伝えて、今日の担当メイドさんはこの部屋で待機、 いや仕 事を

自室のベッドの上でゴロゴロと転がりながら考える。リストができたので、起き

して連絡するように。では、クローゼットのアイテム整理をして……しなさい。」 「……私は魔女の館に一日籠ります。用があれば、あなたに渡したアイテムを使用

「かしこまりました! 必ずやご期待に添える働きをしてみせます!! 」

鼻息を荒くさせて仕事に望む姿に、空振りにならないかと心配になったが、

仕

事 ,は単純にアイテムを並び替えるだけなので大丈夫だろう。

私 は 人し振りに第二の自室とも呼べる施設へ転移した。

に は相変わらず大きな絵が飾られているが、今回は家族ではなく集合写真のように モベたちと挨拶を交わして、館内へとワープする。出入り口となる大きな部屋

約二十人近くのプレイヤーが集まった絵に変わっていた。パインはそれを懐かしそ うに眺めて、意識を切り替える。

両 扉 の端にはすでに魔女の館に勤めるメイドが二人待機している。転移初日に会

えた 「開けなさい」 クレ ンチ ではない。

ク地下大墳墓側 が高鳴る。 「キューブの回収にはこちらの方がいいということもありますが……あなたに喜ん 今日は 顔が見えて嬉しいよ」

かった。そこには愛した人が座っている。

扉は音を立てず開かれる。速度を緩めず中に入り、応接用のソファへ一直線に向

「はっ」

「ヘドラ、おはよう」

「おはよう、

我が君」

そっと伸ばされた長い指が優しく髪をかきあげて耳へかけた。くすぐったくて胸

を贈られるたびに「私はここにいてもいいんだ」と安心できるからだ。

ヘドラの隣り、できるだけ側に寄り腰を下ろす。

言葉に声に愛が添えられて、胸に届く。はじめは戸惑ったが今では心地いい。

愛

私

は

で貰えて嬉し 自 然と湧き上がる笑顔を向ける。 いですよ」 ヘドラも笑ってくれた気がした。

195

「喜んでいるとも。身代わりを発動している姿、今の君、魔女である君、

すべて愛

「わざと、ですよ。ヘドラがいる日を狙って来ています。あなたに会って、話した 寂しそうな感じが言葉端から伝わる。可哀想だと思いつつ喜んでしまう。

れば、しばらくは会えなかっただろうからね」

でなけ

196

か

ったから」

に

かったんだい?」 「天にも昇る心地だ……言葉の熱でのぼせてしまうよ。 君は私とどんな話しがした

が高 **゙なんでもしたいわ。と言いたいところだけど、今回は仕事の件がメインになるわ** いと思わ れるイベント戦を予想している。少しクールダウンが必要ね。

浮かされた声と一緒に溶けてしまいたいが、これから相談事は非常に難易度

彼はソファに預けていた背筋をピンと伸ばし、雰囲気が甘いものから固いものに

ね。最近の宝物殿の様子はどうかしら」

変わる。

変わりない ょ 安全で平和そのものだな。 そちらは危険ではなかったか

「まったく。パンドラもルプーもシモべたちもいてくれたおかげで大丈夫よ。目的

ク地下大墳墓側

の情報も手に入ったし」

「目的 の情報か。 ふむ、そろそろ私の執務室へ移動するかね」

私 は 頷 いた。

「そうしましょう」

り、 彼の生活が少しでも楽になるようにと考えられて作られた。 ドラの執務室と自室は館の二階部分にある。それらは両隣りに設置されてお

そうな広さで、中央から手前に応接用のソファ、奥に執務机と椅子、 執務室 |の扉を抜けると、そこそこに広い部屋があった。二~三十人ほど収容でき その他にもオ

フィス向けのキャビネットや本棚が置かれている。

〈転移門〉と同じような効果があり、結界内と行き来できる。 パインは空中に自分の魔法少女としての固有模様を浮かび上がらせる。これは

計十一人の男性が出てきたところで門が消える。 そこから大木のような筋骨隆々の 大柄な男性が現れた。姿形はほとんど違うが、

197

「おはよう、

皆

ナザリ

198

っお はよう、パイン

草冠を被っている。白い布地の腰巻に動きやすそうなサンダル、彼の体格に見合っ 代表して応えるのは一番大柄な男性だ。赤い肌に赤いヘルメット、その上に金の

た大きな白のマントと随分身軽な服装だった。その見た目はまるで古代人である。

彼はまさしく伝説の時代から生き続ける元神ザ・マンだ。

金の顔を持つ壱式 (ファースト)、ゴールド ・マン。

そして彼の弟子である完璧超人始祖たち。

その弟、 銀 の顔を持つ弍式 (セカンド)、シルバーマン。

長く白い髪に全身鏡面で紫の体を持つ鏡の化身超人・参式 (サード)、ミラージュ

ォース)、アビスマン。 あらゆる痛 『みを無効化する緩衝材を全身に持つ伍式 (フィフス)、ペイン

イノシシに似たマスクを被ったこの中では最も人間に近い見た目を持つ肆式(フ

二股に . 分かれたヘルメットのような頭部の前面が透けて中が見えており、全身の

血管が浮き出ている姿が少し不気味な陸式(シックス)、ジャスティスマン。

カラスを模した形の仮面をつけた玖式(ナイン

その所作は洗礼されており、

貴族

長く伸びた二本の角と一つ目が印象的な漆

ク地下大墳墓側 金ガチャで»拠点のNPCを増やせる»大当たりを引いたためだ。転生者の強運が発 魔女の館内で働くメイドたち含めなぜこんなにNPCが増やせたかというと、 以上、ヘドラを合わせて十二名がパインが創造したNPCである。

課

動 引 Ü た瞬間 たパインは、 だった。 仲 蕳 たちの許可を得て完璧超人始祖たちを創り出した。 もちろ

199

ん趣味と実益を兼ねている。

相手を消耗させ確実に倒す。

守る役目を担う。そのとき、 はそのスキ ルやクラス構成から、 敵を自らの結界内に引き込みえげつない数の使い 敵 の襲撃にあった際 は宝物殿で世界級 、魔で を

員 (できるならしようと話しが出ていたところに、 ちょうどガチャ |初は、パインとヘドラと使い魔たちで対処する予定だった。しかしNPCを増 を当てたため完璧

超人始祖

が創

られた。

ち せ物理と魔法 Ō 襲擊者擊退 呪 を利用することで、 で殴 の要となるように創られた彼らは、 りまくる。 中の上チーム、 パ インは回復やサポ うまくやれば上の下チーム戦 1 ヘドラの指揮により能力を向 トに徹する。 デバ フは に勝 使 Ü 魔 上さ た

宝物殿以外の場所からでも結界内に引き込めばこの作戦が使えるため、千五百人

とができる。

0) 襲撃の際は み なぜ拠点NPCを結界内に設置できたかと言うと、拠点と結 チームを分断でき大いに貢献できた。 界内

げ た か らだ。 宝物殿 の最奥、 世界級がある場所にパインの棺桶を置き常時 結 界内 ح

これは魔法少女イベントの中でも»魔法少女まどか☆

繋げることで成立したのだ。

ヘドラ含めた始祖たちは、ナザリックの中でもあの襲撃で生き残った者たちとし

マギカ»のイベントをすべてクリアした者のみが得られるものだ。

て畏怖される存在であるとパインたちプレイヤーは知らない。

「(これで会うのは二度目だけど、やっぱり完成度高くて大満足だわ)」

心に突き動かされて会いに行った。その時は健康を確認しただけで終わってしまっ 度目は第六階層で階層守護者たちと分かれた後だ。様子を見たるためとファン

、ンドラを出すにあたり、 始祖たちも結界内から出してしまおうと考えていた。

たが今回は違う。

るよう設定を書き込んである。リーダーとなる者は多い方が良いと考えての行動 キン肉マンの原作に沿り全員が知恵者と設定したことに加えて、さらに頭が良くな

だった。

漆黒聖典を倒したらこの子達もナザリックのために働いてもらおう。

こういう時自分から座らないと皆が座り始めないので、パインは素早くいつもは

201

「さて、

全員揃ったし座りましょうか」

横に立つよう指名した。しかし、それに異を唱える者がいた。

「別に俺でもかわまんのだろう?」

律儀に手を挙げて発言するのはゴールドマンだ。あまりにも自然体だったのでこ

「それってロール的にどうなの?」

ちらも素で返してしまった。

ゴールドマンは、はたしてパインのそばに立ちたがるだろうか? やりたい事は

「あんたがダメなら変える」

どんどんやる性質だと思うけど。

る。つまり、自分たちにオリジナルがいることを知っていて、普段からロールプレ 始祖たちの設定文には»それぞれの完璧超人始祖を模した存在である»と書いてあ

イを行なっているのだ。 「そう。……うーん、ダメって言うほど»ゴールドマンのイメージ»に離れていない

「ならばこのままやるぞ。……俺でもいいだろう?」

と思うよ」

っの 場合、 私が創ったゴールドがヘドラの役割を任されたいのだと結論づけた。

というか、その他にないでしょう。

「その意見をのむなら全員でじゃんけんするのはべきだと思うけどいい?」

私は頭を振った。

「ヘドラはそうだよね」

「反対します」

「我らは賛成だ」

「うん、

わかるよ」

複数の NPCを持つ難しさを感じていたパインだった。 賛成多数ということで

じゃんけん大会は幕を開け、結果サイコマンが勝った。

「お 「ニャガニャガニャガ、私の勝ちですね!よろしくお願いします。パイン様」 パインはアイテムボックスからある書類の束を取り出し、 めでとうサイコマン。よろしくね」 サイコマンに渡す。

全員に行き渡ったことを確認してから話し始める。 部ずつ受け取ってちょうだい」

「では、

これ

より対漆黒聖典との戦闘イベントについて会議を始めます。

会議後、

204 完璧超人始祖

グリーフキューブ生産に移り連携を強化します」

i

この漆黒聖典って奴等気になるな」 ル ベルトは部屋で一人、新しい報告書を読みながら考える。 彼らについ てもっ

とよく知 りた い し、パインと話し合いたかっ た。

今日は たしか魔女の館に籠ると言っていたな。 声をかけられた朝から三時間 ほど

経過している。 少し様子を見に行こうか。

今日担当だというメイドに一言連絡を入れて、ウルベルトは第五階層へ転移した。

氷河に吹雪はない。 コスト削減によりそういった金貨が消費するダメージエフェ

ル ベル トは 一部を残しオフにされている、らし 初 めての雪と戯 れ つつ魔女の館 へ飛ぶ。 魔女の館 0) ワー · プ出

ŋ

クト

などは

口には膝丈の雪だるまが飾られており、 これでは出入り口が隠されていないではな

た。 「こんに ちは、パインさん。

通りした。 転移門を守る虫系シモベに適当に挨拶を交わして門の上に乗る。

かと、

ため息をついた。

仲間の作ったものならば無下にもできず、壊さないで素

広 景色はガラリと姿を変えた。 い部屋には、かつてパインと共に魔法少女イベントをクリアしたフレンドたち

0) り目をくれてやらず、 総が 壁一面に飾られ、シックでオシャレな家具が置かれている。 両扉を開けた。 それらにもあま

途端 に騒々しい音が聞こえてきた。

「ほら !ほ ら!キュウベえ、さっさと金貨出しなさい よ!!!」

げ入れているパインの姿があった。そしてヘドラと十一の筋肉たち。 扉 0 すぐ隣り辺り、 銀色のスタイリッシュなゴミ箱らしき物に黒い 無駄に暑苦し

キューブを投

さを感じつつウルベルトはパインの側へ移動する。 気づいたNPCたちは膝を折ろうとするがそれを片手を振って制止し、 待機させ

何をしてらっしゃるんですか?」

「あら。こんにちは、ウルベルトさん。見ての通りキュウベえにキューブを注いで

205

完璧超人始祖 いるところですよ。……そういえばキュウベえは私にしか見えないんですよね」 今ここにいるんですよと、指差す先には何もいない。

206 ですけど、見えないんじゃ面白くありません 「そうですか。見た目は愛くるしい人形なのでサンドバッグにどうかなと思ったん 「残念ながら見えませんねえ」 ね

思う。 ウル 勧めら ベルトに愛くるしい人形を殴る趣味はなかったので、見えなくてよかったと れていたら引く。

パインはにこっと笑う。 ちょっと話がしたいんですがそれはいつ頃終わりますかね」

「私もウルベルトさんと話がしたかったんです。これはえーと、キューブを入れて

金貨に替えるところまで私がやらなくちゃいけないので、三十分はかかりますね」 パインは魔女の館にある壁掛け時計を見た。

ちも交えて話がしたいんです」 「もうお昼ですし、午後から集まりませんか? できればアルベドや他のNPCた

重要な案件に関わっているアルベドたちは仕事の引き継ぎがあるので今すぐには

ナザリ

リー

それなら時 間を開けた方がいいですね。 わかりました。 午後の三時から……俺の

部屋でいいですか?」 「私は構 いませんよ」

来ら

ń

な

「では、午後の三時に。 ……とりあえず今は暇なので見て行ってもいいですか?」

というか、やっていきます?」

ゥ ル ベル トは顎に手をあてた。 いいですよー。

この やっていきますというのは、 おそらくキューブの生産だ。

グリーフキューブ生産、たしか魔獣とかいうモンスターを倒して得られ るの が

グ

てもらえるんだったな。 フキューブ。それをキュウベえに渡すとユグドラシルの金貨やアイテムに変換

い パインはキューブを入れ終えたのか手をパンパンとはたい い <u>`</u>運 「動にもなりますよ。まだ魔法を発動してなかったでしょう?」

い きな り実践ですか?スパルタだなあ」 ちょうど今舞台は空っぽで何もいないので技の練習できるんです。

207 「違いますよ。

「は、かしこまりました」

計十三人の大所帯で、俺たちは部屋の奥、魔獣と戦闘するゾーンに足を踏み入れ

「ではこちらへどうぞ。ヘドラと始祖たちもついてきなさい」

た。

より、ウルベルトさんはお腹減っていませんか?」

「平気ですね」

雑談する姿を見て、ヘドラはフードを深くかぶった。

【つづく】

「まだまだキューブを入れる予定ですから、今はやらなくてもいいんですよ。それ

「あれ、入れたやつ金貨に変換しなくていいんですか?」

ウルベルトはゴミ箱を振り返る。

袓

お望みなら魔獣を投下しますよ」 「とりあえず練習していきましょうかね」

1	人	<u>,</u>	6

ック地下大墳墓側

「ハワー!」「ニャガー!!!」

法とスキルによる支援があったとはいえ、一方的な戦いだ。 を、殴り蹴飛ばしていく。離れた所にヘドラが立ち支持を飛ばしていた。いくら魔 「もう少し手加減した方が練習になったんじゃないですかね」 独特 な大声が戦場から上がる。十一体のNPCが魔獣という異形のモンス ヘター

立っている。 い大きな体の魔獣十体と戦っても狭く感じない。さらに十体追加されても余裕があ 魔獣と戦うための部屋は大きかった。五十メートル級で、 耐久型らし

そう言うのは、ウルベルトだ。パインと二人、魔女の館の地下深くの部

:屋の隅

パインは眉を下げる。

209

「もちろん支援なしでも勝てますけど。彼らは喜んでくれましたし、それに怪我

それぞれの関係 負ってほしくなかったし……」 レベル六十台とレベル百での戦闘において、万が一にもレベル百が負けること

キューブの効率的に収集することを目的としたルーチンワークの一つだ。プレイ はない。もちろん、世界級を持ち出されたらその限りではないが、今回はグリーフ

ヤー戦でもないのに、パインは心配しすぎている。

インは今日やっと、自らが過保護の心配性であったことを自覚する。 仲間に対しては抱かなかったが、NPCたちには過剰なまでに反応していた。パ

自分がこんな感じなら、ウルベルトはどうなんだろうと考えてある事を思い出し

た。

「ひえ」

「うわ、いきなりどうしましたか」

「あの、実はまだデミウルゴスにウルベルトさんの帰還を知らせてなくて、ですね。

引きつった声に驚くウルベルトをよそにパインは慌てる。

それでやベーってなっているんです」

「ああ、 いつも連絡ミスですか。懐かしい」

「私のミスで和まないでください」

ルトに謝罪すると、彼は気にしていないと言う。 現在のナザリックにおいては非常に問題のあるミスをしてしまった。まずウルベ

「実はすでにデミウルゴスとは話したんですよ。昨日パインさんが部屋を出てすぐ

あいつに連絡したんです」

「そうなんですか! ということは、デミウルゴスはすでにナザリックに帰還して

「なぜ?え、会いたくないんですか?」 「いや、 帰還はさせていません」

いるんですか?」

信じられないと山羊の顔を見る。

「だって仕事中でしょう。ひと段落してからでもよくないですか?」

「ウルベルトさん……」 「会ってください」 パインはゆっくりとウルベルトの両肩を掴み、 まっすぐ目を見た。

「でも、この後あなたを含めて会議が……」

それぞれの関係 「予定変更してください。……お願いします」 それからすぐ、パインはデミウルゴスに連絡を取り謝罪と至急ナザリックに帰還

するよう伝える。忠義厚い悪魔は謝罪を「恐れ多いです」と辞退し、涙ぐんでお礼 を口にした。

に伝えておく。 るようにと手帳に書き留める。さらにデミウルゴスの帰還と会議の変更をアルベド パインは心 の中で「連絡遅れてマジでごめんなさい」と土下座し、今後気をつけ これでいいだろう。

「デミウルゴスは数時間後には帰って来れるみたいなので、会ってあげてください

ね

「わかりました。……それで、俺の護衛にでもすればいいんですかね」

「そこはお任せします。護衛が鬱陶しかったら第七階層の守護を命じればいいで

「いいんですか?」 そのへん は ウルベルト次第だと言うと、彼は以外だと思ったようだ。

いうの特別好きそうじゃないし。彼らを傷つけない程度に自由にしたらいいと思い

「私はNPCたちと遊んだり話したりしたいと思いますが、ウルベルトさんはそう

ます」

「それ

はよか

つった」

「ありがとうございます。強要されないことが楽で嬉しいです」

魔獣が残り一匹になったところだ。もうすぐ戦闘も終わるだろう。

そのとき、 唐突にウルベルトが聞いてきた。

「そういえばパインさんは、ヘドラと結婚しているんですよね」

モンガさんに付き合ってもらって真似事みたいなことはしましたね」

「ええ、ユグドラシルにあったプレイヤー同士の正式なものではありませんが。

モ

「……どんな感じですか?」

「幸せです。愛されて、幸せですよ」

「私は、ヘドラのこと大好きですよ。これからもっと好きになっていくと思います」

「愛されて幸せか……パインさんはあいつのことが好きなんですか? 」

「……そうですか」

発、 若干わからないという雰囲気を醸し出すウルベルトはそっとしておき、 魔獣を仕留めたパンチをしっかり目に焼き付けた。 ラストー

떊

口 ッ 次 八の戦闘 プ率を高 からは私たちも参加した。 で多く稼げるだろう。 め る。 私が 参戦することでグリーフキューブはドロ 魔獣を三倍に増やしてグリーフキューブ ッ プ増加するの の ド

魔 獣を倒す作戦 は簡単 だ。 で、

今日だけ

大な裁ち鋏で魔獣の下半身を切って動きを封じ、ウルベルトさんが仕留める。 まず始祖たちとヘドラが統率する使い魔で敵を足止め、私がメインウェ ポンの巨 これ

を繰

り返した。

を倒 で時間 ンプルな作戦でパターン化しやすいからこそ、慣れれば作業効率 が 回を重ねるごとに早くなり、 私たちの 連携もい いもの へとなっ ・が上がる。 敵

ウルベルトさんのM がそろそろ切れるという頃にアルベドから

会

ピールするようなポーズを各々とりだした。 る と伝えておいた。 「大丈夫ですか?少し休んでから上がりましょうか。それとも運びますか」 「り、了解です。はあ、はあ……これ残量に気をつけないと自滅するな。 「ウルベルトさん、デミウルゴスが帰還したので上がりましょう」 力持ちならこちらに、と言うと十一の筋肉隆々の男たちがボディビルダーがア

動きが鈍

言〉が入る。デミウルゴスが帰還したらしい。迎えに行こうかと相談するため、ウ

ルベルトさんを見たら肩で大きく息をしていた。私は「魔女の館まで来て欲しい」

「もちろん、私でよければ肩貸しますよ」

てくれなんて言えませんよ」 「そうですか」 「いえ、〈飛行〉で動くので大丈夫です。それに、旦那がいる前で嫁さんに肩貸し

215 を傾げた。

パインはそういうものなのか、と疑問を含めてヘドラと顔を合わせる。

相手は首

ドメンバーがいる前では言動を変えるよう設定されている。 「そういうも

のなのでしょうか

?

へドラの、このナザリックの忠臣らしい振る舞いは余所行きのものだ。 他のギル

「……嫉妬 ウルベルトがアイテムを使ってふわりと空中に浮かぶ。ヘドラは左胸に手を置い しないのか?」

き、 て答える。 理性が怒りに飲み込まれてしまいそうになります。 パイン様の側に己以外の、他の者がいたらと想像するだけで胸が焼 ですが、パイン様 のド け尽

ルゲンガ 引 · か . かる言い方だった。パインは目線だけでそれ以上余計なことは言うなよと ーは私だけ。 なので心中穏やかであります」

願うが、叶わ な

ろう?」 「なぜドッペルゲンガー限定なんだ? 嫉妬するべき対象はこの人に近づく相手だ

「いいえ、ドッペルゲンガーのみで良いのです。なぜなら、そういう性癖の御方で

ドラは視

線に気づ

ぃ

. た。

だが、

読み違えた。

性 |癖のことならば、 ギルドメンバー全員の、 周知の事実だと思ったのだ。

だって

すか

5

モモンガ は知っていたのだから。

慌てて止めるが、出てしまった言葉は戻って来ない。 ウルベルトはそっと、 ほん

の一メートル 「変態だったんですね だけパインから離れた。 え

「やめてください。

引か

な i

でください」

「おや、言っては いけません でしたか。これは大変失礼い た しま した」

「いいよ……ちゃんと話していなかった私のせいだから、

パインの肩ががくりと落ちた。

性

の秘密を話 そういった仲間の、新 デは Ö ゖ ないと注意されたりと、 しい発見をしつつ。 また始祖たちからヘドラへ、 賑やかに館 の広間 に戻る。 勝手に女 ヘドラと

217 完璧超人始祖たちはどういう関係になっているのか気になっていたが、どうやら友

ある笑みを浮かべていた。しかし土埃被る私たちを見て血相を変える。 すでにデミウルゴスは到着していた。広間へ通じる両扉が開くと、悪魔は余裕が

「私も、 後でここのお風呂に入るから大丈夫よ」

「後で大浴場に行くから、今はかまわん」

えり」と、加えてすぐにウルベルトの帰還の連絡が遅れたことに謝罪をする。 「左様でございますか。でしたら、私からは何も言うことはございません」 久しぶりに会ったデミウルゴスは、見た目上変わりなく安心した。改めて「おか 忠臣

な彼はやっぱり「とんでもございません」と頭を下げるのだった。 そうして私たちのやりとりが一段落して。

「……第七階層守護者、デミウルゴス。御身の前に。 ただいま戻りました、ウルベ

「おかえり、デミウルゴス。あー、ただいま」

ルト様。そしてお帰りなさいませ」

この日はじめて、デミウルゴスから涙が流れた。

帰 っていっ 積 E る話 は大浴場でするらしい。 そのまま二人は魔女の館から第九、十階層へ

ていた。 残った私たちはというと、デミウルゴスの涙にもらい泣きしてハンカチを濡らし

私、弱

いんだよね。ああいう感動ものは特にさ。

感情の波が収まり、 始祖たちを労ってから結界の中へ帰らせる。 結界の中は住居

スペースを完備させているので、彼らの生活には困ら ゥ ・ルベルトとの会談は午後からの予定だった。だが、私がデミウルゴスのために しな い。

時間を取るようお願いしたので、時間は大幅にズレ込んだ。

ル お風呂に入った後、グリーフキューブをキュウベえに再び渡すわ。その後ウルベ トさんと会談になってるから、時間になったら教えてちょうだい」 ヘドラにこれからの用事を伝える。

「夜の九時になったら」 かしこまりま した。会談は何時頃から始められますか?」

220 それぞれの関係 分で洗っている。 入っていく。もちろん服を脱がせてもらうだけだ。体はさすがに恥ずかしいので自 「では、一時間ほど前になりましたら、お知らせいたします」 ヘドラの美しい所作の礼を見届けて、パインは数名のメイドを連れて風呂場へ

「(そういえば、ウルベルトさんの話したいことってなんだったんだろう)」

【つづく】

夜九時、 約 東 の時間。 ギルドメンバーの自室に人が集ってい た。

ゴス。ナザリックの内政を担うアルベド、彼女を補佐するパンドラとヘドラ。美し 部屋の主人ウルベルト、彼の被造物であり巻物の素材を探しを任されたデミウル

い女性の姿から真っ黒な球体の顔にドレス姿へ着替えてきたパイン、以上六名だ。 長テーブルにギルドメンバーが座り、残りのメンバーは立っている。座ることは

はナザ パンドラはウルベルトの指輪を借りて、パインが宝物殿から出した。 ノリッ この会議に 一体何

ク地下大墳墓側

辞退されてしまっ

た。

0) ル が ベルトが咳払いをする。 あ る クの知恵者を全員呼びたいと、 Ō か、パインには見当がつかなかった。 ウルベルトが言い出したからだ。

221 典と呼ばれる者たちについて知りたい」 「人が揃 ったな。では、始めよう。 俺が行いたいのは情報交換だな。例えば漆黒聖

ナザリ

いというのは自分にとって有利に働くと思った。今の表情を見られたら何か知 いると勘ぐられてしまう。私は動揺からうまく誤魔化せない。嘘だって下手につい パインは内心とても驚いた。 そして、やはりこういう状況において表情が見えな って

222 たら信用が下がってしまう。ウルベルトとの仲に不和を招きたくない。仮に、本当 のことを言ったとしても信じてもらえないだろう。 おかしな人だと距離を開けられ

だから自分の知っていることは隠そうと決めた。

「漆黒聖 主典が、 気になります ゕ ?

たら悲しい。

パインは努 なんでも一国の切り札らしい め て平静を装っ た。 ゥ 'n じゃないですか。 ベルトは怪しまず頷く。 俺たちが警戒すべき未知の

存在です。まあ、周辺では最強と呼ばれる王国の戦士長があのレベルなので、考え

でも、と続ける。

過ぎかもしれません」

のような 一法国はプレイヤーが作った国らしいじゃないですか。俺たちのように、 レベ リングに最適かつ金貨を延々と補充できる施設があるかもしれない。 魔女の館

そうならば、

戦士長より強い可能性がある」

ざいません」

しお

密に進め の場合はどのくらいになるんだろうか。一応、レベル百と仮定して襲撃の準備を内 るのかと、今更気づいた。原作のレベルなんて知らないけれど、うーん、高レベル しく得た情報はあるか?」 「この書類は法国の情報源から得たものをまとめた資料だ。 Ν ゥ (PCたちは顔を見合わせた後、アルベドが発言する。 íν ベルトはアイテムボックスから書類の束を取り出してテーブルに置い ている。 ゚・・・・・レベル百以上でした、なんてことないよね これ以上に、または新 ?

「たしかに、そうですね」

彼の言う通りだ。レベリング施設は盲点だった。じゃあ原作より強い可能性もあ

- 申し訳ございません。現状、その件につきましては新しくご報告できるものはご

「そうか、残念だ」 パンドラが声を出す。

時間をいただけるのであれば、 法国ヘシモベを潜入させ直接情報を手に入

223

れましょう」

所にシモベを派遣することは危険だと却下されたよ。下手に刺激して戦争の口実を 「それは先程私も進言させてもらったんだがね、プレイヤーがいるかもしれな い場

る。

224 与えてはいけない、とね」 それを聞いてNPCたちは悔しそうに表情を歪めた。私はどうすれば法国の情報

をより手に入れられるか考える。

「……知っている人に直接話を聞けたら楽なんですけど」

『そうだろ?」

ぱちん、と山羊の指が鳴る。

「だから、俺は冒険者になるよ」

「えっ危ないですよ」

しょうが。なぜ自ら飛び込むんですか。

今さっき未知の存在は高レベル

かもしれなくて危ないよねって話したばっかりで

山羊の悪魔は深くソファに腰掛ける。

「いいか?未知の存在にうまく対処できるのは誰だ?それは、 未知を冒険してき

た俺

゙たちギルドメンバーだろう?」

に。なぜならすでに情報戦で負けているからだ」 その言葉に皆、予想通りなのか落ち着いて聞いている。デミウルゴスは先に話 か静かだ。私は黙ってウルベルトさんの言葉に耳を傾けた。

それも早急

うに努力するべきだ」 前 ミだ。だが、それを仕方ないで済ませる気はない。負けているなら、 俺たちは、 ってい 俺たちより早く来たプレイヤーに情報戦で負けている。 るのは当たり前、この地にしかないアイテムを持ってい 追い越せるよ 先に るの も当 来た方が た ŋ

「そうだ。聞けば、冒険者は国に縛られない自由な職らしいじゃない 「その一つが冒険者になって、広く情報を集めることなんですね」 か。 様 々な国

を堂々と行き来して入り込み、生の情報を得られるのは有難い。

これ以上にい

い職

225 「あと思い浮かぶのは商人ぐらいでしょうか」

ナザリ

は

あ

るの

か

~ _

山

辛

-の頭を振

· それは 俺向きじゃないな。 ふむ、見た目が人間に見えるセバスとプレアデス辺り

に任せませんか?」

「賛成です。彼らならある程度の敵に対処できるでしょう」 パインは頷く。

結果、 それからは ウルベルトの護衛には影の中に入り込めるシャドウデーモン以外に高 サクサクと話が進んだ。

一の一人、最も人間らしい見た目のアビスマンをパインは推した。

ルの召喚モンスターのハンゾウを数体つけること。そしてタンク役には完璧超人始

袓

商人のフリをして潜入するメンバーは、執事役にセバスとそのお嬢様役にソリュ

シャンが決まった。

段落したところで、次はパインが話し出す。

「あの、私も少し出かけたいんです」

どちらにですか

?

食い気味で反応するアルベド。優しげに微笑んでいるがどこか余裕がないように

「今すぐじゃ な いわ。 ただ、 賊のアジトを見つけたら試したい事があるの」

見えるの

いは気

八のせい

か

な ?

「何を試されるのでしょうか」

適材適所

ËËËË-

「ふー、終わった」

てから帰した。それから寝室へ、ヘドラと共に寝転ぶ。 パインは両手足を伸ばしてから、ふっと力を抜く。程よく脱力して気持ちがい 自室に帰ってきたパインは、アイテムの仕分けを行ってくれたメイドをよく褒め

い。しかし、隣の気配はカチカチであった。 「ヘドラ、そう意識しないで。襲わないから」

「何?襲わ 素のヘドラに対してそんな度胸ない、と心の中で嘆く。 ないの いか?」 それから襲われても困る

227

たには触れないわ」 「この体は言わば使い魔の体を乗っ取った借り物ですもの。私じゃないのに、あな

「……なるほど。以後、気をつけよう」 何をとは聞 [かないでおく。それがわからないほど、彼との関係は幼くない。

「触れることはできないけれど、こうやってさ、あなたと二人きりで過ごしたかっ パインは夫の方へ体を寄せた。

たの。 喋ったり、好きな映画を見たり、 もっとお互いを知りたい」

パインは、今自分の中で芽生えているヘドラへの気持ちを大切にしたいと思って

いる。

的な味方、そういうものだった。でも、長く接すれば愛着が湧くように。彼を大事 彼を作った頃は打算的な気持ちだった。自分を都合よく愛してくれる存在、絶対

なものとして扱うようになっ た。

いたいと、 彼 か ら愛されるようになって傍にいることが心地よくなって。この場所にずっと 思った。

ドラは右手をパインの左手に重ねる。

「私は、映画をあまり見ないから君が選んでくれるか?」

「いいわ。まずは私の好きなアクション映画から見ていきましょう」 ストーリーが明快で派手なアクションは見所が多く、はじめての彼にも楽しんで

「(同じジャンルを好きになれたらいいなあ)」

もらえるだろう。

パインは起き上がり、 映画のデータを置いてある棚へ歩み寄った。

へつづく〉

パインの部屋

だ。静寂の中でアルベドの心は弾んでいる。なぜなら、パインに呼ばれたからだ。 n 四十二人の居住区であり聖域である。 かっていた。 至高 ·違うメイドに会釈され、それに対して笑顔で返しつつパイン・ツリーの自室 口 イ 『の御方。NPCたちに、自らの持ち物を分け与え続けてくださった。 ヤルスイートルーム。ナザリック地下大墳墓の奥に位置する場所。 長い廊下を歩くが、足音はふかふかの赤い絨毯に吸収されるため静か アルベドはその廊下は歩い てい た。 至高 ほぼ毎 時 一へ向 マす なる

るが、 を結んでくれた恩人、数え切れないほどのご恩がある御方だ。その方の役に立てる 日会って、大切に扱ってくださった。最後まで残ってくださった。自分とモモン れば即座に切り落とす。その用心ができてはじめて門番としての役目を与えられ かもしれ インの部屋 な は当たり前だ。 い チャンスとあれば、 の前に着く。 主君の部屋に入るものはすべて警戒し、不審な真似をす 門番であるコキュートスの配下から鋭 自然と心は弾み喜びで翼がバサリとは (V 視線を送られ ため ガ

る。

は

な

6

な

い

0)

だ

から。

万が一もあって

か

れるのでこちらの方が私は好きだ。 女性の姿をしていらっ 促 うに言うと扉を閉めた。今度は数分間待った。 扉 挨拶 ぉ お される。 アル 愛するパイ を開けた。 はようございます。 はよう、 ば ベドは慎まやか 短め シ アル アルベドはパインに呼ばれた事を伝える。 を好まれるので、余計なことは言わな 様 ベド」 は執務机に座ってらっしゃ に扉をノックする。 しゃる。 パイン様」 表情がわかること、そのご威光をしっかりと感じら 十秒後に今日 っ 再びメイドが現れて、中に入るよう た。 今日は真っ黒なお い。 相手は頷いて、少々待 のパイン様当番 顔 0 では メイ

つよ ・ドが

な

ク地下大墳墓側 な あま か 部屋の中には、メイド以外にエイトエッジアサシンが五体が護衛に当たっている。 った。 りに も数が少ない。しかし、至高の御方からの命令とあっては聞き入れるほ だが、時期をみて護衛を増やせないか進言してみよう。

231 室内は温 かみのある部屋だった。 ロイヤルスイートルームをデフォルト設定の

ا ح

パイ 232 撮 く増えたものといえば、室内には木製で精巧な装飾がされたクローゼットと廊下側 ヤーたちとの集合写真。ごく最近に撮った物も飾られていた。それらに加えて新し べったも 写真を多く飾っている。壁じゅうに大小様々な写真は、ギルドメンバ のからNPCたちとのツーショット、ギルド以外で繋がりがあったプレイ

たも 置 か 今 日 ŏ れ のが飾ら たと聞い ペストーニャや魔女の館を含めた全てのメイドたちとパイン様が写っ ń てい ている。 る。 棚の写真はパイン様当番のメイド が毎日変えてい るらし

ル

ームのアイテムを整理するために用意されており、

棚はさらに写真を飾

るために ドレ

ス

「ドアから入ってすぐの所に設けられた棚だろう。クローゼットはたしか

よく来ましたね。早速、あなたとお話ししたいところだけれどウルベルトさんに

プレゼントしたい物を思い出してね。少しこの部屋で待っていてほしいの」 「かしこまりました」 ルベルト・アレイン・オードル様。近々ナザリックの外部にて潜入活動をされ

思われた。 る。 最も危険な場所に乗り込まれるのだ。パイン様から何か贈られるのは当然だと ド

NPCにも気さくに応じてくださる御方で、決してそこに甘えた訳ではない。 体なにを贈るのか、 その日は浮かれてためか好奇心が刺激された。パイン様は ただ

「ウルベルト様にどのような物を贈られるのでしょうか?」

もう少し話がしたかったというのはある。

「変身アイテムの素材よ。私が集めてい た物から渡そうと思って……見たい

まるでいたずらっ子のように微笑まれる。 それがあまりにも、失礼かもしれない

い いでしょう。 いらっ しゃ

が、

可愛らしくて頷

いてしま

いった。

?の御方が住む部屋らしくない場所だった。まるで明るい倉庫のようだ。 スルームの奥の部屋。

床

せい 壁、天井はどれも執務室と同じなのに、置いてある無骨な鉄製の棚と多くの木箱の で実用 一辺倒だ。

天井 けまで積 まれ た木箱の間をまっすぐに進むと、壁際に引き出しタイプの大きめ

233 のキャビネッ トが見えた。

234

「アルベドはここに来たことはあったかしら」 パインがその一つに手を入れて探

し始

らめる。

「ならば驚いたでしょう。 「いいえ、ございません」 面白みがないというか、事務的な部屋

「そう……ですわね。パイン様、この部屋には何を置かれているのですか?」

ドラ・ファンタズマのみに注がれていると、そう思っていた。 「愛よ」 アルベドは目を見開いた。意外な答えだった。パインの愛はその被造物であるへ

しから、抜いた御手には一つの赤い玉があった。血よりも赤く、 滴る水よ

りも 引き出)輝いている。これが愛の正体なのか?

麗 がなければ作れないのよ。 「これはドッペルゲンガーのみがドロップする素材で、変身アイテムはすべてこれ だって思うの。だってレア物だし、モモンガさんもいいですねって言ってくれた 綺麗でしょう。私ね、どんな宝石よりもこちらの方が綺

どんどん言葉が普段使いのものへと崩れていくが気にならない。 支配者らしい姿

ね

に振った。パインは興奮して頰を赤くする。 メンには引か 「やり過ぎなのがいけ 「そうでしょう ! ありがとう、 「それは素敵ですね」 「まあ、どうしてでしょうか 御二方が認めればそれは最高のものだ。アルベドはすべての疑問を捨てて首を縦 少女らし れちゃったから……」 い言葉もどちらも尊き至高の存在な ?

アルベド。私の宝箱を見せてよかった。

他のギル

の

にこの部屋も。 るように思われちゃって、一時期はモモンガさんに心配をかけてしまっ 宝箱と呼ぶのに内装に飾り気がないギャップとかが良くないみたい ないみたい。 ド ッペルゲンガーだけを狩り続ける姿が狂 た わ。 それ って

箇所 顔を上げて部屋を見るパインの目は悲しげだ。アルベドは本心で良い点だと思う

235 それに飾る時間より狩る時間のほうが

「そうよね。 私もそこが気に入っているの。

「……実用的

でよろしい

か ۼۜ

236

パインは目をぱちくりと瞬かせて、それから目元をゆっくりと緩ませた。

アルベドはぶるりと喜びに震えて「身に余る光栄でございます」と頭を下げた。

ありがとう。今日、あなたと話せて本当に良かったわ」

ルベドを連れて執務室に戻ると、ちょうどウルベルトが応接用のソファに座

つ

「ええ、

その通りよ。

てい

レア物でしょう。

「他にもあるので大丈夫ですよ。それに使ってあげないと可哀想でしょう?」

ドロップするまで苦労したんじゃないんですか 聖遺物級の変身アイテムが作れますけど、

いい

んですか?これ

?

「ほ

お、

赤 が玉。 「ウルベルトさん。これがお渡ししたいものです」

アイテムボックスから赤い玉を取り出して、机に置いた。

軽く挨拶を交わして、彼の向かいに座る。アルベドは私の後ろに控えた。

ょ っぽど大事だわ」 に入れ、

代わりにあるアイテムを取り出した。

ウルベルトは紅茶を飲み干してカップを下げさせた。赤い玉をアイテムボックス

「は

い

<u>.</u>

「よかったですね」

「これ、せめてものお礼です」

わせてもらいます。ところで、あの玉の保管庫をアルベドにも見せたんですか?」

「……俺には物が可哀想とか、よくわかりませんが、貰えるんですから遠慮なく使

、ルベルトは紅茶を飲む手を止めて、じっとこちらを見つめる。なんだろう。

「ええ、そうですよ。実用的でいい部屋だと言ってもらえました!」

?

「撮りましょうか。今日の記念に」

237

ドメンバーは座って、NPCたちは後ろに立っている。エイトエッジアサシンにデ

立ち上がってウルベルトの横に移動する。

アルベドとメイドも呼ぶ。私たちギル

「おお、ありがとうございます。さっそく使わせてもらいますね。一枚どうですか 写真立てだ。中身は入っておらず、形や色は様々である。

ジタルカメラを持たせて、撮ってもらった。 「ハイチーズ。……よろしいでしょうか?」

「見せてちょうだい。うん、いいと思う」

「いいんじゃないですかね?なあ、二人とも」 カメラの画面を見て、至高の存在が良く撮れているかチェックした二人は及第点

それには気づかずパインは嬉しそうに頷く。

だと判断して「よろしいかと」と答えた。

「ええ、よく撮れているわ。ありがとう」

「滅相もございません。パイン様」

「よくやった。……俺はこれから鍛治師のところに行きますのでこれで」 ウルベルトが立ち上がり、パインも立って見送る。

えてくださいね。見送りたいので」 「わざわざ寄ってくださってありがとうございました。ナザリックを出るときは教

は 「わかりました。その時になったら伝えますね。素材ありがとうございました。で

「私も知らな

Ņ の。

だからね、

見送る時がとっても楽しみなのよ!一体どん

な服

緒だ

V

え。

存じておりません」

装で冒険者になるのかしら。

気になるわ」

楽しみを後にとっておくためでしょ

る。

彼女たち

ゥ

・ルベルトが去った後。パインがソファの上座に座り、その側にアルベドが座

の前に新しく入れられた紅茶が置かれた。紅茶を一口飲む。

っそ

ñ

じ

「ねえ、

か

知 い

外に出るメンバーは知っているが、服装までは見せてもらっていない。

彼女は何

アルベド。ウルベルトさんはどんな格好で外に出かけるか知ってる?」

ってかなと思って質問したが、美しい悪魔は首を振った。

「ウルベルト様に直接お聞きにならないのは、

うか」

「そうよ。

そ

の方が面白いでしょう?」 れて過ごすというのも、楽しい

日 々を焦が

「今、まさにそれね!はあ、

239

楽しみだわ。

胸が踊るわ」

か

と思います」

ンの部屋 ・ルベルトさんの人化を拝めるなんて転移してきてよかった。どんな姿で出かけ

るの 妄想にふけっていると今度はアルベドが質問してきた。 か見てみたい

「パイン様、ウルベルト様は誰を外に連れて行くのか、ご存知ですか?」

「知っているわ。ナーベラルとアビスよ」

240

「アビスというのはたしか、パイン様が自ら創造されたNPCでしたね」 「そうよ。完璧超人始祖のなかで最も人間らしい見た目をしているし、 タンクとし

ても優秀だから推薦してお ルベドはにっこりと微笑む。 いたの。 ……ついて行きたかった?」

「いいえ。私はナザリックの内政という大役を任されておりますから。それにパイ

ば私は役目を全うしたいと思います」 ン様が以前、アルベドだからこそ安心して任せらると仰っていただきました。なら

ル ベド……。 からもよろしくね_ 今もその気持ちに変わりないわ。いつも助けてくれてありがと

アルベドはNPCには珍しく、嬉しそうに笑うと「こちらこそ末永くよろしくお

願 いします」と頭を下げた。 パインは喜んだ。原作ならば、NPCたちは礼を辞退し恐縮するだろう。

た。これならモモンガさんも肩の力を抜いて支配者を振る舞えるだろう。今ならウ だけど、変わってきている。今のアルベドのように態度が良い方向に軟化してい

ルベルトさんもいる。男同士、話し合えるならストレスもフリーになるはずだ。 「(モモンガさん、早く戻ってきてください。原作よりもきっと、楽しいことにな

りますからね)」

へつづく>

ナザリック地下大墳墓、表層。 天気は晴れ。

旅立 |ちーーー数日後には帰ってくるーーー には、良い朝だっ た。

「普通ですね。厨二病が足りないんじゃないんですか? 剣モチーフのペンダント

とかいります?」

242

「パインさんは俺をなんだと思っているんですか」

「悪魔ですよ?」

「そうですか。煽られているのかと思いましたよ」

人間のような姿をしているパインの前には、 人間が Ö た。

黒目黒髪で中肉中背の青年。背は百七十センチ後半。

顔はこの世界では普通で特

别 な部分は な

ととても質素だが、手袋やブーツ、アクセサリー類は派手な意匠が施されていた。 質 (の良いシャツにズボンを着てその上に革の胸当てを装備している。これだけだ パ

インは少し考える。

特に目を引くのが、大粒のスターガーネットがはめられたブレスレットだ。 装備品も変身効果によって外装が変更されており、現在の見た目になっている。 腰 この人こそナザリックの主人が一人、ウルベルトが変身した姿だった。 彼の装備はすべて魔法的な付与がされており、やんわりと光っている。 に剣を下げ、腕にマントを持って立っている。

体、護衛にNPCが二人ついてくるのだから、この身は安全と言えるだろう。 ルベルトは考えている。さらに肉壁となるハンゾウが一体、シャドウデーモンが二 と、毛皮から人間の肌の質感へと触感を騙せること、飲食可能などが挙げられる。 「(まあ、冒険できることを考えればこんなもの大したデメリットじゃない)」とウ 一部スキルと魔法が制限される。ステータスも大幅に下がってしまうが。

この変身効果は素晴らしく、かなり性能が良かった。触っても術が解け

ないこ

ない。

この場には主人が二名、見送りに来たアルベドと護衛のシモベたちしかい

燃え上がるは勇気の炎 トアバターに似ているからだ。 キーだと思われるだろうな。なぜなら、見た目がユグドラシルの人間種のデフォル だが、ここは異世界。なので装備品の良さから貴族辺りと勘違いされるだろう。

のル

「その装備なら貴族辺りと勘違いされるでしょうね。質が良く魔法が付与された装

タンク役のアビスマンは青い金属のフルアーマーだ。兜は目を覆うが、 へ入る扉 から出 てきたの は、変装したアビスマンとナーベラルだ。 244

備品を身につけていますから」

「そういうもんなんですね。んんっ、来たな」

与されていることがわかる。付与されている効果はこの世界の基準に合わせて大し は たことはないと、パインさんが言っていた。しかし、 イノシシを模したマスクが覆っている。 鎧は微かに光っていることから魔法が付 一瞬でメインの装備にチェン

両手 、に体の半分もあるでかい円盾を装備している。 あれで敵を殴るら まん

ジできる代物だから、いざというとき便利らしい。

ま茶釜さんの戦い方だな。本来の武器はやまいこさんやユリと同じく拳だ。盾を装

ック地下大墳墓側

アビスマン が口を開く。 普段のおどけた口調とは違い、真面目に話してい

不安になるが、

二人は

私た

ちの前で膝をつく。

服

備

したの

はパインさんの命令で、

とマントのみ装備している。この装備だけでは様々な場面において対応できないと

こちらも一瞬でメイン装備に着替えられるらしいので、安心だ。

ではない。ウルベルトよりも軽装で、魔法の付与すらしていないシャツとズボン

ナーベラルはその黒髪をポニーテールのまま結い上げている。だが普段のメイド

敵に偽の情報を掴ませる為

れ 「そうか」 お待 の挨拶を交わして参りました」 たせい たしました。 パイン様、バッファ様。ご命令通り、 親しい者たちと別

兜とマスクに隠れてわからないーーー嬉しそうだ。その表情を見て思い出すのは一 青年は支配者らしく頷く。それを見てナーベラルはーーーアビスマンの方は顔が

般メイドたちである。 「(ナーベもメイドたちのように、 物のように扱われた方が支配されてるって感じ

でいいのかしら?うーん、私はできそうにないな)」

我を通すところが、モモンガさんと違って支配者に向いていないと感じてしまう。 「では、これよりエ・ランテルに向かう。パインさん、後は頼みますね」 頼まれたとしても無理そうだ。なぜなら大事にしたいから。NPCの気持ちより

三人とシモべたちは〈飛行〉の呪文で飛び上がり、街の方へ飛んで行った。

姿が見えなくなった頃になってからナザリックの中へと戻る。歩きながら今後の

「頼まれました。気をつけていってらっしゃい」

法を書類にまとめて渡した。ぶっちゃけ原作そのままの作戦だけど上手くいくで ことについて考えていた。 「(さて、ウルベルトさんにはポーションとズーラーノーンの情報とそれらの活用

パインはアルベドたちと別れて、魔女の館へ転移した。 ょう。だからあちらは任せよう。私は集中しなきゃ!)」

二日後。

ク地下大墳墓側 そしてこちらはーーー。

捕獲してイベントを起こすタイミングを狙っていると言っていた。上手くやれば、 合い、こちらの世界のポーションを購入したり。また、ズーラーノーンをさっそく ウルベルトさんからの定期報告は平和なものだ。ンフィーレアくんと無事に知り

マッチポンプになってしまうが、冒険者ランクを一気に上げられるのでタイミング

を見計らっているのだろう。

てある。 もしかしたら風花聖典というスレイン法国の手の者が来るかもしれない事も伝え

た。風花聖典を捕まえるまでは缶詰にされると聞いてい という事をデミウルゴスに伝えたら、ウルベルトさんはナザリックに帰還となっ る。

それに対して彼は「心配してくれるのは嬉しいが忠誠が重い!」と嘆いていた。

どんまいです……今度愚痴に付き合いますので、この回は守られてください。

無事に野盗たちのアジトを見つけ出せた。

247 獲物が動き出しました』

『パイン様、

燃え上がるは勇気の炎

248

その先は

「平原だ。そして草が刈られただけの道が真っ直ぐ伸び、その上に馬車

周りは死体だらけだけどまったく気にならなかった。

セバス、

ソ

シャルティアの部下であるヴァンパイア・ブライドたちが膝をついて

IJ が

ユ

シャ

止まってい

る。

い

参りま

下位のヴァンパイアにアジトへと案内させた。

二人が頭を下げたのを見届けて、私たちとシャルティアたちは新しく部下にした

しょう。セバス、ソリュシャン貴方達の無事を祈っていますよ」

で誰も罠に

か

か

らな

かった。

やがて森が開けて、

洞窟についた。

の中の

トラップはすべてネズミたちにくらってもらい、真っ直ぐ進む。

おかげ

「(やったここだ!!!)」

「ーーーわ

か の時が来た。 りました。行きましょう」

そ

ぃ

なる高

.位のシモべたちはナザリック表層に集まり、シャルティアが作り出した

へ転

移門〉へ足を踏み入れた。

ソリュシャンの〈伝言〉を受けて、私とヘドラ、完璧超人始祖たち十名と肉壁と

は冒険者グループと漆黒聖典たち。ただし交戦は一切ぜず、あくまでも身を隠して 私 は 興奮したまま、すぐにネズミたちを再召喚し辺りへと散らせる。 見つけ るの

これで準備は整った。次は支配者としての仕事を行おう。

発見にのみ命令を下す。

「シャルティア、ここからの指揮権は貴方に移します。ここにいる者たちを捕らえ パインはシャルティアと向き合う。

てみせなさい」

「かしこまりんした。すべて蹂躙してみんす」美少女はにこりと笑い、優雅な礼をする。

「(いや、蹂躙じゃなくて捕らえて欲しいんです……)」

多少遊んでもいいと言ってあるが、これ大丈夫かな。

つしか ターにぶつか そんな私の心配を他所に、彼女は新しく配下にしたヴァンパイアに出入り口が一 ない事をたしかめると、見張りの男に投げた。凄まじい勢いで飛んだモンス った男は散った。

249 「(あらーーー

「つーすとらいく、でありんしたかね」 「すとらーいく」

美少女は続いてその辺にあった手頃な石を投げ、二人目の見張りを殺した。 なんて事だ、原作通りじゃないか。

こちらを見てきたので、頷く。シャルティアはにっこりと上機嫌だ。一方でこち

らの空気は驚きで凍っている。これをナザリックで見ているアルベドたちもきっと

驚 出 いているだろう。 を塞がずに攻撃したのはマイナス評価だ。始祖たちも「あれはマズイよな

?」といった表情を各々している。いやサイコマンがわかりやすいくらい動揺して

いて面白い

する。 私は シャルティアにヒントを与えないため、全員に顔色を変化させないよう命令

ーシャ ルティア、 あなたは自由にしていいからね」

「かしこまりんした」

ちなみに途中もネズミたちを使って落とし穴などのトラップも潰して進んでい

「はっ」

化〉をかけたサイコマンが進む。サイコマンにはシャルティアの行動を見守る役目 出入口に最も近い部屋を占拠し、それから先はシャルティアたちと〈完全不可知

もどこから持ってきたのか玉座らしき豪華な椅子が部屋奥に置かれている。 三人を見届けている内に室内が清掃されたそうで、中は綺麗になっていた。 家具

を言い渡してあるのだ。

二十回ほど練習した座り方でそっと椅子に腰掛ける。うん、ちょうどいいクッ

「ありがとう、みんな」

「どうぞ、我が君」

ションの硬さだ。 「うん、 とっても座り心地がいいわ。皆も楽にしてね」

各々が部屋の隅か廊下の方へ立つ。 私は手帳を取り出して今後の流れを思い出し

な Ň いけれど、その瞬間が来て欲しくない気持ちに傾いたりする。失敗は絶対にでき

成功させたくてたまら

彼の顔がす

ぐそばにある。 ギュ ッと手を握っていると、重ねるようにヘドラの手が乗せられた。

252

「なあに?」

「あまり抱え込み過ぎないでくれたまえ」

「わかってる。私一人じゃできない作戦だもの、 だからあなたたちを総動員させ

「そうではないよ、 ヘドラが前に移動し対面する。 我が愛しの君」

「私を見てくれ」

言わ れた通りへドラの顔を見た。いつもと変わらないつるりとした顔に、 穴が きある。 目と口

の部分に

不安があるなら、 共有させてほしい。 苦しさを分かち合えば半分になるだろう?

「……楽しさを分かち合えば二倍になる。うん、そうね」 それは、私がヘドラに教えた言葉だった。そしてその言葉には続きがある。

目を閉じて自分の不安と向き合う。これの正体は何なのか。

ばらくしてパインは目を開けた。そしてヘドラと手を繋ぐ。

ないの ぁ のね、怖いの。この作戦が上手くいかなかったらどうしようって不安でたまら

戦»といえば何を示しているのか理解してもらえる。 ドラは頷く。 彼と始祖たちにはこれから起こる事を話してある。 だから≫作

惑かけたらどうしようって。せっかくここまで準備してきたのに、失敗したらどう 「私やシャルティア、あなたたちに何かあったらどうしよう。ウルベルトさんに迷

しよう。なんて、考えたらキリがないわ」

うよ。 「完璧主義だね。私はパイン様が無事でアイテムを得られたら何の問題もないと思 NPCは死んでも金貨で蘇る。金貨だって大量得られる手段があるからね」

253 「わかってる。まずは頭である私が無事であることが大切よ。でもね、あなたたち

ナザリ

のよ

燃え上がるは勇気の炎 まう。 の事も大事な

情が湧いてしまった。できれば誰一人も怪我をさせたくない。そんな風に考えてし この世界に転移してからは命ある者同士の付き合いだ。ユグドラシルの頃よりも

パインは立ち上がりヘドラの胸の中へ。ヘドラは両腕で抱き締めた。

「……大丈夫だよ。あれだけ高レベルの魔獣たちと戦ってチーム力を高

め、

作戦を

練ったじゃないか。 「ええ、そうね。 きっと大丈夫。ちゃんと準備したもの」 私たちならやれるさ。そうだろう?」

254

そうだ。高レベルのチーム戦を想定してレベル八十後半から九十前半の魔獣たち

と戦ってきた。さすがにそこまで強くないと思いたいが、念のためだ。 装備だって

万全である。 やるだけの準備はしたわ。

ドラから離れ る頃 には不安が剥がれ落ちていた。そして心の底から柔らかく勇

「……やるだけやってみよう」

気

の

炎が燃え上が

. る。

255

そう言う彼の表情は変わらないのに、笑いかけてくれている気がした。

「その意気だよ、我が君」

前菜

ドラに励まされてからは、みんなとお喋りした。 おかげでそれぞれの表情から

強張りがなくなる。和やかな空気になった。

これなら良いパフォーマンスができそうだ。きっかけをくれたヘドラに感謝す

「礼なんて恐れ多い」

「ヘドラ、ありがとう。

調子が戻ってきたわ」

る。

普段よりも茶目っ気を含んだお辞儀をする。 私は笑った。

「まあ、ヘドラったら」

「ふふふ」

ヘドラも笑ってくれる。始祖たちも僅かに口角が上がっていた。 胸に温かい光が

降り積もるようだ。ささやかだけれど、こういう幸せも大切にしていきたい。

そのためにも、今日を乗り切らなければならない。

ク地下大墳墓側 という報告。 ンパイア・ブライドが入ってきたからだ。 「ありがとうございます」 「直答を許します。近くへ」 「パイン・ツリー様にご報告があります」 片方には結界内で監禁しておくこと、もう一方には監視を命じた。 彼女は跪き、 これで良し、と椅子に背中を預けようとして、やめた。シャルティアの配下、ヴァ 頭を垂れる。

向

!からは、人を捕らえたという報告。出入り口からは、こちらに近づく集団がいる

そのとき、ネズミたちから思念が送られてきた。アジトの隠し出口と思われる方

257 ティアに知らせ、この部屋に戻るよう伝えなさい。私たちはここで待ちましょう」 「ご報告いたします。人間どもがこちらへ近づいております」 報告ご苦労。 その件か。パインは頷いてみせた。

その件ならば、先程ネズミたちから聞いています。

あなたはシャル

ヴァンパイア・ブライドは部屋を出て行った。

「かしこまりました。すぐに行動を開始します」

情 ア・ブライド、サイコマンが戻ってきた。四人は私の前に跪く。シャルテ いるんだろう。 「お待たせいたしました。パイン様」 ⋮が強張っている。多分、 数分後、 頭上にブラッド・プールを浮かべたシャルティアと二体のヴァンパイ サイコマンや他の始祖たちがどのような報告を上げるの 一獲物……ブレインを逃してしまった失態について考えて かにもよる ィア の表

が、今回 の作戦でシャルティアの評価は下がる。 私は原作知識で知っていたから、

あまり下がっていない。やっぱりこうなったか、くらいである。

しかし、ウルベルトさんは違う。未来を知らない彼は、彼女が警戒せず、よく調

もせず行動したことに怒るだろう。がっかりするかもしれない。

が 7らな 私 が 最 初 やらせなければ、 から指揮 ;を取れば、彼女の失態はなかった。けれど、それでは成長に繋 何もできない。

心苦しいが彼女のためを思えばこそだ。ペロロンチーノさんに詫びたい気持ちに

私

は内心を表に出さず話す。

をした。

「よく戻りました。……全員無事でよかった。 何か報告があれば聞きましょう」

代表してシャルティアが声を絞り出した。

せん」 「……ご報告いたします。獲物を一匹、取り逃がしてしまいました。 申し訳ありま

「それなら問題ないわ。私のネズミたちが捕らえたから。 し かし、 シャルティアが

人間を逃したことに変わりありません。それを踏まえて、 いいですね、 シャルティア?」 ウルベルトさんに報告し

がしこまりました。ところで、女たちはいかがいたしましょうか? 」

ック地下大墳墓側

ぴたり、とパインは停止する。

そんなのいたっけ?ああ~いた、 気がする。 野盗たちの慰め者になっていた女

性たち。 それ でシャルティアも、困ってたはず。

パインは今後の計画に使えるかどうか考えて……結論を出した。

259 「生かして、 放っておきなさい」

前菜

「かしこまりまし

260

何

かしら」

あら、 理由を聞かないの?と、考えているとサイコマンが手を挙げた。

「質問 いたします。なぜ生かしておくのですか? 殺した方が、ナザリックの情報

を隠 ょ か せま った、 す 質問してくれた。じゃないと、 私の考えが合っているかどうか議論 で

きな ーその i 通 Ł ŋ̈́ 0) ね でも、今から行う作戦には目撃者、 または騒音を耳にする証言者が必

要だからよ

仕業だと言うためでしょうか?」 悪魔に冒険者を襲わせる作戦に、 証言者ですか。ふむ……その後の作戦も悪魔の

た。 せ かーい!ドンドン、パフパフ!なんて紙吹雪でも降らせたい気持ちになっ

ナザリックとは無関係の悪魔のせいにしたいの。そうすればできる事があるから 「正解 ょ。 アジト襲撃も、冒険者を襲ったことも、 漆黒聖典を倒して敵も。 すべて

、べてはゲヘナへと繋がり、 聖王国に終着するための物語 である。

ち

な みに、

ま

だゲヘナの作戦については誰にも話していない。 これが終わったらウルベルトさん

す

ね

サイコマンは満足そうに頷いた。

と話予定であ

る。

「なるほど。そういうことでしたか」

私 の意図が伝わ ってよ か っ た。

シ

ヤル

アティ

アは

「そんな意味があっ

たんでありんすね」

と驚いてい

る。

冒険者を襲 ī ま じょ くうか

令に従って外へ出て行った。 部屋の隅に待機していた憤怒の悪魔に、 合図を送る。 深く頭を下げた悪魔は、 命

十分ほどで悪魔は戻ってきた。

作戦 強負り、 姿を見せなかったレンジャーはそのまま逃した。 そして、 ブリダは気

261 絶させた後に、 アジト内の女たちがいる部屋へ放り込んだ。

さあ、本番だ。

世界級を得ろ!謎の鎧との戦闘 !!

攻撃力、ダメージ、 共に戦う始祖とヘドラ、後方で待機するシャル 防御力アップ。 ティアにバフを素早くかける。

防御無視、 ダメージカッ ١ ·無視、 回避 無効、 クリティカ ル 無効。

「では、手筈通りに」

クリティカ

ル付与、

スタン付与、

拘束付与、

呪い付与、

睡眠付与。

始祖たちが 「おう!」と拳を突き上げる。

森 の上空を飛んで一分ほど、 眼下に見えた。それは十二人の漆黒聖典 へたち。 課金

アイテムで姿を消し、 隠したパインを彼らは見つけられな い

る。 イン のマギアー必殺技ーをくらう。 地面は大きく凹み砕けた。 ンは急降下した。音を置き去りにした弾丸よりも早い動きで、 宙に浮かび上がった敵は体制を整える暇もなく、 地面 に 着地す

5

、彼岸の

渡

Ũ

舟

縛った。 二人の男女を閉じ込める。次にパインの背中のリボンが幾百に分かれて、それらを 突如、 地面から木製の棺桶が出てきた。 周囲には美しく花々が咲いて、花畑が完成する。 それらは自在に動き、あっという間 さながら、よく手入れさ に十

れ た墓地 棺桶 を縛 のようだった。 り上げて、 あたりが香りに満たされて、 中にいる人間もろとも破壊した。 花吹雪が舞った。 リボンはさ

「あら?」 そ 0 ラバラと、 地に立つのは、 花畑に様 パイン一人だけだっ 々な物が落ちる。 た。

264

する。弱って混乱しているところに、 呆気なく死なれてしまい、 困惑する。予定では、私が、 始祖最速の男、カラスマンが登場。 敵をデバフや状態異常に おばあさ

んと槍を持った男性の首を取る。 残ったメンバーで十人を殺すはずだった。

作 戦 の第 段階 で終わっちゃうなんて……。

パイン

様

カラスマンが側に降り立つ。 他の始祖たちは少し離れたところ、森と草原の境界

あたりで立ち止まっていた。 みんな困惑しているようだった。

だ。まさか、 それもそうだ。私たちは、漆黒聖典が高レベルだと考えて、今まで訓練をしたの 私のマギアで死んじゃうくらい弱いなんて思わなかった。

ので、たっちさんのような純粋で強力な火力はない。 私は、私のキャラクター構成は復活・状態異常・即死に重点がおかれている。 敵 の攻撃をすべて受けきる、 な

常を付与する攻撃だった。だから、カラスマンの攻撃を第二段階に持ってきたのに。 そんな私の必殺技であるマギアも、 一撃必殺の火力重視ではなく、 即死・状態異

タンクになりきることもできない。

ヒーラーもどきの前衛だ。

「(私のマギアで死んだって事は、 即死に抵抗できなかった。つまり、こいつらは

なんてことだ。想定された高レベルではなかったのだ。

レベル低かったんだ)」

り鋏 パインは、近くに落ちた誰かの頭を見る。そして、身の丈ほどある巨大な断ち切 の先で、 んちょんと小突い

やっぱり死んでいる。

ちょ

い ニャガニャガ。こうもあっさりと死なれては、困りますねえ。 サイコマンがふざけて不満そうに言った。今までの努力が無駄になったのだ。 ゃ ないですか」 私たちの出番 Iがな そ

世界級を得ろ!謎の鎧との戦闘!! う言いたくなる気持ちもわかる。だから咎めたりせず、良い点に目をやった。 「まあ、こちらに被害が出なくてよかったよ」

この時、 た。手早く遺体や荷物を袋に詰めて、 始祖たちには、今度新しく活躍の場を与えることにして。今日は帰ることになっ ヘドラを残らせた。 ツアーとコンタクトをとるため シャルティアが待つ野盗のアジトへ向かう。 だ。

将 敵対 てするよりも、今から同盟を組んでしまった方が良いと思うから。

「それでは、 何かあれば結界へ逃げるのよ?」

「わかっているよ。 互いの手をぎゅっと繋いで、ゆっくり離した。 パイン様も気をつけてくれたまえ」

始祖 たちの 体は巨体だが、 身軽に木々の間を駆け抜けていく。 もちろん私も、木

の根に引っかからず、 疾走した。

に 広がる。 ヤ ルティアたちと会うまでに、じわじわと、世界級を手に入れられた喜びが胸 野盗たちのアジト外に、シャルティアたちがいた。彼女と目が合うと、

「勝ったよ!」

もう、

我慢できなくてピースサインを送る。

ャルティアは淑女の礼儀を放り出さず、軽く腰を折って「おめでとうございま

す」と言った。 頰が赤く染まって、笑顔がとてつもなく眩しい。

「随分お速くに終わりんした。大した脅威ではなかったでありんすか?」

「ええ、 高 レベル ではな かっ たみたい」

そのまま話し出

「まだ作戦は遂行中だ。 すぐに荷物を運んでしまった方がいいだろう」

してしまいそうな私たちをザ・マンが

止め

たしかにその通りだ。 シャルティアに頼んで〈転移門〉 を開かせた。その中から

プレアデスたちが現れ、 世界級 が入った袋が 〈転移門〉 を通過したとき、大きな爆発音がした。

始祖たちから荷物を受け取る。

ドラが ï る方角だ。

私は再び森を駆けた。

267 その瞬間、 誰かが私の名を呼ぶ前に、

たい!」 「パイン様、一人では危険だ。 我々が行く!あなた様は後方で待機していただき

瞬

く間にカラスマンが並走する。

「できない!」

ていた。

森は

あっという間に抜けた。

経過するほど胸から不安が広がっていく。今だけは、ナザリックの王たる姿を忘れ はやくはやくはやく!たった数十秒の間がこんなにも長いなんて知らなかった。

ヘドラが後ろへ倒れこむところを見た。

「だめよ!!」

一歩、大きく飛び込んでヘドラを抱きとめる。

「っ、なぜこちらに……」

て 彼の体は明らかにダメージを負っていた。不安の煙が一気に怒りの業火へと変化 <u>ر</u> 睨みつけた空中には、四つの武器を従えた白銀の鎧が飛んでいた。あい

つがやったんだ。

らだ。

しか

視線が遮られる。

カラスマンが壁になるべく私たちの射線上に飛んだか

すぐにヘドラの傷を回復させる。

「ありがとうございます」

「いいの、いいのよ」

もう利益なんてどうでもよかった。とにかく、あいつを粉々に砕いて、ヘドラに

「黙れ」 「……仲間がいたんだな。君は、ぷれいやーか?」

やったことを思い知らせてやりたい。

ら愉快だと思った。 鎧から表情なんて見えない。でも、遠い地でツアーが、間抜けな表情をしていた

私は援軍を呼んだ。

「なんだ?」

る。

鮮

やか

な七色に発光する魔法陣から、

何

!干もの光球が現れた。 全員少女となっ

それ

らは女の

周

全体が

囲

に

降りてきた。

そして人型へと変化して、

見れないほど大きい。 い 空に、 ツア それからもっと驚 1 大きな魔法陣が描かれたからだ。 は、 突然現 れた暴言を吐く女ーおそらくぷれいやーーと、 夜の世界が昼になってしまったかのように、 いた。 それ は首をぐるりと回さないと、 辺りが照らされ 鳥人の登場

270 く女神 ぅ 助 力

て助けに来てくれる 度で 円環 の理に導かれた魔法少女のみが使えるスキル。 女神が軍勢を率

百時間 に一度発動できる、破格の性能を誇る、 私の奥の手。 まさか、こんなにも

-い時点で、使うことになるなんて思いもよらなかった。

早

ほ 数 むらや巴マミなど、 千の 光球 の内、一際目立つ光がアルティメットまどかに変化した。 私がユグドラシルで好感度を上げたNPCたちに変化する。 次々に暁美

彼女たちはツアーを一斉に攻撃し始めた。

残りの半分はパイ

約半分が変化すると、

ンを囲み、守ってくれていた。

一人は退路を塞ぎ、一人はツアーを拘束して、一人はとにかく銃を撃ちまくり……

みんな、自分の特性を最大限に活かした攻撃している。

れ死んだな。と、心の中でツアーに合掌していると、一人の魔法少女が傍に来

な い 髪は リボンが飾られている。髪をまとめているリボンと、同じ物だ。 膝丈のワンピースには細かいフリルがたくさん使われていた。 薄 :い桃色で、春を思わせる生命の喜びに満ちた輝く色。 ポニーテールに 腹部には大き して

膝下までの白い靴下を履き、ショートブーツはプラチナのように煌めいている。

か はかり整った顔立ちをしている。薄い桃色の瞳が、パインとヘドラを交互に見て

いた。やがて眉が下げられる。 私たちに援軍 を要請するから、大ごとだと思ったのに。大丈夫そうね」

271 「大ごとになる前に呼びましたから。……お久しぶりです、先輩」

先輩と呼ば

「うん、久しぶり」

れた少女は、

はにかんだ。

加 されたイベントNPCである。 彼女はユグドラシルのNPCだ。魔法少女イベント時に新キャラクターとして追

魔法少女になるには、彼女のような〝先に魔法少女となった〟NPCに出会う必

だ。

要がある。

友好度をある程度上げたら、

キュウベえを紹介してもらい、契約するの

272

私 は 彼女から、 キュウベえを紹介してもらい、魔法少女のイロハを教えてもらっ

たので先輩と呼んでい 私 の使い魔の一種は、彼女がモチーフになっている。それだけ仲が良かったのだ。

. る。

「おーい、終わったよ」

杏子ちゃんが槍を得意げに回した。

「倒したの

?

いい え、 逃げられたわ。 あれはワープ、 つまり転移で、 ね。 また襲われたら厄介

だわ」

木 ったようにマミさんが頰に手を添える。 私は頭を振った。

゙あれは人形のようなものなんです。たとえ壊しても、本体にダメージは入らない

はずです。多分……」 「なんだそれ。はっきりしないねえ」

謎に包まれている存在な

んだ。私の錆びついた記憶じゃ、あんまり役には立てない。 魔法少女たちは、役目を終えて再び光球となり、空へと帰っていった。 やれやれと首を振る。仕方がない。ツアーはまだまだ、

私たちも帰らなくてはならない。

へつづく>

報告会

様 ン . 々な術が使えるサイコマン、広範囲攻撃ができるシング、奇襲要員にハンゾウが ク役のペインに、前衛のゴールド、シルバーと、幻術使いのミラージュ。 一戦後、 カラスマンとヘドラと私を迎えに、 救出チームが来てくれ 後衛 タ に

数体も来てくれた。

残っていたメンバーが全員膝をつい 私が 彼らに守られながら私たちは野盗のアジトへ戻る。私が姿を見せると、 ヘドラを助けに行った後の指揮は、ザ・マンがとったと報告を受ける。 た。 アジトに 私 は

達成感を味わった。 荷物をナザリックに運搬してくれたらし あらかじめ決めていてよかった。 おかげで現場は大きな混乱を

は、 きちんとお礼を伝える必要がある。 考えも、 ちゃんと役立つときがあるじゃないか。 信頼に応えてくれた彼に

「ありがとう、ザ・マン。あなたに頼んでおいてよかったわ」

「もったいないお言葉です。当然のことをしたまでですから」

「そうだとしても、私はたいへん助かりました。感謝を受け取ってください」

「ははっ」

く は な ザ・マン相手に上から物を言うのは、気が引ける。しかし、彼はザ・マン本人で 彼は深く頭を下げた。 い。 ザ・マンを元に造った私の被造物なのだ。

その場 堂々と振 Ê いた全員に、勝手な行動を詫びる。 る舞うべきだ。 詳細は後日話すことを伝えて、 私た

私はナザリックの支配者らし

ちはナザリックへと帰還した。

ル ベ ナ 自分の代わりに、今日の当番のインクメントリに扉をノックさせる。すぐに、ウ ルトさん当番のメイドが出てきた。 、ザリック地下大墳墓。スイートルームがある階層の廊下。ある部屋の扉前。

アストル、パイン様がご訪問されたことを伝えてください。 緊急の要件です」

「かしこまりました。少々お待ちください」

アス アス 、トルは五分後に戻ってきた。 トルは赤毛を三つ編みにしたメイドだ。 髪は長く、

腰まであった。

「ありがとう」 「お待たせいたしました。お入りください」

276

彼女に案内されて、私はウルベルトさんの自室にはいる。彼は執務机に座ってい 普段よりもシャツとズボンというラフな格好とはいえ、 なんとも様になってい

と考えた。 いや、こんな重要な件を後回しにしたら、頭を疑われる。これで

い。身なりを整えてから訪問したほうが良かっただろうかと、

ちょっ

る。

かっこい

「こんばんは、パインさん。随分、遅い時間の訪問ですが、 何かありましたか」

っぱ い。とっても重要な件を伝えに来ました。あなたたち、これからは極秘よ。 席

を外してちょうだい」

ウルベルトさんは、極秘と聞いて、すぐさま「全員出ろ」と命令した。

メ イドたちは慣れたもので、護衛を含めて全員が退出する。 無駄のない動きにい

つも感嘆 ウルベルトが前のめりになる。 してしまう。私たちは応接用のソファに座った。

極 「秘とは、一体何事ですか」

れてしまうのでやらない。にっと笑い、ピースサインに留めた。 私はにんまりと笑い、ふふふ、と笑う。踊って報告したかったが、さすがに引か

「世界級、手に入れました!」

「マジです。やったー!!!」 「……おお!!? マジですか!」

なんと気持ちよく、どこまでも膨らんでいく。歌でも高らかに歌 「すげえ!この世界にもあるんですね!それって……やばくないですか?え、 悪魔と魔法少女はやった、やったと両手を突き上げて喜ぶ。分かち合う幸せは、 į, たい。 他

の奴らも所持している可能性が、確定しましたね。これだからリアルはクソ」 もう少し浮かれていたかったのに。 可 喜びから一転、ウルベルトさんの厄介なスイッチが入った。あー、なんてこと。 愛 山羊さんの口からクソクソなんて汚い言葉聞きたくないですわ。

しょ ? _

ゥ

ルベルトさん、落ち着いてください。たしかにヤバイです。でも対処できるで

報告会 世界級の効果は、世界級を所持するプレイヤーには効かな

278 さん。そして階層守護者には世界級を貸し出して、持たせておきませんか? そう すれば、対抗しやすくなります」

「この世界に、プレイヤーがいる事、いた事は明らかです。……私や、ウルベルト

ウルベルトさんはゆるく頭を振った。

「階層守護者にまで持たせるんですか? そこまでしないと……」

危ない、 と思います。 これを見てください」

*、*ムボ ックスから、 チャイナドレスー傾城傾国ーと古びた槍を取 り出

「今回手に入れた世界級です。そして、こっち。 これは、 世界級の傾城傾国です。

対象を精神支配します。例えアンデッドであってもです」

強のシャルティアに使われていたらと思うとゾッとします!」 「……クソ!こんなものを使われたら、俺たち危なかったですね。階層守護者、最

ゥ 原 ル 作では ベルトさんは頭を掻き回した。整えられた毛並みがぐちゃと崩れ 使 (われていました。という言葉はぐっと飲み込む。

「わかりました。パインさんの提案とおり、階層守護者たちに世界級を預けましょ

「この世界に魔王が来たことを知らしめるためです。それをアインズ・ウール・ゴ

ウンが討 ち取り、悪を退けます。私たちが人間たちと手を取り合って生きていける

279

存在であることを、アピールするためです」

「敵対組織を、作らないようにするためか。

マッチポンプとは、まるでぷにっとさ

「なぜ王都を狙うんですか?」

ヘナ作戦の下地だと、教えた。

これは

いずれ、デミウルゴスに魔王役を演じさせて、王都の人々や財産を得るゲ

う。

あいつらには決して奪われないように細心の注意を心がけさせて、

護衛もつけ

胡

座

「安心しまし

次に、悪魔

を使って冒険者チームを壊滅させたこと。

逃した獲物は、

私が捕まえましたので。特に問題はありません」

「はい、それでいきましょう。では、これらを手に入れた経緯を説明しますね」

シャルティアの能力を試すため、野党のアジトへ向かったこと。彼女は、強さに をかいている行動が目立つこと。それによって獲物を逃してしまったこと。

んみたい 「私は、 ただ真似をしているだけですよ。それが上手くいっているだけです」 な行動をしていますね」

「真似、ですか?」

「異世界転生ものの真似です。けっこう参考になりますよ?」

特に原作とかが。

は私 それから、謎の集団ー漆黒聖典ーと戦った件を報告する。 の前世の記憶にしかないので、あくまでも謎の集団と呼ぶ。 漆黒聖典である裏付け

世界級を所持していた集団ってことは、確実にプレイヤーが背後にいますよね。

そい つらから奪ったんだから、 確実に戦争になるなあ」

「すみません」

を得ましょう」

「いえ、責めたいわけではありません。まずは、殺した奴らを生き返らせて、情報

最後にツアーーこちらも謎の鎧野郎と呼ぶーと戦闘した件を報告する。 すべてを

話し終える頃、 「……なんか変だな、アンタ」 ウルベルトさんはソファに深く座った。

「え?」 まじまじと見られる。居心地が悪くてモゾモゾと動いてしまう。

「衝動的に動いた件……鎧野郎との戦闘とかが特にそうなんですが、いつものパ

IJ インさんらしい行動をしています。感情的に行動している。しかし、これまでナザ クを動かしてきた政治的手腕を考えると、いつものあなたらしくないんです

よ。ゲヘナといい、シャルティアを試す件といい。用心深く、それでいて大胆に行

::::は

動している。

まるでモモンガさんみたいにな」

わ お、するどーい。正解です。本当にモモンガさんの真似をしているんですよ。

なんて言えるはずもなく。黙る。 「異世界転生ものを読んだだけで、ここまでできるものでしょうか?」

お 前何か隠していないか、と言外に言われている。気がする。

本当のことなんて言えるわけないじゃな

用意しておいた言い訳をする。

281

「アルベドやデミウルゴス、ヘドラやパンドラに相談しました」

か

「……ああ。 納得してもらえたようだ。ナザリックの頭脳派メンバーの名前たるや、偉大なり。 なるほど。 それなら盤石ですね」

すね」 「じゃあ、 報告は終わりましたので。次は……ウルベルトさんへのマッチポンプで

「何をするんですか?」

て、アダマンタイトとは言わずとも、ミスリルぐらいにはランクか上がるでしょう」 「面倒 - 私が戦った跡地を利用して、悪魔と戦ったことにします。 な試験をパスできることは嬉しいですけど、証拠はどうやってでっち上げる 悪魔を退けた功績を得

んですか?」

けらを、 る切札として、魔封じの水晶を使ったと言う。あとで、使用後に得られ - 第八階層で実際に、憤怒の悪魔と軽く戦って装備をボロボロにする。悪魔に対す 指を折り曲げて、何をするか、声に出して考える。 お渡ししますね。それと、 戦利品として悪魔の角を提出しましょう」 る水晶の のか

「信じてもらえますかね?」

へつづく>

「先日捕まえたズーラーノーンたちに事件を起こさせて、それを解決してください」

「大丈夫ですよ。さらに事件を起こして、それを収めることができれば」

ウルベルトさんがじっと私を見つめて、続きを促す。

第八階層で、 アビスマンの鎧はあちこち凹んだり、欠けたりした。ナーベラル 憤怒の悪魔と軽く手合わせをして、装備をボロボロにする。 の服 は、 裾はボ

ブレイン・アングラウスさんの入社試験。

目は、路上暮らしをしている者たちよりも、 口 ボ これは、もう冒険者ではない。装備はこの世界基準ではそこそこだ。しかし見た 口になったり千切れたりしている。ウルベルトの服も同じ感じだ。 酷い有様になった気がする。

「よし、こんなもんだろう。 お前たち、ご苦労」

いかにも激しい戦闘を終えたあとらしい。

俺は満足した。

アビスマンの次にナーベラル、そして憤怒の悪魔が跪く。

「ははっ」

る。そこにデミウルゴスが早足で近づいてきた。いつもの余裕の笑みが崩れている 全員、至高 の存在の役に立てたことが嬉しいの か、その表情は達成感に満 ちてい

のは、気のせいじゃないだろうな。俺の今の格好が嫌なんだろう。 「ウルベルト様、お疲れ様でした。さっそくお召し替えを……」

ルゴスも一緒だ。パインは大きく目を見開く。

ヤリと笑ってから転移門へ歩く。その後ろをアビスマンとナーベラルが続いた。 い ナザリック表層に着くと、すでにシモベたちとパインさんが待っていた。デミウ 本気なのだが。 ゆうし。 見事 にボロボロになりましたね!」 コイツらにとっては主人を待たせるなど、論外らしい。

からな」

「かしこまりました。お見送りさせていただいてもよろし

·いでしょうか?」

曖昧にニ

いや、このままエ・ランテルへ行く。もう夜明けが近い。門が開く前に着きたい

「許す。俺たちはゆっくり進むから、あまり急がなくてもいいぞ?」

「ご冗談を」

奇 声 ĺは 何か の真似だろう。たまにやるんだよな。

リ 炎 アル でボ ロ でし ボ 口になったマントを広げる。少し強目に引っ張ったら千切れそうだ。 ?

285 「それなら怪しまれませんね!やり過ぎ、ではないですよね。

夜を昼間にしてし

まう ゙ほどの事件があったんだし……。そうだ、これをお渡ししますね」

スさんの入社試験。 のかけらとポーション各種、悪魔のツノだ。 昨 パインはユリに指示をして、俺にアイテムを渡す。数時間前に言っていた、水晶 一夜、パインさんと作戦を練る内に、ポーションをあった方がいいだろうとい

減っ う結論になった。夜に世界最悪の悪魔と戦って、朝には街に戻るのだ。 た気力は、ポーションで治した事にした。 怪我やすり

「ありがとうございます。これを今日の夜に使えば 怒涛 !の一日になると思いますが、頑張ってくださいね」 い いんですね」

「それと、

第八位階を封じた魔封じの水晶です。

どうぞ」

「俺よりパインさんが大変でしょ。昨日から続いて動き回っているんだから」

286

ウルベルトは三人に〈飛行〉の魔法をかける。

落 「アドレナリンが出まくっているので、あまり疲れは感じませんね。まあ、ひと段 したらゆっくりしますので」

今日 姿を人間に変えて、大空へ飛ぶ。三人が豆粒ほど小さくなってから、 は お 互 いに辛抱ですね。 それじゃ、行ってきます。 行くぞ」

留守組は家

ナザリック地下大墳墓、第六階層。

として、彼は最高 と肉壁数体を引き連れてきた。ここでブレインの勧誘を行うのだ。人間のサンプル 円形闘技場。デミウルゴスとコキュートス、アウラ、ユリ、パイン当番のメイド の素材だ。ぜひ引き入れたいと思う。 シャドウデーモンを影に残

ブレインの警戒を和らげるために、今は魔法少女の姿でいる。

ーは貴賓席に移ってもらっ

た。

他のメンバ

「さてさて、夜までは時間があるからね。やっちゃいましょうか。ネズミたちよ、

五メートル先に結界の門が現れ、そこからネズミたちが溢れる。そして一人の人

獲物を連れてきなさい」

ク地下大墳墓側 間を置いて戻っていった。 「うう、ここは?あんたは?」

287 「我が名はパイン・ツリー。 四 つん這いになるブレインの体調は、 ブレイン・アングラウス、剣を構えなさい」 悪そうだ。それらは無視 うする。

と。

前は? あそこ……あそこにいる化け物たちは……」

いたようで刀を構えた。うん。全然怖くない。死なないように気をつけてあげない んだろうな」ぐらい苛立ちだ。だが、レベル差があるブレインにとっては、 ブレインが立ち向かえる程度の殺気を当てる。守護者たちならば「機嫌が悪 よく効

すくていいでしょう?」 「良し。 では、始めます。 勝利条件は相手を「参った」と言わせること。 わかりや

結果は、三勝。私の勝ちだ。 私は一歩大きく踏み込んだ。 目前にブレインの顔があった。

「ほい、くるりんぱ」

「うご!」

288

た。 ブレインの足をすくい、グルンと一回転させる。どさりと、背中から地面に落ち また首に断ち切り鋏を当てて、促す。 ブレインはうんざりした様子で言葉にす

る。

「まいった」 「よろしい。 立ちなさい」

いる。それでも警戒を解いてはいない。私は断ち切り鋏を持ち上げて、抱えた。 首から鋏をどける。男は緩慢な動きで立ち上がった。いかにも不機嫌な顔をして

「は? わかり合う? 俺を痛めつけているだけじゃないのか」

「そろそろ、分かり合えたかしら?」

「違う。よく言うじゃないか。戦えば、自ずと相手のことがわかると。 私のことが

ブレインは間抜けな顔をした。

理解できたでしょう?」

「戦ってないだろ……。加虐心の持ち主って事しかわからないな」

「あら、誰しも加虐心は持っていると思うけど。うーむ、ダメか」

ありゃ。私の殺さない優しさを理解してもらったところを、勧誘しようと思った

がダメらしい。うーん、どうしようかな? 「なあ、 アンタはどうしてそんなに強いんだ? その装備のおかげだけじゃないよ

289

な

バー以外にいないからね。いや、円環の理のみんなも、 こん なに気楽に話しかけてくる人は珍しい。 もうウルベルトさんやギル 気楽に喋ってくれる。 ド

私 に ン

とっては珍し 貴賓席から若干殺気が漏れているので、手で止める。 い事態じゃない か。 青くなっていたブレイン 0)

顔色が戻

つった。

強くなるための修行を積んだからよ。

あなたも強くなりたい

「……人間のまま、 ちょっと噴き出 してしまっ なれ た。 るなら」 なぜ異形種に変えられると思ったんだ。 変な の。

290 としてコキュートスをつけてあげます」 コ 「ええ、 キュート できるわよ。どう?ナ ・ス?」 、ザリックの軍門に下らない ? そうすれば、 先生役

「武器 の専門家で、武士……こちらの地方で言う戦士よ。 コキュートス!」

「 ハ ッ

!

ろへと下がる。 コ キ ユ 1 ŀ ż ナザリックじゃ貴重な、 は貴賓席から飛び降り、 私の後ろに立った。 カルマ値中立なんだから怖がらなくていい ブレ インは二、 三歩後 を誓えばいい

のか?」

から安心しなさい。それで、どうするの? 彼は私と同じレベルだから、強さとし 彼がコキュートスよ。第五階層守護者、つまり幹部の一人。性格は穏やかな方だ

0)

にね

ては申し分ないけど?」

「王の帰還」「最後に一つ。アンタらの目標は?」

モモンガさんの帰還が第一である。その後のことは、モモンガさんが帰ってきて

『「王の帰還 ?あんたは違うのか?」から決める。

「わかった。えーと、なざりっくに入る。これからアンタに、いや。あなたに忠誠 「私は王の一人よ。そこら辺の説明は、コキュートスから聞いてちょうだい」

いいえ。 王たちに、四十二の王に誓いなさい」

ブレインは土埃がついた頭をかく。「それも、コキュートス……さんから聞くよ」「しょう」

〈つづく〉

まずはお風呂に入れてあげようかな。

僅かな時間差から、二つの事件が無関係だとは考えられない。 組合長、プルトン・アインザックは頭を抱えていた。 悪魔 の存在。ここから離れた場所の上空が、真昼 生き延び のように光 一体、この王 た冒険 っ た 者

近くを歩 テ オ 組合 誰 ₹ ・ラケシ か の中でも広い部屋、そこにアインザック、都市長パナソレイ、 い れ でも暗 て Ņ ル、 るかも Ü 他三名のミスリル 表情をしている。 しれ な いのだ。 それもそのはずだ。 級冒険者が座ってい これでは冷静でい られ た。 国を滅ぼすほ ない。 無駄だとわ 魔術師組合長 強 い 悪魔が、 か つ

てい をまとめていた男だ。 をまとめ ても対策 Ć Ū を練る必要がある。 る男が表れ その手腕を買われ、今は冒険者組合の受付チームをまとめて た。 男は白髪で、 話し合い . が 一 体格は、 段落 よい。 してお茶 前 を頼 職 は冒険者で、 んだとき、 受付業 チーム

293

いる。

ナザリ

ック地下大墳墓側

国

の

地

で何が起こったのか。

「都市長。三人組の冒険者チームが、昨日の事件は〝自分たちが関係している〟と

報告は驚くべきもの

言ってきたそうです」 「なんだって。ランクは? 一体どこの誰がそんな事を言っている」

294 持っている装備品は一級品で、 「最近、 冒険者になったばかりのチームで、まだ依頼はこなしていません。し 仲間の魔法詠唱者は第三位階の魔法が操れるとか」 ゕ

ぷひーと鼻息が鳴る。

「間違いなく」

「強いな」

「しかしなあ、どこまで信用できる人物か。どうする?話を聞いてみるかね」

賛成。一名が反対した。そこにアインザックが、情報を追加する。

都市長パナソレイは全員の顔を見る。アインザックとラケシルと二名の冒険者が

彼らは、 なんでも悪魔と戦った証拠を持っているととのことだ」

それなら話を聞くしかあるまい。呼んできてくれるかね」

「うーむ。

ク地下大墳墓側

ナザリ

かか

しこまりました。

おい、

呼んできてくれ」

「承知しまし

な 男たちが のだろう。 ル ベルトはアビスたちと別れて、組合のある部屋に通された。中には計六名の :座っている。全員ちょっと疲れが見えていた。ここで長い時間、 ウルベルトは思った。 持ってきた情報によっては、さらに長い時間 缶詰状態 篭

っわ 「座ってくれ かりまし たまえ」

ることになるだろうな、

ح

言わ 加えて約一名から鼻で笑われてしまった。多分、服装を笑ったのだろう。こう れた通りあいている席に座る。全員からジロジロと見られて居心地が悪かっ

いう場所で、感情を隠さないタイプには内心イラついた。 精悍で壮年の男が立ち上がる。 歴戦の戦士といった感じの雰囲気をまとってい

る。 「ようこそ。 私はこの街の冒険者組合長のプルトン・アインザックだ。 こちらの方

295

表者イグヴァルジ君、天狼の代表者ベロテ君、虹の代表者モックナック君だ」 テオ・ラケシル。そしてエ・ランテルが誇る冒険者チーム。 右からクラルグラの代

0

魔法詠唱者です」

296 ゙゙まだ決めかねています」

゙そうだったか。さて……君は、昨夜の事件に関係しているらしいな。

証拠を見せ

「ん?チーム名はないのかね?」

てくれん か

「こちらです」

その中から、成人男性の腕三本分の大きさの、捻れた悪魔の角を取り出した。そし 都 i市長が促したので、ウルベルトは、ベルトに下げている袋を机の上に置いた。

悪魔 の角を見て都市長が「ひっ」と声を上げた。 無礼な態度の男もビビっている。

て砕けた魔封じの水晶のかけらを並べる。

い 気味だ。

「こ、これが君のいう証拠かね。 なんとおぞましい」

恐ろし

い物

ック地下大墳墓側

?

297 ずですよね 「そのとおりです。 「……わかりません。ですが、かなりの高位の魔法です。それは皆さんご存知のは モックナックがうなる。 部 0

地

域

の夜を、昼にしてしま

ったあの魔法

. か.....」

順序だてて説明いたしましょう」

追

い詰

められた俺たちは、

国宝であった魔封じの水晶を使いました。そして、夜

ルベルトは、パインと昨夜考えた設定を、 彼らに話す。

悪魔を探して旅に出たこと。

昨夜、 悪魔を発見してあの場所へ行ったこと。

会敵して、 激しい戦闘になったこと。

ラ 、ケシルが身を乗り出して続きを乞う。 それで!どんな効果がだったんだ!」

空が真昼になったのです」

「……空から女神たちが降りてきました。彼女たちはそれぞれ少女の姿になると、

斉に悪魔を攻撃したのです。形勢は逆転し悪魔は追い詰められ、そして、逃げて

行きました」

今度は都市長とアインザックが身を乗り出した。

悪魔 ゙゚ど、どちら が逃げただって ?! 討伐できなかったのか の方角に逃げたの かね」

ウルベルトは申し訳なさそうに、 ゆるく頭をふる。 1)

市

長がそれを聞いて慌てた。

飲

袋から、

ユグドラシル産の低位の各種ポーションを取り出す。

わ

か

りません。奴は転移しましたから。

それから俺たちは、この、

ポーシ

ョンを

「み満身創痍から全快したのです」

「はい。

とあ

る遺跡から発掘しました。いつくらい昔の物かはわかりません」

「これらも君たちが見つけた宝か?」

「今はしが

ない冒険者ですよ。それ以上は詮索しないでいただけると有難いですね」

冒険者のルールでもある。だが今は時期

個人の過去を詮索しないのは、

「バッファくん、君は一体何者なんだね

都市長がまじまじとウルベルトを見つめる。

がなあ」

つもりで」 ゙もし詮索された場合は、俺たちチームはここを離れるつもりでいますので。その

次回の戦闘には君たちが必要だろう」

んたちとなる。

それ

は困る。

君たちの話が本当なら、

あの悪魔に最も詳しいのはバッファく

299

んよ」 その言葉にイグヴァルジが嗤った。

「おい、やめないか」 「はっ! こんな銅ランクの力なんて如何程のものか。 すぐにアインザックが注意するものの、本人の態度からしてあまり効果はなさそ

わかったもんじゃありませ

「とにかく。当分の間、 悪魔は身を隠していると思うかね?」 うだ。

「ううむ、祈るほかない か

「おそらくは。

しかし、

必要に駆られれば出てくるでしょうね」

「それすらも、怪しいものです」

「おい、いい加減にしろ!」

にしてしまう方が 「だってそうでしょう。彼はまだ信用が足りていません。その彼らの言葉を鵜呑み おかしいでしょう」

かに、そうですね」

バッファは頷く。ここで全面的に信頼されていたら、それこそ気味が悪い。

体

何の 「俺が話した内容はすべて真実です。ですが、証明しようがないことも、また真実。 |根拠があるのかと、問いたい気分になる。

どのように判断されるかは、皆さんにお任せします」

そして話し合いは終わった。

しないだろうと予感していた。 組合長たちがバッファをどのように判断するかは不明だが、悪い方向に転がりは

後は宿に戻って、合図が来るまで休むまでだ。

予備の装備に着替え終わり、宿で仮眠を取っていた頃。〈伝言〉がきた。

『ーーもしもし、ウルベルトさん?ンフィーレア攫いましたので、動いてくださー

? 「了解でーす」

さあ、仕事だ。

へつづく>

新たなる英雄たち 新たなる英雄たち

急いでバレアレのポーション屋へ向かい、 中に入る。

「こんばんは。 誰かいるか?」

302

が ない。 店 の奥からリイジーが出てきた。老婆はまだ孫のことを知らないようだ。しょう 気づかせてやるか。

今日は何をお探しで?」

「……ンフィーレア、お客さんだよ!……おかしいね。

便所かね?いらっしゃい、

「冒険に使えるポーションを見繕ってもらいたい。それと、ンフィーレアさんはい

るか?この角を鑑定して欲しいんです」

トリと、 悪魔の角をカウンターに出す。 リイジーがひっと息を飲んだ。

「なんじゃ、この禍々しいアイテムは?」

「ああ、おるよ。それにしても、アイテムの鑑定ぐらいなら儂でもできるが?」 ¯戦利品です。それで、ンフィーレアさんはいらっしゃいますか? 」

もらうつもりです。何でも使用できる異能持ちのンフィーレアさんが適任でしょう 「鑑定したアイテムの、より詳細を知ることができるマジックアイテムを使用して 「そうだったか。よし、 ンフィー、ンフィー。と声をかけながら老婆は奥へ戻っていった。 ちょっと待っておれ」

たしか、パインさんが「必ず叫び声上げさせるので、ウルベルトさんは助けに

行ってあげてくださいね」と言っていた。どうなることやら。 数分後。店の奥から叫び声が上がった。 俺たちはすぐに駆け つける。

れていた。その奥に何かうごめいている。 「ああああー!!!」 言葉にならない叫び声が、また上がる。右へ曲がるとリイジーが腰を抜かして倒

「はっ」 アビスマンが加速し、 守ってやれ」

303

リイジーを捕まえて後ろへ引っ張り、

自らは前に出て何か

304

を攻撃し始めた。鈍い音が辺りに響く。 「一体どうした!!」

「ゾンビです!数は4体!すぐ倒します」 そのくらいならアビス一人でも大丈夫だろう。俺はリイジーに駆け寄った。

「だ、大丈夫じゃ。しかし……部屋が荒らされておった。ンフィーレアもおらん」 老婆の腕を優しく掴み、ゆっくり立たせてやる。リイジーは短くお礼を言った。

「すまんのう。 ンフィーレアはさっきまでおったんじゃが、 一体どこに」

「誘拐、 じゃ ないのか」

「どこにそんな根拠がある?」

いること。……誘拐犯が攫って、その内の仲間がゾンビを放っていったと考えられ 「突然いなくなったこと、荒らされた形跡があり、ゾンビがなぜかあなた方の家に

ると思ってな。 「冒険者に、俺たちに依頼する気はないか?」 「そ、そんな……!儂は、儂はどうすればいいんじゃ」 ンフィーレアさんの異能はレアだろ? いくらでも使い道がある」

と思うぞ?」 「そうだ。俺たちは、この街で始めてのアダマンタイト級になるチームだ。適任だ

「お主たちに?」

「あの角は戦利品だと言ったね。本当か?」

「真実だ。俺の魂に誓う」

「……わかった!汝らを雇おう!必ずンフィーレアを救ってくれ! 報酬は望むも

のすべてを与える」

「なんじゃと?」 「では、すべてを」

「すべて、と言ったんだ。それでもいいんだな?」

「……お主、悪魔か?」

「そんなこと、今大事か?」

「そうじゃな……わかった! よろしく頼むぞ」

契約成立だな。よし、 部屋を一室貸してくれ」

「何をするんじゃ」

ただ、ンフィーレアを探すのに必要なことだな」

『もしもし、パインさん?上手くいきましたよ』

306 りが始められます」 『そうですね。上手く事が進んでよかった。では、適当な時間になったらそちらに 「わー、よかった!これでバレアレ一族がゲットできます!新しいポーション作

向

いますので。その時にまた連絡します』

はか

い。

お待ちしてまーす」

プツンと〈伝言〉の糸が切れる。これでまた暇になっちゃったなあ。 私はプレアデスたちと護衛、パンドラズ・アクターを引き連れて墓地にいた。こ

番好きな テーブルなどを持ち込んでティータイム中である。オレンジの香りに癒される。 こは墓地の中でも最奥、霊廟の隠し階段を降りた先にある場所だ。そこに椅子や のは、コーヒーにミルクと砂糖を入れた甘い飲み物だけど。 紅茶も好きな

んだよね。さっぱりしていて、香りが良くて好きだなあ。

る。 「ありがとうございます。 いい 「少し 優雅 ょ。 お話 にお辞儀をする、モモンガさんの息子さんは静かにカッコよくポーズを決め 何 しいたしませんか?」 か用かしら?」 実は、上にいる者達のことですが。いかがいたしましょ

見張りをしている。 ラが近づいてきた。

クレマンティーヌはその護衛だ。周りには私の使い魔ーネズミたちとセンパイーが

まだかなー?まだかなー?とリズムを刻んでいると、パンド

ただ今、墓地ではカジットと彼の高弟たちにアンデッドを増やしてもらっている。

? 塊も残さないよう念入りにね。じゃないと、戦いましたって証言できないじゃない 「ああカジットたちとクレマンティーヌのこと?ウルベルトさん達が殺します。

肉

307

「なるほど。

それならば死体を残した方がよろしいのではありませんか

?

蘇生できないようにするために、

死体

「ナザリックのこと喋られたら面倒だから。

308

しい。

新たなる英雄たち は残 「うふふ、ありがとう」

ょ 合なな いお考えですね。さすがは至高の御方でございまァすっ!」 のよ

大したことではないのに、 あんまり持ち上げられるものだから、ちょっと恥ずか

こと、先日見た映画の話しとか。ユリたちは姉妹の話が多い。それから、 は日常的なものだ。私で言うとヘドラに関する話題が多くなる。夫が話してくれた ら、進 なが につれて仕事の少なさが浮き彫りになった。 だ。そこからは 久 5 、々のパンドラ節に笑顔になる。朗らかな雰囲気になったからか、ユリ達も笑顔 め 進 ている研究がどうなっているか、と仕事の面のみである。 め T Ū . ۲ ユリたちも交えてお 話題は主に最近のナザリックについてだ。報告では異常 いしゃべ りだ。 私ができるだけ、全員に話 今話して 話が進む を振 な る しゃ ŋ

仕事をコ (原作 :か特典 キ ュ ートスたちの部下にとられちゃって、今は待機状態なんだよね。 小説だったか忘れちゃったけれど。 たしか第十・第九階層 の警備 それ 0)

で憂いていたはず)」

した。今こそあの話をするときだと。

私は

5仕事ができないことをどこか恥じている様子のプレアデスたちを見て、決心

「ねえ、もし仕事が欲しいなら。ファッション誌、作ってみない?」

「ファッション誌、でございますか?」 私は能力のせいで着替えができないけど、ウルベルトさんは違うじゃない

ス 後に雑誌として配布するの。それから、一週間以内に投票期限を設けて、 かしら?」 が 一番だったのか決めるのよ。 のメイドたちが毎日頑張っていると聞くわ。それらを写真に収めて四十一日 一番の人には、何かしら贈れたらいいわ ね。 誰 の セン

ば喜ぶことでしょう。感謝いたします。パイン様」 「とてもよいお考えだと思います。一般メイドたちも自分たちの仕事が、 形に残れ

「よかった。では、具体的にどうするか話し合いましょうか」

な気もするが、撮影するメンバーについて意見を出してくれたりした。 女性が多い ためか、おしゃべりがさらに盛り上がる。若干パンドラが押され ありがたい

309

な〜。

私は右手を

310 ださい っわ 『ウルベルトです。今そちらに向かっています。あと十五分をすれば到着します』 かりました。では、お出迎えの準備しておきますので、存分に暴れちゃってく ね

「失礼します」『了解です。~

それでは』

てちょうだい」と仕事をほる。ユリが、エントマに行くよう命令した。多分、あの プツンと糸が !切れた。私は「誰か、アンデッドたちを放つように、上へ伝えてき

子が一番仕事が少ないのだろう。姉妹に平等に仕事を分けるユリは偉いな。エント

マは頭を下げると、階段へ向かった。

どを召喚してください。 「それとパンドラは、モモンガさんの姿に変身して。低位のモンスター、レイスな ウルベルトさんたち以外の冒険者が来るのを防ぐのです。

冒険者は殺してもいいですが、衛兵は殺してはなりません。ウルベルトさんたちの

「かしこまりました。直ちに行動を開始いたします」

勇姿

の目撃者になりますから」

ルベルトさんが頑張るだけだ。 パンドラも階段を上っていく。これで、こちらでやれる事は終わった。 あとはウ

衛兵たちを逃してやり、上空から襲ってきたレイスをファイヤーボールで迎え撃 モンスターは叫び声を上げる暇なく燃え尽きた。

内側、スケルトンの群れの中へ飛び降り、盾で四方を押し潰す。スケルトンはバラ アビスが鬨 の声を上げる。門の横、塔を駆けて最上段に到達する。そこから門の

うお

お

お お

お!!!」

バラに砕け散った。

三人は墓地の奥へ急 アビスは猪のごとく直進した。ウルベルトとナーベラルは〈飛行〉で空を飛び、 が 見えなくなったあたりで、 心いだ。 アビスはマジックアイテムを使い、

311 デ ゚ッド から隠した。それまでアビスを追っていたアンデッドたちはだらりと腕を下

自身をアン

門

たな。

312 よし。 墓地、 ナーベラルは、 行くか」 霊廟 前。 剣と鞘を紐でキツく結ぶどそれをブンッと振ってみせる。

「そうやって命乞いしてきた奴、今まで助けてやったことあンのか?ねえよな。

な

「何でも、

何でもしますから!ころさないで!」

けてやった。 ら死ね」 弾ける音が聞こえて、そちらに目を向ける。 クレマンティーヌをファイヤーボールで焦がす。喚き声も何もかもくどくて、そ 周 .囲に防音の魔法をかけてやる。 転げ回れないようにイバラで地面に縛り付 ちょうどアビスが自身の盾でカジッ

ク地下大墳墓側

ね

終わったのなら、片付けしまおう。 「いや、 「コイツらの過去に興味がないだけです。苦しめた方が良かったですかい?」 俺 ナーベラルの方もカタがついたらしい。 死体も残らないほど燃やしてしまおうか」 いい 肉が焦げる匂いが充満していた。

すべて

トの

頭を叩いたところだった。あれじゃ即死だろう。

「優しいな。

苦しませないなんて」

盾を振り、

血を払う。アビスは肩を下げた。

はスキルと魔法で強化したファイヤーボールを、 敵全員に打ち込んだ。 死体は

すべて燃えて、灰となり夜風に流れていった。 「お疲れ様でした。ウルベルトさん。これでアダマンタイト級に一歩近づきました その場に似つかわしくない拍手が起こる。

霊 廟 か らパ インさんと、プレアデス、モモンガさんの姿をしたパンドラズ・アク

313 シモベたちが出てきた。 彼女たちはゆっくりと段差を降りてくる。

ター、

314 「持てる力をすべて使うことは、悪いことじゃありませんよ。さあ、最後にこれ、

破壊しちゃってください」 1 レアに装備された蜘蛛の巣に似たサークレットー叡者の額冠ーに手を伸

「では、〈上級道具破壊〉」

ばす。

ユ リが抱えてくれる。うんうんと、パインが頷く。 弾け飛ぶアイテムはキラキラと光を反射して美麗だった。倒れるンフィーレアは

「これでおしまい !どれだけ階級が上がるか楽しみですねえ」

の証言から、冒険者組合は彼らの大きな二つの功績を認め、オリハルコン級にした。 かくして、 アンデッド事件は、バッファたちのお陰で一晩で解決に至った。 衛兵

いくつもの高難易度のクエストをたった数日でこなしてしまうからだ。

人によってはアダマンタイト級と噂されている。

しかし、そうなる日も遠くない。

バッファたちはやがて、チーム『青』と呼ばれはじめる。

「ええ、いい宣伝になってますよ」

「アビスの青い鎧目立ちますもんねえ」

へつづく>

大仕事を終えたナザリック

存在を急かす存在など、同等の存在以外にいないのだ。その彼は今、傍らを共に歩 これ がラストだ。気を引き締めて、背筋を伸ばし、急がず歩く。この地 に至高

プランを練っていた。大した内容ではないが、喋っていないと身がもたないのだ。 いてくれている。 私たちはなるべく第九階層から第十階層をゆっくり歩き、〈伝言〉を使って今後の

そして、玉座の間へ入った。

頭 い二人からすれば充分圧倒的だっ を垂 中 に れ は階層守護者、 ていた。 ゆえに数はそれほど多くない。しかし、人に頭を下げられ慣れな 始祖たちを含め、今回の作戦に参加したNPCたちが跪 た。

く。もう足元がふわふわと地に足がついていないような感覚で、緊張しまくってい 赤 い上質なカーペットの上を誰にも急かされず、アルベドに引き連れられて、 步

ク地下大墳墓側 定位置ではなく、 つまりアルベドがいつもいる側に、ウルベルトさんは左側に立つ。 『心臓が破裂しそうです。ミスしたらフォローしあいましょう』 「面をあげよ」 パインは息を深く吸い込み、二十回は練習した言葉を発する。 なんて話していたら、階段を登り切ってしまった。予定通り、私は玉座の右側…… で内心がバレてはいけないので、今回も身代わりの姿でい 階段下、守護者たちに並んで跪く。

当のアルベドは

しょう。心より感謝します。 「皆、よく集まってくれました。今回の作戦は皆がいなくては成功しなかったで ありがとう」

NPCたちの顔が一斉に上がった。

317 る。 両手を合わせて、とっても助かったんですよ、という感謝を表現したポーズをと NPCたちの頰が染まり、 場が若干興奮する。代表者としてアルベドが言う。

大仕事を終えたナザリ た言葉が、やっと浸透してきたらしい。努力の甲斐あって、遠慮し過ぎる姿勢をや その場にいたシモベたちが一斉に頭を下げた。 転移する前から繰り返し言ってい

有り難く頂戴いたします」

めさせられそうだ。やったね。

318 す。 はアルベドか では、 次に移りましょう。 ら聞いてください。 漆黒聖典に関する作戦内容について、何があっ 図書館にも報告書としてまとめられているから、 たか

「受け取ってもらえて嬉しいわ。それでこそ、褒美を与えがいがあるというもので

は、 全員 ちょっと不真面目だっ 〈の顔を見渡して、 しっかり聞いている態度に感動する。 自分が社会人のとき た。 仕事に関する内容以外の連絡は、こんなに真面目に

そちらを閲覧しても構いませ

ん

聞 か なかったのだ。うん、みんな凄い。すごいよ。

気を取り直 して続ける。

「はっ!」

「まず、

シャルティア」

「今回のあなたの行動についてですが、 いくつか問題点がありました」

失敗を次に活か

319

「ヘドラ!」

ク地下大墳墓側 わ うちに青ざめていく様子に気づいて、両隣であるアルベドとコキュート アに直接手渡した。彼女は素早く元の位置に戻り、じっと紙を見つめる。 ヤ ている、 ル ティア! ように見えた。今回は良い点が少なかったから仕方ない。

次回頑張れ

-スが みる

そわそ みる ティ

「かれているのか知らない。

が書

は

い

は違い、 ヘドラにも紙を渡す。 この紙には、ウルベルトさんからの総合評価が書かれている。 彼には感謝しっぱなしだが、それは私の視点だ。 具体的に何 他の者と

320 る。ううん、 元 の位置に戻って、紙を見る彼の様子を窺う。 ドッペルゲンガーだとやっぱり表情わかりづらいよ! もっと目とか なにか反省している……気がす

次に、完璧超人始祖たち。 あなたたちについても同様にまとめました。 代表して

「はっ。 かしこまりました」

ザ・マン、

取りに来てください」

口元とか動いてくれ!

アイテムボックスから、 Aサイズの紙がすっぽり入る茶封筒を取り出す。それ

を手渡した。

「後で始祖たちに配ってあげなさい」

。
ご命令通りに」

ザ・マンが元の位置に戻る。

他

シモベたちに関してはパインさんから報告を受けたが。

特に問題なく、

命令

マンに注目せず真っ直ぐ前を見て

いる。

張るナーベラル。

その様子に姉妹たちの眉が下がる。

アビスマンは表情を変えず一

つ頷

Ó · て、

紙

を丁寧に巻いた。

他の始祖たちは、

た。元

の位置

に戻り、二人とも紙を見る。

視線

が上から下へ移動してい

· き、

顔

が 強

あまり良い内容ではなさそう

男女の

声

、が重なる。

まず先に呼ばれたナーベラルが、次にアビスマンが受け取

スマン、 「はっ」

取りに来

「ここからは

俺

が取り仕切る。

次はアンデッド事件に関してだ。ナーベラル、アビ

パ

インが半

・歩下がり、

ウルベルトが半歩前

に出

あまりアビス

りに動いていたので紙は用意していない。みんな、よくやってくれた」

感 (嘆の声が上がる。一番後ろにいるハンゾウたちや肉壁として参加して たシモ

ほっと息をついていた。プレアデスたちも嬉しそうだが、目

が

貰

え ーベラ

るな

321 5 ル 0 紙 あの紙でも E 釘 付 けだ。 いいのか? なんでも欲しがる姿は可愛らしい。 Ł Ū かして欲しい 0 かな?うーん。 至高 の存在 できれば仕事を成 か 6

ナザリッ ク地下大墳墓側

たちが、

「さて、俺から言うことは終わったな。パインさん、最後に何かあるか?」

なさい。以後、気をつけます」 「そうですね。では、一つ。途中、護衛をつけず、行動したことについて。ごめん

そして軽くお辞儀をする。

322 ば。幸いでございます」 「謝罪は不要でございます。 アルベドが首を振った。 ただ、今後我らに御身をお守りする機会を頂戴できれ

「ええ。皆……ここにいない者たちを含めて、我が身を頼みましたよ」

みんながにっこりと笑う。以上で、解散となった。

報告があるまで、のんびり待ってよ~! まずは、カルネ村に行ってエンリちゃん さて! でっかいお仕事も終わったし、ザイトルクワエとリザードマンについて

たちの様子を見に行こうっと!

は晴天だ。雲一つ見つからない。 爽やかな風が髪を撫でる。風が森の香りを運んでは、私の鼻をくすぐった。今日 村には笑いが溢れている。平和だった。そこにル

プスレギナさんが現れるまでは……。 「こんちは!エンちゃん」

「ひゃあ!ルプスレギナさん、こんにちは」

やっぱり突然現れた、この村の恩人ルプスレギナさんは、にししと歯を見せて

「今日は仕事 で来たっすよ」 笑っている。

「お仕事ですか?」

「そうっすよ」

を、手で止めた。大きな声を出したが、大したことではなかったのだ。ルプスレギ 村のど真ん中。遠目からジュゲムさんたちが気づいて、こちらに来ようとするの

ナさんは 頭の後ろで組んだ両手を下ろす。そして美しいお辞儀をした。

しょう、 「パイン・ツリー様より言伝です。もうすぐそちらに行きます。久しぶりに会いま とのことです」

「え……えええええ!??」

今度こそジュゲムたちがエンリの元に集合した。

暗闇 使って、 時間後。 からパイン・ツリーが出てきた。 線のように細い体に変身している。 村から約一キロ離れた場所に、 魔法少女の姿ではない。身代わりの 顔には、エンリたちとはじめて出会っ 〈転移門〉が出現する。先が見えな ス キ ル を

たときに付けていた仮面をしている。 続いて魔女の館に勤めるメイドのドミル、護衛の隠密を得意とするシモベ、アウ

ラとその魔獣たちも現れる。 り返って、号令をか ?ける。 最後はアンデッドの馬に引かせた馬車だ。パインが振

「では、それ 大きな巻物を背負ったアウラが頭を下げる。 ぞれの持ち場につきなさい。 アウラ、 周囲の警戒を頼みましたよ」

アイ ンラ ド り巡らせている。 パインはドミルと馬車に乗り込み、シモベたちと村へ向かった。 パインは頷く。 アウラの守りがあれば安心だった。一応、使い魔たちを周辺に張 アウラたちと協力すれば、 盤石だ。

326

村にはすぐに到着した。

村には立派な木製の壁が築かれていた。アニメと同じ物

たちが集まっていた。全員集合しているのか? そんなかしこまった訪問じゃない そ 車 んだけど。私は命の恩人で、立場が上ー例えば貴族とかーと思わ いでくれるだろう。大きな門をくぐると、のどかな田舎の風景が見えた。 だと思う。 は 0 先に 止 |まる。どうやら村の中央に着い . 村長やその夫人、エモット姉妹と護衛のゴブリンたちが周りにいて、村人 それは村をぐるりと囲んでいて、大抵のモンスターや軍からの侵入を防 たようだ。 メイドが先に降りて扉 れている を開 やが から、 ける。 7て馬 当

ら緊張と怯えの気配がバシバシ伝わってきて、落ち着いてくれと思う。 私 は 淑 女らしく、 ゆっくり降りる。 そして村長たちに近づいた。 ゴブリンたちか 彼らの前で

然の反応

なの

かな。だとしたら、今回と突然の訪問について謝っといた方が角が立

たなくて

ております。ありがとうございます」 再興を手助けしていただき、心より感謝し

自分たちの甘さを学びました。

もう二度と

村長は重く頷く。

その分援助します」 「受け取りましょう。私たちは今後も、 「いて安心しました」 あなた方が対価をきちんと支払うならば、

心から安堵したのだろう。村人たちの顔には笑みが浮かび、「よかった」

と声が

327 それを聞 間違いは起こしません。パイン様には、 今日はどのようなご用件でしょうか?」 りましたね ましたから。 っあ 「いえいえ。パイン様のご訪問でしたら、 「お久しぶりですね、皆さん。今日は突然訪問してしまって、ごめんなさい 村 襲 の件で我々は、多くのものを失い、 (撃の被害にあったとは思えない発展ぶりだ。 .の様子を見にきました。ルプスレギナの報告から、かなり良くなったとは聞き どの程度か確かめに来たのです。

……見たところ、素晴らし

い村にな

ıŀ.

まり、

浅くお辞儀をする。

村長たちは深く頭を下げた。

我々はいつでも歓迎いたします。して、

ね

用させてもらうけどね。

そろそろ本題に入ろう。

328

「挨拶はこれまでにしましょう。エンリ、ネム、今日はあなた達に会いに来ました。

「はーい!」

残った。

「エンリ、彼らも一緒ですか?」

ーえ?あ**、**

はい」

「俺たちはエンリの姐さんの護衛です」

しませんので、ご安心ください」

「よかった。では、皆さん。私たちはこれで失礼します。お二人は村から出したり

村人たちが一礼してそれぞれの持ち場へと去って行く。ゴブリンたちは数匹を

少しお話しませんか?」

「はい!で、できます」

ゴブリンに慕われているんだな。微笑ましくて、和む。

「そうですか。忠実なシモベを持てて良かったですね」

「あ、あの、シモベじゃないです……」

あれ、そうなの?自分にとって召喚したモンスターはシモベ感覚だったから、間

違えちゃった。

「あら、失礼。では、一体なんでしょうか?」 「家族です。

私たちを守ってくれます」

毅然とした態度ではっきり言う。その姿には好感が持てた。

ですね、エンリ、ネム」 「それは素敵ですね。では、改めさせていただきます。 こほん。……素敵なご家族

てやる。 「うん!」 ネ ・ムが満面 ネムはぎゅっと力を入れる。この、子供の体温ってなんでこんなに加護欲 の笑みで飛び込んで来た。頭を撫でてやり、左手でネムの右手を握

0

329 を掻き立てられるんだろう。大事にしなきゃ、大切にしなくちゃいけないって思っ

330 ラと歩いて、のんびりお喋りした。最近の天気のこと。ゴブリンさんたちのおかげ すと、村人たちの手が止まるから、滞在時間は短い。まるで散歩するようにブラブ なんてことに気づきつつ、ネムに案内されるまま村中をまわった。私が姿を現わ

工 ンリは、ネムがよく手伝ってくれると話した。ゴブリンたちのことも一人ず よく笑い、教えてくれる。

つ、丁寧に紹介してパインに聞かせてくれる。

で村が活気付いていること。ゴブリンさんたちがいてくれるから、もう夜が怖くな

分からないが、これからもエンリたちと関わっていくなら覚えておく必要がある。 るほど頭は良くない。後でメイドに書き起こさせようと思った。いつ必要になるか だがパインは覚えられない。メモもなく、一度に十体ほどの情報を脳に入れられ À がゴブリンと手を繋いで、先を走る。エンリは私の方をチラチラと見てく

「どうかしましたか?」る。何か用事があるのだろうか。

すね。あとは……」 るべき時は叱るようにしています。なるべく平等になるよう注意して、接していま 「上司らしくあること、でしょうか」 「あとは?」 「?普通、だと思いますが。そうですね。具体的に言うと、褒める場合は褒め、叱 「パイン様は、部下の方とはどう接しているのでしょうか?」 「なんでしょうか」 「あ、えっと、ちょっとお聞きしたいことがありまして」 エンリは真剣に聞いていた。パインはさらに話す。

クーるだけ、その内面を相手に悟らせては地で「彼らが迷わず進めるように、いつも墳「上司らしくですか……」

るだけ、その内面を相手に悟らせてはいけないんですよ。いつだって余裕であるべ 「彼らが迷わず進めるように、いつも前を向くのです。だから、上に立つ者はでき

きなんです」

「少しずつ練習すれば、あなたもできるようになりますよ。お互い頑張りましょう」 エンリの手を握ってやる。 顔がこちらを向いて目があった。

「はい!」

笑顔が戻った。元気出てよかった~! なんて考えているとネズミの警戒網に何

か引っかかった。視覚情報を共有する。 モ モンガさんとたっちさんとペロロンチーノさんがいた。

332

ーは い? !

「何でもない」

信じられないものを見た。早く本物か確かめたい。一人になって考えたい。とい

うか、 私は突然予定を変更することが嫌いなんだよ! パニックになるから。やめ

ろ!!!? いきなりこういう場面はお断りだよ

なんて混乱を態度に出さず、エンリに向き直る。

らなくてはなりません。これを、ネムや村人たちと分け合いなさい。では、 「エンリ、今日はありがとう。 あなたたちに笑顔が戻って本当に良かった。 さよう もう帰

ベルトさんに任せましょう」

アイテムボックスからただの木箱を取り出した。中身は同じ菓子がたくさん入っ

なら」

ている。驚くエンリを放置して、私はドミルを抱えて馬車へ戻った。

できるだけこの子に負担がかからないように、かなりの速度で走る。

馬車の前ま

で来たらそっと下ろしてやっ - あなたは馬車で待ち合わせの場所まで戻り、 ナザリックへお帰りなさい。 た。 私はア

ウラたちと合流します」

「かしこまりました」 少しもふらつかず背筋を伸ばす。その姿に私は安心して、村の壁を飛び越えた。

〈伝言〉ですぐにアウラと魔獣たちを呼びよせて、簡単に事情を説明した。

「とにかく、本人達なのかわからないから、たしかめに行くわ。ナザリックはウル

「は、は ·!わ か りました!!」

333 声が裏返っている。 突然の事態に緊張しているんだろう。ううん、私がしっかり

『いざとなれば逃げろよ。……アウラはまた復活できるんだから』

肉壁がたくさんある。私だって召喚できる。大丈夫。 「そんな……!いえ……わかり、ました。危なくなったら、そうします」 嘘だ。絶対にそんなことしたくない。何とか二人で結界内へ逃げよう。ここには

334

「そうしてちょうだい」 「アウラ、いざとなったら二人で結界内へ逃げるわ。いいわね」 「かしこまりました。 お側をできるだけ離れないようにします」

これでいい。さあ、彼らに会いに行こう。

また草原だ。ここには思い出がある。ニグンを捕まえた思い出だ。あの時はうま

くやれたと思ってい

今回はどうなるだろうか。

私たちは三人と対峙していた。距離は五十メートルほどあいているだろうか。戦

アインラードゥン。かつて導きの魔法少女として、私たちを様々な場所に導いて

アウラに「私の魔法少女仲間よ。信じていいわ」と、 簡単に説明をする。

335 に飛び込もう。 今日は予想外のことばかり起きている。心臓に悪い。 ああ、帰ったらヘドラの胸 ク地下大墳墓側 「アインちゃん?」 「久しぶりだね、パインちゃん」

ブの下には丈

への長 い 、スカ Ĩ ŀ

・がのぞいている。手にはカンテラを持っている。

髪を短く刈り上げていた。

口 l

高校生から大学生ぐらいの歳。顔立ちは美しく、

その決心を空回りさせる存在が、目の前に現れた。

しく頑張ろう。

もっと上手くできるんだろう。でも、今は私しかいないから。最善を目指して私ら

パインはどうすればいいか、わからなかった。アルベドなら、デミウルゴスなら

士職なら二、三歩飛べば届く距離だ。どちらも言葉はない。

張り詰めた緊張感だけ

が辺りを包んでいる。

くれた、ユグドラシルプレイヤーだ。

「本物なの?」

「円環の理が私たちを繋いでいるよ」

ンラ 自分の中にある大きな力。〈女神の助力〉を使った時に感じていた力に集中する。

すると糸を感じた。一本の大きな、大樹ほどの大きな糸だ。それと細い糸が、私た

336 「うん、感じる。本当にアインちゃんなんだね。ねえ、どうしてここにいるの?」 間に伸びて繋がれた。その糸が彼女を本物だと教えてくれる。

アインラードゥンは空を指差した。

ちの

「今、円環 にね。パインちゃん、彼らは本物だよ。私の命にかけて誓うよ」 の理から降りてきたんだよ。この人たちを、パインちゃんの仲間たちを

ならば、本当にそうなのか? 私はモモンガさんだけじゃなくて他の二人も見つけ パインは驚いた。なんてことだろう。アインが、彼らを本物だと保証している。

ちゃったのか 心 。がばくばく鳴り響く ! なぜモモンガさん以外も転生できているんだ? どう !?

に、 やって出会ったんだろう? 彼らに何が起こったのか。なぜウルベルトさんのよう ナザリックに転生しなかったのか。何から質問すればいいんだと、混乱してい

んだ。

「私はたっち・みー!創ったNPCはセバス・チャン!ナザリックの執事です!」

正解だ。アウラが希望を込めた目で私を見る。私も彼女の方を向いて、頷いてや

りたかった。けれど、まだだ。

「あ、そういう感じですか?じゃあ、次俺で。 口 ロンチーノさんがたっちさんに続いた。 俺はペロロンチーノ!姉はぶくぶ

く茶釜! 創ったNPCはシャルティア・ブラッドフォー ルン!第一階層から第三

正 上解だ。 もういいのだろうか。 頷 いてもいいだろうか。

階層の階層守護者です!」

モモンガさんが慌てはじめる。

ク地下大墳墓側

「皆さん、防音の魔法もかけていないのにナザリックの情報喋っちゃダメですよ!

ろうな。 モモンガさんらしい。ここにいたら、ベルリバーさんも二人に注意していたんだ その光景がパッと浮かんで、思わず微笑む。

337 モモンガに対して、たっちが反論する。

「このぐらいの情報なら問題ないかと。それに、今はパインさんに信じてもらう方

が先です」

338 「仕方ありません。今からでも張りましょうか」 詠唱しようとして、パインが止めた。 揺らがない態度にモモンガはため息を吐くふりをした。

「おかえりなさい。皆さん」 「その必要はありません」 三人がこちらを注視する。もうパインは肩の力を抜いていた。

その声を聞いてアウラの頰が上がった。

へつづく>

アウラは モ モンガさんの魔法で、私、 飛んでナザリック地下大墳墓へと帰還した。 モモンガさん、たっちさん、ペロロンチーノさん、

ナザリックは現在、魔法的な防御と隠蔽をかけて守っている。それも私たちが入

テンションが高ぶるまま、 地表部分に降り立った。

る数分だけは切っていた。

「わーたーしーが !! ナザリックに帰ってきた!!!!」

ク地下大墳墓側

「お帰

'n

「お帰りなさいませ。パイン様」

で私たちの帰り待っていてくれた。私やウルベルトさんにとっては慣れた数だが、 、ルベルトさん、デミウルゴス、メイドたち数人、護衛のシモベたちが地表部分

モモンガさんたちにとっては威圧的な数らしく、少し動揺している。というのも、

339

モモンガさんたちとは〈伝言〉で会話しているのだ。

340 すよ~』 怖いよ、モモンガさん、たっちさん!』

『何ですかこの数!! 多!!?

『大丈夫ですよ、ペロロンチーノさん。迎えてくれるときは、いつもこんな感じで

んでしょうか。私たちもラフな感じで挨拶をするべきでしょうか……?』 『やめてください、たっちさん。すみません。テンション上がっちゃって、 はしゃ

『パインさん、まったく威厳とか感じさせない行動しているんですが、アレでいい

にしてくださいね。喜ばれますから』 ぎすぎてしまいました。皆さんは会社の役員とか、社長とか、王様みたいに偉そう

『そうですよ、モモンガさんは慣れてるでしょ? 頑張ってね、魔王ロール』

『喜ばれるって何ですか?皆、社畜だったりするんですか?』

『ひえ』 そんなやりとりをしつつ、歩みを進める。ある程度近づくと、一斉にシモベたち

が

する。 「久しぶりですねえ、皆さん。俺についてあんまり驚いていないのは、パインさん

:頭を下げた。私は驚かないが、モモンガさんたちの反応が初々しくて、ほっこり

から先に聞いているからでしょうか?」

悪魔の貴族らしい所作を見せつけるウルベルト。いつもより立ち振る舞いが自然

だ。……もしかして練習した? 「帰る途中で、今ナザリックに誰がいるのか説明したんですよ」

「そうでしたか。皆さん、無事で何より。さあ、中に入りましょう。皆さんが創っ

「おお‼シ ,ャルティアに……会えるんですね。とても楽しみです」

ゕ ゖ たロールをなんとか取り繕い、一行は地下へと潜って行く。

に行きたいんだが、いいだろうか?」 「待ってください。できればすぐにでも……そうだな、第六階層か第八階層あたり

ウキウキしていたパインが首をかしげる。

「どうしてですか?何か確かめたいことでも?」

「その通りです。皆さん、疲れているところ申し訳ありませんが、どうかお願いし

341 ます」

が片手を上げて鎮める。その慣れた行動にペロロンチーノとたっちが舌を巻いてい

モモンガが深く頭を下げた。シモベたちが動揺するが、やかましく感じたパイン

342

た。

パインは頷く。

向 モモンガさんがそこまで仰るなら、余程のことがあるんですね。では第八階層に か いましょう。 あそこなら多少暴れても問題ありませんし。私は賛成です」

モ モンガはパインの顔を見た。

「ありがとうございます!

あの、 ルベルトがマントを引き寄せる。 皆さんはどうしますか?」

「行きましょう。気になることは早目に解決しておいた方がいいですからね」

「モモンガさん、パインさん、ウルベルトさん。三人がが賛成なら決定ですね。

俺

うですね」と同意 も行きますよ」 ャルティアにはいつでも会えるしね、とペロロンチーノが言う。たっちも「そ した。

「では、第八階層へ向かいます。えーと、NPCたちはどうしますか?」

パインが手を上げる。

つシモベたちにに連絡しなさい。私たちは第八階層にて、少々用事を済ませます。 「ああ、はい。じゃあ私が。こほん。デミウルゴス、モモンガさんたちの帰りを待

それが終わったらアルベドから指示を貰いなさい。では、行け」

「これでよし。では、転移しましょうか」「はっ!直ちに行動を開始致します」

「は、は

ربا ا

パインのあまりの慣れように三人は少し引いていた。

第八階層。 ウルベルトが自らの指を眺める。 荒野。

「そういえば、俺たちってリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン装備している

んですね。アイテムボックスも、最後にログインした状態のままだし」

リングは三人の指にもはめられている。もちろんパインの指にもだ。 人任せの魔

343 女は首をひねる。

344

ペロロンチーノが呻いた。

テム、 っ こ の 装備品は最終日にログインした状態で、転生する」 世界に転生する条件なんですかね? ユグドラシルアバターでなおかつアイ

都合が良すぎますよ。 大昔の異世界転生ものじゃあるまいし。何か理由があると

思うんですけどね」

の顔を見つめ返す。 その言葉を聞いてモモンガがパインを凝視した。 視線に気がついた魔女が骨だけ

「なんですか、モモンガさん」

「俺は、 パインさんがきっかけだと思うんです」

無いはずの心臓が飛び上がった。

自分が転生者だと、言われた気がしたんだ。

私 思っ 0 いせい、 ですか?」

と振る。 たよりも弱々しい声になってしまい、 モモンガさんは慌てた。手をバタバタ

ー二十分後

「その前に一旦元の姿に戻らないと。ダッシュで帰ってきます」

の ? 「違いますよ。アインちゃんとはさっき、モモンガさんたちと再会したあの時、 パインは首を振 どうやら驚 いて開けたらし る。

「俺たちを転生させるようにって、パインさんがアインちゃんに頼んだんじゃない

う言

這

「なんじゃそりゃ。まったく身に覚えがありません」

っていましたから。俺たちがパインさんの友人だから融通がしているって」 いますよ! あくまでもきっかけです。だってアインラードゥン……さんがそ

ペロロンチーノが嘴を大きく開いた。

しぶりに会ったんですよ。……これ、直接本人に聞いた方がいいですね」 「ですね。呼んでいただけますか?」

、ザリックの現状をウルベルトから聞くモモンガたち。特に盛り上が

った話題

は、世界級を二つも手に入れたことだ。傾城傾国が手に入ったことで、モモンガ筆

345

に精神攻撃が効かないメンバーが、操られる心配がなくなった。それは大きな利

346 ど。慰労会はいいかもしれません。全員の士気を上げられる」 益だ。ぜひ実物を見たい、ぜひ宴を、と三人は言う。 「宴か。もう褒美とかは何を与えるか決めっちゃった後なので、与えられませんけ

よね?」 「堅苦しいのは抜きで楽しめる会にしましょう!……そう言えば叶えてくれます

「大丈夫だと思いますよ。きちんと命令してやれば、聞いてくれるでしょう」 「皆さーん!!」

ちの前で止まった。土埃が多少舞い上がるが、服にはかからない。 遠くで声が聞こえる。その小さな影はあっという間にに大きくなり、モモンガた

「ただいま戻りました」 やっとパインが戻ってきた。にこやかな表情をしている。さすがと言うべきか、

息切れ なんてしてい ない。

「いいですよ。 早速始 めましょう。い お願いします」 い ですか?」

「答えられることなら、

何でも答えるよ

代表してモモンガさんが話を聞き出した結果、

重大なことを知ることができた。

「あの、 「何か

色々聞きたいことがあって呼んだの。

教えてくれる?」

こか

らするりと、

回とはまったく異なる様子が目の前に広がっ

た。

パインは、アインラードゥンに呼びかけるようにスキルを発動した。すると、

天空一面に広がった魔法陣は、パインたちの近く、二メートル上空に現れた。

そ

前

カンテラを持った魔法少女が出てきた。

(女神

の助力〉

に心の奥底で仲間

の転生を望んでいるため、

常時発動状態になっている、らしい)

(常

なので、アインラードゥンが

言われてみれば、

ナザリ

ただ復活させるとこの世界のどこかに落ちるだけ。

導

Ü

て、

ナザ

リックの近くに落としてくれた。

転生させられるのは、パインが復活と縁結びの魔法を得意としているから。

ナザリックから離れてしまう原因はリアルに心残りがため。

347

348

ゥ

と」、たっちさんは「妻子(離婚済みだった)」、ペロロンチーノさんは「エロゲー

'たみたい'。モモンガさんは「パインさんと別のゲー

ムで遊ぶこ

ザリ アインラードゥンは続ける。 ックに直接召喚できた。

ルベルトは死亡しており、なおかつナザリック行きを望んでいた。そのためナ

は 「そういえば、ベルリバーって人も死んでいたわ。リアルへの執着が強すぎて勧誘 無理だった . の 。頭はくらくらし始めた。ベルリバーの死は知っていた。改めて仲間 ょ の死

静ではいられない。そして自分には責任があった。 を突きつけられると動揺する。それが四人分、いや自分を含めて五人分となれば冷

「(モモンガさんとの約束が、仇になったなんて信じられる?良かれと思ったのに。

それが原因でギルド長を危険な目に合わせていただなんて!)」 パンドラとアルベドに申し訳がない。 モモンガさんを含めた三人には、いや、ナ

ザリックに直接来られなかったペロロンチーノさんとたっちさんも含めて五人に謝

ク地下大墳墓側

連れてきちゃって、申し訳ありません」 「ごめんなさい。私が皆さんをこの世界へ連れてきました。こんな危ないところに

パインは四人に向けて頭を下げた。

荒野に

風がふく。

神

の

)助力〉

私

さようなら」

そう言って頭上に浮かぶ魔法陣から帰

っていった。

部

は強張りうまく動けないでいる。

イムアップだ、とアインラードゥンは言った。

の方から訪ねられるけど、こちらに来る条件はパインちゃんと同じなの。

は連続で使用できるスキルじゃない。だから、

しばらく後でね。では、

分女

パインの胸はがらんどうになり、そこに冷たい風が吹き抜けていく。そのくせ胸

らなくちゃ

, () けな

深く、深く腰を曲げる。

皆が「頭を上げてください」と言うが、上げられなかっ

た。

「皆さんの命を危険に晒したんです。とても顔を上げられません」

349

350

「でも、 ペロロンチーノさんに優しく声をかけられて、私は背を伸ばした。 顔を見ないと話もできませんよ?だから、上げてください」

?なのに、パインさん一人だけ責任を押し付けられるのは間違いですよ」 れに、アインちゃんが言うには、俺たちも望んでこの世界へやって来たわけじゃん

「パインさんは知らずに力を使っていたんですから、仕方ないと思いますよ? そ

た。パインさんと会えて良かった。悪いことばかりじゃありません」 「私もそう思います。……俺は、危険だったとしても、また皆さんと会えて良かっ

モモンガが

同意する。

たっちがふざけた声色で話す。

- 空気はうまいし、自然はまだ残っている。星空は美しかった。リアルより、こち

らの方がよっぽど楽しいですよ! たしかに、ナザリックと合流する前はちょっと

恐ろしい思いもしましたが、それだけです。むしろ、こちらに来れたことを感謝す るべきか もしれません」

「ナザリックは良い所ですよ? あの頃の俺たちの夢の集大成ですからね。何でも

ゥ

ル ベベル

トはニヤリと笑っ

アイツら俺たちには良い奴だからな」

揃

ってる。NPCたちの忠誠心はちと重いが、

慣れればなんてことはありません。

誰もパインを恨まなかった。憎んでいない。 転生して良かったと言ってくれた。

視界が涙に歪む。

「そうですか?ありがとうございます」

「ありがとうございます、皆さん」

出した。 「洗って返しますね」 女性の涙に一人、動揺しなかったたっちがアイテムボックスからハンカチを取り それ をパインに渡す。 パインはおずおずと受け取り、 涙を拭いた。

に落ちてくれるならばともかく。 以上の情報を得て、モモンガたちは考えた。仲間たちが、ナザリックに近い王国 ればかかる程、命 もし他国に落ちたら、助けに行きにくい。 現状、

時間 いっそ国 が か か でも興しましょう。 の危険があった。 自国なら異業種にも優しい国にできるでしょう?そ

351 うすれば、

仲間を助けられる」

ウルベルトの案が採用され

モモンガは別の事で頭がいっぱいだった。

最後にログインした状態で復活できるということは、ユグドラシルにアクセスし

ているということでは? ならば、そのアクセスを逆に辿ってユグドラシルに行け

ないか?ユグドラシルに着いたらリアルに行ける? そっと、長年共に頑張ってくれた友人の横顔を窺う。

パインさんいてくれたら、リアルへ行って仲間たちを救える。死ぬ前に救えるん

だ。パインさんもきっと協力してくれる。

モモンガは希望の星を見つけた。

へつづく>

〈女神の助力〉 の活用法。

するわけではないので許してほしい。 字面だけ見ると、ナザリックが叛逆の物語のキュウベえみたいだ。しかし、 まず、アインラードゥンによって様々な事がわかった。自分たちよりも先に、こ 悪用

ク地下大墳墓側 ル 0) 世界へ転移しているユグドラシルプレイヤーの存在。いつ来るかもわからないギ ドメンバーの存在。 どちらも早急に対処するべき問題だった。 ちょうど良いので、モモンガさんから

命じてもらう。 円卓でそんな話をすると、だいぶ嫌がられた。

PCたちがいざという時に困ります」 俺 ⁻もちろんですよ。でも命令系統において上下関係ははっきりしておかないと、N 『が命令するんですか!! そんな、俺たちは対等なんですよ!」

353

ナザリ

アに許可も 平行線になりそうなところでたっちさんが手を上げ

「だったら、命令というより、依頼する感じにしましょう。それでどうですかお二

人とも」

「いいと思います」

⁻それなら、いいですよ」 というわけで。

ザードマン達と戦うこと。パインが主軸となりギルドメンバーの捜索、ユグドラシ 玉座 の間にて、 帰還報告、 簡易的な宴の催しをやること、パインの予定通 りリ

ちなみに、パインの能力によって帰還できたことは、内密にしている。NPCた

354

ルプレイヤーの痕跡を探ることなどが話された。

が、今は話す時期ではないと、全員が判断した。 ちの間で大きな混乱が予想されるからだ。変に希望を持たせてしまうことも問題だ

もう来ないベルリバーさんのNPCに、どの様に説明するか話し合いの真っ最中

だ。

それから私たちは活動を再開する。

先

屋

屋敷に

お邪魔し

ているらしい。

セバスたちの仕事が

できるように考えてい

るの

ヤ

イア

か

な 0

?

口

口

てい

るだろう。

モ

ンガさんは黒歴史と向き合いつつも、

非常に優秀なので、滞りなく仕事

たっ

ちさんは、

問題

なんて見当たらない。

— 日

1の内、

数時間は

セバス

た

ちの潜入

創造したNPCたちに囲まれて仕事している。

モモ

ンガさんたちは、

ナザリック内で活動中だ。

外での疲労を癒したり、

自身が

ル

ベルトさん

は

外に出て、

冒険者活動

中。

ク地下大墳墓側

私 は

使 昔馴 染 相手 から情報を聞き出

の 往 中で一番楽しんでいる。 事

に付いて行ったり、二人で第九階層の様々な施設を回ったりと。多分、三人 ンチー ノさん はシャルティアと仲良く仕事しているようだ。 シ ルテ

「副官にヘドラをつけてもらい仕事をしている。 みのユグドラシルプレイヤーを召喚して情報を集めることだ。 仕事内容は 〈女神の助

他所のギルド長だった彼女なら、

有益

す。

主に第 力

を

355 ナザリ 八階 今回は、 層 でスキ 戦士・タンク役だったカナリア。 ル を使い、

な情報を持っているだろうと予想したからだ。

は たして、カナリアは円環の理にいるだろうか。スキルを発動し、カナリアに呼

「来てくれてありがとう、カナリア」びかける。彼女はすぐに来てくれた。

アに許可も は美しく、デミウルゴスと同じくらい耳に心地よい。リアルでは歌手だと教えてく 「ちょうど暇してたからね。どうってことないよ」 大学生くらいの歳。フルアーマーで全身を覆い、水色のマントをなびかせる。 声

出会った魔法少女が二人とも、円環の理にいたのは驚いた。まあ他のギルドに出

「あなたも円環の理の中にいたんだね。ちょっと驚きかも」

356

れた。

会っていないのだから仕方ないけれど。 「そうでもないよ。……ほとんどの魔法少女は、みんな円環の理にいるからね」

「そうなの?じゃあ、私みたいなのが珍しいんだ」

「どうして、皆そちら側にいるの?寿命でも迎えたの?」

「ええ、そうなるわね

気軽

に話せる空間だ。

「私の場合は、ギルドで最後に残ってね。寂しくて、落ち込んでいたところを導か

冗

、談で聞くと「そうじゃないけれど」と彼女は続

ける。

れたの。 ねえ、私に何か頼みたくて喚んだんだよね?私の頼みも聞いてくれる?」

ギルドで最後に残った。一瞬、途方もない時間を生きる自分を想像した。そこに

は モモンガさんがいる。寿命がないNPCたちもいてくれる。独りぼっちじゃない

から大丈夫だ。

想像はパッと流れた。

「そりゃあ、

今の パインに恐 できる限りは聞 れはなな か つ くよ た。 カナリアは祈るように両手を組んだ。

「私のギルド拠点を壊して欲しいの」

「という訳で、近々アゼルシリア山脈にあるらしいギルドに出かけてきます」

パインの自室、応接用ソファに至高の五人は集まっていた。NPCたちはおら

モ モ ガが心配そうな声を出

357 「わかりました。けれど、気をつけてくださいね。 俺たち四人には階層守護者が警

せん。 撃があった場合、無理はするなってことでしょう? この前みたいに戦ったりしま 護についてくれますが、パインさんのところはヘドラと始祖たちでしょう?」 「わかっています。バランスの悪いチーム編成なんだから、他のプレイヤーから襲 パインは少し唇を尖らせる。 お約束します」

ょ。 「パインさんは後、七回はやらかすでしょう。クラン時代の皆は知っているんです ゥ あなたは不器用だってね」 íν ベルトがにやにやと口角を上げた。

358

「いじめないでください ! こっちじゃ命の危険がある分、本気で取り組んでいる

れ合いの範囲内なので、本気ではない。

それを聞いたパインが眉をぎゅっと寄せた。怒りますよ、というアピールだ。じゃ

「ああ、そうだったな。こうして喋ってるとつい、忘れちまうぜ」

んですから」

「本当にそうですよね。NPCたちの忠誠心は重いですが、皆いい子ばかりですし、 居心地が良すぎてな、 と紅茶をあおる。ペロロンチーノも同意

モモン ガはガパリと大きく口を開けて、閉じた。 リアルよりナザリックが選ばれ

て嬉しかった喜びが、一気に抑制される。 「クソ、またか……」

モモンガの隣にいたたっちが甘い蜜のジュースを置いた。

「大丈夫ですか? 例の感情の抑制ですか?」

では邪魔ですね。パッシブスキルのようにオンオフできませんか?」 くなれないんですよね」 「うーん、常に冷静な判断を求められるリーダー向きの能力ですけど、こういう場 「そうです。一定以上の感情の波は抑制されるので、なんというか、テンション高

ク地下大墳墓側 「無理です。あー、何度も助けられた能力ですけれど、こういう時はオフにしたい

インはアイテムボックスから三つの流れ星が彫られた指輪を取り出して、モモ いを叶えちゃいますか?」

です」

「それなら、

願

359 ンガに差し出した。モモンガはブンブンと首を振る。

本気でそう考えるのだが、モモンガが頑なに拒否するので、指輪はアイテムボッ

行くんですか?」

目的地まで行けますから」 「次、スキルが使える時に行きます。 アインラードゥンの力を借りれば、 迷わずに

360

「わかりました。くれぐれも気をつけてくださいね」

そこでバードマンの手が上げた。

「はいはい!俺も付いて行っていい?アインちゃんに会いたいんだ!」

「ダメですよ。今回はお墓参りなんです。部外者や興味本位での参加はご遠慮くだ

「ああ~。仕方ありませんね。今回も写真を撮るんでしょ? 楽しみに待ってます」 アインちゃんの写真多めでお願いします、 と頼まれた。 なので「シャルティアに

許可貰ってますか?」と確認すると、ペロロンチーノさんは口を閉じてしまった。

お迎えまでのタイムリミッ

団 が 早朝。 Ö た。 地平線 パインが率いる隊だ。 の彼方に太陽が顔を出 天馬が引く馬車に乗り、 した頃。 ナザリック地表部分から飛 天使たちを引き連れて が出 た

トが くの アゼルリシア山脈に向かう。 アゼルリシア山脈 覇権 モンスターが空を飛び、地表ではフロスト・ドラゴンとフロスト・ジャイアン を争う。 地中ではドワーフの国とクアゴア氏族が戦ってい は極寒の山だ。そして生きるのには厳しい場所でもある。

数多

362

そん な Й . の麓 に、馬車を置く。 麓は高い木々に覆われているが、山を上がるにつ

れて低 い木々へと、景色が変わ . る。

が ~空中 空が ?青く ・に浮かび、そこからアインラードゥンが現れる。 なっ た頃、パインはようやく〈女神の助力〉 を使った。 アインラード 小 さめ . ウ ンは、 の魔法 カナ 陣

一今日も、 道案内よろしくお願いします」

リアのギルド拠点まで案内する役だ。パインは軽く頭を下げた。

「頼 まれ

まし

アインラードゥンは手で胸を抑えた。

た。 らに 導きの魔女を先頭に続いて、パイン、ヘドラと歩む。その周囲に始祖たちが、 かなりの大所帯となってしまったが、主要なメンバーには〈飛行〉の魔法がか .外側を図書館で召喚した天使たち、そしてパインの使い魔が護衛 移動には困らず。 パインたちはまっすぐギルド拠点へ向かうことが に ついてい さ

アルゼシリア山脈の中腹。 絶壁の崖の下、 隠された場所に入り口は見つかった。

「案内はもういいよね。それじゃ、 またね」

「ありがとう。行ってきます」

洞窟のようだ。

インと手を振って別れる。 再び魔法陣が空中に出現して、その中へ戻って行っ

た。 パ インはヘドラたちに向き直ると「行きましょう!」と号令をかけた。

363

イを動

かして、

扉を開 しだね

けさせる。

お迎えまでのタイ

うん、

罠の類は無

が施され、美しい装飾 れているようだ。いくつか骸があるが生きている者がいない。アンデ 中 1 に入ると侵入者妨害用の罠とかが、発動 i 死んだ拠点、という言葉が浮かんだ。 の扉が現れた。 これがギルド拠点への入り口だろうか。 しない。 洞窟の最奥に進むと、細やかな細工 カナリアの言 っ た通 ッ ド B り切 な 6

ミラージュマン、サイコマン、他使い魔を残していきます。 それじゃ、入りましょうか。 予定通りにザ・マン、ゴールドマン、シルバー 出入り口の守りを頼 -マン、 み

名前 で呼ば れたメンバーがそれぞれポーズをとり、了承する。うん、やる気が

あってよろし

IJ か ñ ら聞くことは時間的 からは、 地道にギルド拠点ーダンジョンーを攻略していった。すべてをカナ に困難だったので、攻略 の注意事項だけを聞 いて、この

地へやってきた。一応、 死ぬ危険はないとお墨付きなので、 問題ないと思う。

に

ナザリックと同じく階層ごとに分かれている。

つまり、

別 の階

層を移動す

モモンガさんたちへは報告書を作成するために撮影す これはギルド長カナリアに許可をもらってい

カナリアとモモンガさんのたちに見せる為

体を浮かび上がらせて神々しかったーから、言われた通りの順番に家具や柱を動 座 の間ーここの玉座の間は神殿風で光が部屋全 か

それは玉座の後ろ、

隠し階段が現れた!

それを見た パインはくすりと笑う。

365 「ふふ、ゲームみたい」

考えるが何も思い出せなかったので、 ブ調だった。 玉座 空は快晴で心地よく、鳥たちが鳴いている。 ナ 、ザリックの宝物殿は重厚感がある。こちらの宝物殿は華やかで煌びやかなアラ の 後ろの隠 長い階段を降りたら、広い空間に出た。 し階段といえば、ドラクエだよね。 諦めた。 それ以外に何かあったか

があちらこちらに積み上がっていた。 その金貨を避けるようにして川が奥から流れ 白い大地が広がり、すでに金貨 の山

366

てい

金貨

の

回収作業は任せて、

私とヘドラ、始祖たちは奥へと進んだ。

奥には上へあがる階段があった。下って登るのか? なぜそんな手間を? とか考

得して、ペインマンを先頭に立たせて進んだ。 えたが、他人の家にけちをつけるものではない。そういうものなんだ。 無理やり納

登りきると煌びやかなアラブ調の建物が見えた。川の流れもそこから来ているよ

「アラジンじゃん!!! 素敵!」

うだ。

あそこが目的地ですね、気を引き締めて参りましょう」

咳払いで誤魔化すん

皆、空気を読んで反応しないでくれるの有難いよな。

ド武器と、レア中のレアなアイテムが建物内に保管されてい

全て報酬としてもらう。カナリアとの交渉の結果だった。こんなに破格の仕事もな どの部屋も模様が美しく複雑なので、バシャバシャと撮影してから、 貰える物は

いだろう。 そして、本ばかりある部屋の中で、目的の物を見つける。それは、ある人によっ

一召喚データよりも価値があるものだった。

ル バ ム 「だ。

367 パ インはパラパラとめくり、 それから胸に抱えた。

壊することが、今回の任務であっ 預かったアルバムは、 この ギルドの思 い出がたくさん詰まったアルバムを預かること。 たまに飾ろうと心に決める。 た。

ギルド武器を破

い 後の仕事、宝の移動はシモベがやるべきであって至高の存在が監督するほどでもな 0 パインは貴重品とアルバム、ギルド武器を持って、即座にナザリックへと帰った。 始祖 たち が監督者となり、 シャルティアの〈転移門〉 の力を借りて、 物を移動

Ē 帰 れた の は、夜だった。でも、まだ終わりじゃ ない。 368

させると聞

い

7

る。

「今日はよく働きました」

「お疲れ様だね。もう一踏ん張りだよ」

ヘドラの励ましに、笑顔で応える。空っぽのタンクにエネルギーが注がれたみた

いだ。

「ありがとう、 そう感謝すると、ヘドラは照れてフードを少しだけ深く被るのだ。 ちょっと元気になれたわ」 目

三当ての物は持っている。

張

ってたね。

「今日はよく働いてくれたから、疲れが出ても仕方ない

. さ。

あっちで見てたよ。

頑

?

だから、すぐに取り掛かろう。パイン見せて」

「何? その喋り方、少し変だよ。パインちゃん疲れてるの

「お早いお着きですねタ!・」

私は、

すぐに来てくれた二人に驚いた。

カナリアが出て来る。私のスキルではない。

アインラードゥンとカナリアがスキル

ンと

転移した途端、目の前の空中に魔法陣が浮かんだ。そこからアインラード

甘

Ü

やりとりは程々に、今度は第八階層に転移した。

〈女神の助力〉を使って、私に会いに来てくれたのだ。

い、コレ」

イテムボックス が何度 つも頷 から取り出して、カナリアに見せた。ギルド武器とアルバム い た。

カナリア

369

ギルド武器を持ちつつ、アルバムを開く。

じっと見つめて、何を思い返している

うん、

これ

だ。 懐

か

Ĺ

ク地下大墳墓側

れも魔法少女に関するもの。 んだろう。

ある事を聞きたかった。それはもう一つの報酬ーギルドの宝ではなくー情報だ。そ 思い出に浸らせてあげたかったが、時間がない。できれば、報告書作成のために、

な 「ねえ、ごめん。よかったら、カナリアが言っていた魔法少女について教えてくれ i かな?」

「ええ、 ナリアは い いわ。ええ、 サッとアルバムを閉じて、ギルド武器と共にパインに返した。 聞かせてあげる」

カ

それは 聞 いてみれば、 当たり前だと思えるような内容だっ

魔法少女は心残りがなくなると、円環の理に導かれる。

アインラードゥンの心残りは仲間たちを導くこと。全員をリアルから導き、そし

て円環の理へ還った。

ナリアの心残りは仲間たちを残すこと。自分が最後になったから還った。

は ?

「私は……モモンガさんと遊ぶことだよ」

へつづく>

ていく事を望んでいた。 そうだ。ユグドラシル最終日。私は転生した世界で、モモンガさんと楽しくやっ

「違うの。あのね、女神様に聞いてきたんだけだ、パインちゃんの望みはね……」 アインラードゥンが首を振る。

ガクリ、とパインは膝から崩れた。それをヘドラが支えてくれる。

モモンガさんとこの世界に転生すること。

もう叶ってしまった。すぐに女神様がやってくる。

大事なんだよ。 らだ。 ナザリックが大切で、大事なんだよ。

パインは一人では悩めない。 悩んだら出口のない迷宮に入ってしまうと考えたか

私が持ってきた爆弾は、大きな衝撃をもたらした。だが、それが魔法少女の特性 だから正直にモモンガさんたちに話す。私は円卓に皆を呼んで、告白した。

ならば、ルールなら、従わざるおえないね。そう、無理に納得した。

はじめて見せた激情だった。机を叩き割ってしまいそうな程強く叩 Ò た。 372

モモンガさんは違った。

「なんで……、 なんでそんな、納得できるんだよ!!! パインさんが連れて行か

れるんだぞ!」

しま 発してしまってから、モモンガさんは居心地悪そうに座り直して「大声を上げて いすみません、机を叩いてしまってすみません」と言っ た。

モモンガさんが大声を上げてくれて、私は嬉しかった。仲間として、強く想って

暮らして生きたいですよ!!!」

でも無理なのだ。ならば、メリットを上げて、上げまくって、無理やり納得する

か ないじゃな を流 す。 か これまで我慢していたものが溢れてきた。

ハンカチを取り出してぐしぐしと、

顔を拭う。

溢れても、

また蓋

373 をしなくちゃいけない。 は 涙

インさんと遊びたいんですよ!」

が別

る。

数日に一回は会えるんです」

こんな風に会えないじゃないですか。俺は、

連絡だけじゃなくて、パ

地上に戻って来られるんですよ!いられるのは短時間だけど、

自由に行き来でき

くれ

深く吸って、呼吸を整えた。

守ってきたんだ。絆は本物だ。だからこそ、伝えなくてはならない。

パインは息を

ていることに喜びを感じていた。二人で頑張って、ナザリック地下大墳墓を

モモンガさん、永遠に別れるわけではありません。こう考えてくださいよ!家

になるだけって。私は縁を辿るのが得意なので、アインラードゥンのように、

「私だって、遊びたいですよ!皆さんと、モモンガさんと遊んで、悩んで、楽しく

大事なんだよ。 の理にいる魔法少女たちの縁を辿って、世界中どこにでも降りられる。彼女たちか 「モモンガさん、私が円環の理に導かれることは、メリットが大きいんです。円環

今回のようにユグドラシル産のアイテムをゲットできる。デメリットは皆んなと長 ら、他のユグドラシルプレイヤーの情報を聞き出せる、探せられる。運が良ければ、

た涙が溢れてきた。それもゴシゴシと拭う。

「もう会えなくなるわけじゃない」とパインは続

ける。

時間

いられ

ないこと」

374 ナザリ 「……パインさんが、円環の理に行ったら。 最悪な空気 の中、ウルベルトが意を決して発言 仲間の発見とか、どうなるんだ?」

この安全なナザリックに転生させてあげられるんですよ?」 たちのようにナザリックから遠い場所に転生する事故を無くせます。……皆さんを ¯やり易くなります。私が直接見つけに行けるらしいです。なので、モモンガさん

うな姿が、 モモンガに向かって言うが、彼は黙ったままだ。普段は見せない、駄々っ子のよ なんだか微笑ましく思えてくる。

ペロロンチーノは頭をかいた。納得できないのだ。

うな真似は絶対にやめてください。もう円環の理の力を、他の魔法少女に助けても る系の世界級をゲットして、パインさんに帰ってきてもらえばいいんですよ!」 りさ、足掻いても良いんじゃない? 俺たち何とかするよ? 例えば指輪に願ったり してさ」 「どうしてですか!!!」 「あ、それヤバそうだからやめてください」 「そうですよ!指輪、試してみましょう!それがダメなら、願いを叶えてもらえ ⁻なんか、こう。勘にピーンとくるものがありまして。私と円環の理の縁 モモンガがそれだと叫ぶ! を切

るよ

「それも大事だけどさ。もう避けようがないけれど。パインさんはもう少し泣いた

らえなくなる」 「そんなのどうでもいいんですよ!パインさんさえ居てくれれば、いいんですよ

375 「モモンガさん、円環の理の力を借りれないという事は、パインさんの切り札 衄 奮 「が冷めないモモンガをたっちが抑えるように言う。

分女

大事なんだよ。 るなら、 神 の助力〉 仲間 が使えなくなるということでは? それに他の方に助けてもらえなくな !の捜索にも影響が出るでしょう。それでもいいんですか? 」

376 Ď た。 てしまった。 「しょうがねえよ。種族の特性に関わる事だ。無理やり歪めて良い事じゃないだろ 良 ウルベルトが肩をすくめると、モモンガが吐き出す。 ペロロンチーノはわざと明るめの声を出す。しかし、どうしても重い調子になっ モモンガはぐっと黙った。しばし静寂が訪れて、「俺は、俺は……」と繰り返し い案だと思ったんですけど、難しいですね」

を抱きしめる。

もう、

モモンガが苦しむ姿を見たくなかった。こんなに自分を惜しんでくれる仲

「誰も諦めてください、なんて言ってませんよう」

が席を立ち上がり、モモンガの元へ向かった。

そして、厳しいアンデッド

「諦めるんですか?俺は、諦められない!」

間 友人を慰めたか

、った。

「モモンガさん、私はちょっと出かけるだけですから。許してください。 ナザリッ

クのために精一杯働きに行くんですよ」

モモンガは、座っている自分と同じぐらいの身長をそっと抱きしめ返す。

「ここに来てから。ナザリックに転生してから、まあ、好きになりました。 働くの

も悪くないんですよね。好きな人たちと頑張る事が出来れば、私はいくらでもでき

「俺たちより、魔法少女たちの方が好きなんですか?」

ク地下大墳墓側 は、今じゃここだけですよ」 「意地悪な質問しないでください。ナザリックが大切で、大好きです。私が帰る家

優しく、優しく。背中を撫でてやる。段々と落ち着いてきたようだ。

二人はそっと離れた。それでも手は繋がれている。パインの手は柔らかく熱い。

377 モモンガの手 モモンガは声を絞り出した。 `は固く冷たい。全く違うけれど、それが友人の手だった。離れがたい。

大事なんだよ。 「俺たちを忘れないでくれますか?」

パインは吹き出した。

「絶対に忘れませんよ!こんなにゲームにハマったことも、誰かと一緒に遊べた

クが大切で、 ことも、 「ふふ、そういえばそうですよね」 転生なんてトンデモない体験もした事ないんですから!」

いた。 「納得は済んでませんが、まあ、次に進んで良いの ペロロンチーノが問いかけると、二人は頷いた。全員を見回して、忘れかけてい かな?」

柔らかく笑い合うと、部屋の空気も緩んだ。見守っていた三人はほっと、息をつ

378 た難問を思い出させた。 「NPCたちにはどう説明するんですか?」

へつづく>

挙げられ

. る。 様がご入場されます」

続いた夢の先

つどえられる全NPCが集まった。

けでも見せてもらえればそれでいいのだ。 皆、今度はどんな命令を賜れるのか楽しみにしている。いや、声だけでも、姿だ それが叶うこの呼び出しは素晴らしい。

「モモンガ様、たっち・みー様、ペロロンチーノ様、ウルベルト様、パイン・ツリー しばらく膝をつき、頭を垂れているとアルベドが主人たちの到着を告げた。

中 -央を静かに王たちが歩く。 名前の順番に意味はなく、先に入る者たちから名が

ただしギルド長のモモンガだけは別だ。 彼だけは一番最初に、必ず入場する。

王たちが階段を上がり、配置についたら始まりだ。

モモンガの威厳ある言葉が届き、一斉に顔が上がる。

「面をあげよ」

NPCたちの心が誇りで一杯になっていた頃、主人たちは騒がしかった。もちろ

ん、〈伝言〉内でだ。

『あ〜皆、今日も揃ってるんじゃ〜』

『パインさん、それやめてください。何の真似ですか』

『特に何もないですけど、すみません』

『モモンガさんカッコいいですよ。次もバシッと決めてください!』

『うう、こういうの苦手なんですよ~』

『あともう少しだけファイトです!』

「皆、よく集まってくれた。今日はパインから大切な話がある。心して聞くように」

人任せの魔女が一歩前に出る。

て、私からの話というのは……新しい任務についた件についてです。それは、至高 「皆さん、ご機嫌よう。今日も皆さんが元気そうで、私はとっても嬉しいです。 さ

た

「その最中で、

両

手

`を軽く広げて周囲の目をさらに集める。

0)

お

仲間たちを探しに行くこと」

集を行っていました。結果実り、多くの宝をナザリックに持ち帰ることができまし

拍手がおこる。それもパインの話の邪魔にならない時間で止んだ。

私の能力について、さらに詳しく知ることができたのです」

「以前から、魔法少女たちに、この世界について、またプレイヤーについて情報収

と騒めきがおこる。パインはそれを慣れた手つきで止めると続きを話た。

381

さらに大きな騒めきが起こった。それぞれ顔を見合わせて「どのくらいお戻りに

{}フシュー」

そんなっ……」

ク地下大墳墓側 は

力を使って、私は仲間を探すために様々な場所へ行きます。なので、ナザリックに ることができるし。他人の縁を辿って目的の土地に降り立つことができます。この あまり……ほとんど帰ることができません」

「それは縁を辿ること。縁を結ぶことができれば、私は相手プレイヤーを引き寄せ

私は続けた。

382 天国のような場所です。私は夢を叶えました。皆さんとずっと一緒にいることで

ないので、許してほしい。これは他の四人にも了承を得ていることだ。 今回、NPCたちに説明するため、一部内容は変更している。嘘を伝える訳では ルベドが吠えた。

のではないでしょうか!?それに夢を叶えたとは一体どういうことでしょうか?そ 「お待ちください!それでは、ナザリックに〝帰らない〟 のではなく、 *"*帰れ

の夢では、永遠に叶いそうにありません!」

全員が首を縦に降ったり、巨大な顎を噛み合わせたりしている。アルベドに同意

私 は頭を横 に降 った。

「私は夢を叶えました。 あの時、 ユグドラシル最終日に……」

「ユグドラシル最終日? マサカ、終末……?」

ていますね?」 "その通りです。アルベド、私とモモンガさんが揃ってここにいた日のことを覚え

ことでございますね」 「忘れもしません。ちょうど、このナザリック地下大墳墓が異世界に転移した日の

い運命でした。私とモモンガさんはそれを憂いて、この場所で終わりを、 ¯そうです。あの日が、ユグドラシルの終わり、最終日でした。それは避けられな 貴方たち

「貴方たち? では至高の存在に害は無いのですね。よかった……」

の

死を見届けるつもりでした」

姿に怒りたかった。自分たちをもっと優先しろと、NPCたちには酷なことを言い 『が痛くなる。自身の身より、いつだって私たちギルドメンバーを想ってくれる

たかった。それは無理だと知っているから、言葉を吐き出したりはしない。

「……あの日、私は願っていました。ユグドラシルがなくならないことを。

383 に IJ いることを」 クが続いて、 モモンガさんとまたログインできる日々を。皆さんとずっと一緒

「それは 広げていた両手を胸の前で組む。 5叶いました。異世界への転移という形で。私の夢は続いた」

劇だと、泣き出すものが現れた。至高の存在の役に立ちたい。願いを叶えたい、 皆、気づいたらしい。至高 の存在の願いが叶ったばかりに天国へ行くなんて。 ح 悲

私にとっては喜びだ。

行ってしまうなんて。

思っている彼らからすれば、

たしかに悲劇だろう。願いを叶えたら、主人が遠くへ

間たちとも会えて、少しだけ遊べた。それに私だけの仕事を手に入れられたのだ。 大好きな世界に転生して、ちょっとゴタゴタしたけれど、モモンガさんや他の仲

仕事が好きになれた。やり甲斐がある。これは幸せなことだ。

です。受け入れてくださいね 皆さん、帰れない私を許してください。 これもナザリックの利益になることなの

「恐れながら申し上げます。行かない、という選択肢はないのでございますか?」

帰れるんじゃありんせん?」 でも……パイン様はしばらく帰れないと、仰ったでありんすえ? いつか

視線がこちらに集まる。私は頷い た。

「最短で五日毎に、数分だけ帰って来れるわ」

「それは帰宅とは言えません!!!」

ちの幸せを勝手に決めて、それを選んで、ごめんね。 のは私だ。ごめんね。ここに残ることよりも、ナザリックの利益を取って、貴方た 悔しそうに、それは悔しそうにアルベドが泣き、NPCたちが泣いた。 泣か んせた

いて耐えていると、モモンガさんが立ち上がった。そして階段を降り、アルベ

ク地下大墳墓側

385 私たちも同じ気持ちだ」

「アルベド、

ド

·о

涙を骨の手で拭き取った。

俯

続いた夢の先

全てを理解したアルベドは、 崩れ落ちた。それを理解できない階層守護者たち

が、デミウルゴスを見る。彼も唇を噛んで耐えていた。 視線に促されて、説明する。

様の使命は、 決定事項なんだよ」

「至高

の御方々がすでにご存知ということは、ご承知であるということだ。パイン

「覆ラナイ、

トイウ事ナンダナ」

「そんな……」

「パインさんが行かなければならない理由が、ある」

威厳ある声が皆の耳に届いた。まだすすり泣きは聞こえるが、かなり静かになっ

た。

「ベルリバーさんの件だ。ベルリバーさんは……もうナザリックに戻られない」

「なぜ、何故でございますか? 私どもが何か不手際を……?」 「そうではない。亡くなられたからだ。復活はできない」

「何という……」

あ

!!

際大きな叫びが玉座の間を包んだ。そのNPCの周りにいたものが、 心配そう

パインがその者の所まで行き、その背を撫でた。

に見ているが。見守ることしかできない。

すために、 しましたが、ダメでした。本当にごめんなさい。……私は今後こういっ 「ベルリバーさんはリアルで亡くなりました。こちらで復活できるように手を尽く 円環 の理に導かれます、そこからギルドメンバーを探します。 た事を無く 誰も、 取

りこぼさないように」

わ

考えたのだろう。そうだよね、帰還できないことは恐ろしいよね。私も、この世界

かってくれますね?そう問いかけると、全員が頷いた。自身の主人のことを

私 はベルリバーさんが手がけたNPCに問う。

に来られなかったと思うと、身がすくむよ。

「……貴方の 願 いを叶えたいと、思っています。何か望みはありませんか?」

ベルリバー様の帰還を。その者は答えた。

387

ナザリ

す。

それでいいですね?」

再捜索はしていませんでした。 私があちらに行った暁には、もう一度探してみま

パインは少し困

った顔をして、

頷 b た。

と頷いた。

主人たちが去り、 しばしの静寂が、い や無が玉座の間を包んでいた。 皆、 それぞ

その中でも、異色の存在がいた。

れ何かを考えており、あるいはぼんやりしている。

パインの被造物、ヘドラと始祖たちだ。

まったく動じていなかったのだ。

一足早く落ち着 いたアルベドが、怪しそうに尋ねた。

「随分、 落ち着いてい るのね。パイン様から、 先に説明されていたのかしら?」

我らは共に円環の理へ行けるのだよ」

「それもありますが、

389

「どうして?」

に連れて行っていただけるそうだ」 「そう。 「私たちはパイン様の被造物、所謂使い魔と同じ存在ともとれる。なので、例外的 離れ離れにならず良かったわね」

「ああ。……今後とも、我らはパイン様に全力でお仕えする所存だよ」

へつづく>

さらば、カルネ村!

をすることもあって、外行きの服装に着替えている。それに、一応カルネ村の代表 れにンフィーレア。重大な発表があるらしくて、それに呼ばれた。普段しな 私は今、馬車に乗せられている。隣村に行くのだ。人数は三人。私と、ネム、そ い遠出

「お姉ちゃん、この馬車全然揺れないね!」

「そうだね、ネム。この馬車って高いんだよね?」

者として来ているから、きちんと着替えておかないとね。

「高いどころじゃないよ。最高級だよ……。多分、王族クラスじゃないのかな」

に飛び上がってしまった。ふかふかのクッションがお尻を受け止めてくれたので痛 正直、村娘にそこまで大層な馬車を貸してくれるとは思わず、びっくりして本当

「そ、そそんなに高価なものだなんて!」 これでもう何も触れなくなった。外にいる執事さんから「もし壊しても大丈夫

くは

な

だ」と言われているが、緊張で唾が喉を通らな の 前 に置かれた水筒ー馬車内でも飲みやすい様にとパイン様が用意してくれ

た、 「エンリ、僕たちは持て成しを受けているんだから、何か手をつけないと。そうし 細工が凝ったものーをじっと見ていると、ンフィーレアが諭してくれた。

ないと、 相手側に不手際があったって勘違いされちゃうよ?」

意を決して、美しい人形が彫られた水筒を手に取る。

「そ、そういう事なら……」

ルと回し、小さな飲み口に唇を当てて飲む。すると冷たい、爽やかな水が体の中に 魔法が付与されているそれは軽く、丈夫だと聞いた。蓋部分に力を入れてクルク これを見たプレイヤーならばこう言っただろう。 それペットボトルじゃん、 ځ

入ってきた。

「美味しい!」

張 り 井戸水とは明らかに違う旨さに、エンリは驚いた。「私も飲みたい」 水筒を渡してやる。一口飲んだ妹も「おいしい!」と喜んだ。

とネムが強

391 「水がこんなに美味しいなんて、知らなかったわ」

う。

カルネ村! 「こっちの果実水も美味しいよ」 ンフィーレアに手渡されて一口飲んでみる。なんてすっきりとした甘さなんだろ

客人たちは村に到着するまで、 しばしの暇を楽しんだ。

隣村に到着した。 ここもカルネ村同様に発展している。 村の周りは木製の城壁でぐるりと囲わ

かった。いくつもの村が合併してできた土地だから、カルネ村の倍以上ある。これ パイン様から派遣された剣士によって鍛えられているらしい。何より村人の数が多

はもう町と呼べるんじゃないだろうか。

門を抜けて少し進んでから、馬車の扉が開かれる。ンフィーレアが先に出て、ネ

ムを下ろし、私の手を取って下ろしてくれた。

ロ見られて少し居心地が悪かった。

から執事のセバスさんが先導して、村の中央に案内してくれた。 道中ジロジ

もしさを感じさせる。体格も良く、現役の戦士だろうと思われた。 い、自分よりも年上の方だ。おそらく五十代だろう。精悍な顔つきと静かな瞳が頼 「私はここで村長をしております。ベルディオと申します。あなた方の事はパイン 優しそうな声だ。そこにいたのは背の高い男性だ。カルネ村の村長よりも年若

393 エモットです。今日はよろしくお願いします」 「エンリ・エモットです。それから村の薬師のンフィーレア・バレアレ。

妹のネム・

様

から任されています」

さらば、

ベルディオはエンリから順に握手をした。

394

その

人は花吹雪と共に現れ

女性として圧倒される。近くから胸の熱を吐き出すかの様に、ため息がちらほらと

そう言われて、やっと頭を上げる。見上げたパイン様はやっぱりお美しい。

同 じ

だ。私たちは慌てて頭を下げた。

「ご機嫌よう、皆さん。どうぞ頭を上げてください」

視界を奪った。風が止むと、あの美しいドレスを着たパイン様がいらっしゃったの リー様です」と言った。台座中央に注目していたら、花吹雪が巻き起こり私たちの

- ムが鳴り、台座の上でルプスレギナさんが「ご到着されました。パイン・ツ

カルネ村! 「さあ、ぜひ前の方へ。もうすぐパイン様から発表がありますからね」 「よろしくお願いします。パイン様に助けられたもの同士、

「そうですね」

仲良くしましょう」

聞こえた。

のたび、私は大切な仕事を任されて、故郷に帰ります。故郷に帰れば、私は村の皆 「今日は皆さんに大事なお話があって参りました。それは、担当者の変更です。こ

さんの様子を見に来ることができません」 衝 『撃的な内容だった。それは、静寂を一瞬で騒めきへと変化させた。

「パイン様が いらっ しゃらなかったら、 ルプスレギナさんが手を叩き、 我々はどうすればいいんだ」

「パイン様が

いなくなる?」

話 混乱と困惑 はまだ終わっていません。 が辺りを包む頃、 静聴するように……失礼致しました、パイン様」 注目を集 めた。

りに、この村を任せる方をご紹介します。どうぞ、アインズさん」 いいのよ。ありがとう、ルプスレギナ。……そこで担当者の変更です。 私の代わ

パインさんが台座中央から少しズレる。すると、中央に半円状の暗闇が出現し 沼を一定方向 に掻き回すように、渦巻くそれは深い闇だ。

ローブと装飾を纏い、 今度は得体 ; の 知 れ ない、恐怖を掻き立てられる。 腕には籠手をつけた。 さらにおかしな仮面もつけているー魔 程なくして一人の 男性 ー高級な

カルネ村! 法詠唱者らしき人物が、出てきた。 男は低く威厳のある声だっ

「はじめまして、皆さん。私は、パインさんと同じくナザリック地下大墳墓の主人、

アインズ・ウール・ゴウンです。魔法詠唱者です」 - ?お屋敷に二人の主人がいるの? 」

396

「構わないとも。そうだよ。ナザリック地下大墳墓は、私たち四十二人の仲間たち 「こら、ネム!」

が作った城なんだ。だから、主人も四十二人いるんだよ」 「そんなんだ。えーと、ゴウン様たちすごい!」

「はっはっはっ!ありがとう」

抜 いた。 ネ エンリは肝が冷えっぱなしだった。ゴウン様が寛大な方でよかったと肩から力を ームが静 !かになったところで、パイン様がアインズ様をご紹介してくださる。

「アインズさんは私たちの中でも、リーダー的な存在の方です。慈悲深く、人徳が

ある方で、仲間たちから愛されています。また魔法詠唱者としても能力が非常に高

繁に皆さんと顔を合わせることは難しいでしょう。なので、これからも連絡役はル 私よりも遥かに物知りなんですよ。 彼はリーダーとして忙しい身ですから、 頻

プスレギナが担当します」 「皆様、これ からもよろしくお願い致します」

物資を適正な価格で売りましょう。皆さんの生活に大きな影響はありません」 「支援や物資に関しては、これまでと同じです。あなた方が求めるならば、労働と

それ を聞 いた大多数の村人が安心していた。もちろん、私だって安心した。けれ

(イン様は私やネムにとって心の拠り所だった。 助けていただいたあの日か

もうパイン様にお会いできないことは悲し

い。

だ。忙しい身でありながら、村に来てくださり。私たち姉妹に特に優しくしてくだ パイン様が見ていてくださると思ったからこそ、日々の生活を頑張ってこられたの

さる様子から勝手に母親のように、姉のように心の中で頼っていた。 そんな方が いなくなるなんて……。 悲しい。

397 ナザリ そこに鐘の音が響き渡った! 気持ちが沈 む。 その悲 しみを分かち合うようにネムと手を握った。

「トロールにオーガだ!数、多数!!!」

訓練されてきた村人たちは一斉に、それぞれの持ち場へと走りだした。

「女、子どもは納屋へ行け!男たちはこれまでの訓練を見せてやれ!」

なんて冷静なんだろう。だが、オーガほどの化け物に、聞いたことがないトロー

ルにも勝てる 私 はついパ イン様を見てしまった。パイン様は私の眼差しに気づいて頷かれた。 のだろうか。

「任された」

「大丈夫よ。

アインズさん、

お願いしてもいいですか?」

そう言うとアインズ様はゆっくり前進され た。

「エンリ、ネム。それと、ンフィーレア、恐ければ私の後ろにいなさい」

「は、はい!」

「はい」

「ぼ、僕はここで……」

私とネムはパイン様の真後ろに行った。 私たち

のやりとりを見ていた女性たちは、 納屋に行こうか、パイン様の後ろに行くか

激

しく打ち付ける音がして、

木製の城壁が外側から破壊された!オーガや、鼻

が 「あなた方は納屋に向かいなさい。待っている人もいるでしょう?ここは、私たち :いるから大丈夫ですよ。-召喚、使い魔たちよこの者たちを守ってやりなさい」

迷

っているみ

たい。

パイン様が手を振るうと、地面からあのカニのモンスターが出現する。 五体のカ

ニが女性たちに付き添う。

「ありがとうございます。主人たちを、どうかよろしくお願いします」

た。

「任されました。さあ、お行きなさい」

女性たちは口々にお礼を言うと駆けていっ

ド ガン!ドガン!

「壁が壊れるぞ!」

と耳 が 醜 でく長 い巨人が村の中に入ってくる。

あ n が トロ 1 ル

「うん、 間違いないよ。 話に聞いていた通りの特徴だ」

「皆さん、さがってください」

るつもりなのだろう。だが、その出番はなかった。 ンフィーレアが構えを取りながら、エンリに解説する。 男たちに魔法的補助をす

アインズさんが最前線に出た。 何の武器も持たず、何も召喚せずにいる。一体ど

00 うするつもりなのだろう。

「グオオオオオオオオオ!!!?」 |まずは入ってきた奴らからどうにかするか。 〈ドラゴン・ライトニング〉|

突きつけた指の直線上にいた敵が、龍のごとく踊る雷撃を受けて体を焼かれて死

ぬ。 「まだいるよな? 中位アンデッド作成、デス・ナイト」

霧が膨 粘着質な闇が溢れ、全身を覆う。数秒後、形が歪みながら変化し、死の騎士が現れ ギクシャクとした動きを見せると、ゆらりと立ち上がった。死者の口からごぼ 黒 い霧が中空からにじみ出ると、心臓を焼かれたオーガの体に覆いかぶさった。 れ上がり、オーガに溶け込んでいく。そして、生きている者ではあり得ない

た。

「オーガとトロールを殺せ」

「オオオオオオ!」 まるで喜びの雄叫びだ。身もすくむような恐ろしい騎士は、オーガとトロールを

無残に殺していく。 男たちが出る幕などなかった。

ク地下大墳墓側 「とても怖かったんですが、アインズ様の命令ならどんな命令でも聞くそうですよ」 「という感じで、凄かったんだよ!」

「パイン様もそうだけど、アインズ様もさすがだよね。とんでもない魔法詠唱者だ 夕方。ゴブリンたちに何があったのか、興奮が冷めないまま話す。

401 が、あっという間に倒されていったのだ。興奮するなという方が無理だろう。

今日、

自分が見てきたものが信じられ

ない。

あんな数のトロールとオーガたち

「そいつはまた、 ゴブリンさんたちは何か心配しているよう。そんな必要などあり得ないのに。 凄い方が現れましたね」

402 さらば、カルネ村! 「パイン様のお仲間だもの、凄い方に決まっているわ」 慈悲深いアインズ様。パイン様とは違う、恐ろしさを持つ御方。 これからも良い関係が築けていけますよう、とエンリは亡き両親に願った。

へつづく>

Ö

て、

同じく力を抜いて私に少しだけ体重をかけてい

. る。 周 ŋ Ó

ソ フ

ア に

は

失う日常

紅茶 た。そしてゆっくり吐き出す。緊張で強張っていた体がゆとりを取り戻していく Ó フル ーテ 1 な香りが鼻孔をくすぐる。 私はそれを深く吸い込み、 肺 を満 た

のを感じた。 私は魔女の館にいる。

今は 最 後の時まで、 休憩中。 昼の第一回目を終えて小休止を挟んでいる。館に入ってすぐの玄関 ナザリックのために金貨を手に入れようと考えたからだ。

ホー た。 ・ル、そこに置か といっても、今はお菓子と飲み物をいただいているだけだが。 :れた応接用ソファにくつろいで、メイドたちから奉仕を受けて 私 の横 には

えて、 始祖たちが、 仕事を与えられるのを待っている。その目は私を捉えて離さず、 ちょっと狭そうに肩を並べて座っていた。 メイドたちは私の後ろに 正直疲れる 控

404 ゲームの設定では、円環の理に導かれた魔法少女は、女神の中で漂っている、らし たく想像できない。 もうすぐ円環の理に召される。それが日常にどのような変化をもたらすの かなり前にちょっとデータを見ただけなので、記憶があやふやだ。 魔法少女まどか☆マギアの外伝、マギアレコードというアプリ か、ま

違っていたら申

し訳ない。

ちらについ

ては分からない事だらけなので、ほとんどへドラとも始祖たちと

間

物が無駄 ξ い らな 情報は共有 いことは、伝えておい になったら申し訳ないな していない。 まったく違うものだったら恥ずかしいし、 いからだ。 ただ身一つで行く場所なので、 準備 荷物は させた

ファにあずけた。 あー、自室の物置部屋を片付けなくちゃいけない。面倒だと、体をぐったりソ 背もたれに頭が乗っかり、視線がちょうと真上を向く。すると、

「あ、そうだ。身辺整理しなくちゃ」

視界の中にメイドたちの姿が見えた。

あ あ そうだ。 最後の思い 出作りをしよう。

休憩後の予定を変更。自室の片付けをします。

魔女の館のメイドたち全員

ねえ、

で大掃除をしましょう」

代表者のクレンチが了承した。

「かしこまりました。皆にそのように伝えます」

「うん。というわけで、残りはヘドラたちでも倒せるように、魔獣のレベルを調整

「承ったよ」

左側 3の肩口あたりから声が聞こえた。その肩の反対側の手ー右手ーを伸ばし、

ドラの頭を撫でた。

る転移門を作動させる。千五百人の侵攻があった時に、メイドたちを逃がすために、 一度使った限りだ。久しぶりに利用するなあ。一度作動させると、次に使えるまで 休憩時間も終わり、私たちは移動を始めた。魔女の館から第九階層へ直通で行け

二十四時 X イドたちを魔女の館に帰宅させるときは、 間 ば かかる。なので、普段は使わないのだ。今日ぐらいはいいだろう。 冷気対策などの魔法が付与された装

405 備品をあげる為、第五階層内を自由に歩ける。 これで、少し歩くことになるが帰宅

失う日常 に問題は

な

第九階層のとある一室に転移する。メイドたち全員が転移したら、外に出て自室

へ向かった。

「あら、ご機嫌よう」 「ご機嫌麗しゅうございます。パイン様」 道中、デミウルゴスとコキュートスに出会った。

「オ会イデキテ光栄デゴザイマス」

「さて、二人はどこか出かけるの?」 二人が並んで膝をつく。挨拶もそこそこにして、立たせた。

「へえ、素敵ね。私もヘドラとデートしに行こうかしら」 「左様でございます。コキュートスとバーに向かう途中でして」

そういえば転移後は、ナザリックの娯楽施設に足を運んでいなかった。彼らの様

子も気になるし、覗きに行こう。

運ンデ頂キタク存ジマス」

「パイン様。ピッキーガ貴女様ノ為ニ、特別ナカクテルヲ作リマシタ。ゼヒ、足ヲ

ク地下大墳墓側 「(項 張

「それならば、ピッキーも喜ぶでしょう。彼には先に伝えておきましょうか?」

「それはいい情報を得たわ!ありがとう二人とも。夜に伺いましょう」

「カシコマリマシタ。ソレデハ御前失礼イタシマス」

「ええ、頼んだわ」

会えてよかった。NPC同士が仲良くしている場面に出くわすと、ほっこりするん 二人は並んでバーの方へ歩いて行った。仲の良い二人が、飲みに行くところに出

「ふふ。 なんだかやる気をチャージさせてもらったみたい。 片付け頑張ろうっと!

だよね

ク 「(頑張れないー!)」

パインは開始一時間で根をあげていた。

転移直後からメイドたちに、ちょくちょく片付けさせていたドレスルームが片付

407 きそうにないのだ。さすがにこれでは嫌気がさしてしまう。

408 失う日常 いてくれているおかげで、やる事がないのだ。 ちな ぶんパインは大した事はしていない。ほとんどはメイドたちがテキパキと働

れ も九割は要る物として再びクローゼット内に押し込められていた。 先程からやっている事と言えば、要る物といらない物の仕分けぐらいである。そ いらない物の

は すべて換金アイテムである。

どちらかと言えば整理 これを片付けとは言わ 一整頓 な

だから装備品とかアイテムはすべて要る。 ^べてのアイテムをギ ルドメンバーと、 換金アイテムはいらないから、 NPCたちに分けてやるつもりなのだ。

えてしまう魂胆なのである。

けて、残りをNPCたちに与えてもらおうか 「これじゃ拉致があかない。 装飾品 が多いが、素材アイテム、自分では使わなかった道具と様々な種類が揃 とりあえず伝説級と聖遺物級はモモンガさんたちに預 な 0

てい る。 意思疎 通が 難しいNPCにも喜んでもらえそうな物だってある。 一人一つ

は必ず当たるだろう。

「喜んでもらえたらいいな」

「喜ばれますわ。 クレンチたちに力強く頷かれる。それが嬉しくて、パインも頷いた。 絶対!」

「よし!喜んでもらうためにも、 もう少しだけやるぞー!」

やればやる気がでる!を、合言葉に作業を続けた。 人数の多さが功を奏したのか、仕分けをメインとした整理整頓は、夜に無事終了

「……というわけで、今日は一気に片付いたのよ?」

ク地下大墳墓側 ナザリック娯楽施設。バー。 カウンター席にヘドラと並んで座る。

「それはそれは、

お疲れ様でした」

でー 互いにグラスを軽く上げてー音が鳴らないようにグラス同士を当てたりしない 飲む。ピッキーが作った、 自分特性カクテルは甘くてジュースのように飲 ぶみや

すく、人にオススメしやすい一品だった。 お酒を飲みに来た人たちには、 物足りな

409

ナザリ

410 うな甘さは私の好みだけれど、飲む人によっては甘すぎるんじゃない?」 「ピッキー、こちらのカクテル。とっても飲みやすくて美味しいわ。ジュースのよ ピッキーがキノコの頭を少し前後に揺らした。

が違いますので、お好みの味が見つかるかと」 法少女、身代わり、魔女の姿の三種類です。それぞれ甘さや苦さ、アルコール度数 「はい。ですので、パイン様特性カクテルは全部で三種類ご用意いたしました。魔

ぎこちなく初々しい。見ている方が照れてしまう。ピッキーは自然な動作で二人を 「あら、嬉しい。三種類も作ってもらえるなんて! 私ってば得しちゃったわ」 ふふふ、と笑ってふざけてヘドラの腕に抱きつく。まだ慣れないそれは、どこか

へつづく>

視界から外した。

ねえねえ、聞こえていますか?「楽しかったんですよ」

「ヘロヘロさーん。おーい」のスライムから少し離れて、私も横たわる。

腐

敗臭が漂ってきそうなヤバイ黒色のスライムが、ぺたんと横たわっていた。そ

ック地下大墳墓側

「んあ……何ですか。寝かせてくださいよ」

ぷるぷると、

揺れる。

視界まるごと真っ白な世界で、黒いスライムとパインはよく目立つ。

さんのところで警護の任務に就かせている。パインは何をしているか? 彼女にし パインは今一人だった。ヘドラはナザリックへおつかいに。始祖たちはモモンガ

411

か できな

仲間探しだ。

い仕事をしてい

今日、ヘロヘロを見つけることができた。それが何を意味するのか、

るパインは瞼をぎゅっと閉じて、胸中に広がる思いに耐える。数秒後、

パインは瞼 理解してい

を上げて仕事を開始する。まず辿ってきた縁を太くして、切れないようにするため

会話を重ねることにした。

ーヘロ 「それは、

ヘロさん、

私ね。とんでもないことを経験したんですよ」

? メイドたちがヘロヘロさんのお世話をしたくて待ってますよ? ずーっと眠れま

すべてを語り終えたところで「一緒にナザリックに行きませ

世界級を手に入れたあたりで、起きかけたが、やっぱ

りう h か

勝手に考えるのだ。

せる寝物語のように。

てい

る。

パインは転移してからの日々を、ゆっくりヘロヘロに聞かせた。ぐずる子供に聞

い人だと思う。優しい彼だからこそ、ナザリックで幸せになってほしい。そう身

それ

でも話を聞いてくれるあたり、

ヘロヘロは半分寝ているため返事が雑だ。

大変ですね……」

すよ?」と誘っ

「眠れるのは……いいですねえ……」

「行きますか ?ナザリック?」

「うーん……いいよ……?」

「……うん。じゃあ行きましょうか」 応肯定してもらえたので、 ナザリックに連れて行く。太くなったー成人男性の

胴 背中の飾りを翼のように広げて、私はナザリックとの縁を辿った。 回りくらいー縁 の糸をヘロヘロに巻きつけて、 引っぱる。

NPCたちと思い出を作ってから、瞬く間に円環の理へ導かれたパインたち。何

界に の前触れもなく、まったく別の世界と思われるこの世界、周りすべてが真っ白な世 転移 していた。あっという間だったが、まあ、心の準備はしていたので。 案

413 どい 外早 い頃合いではあった。 ゕ っ たな」と思うぐらいであった。 部屋の片付けは終わった後なので、ちょう

楽しかったんだ 「いつでも帰れるって言ったし、早速帰るか!」 'かし、急に移動したので、ナザリックはパニックに陥っているかもしれない。

パインの号令の下、すぐにナザリックへ帰還する。大勢で行くと、大規模な魔法

.現れてしまうかもしれない。なので、ヘドラとパインだけがモモンガの所へ

414 行った。(行くといっても方法は転移だ) モンガさんー今はアインズと名乗っているーは、顔を伏せて、その報告を受け きなり現 執務中であったモモンガの部屋に、パインとヘドラが〈女神の助力〉によってい **れた。パインは驚かせてしまった事を謝罪して、導かれたことを話す。モ** 取っ

陣

がが

します」 「こうやって、また会いにきますから。だから、またね。皆さんによろしくお願い

「わかりました。こちらは任せてください。仲間探し、頼みましたよ」

「頼まれ

ました!」

た。

側に

いたメイドーたしかエトワールだーは懸命に涙を堪えているようだった。

厚く 握手を交わす。 もう悲しみは、私たちの間になかった。それからエトワール

を抱きしめて、寂しさを分かち合ってから、

円環の理へ戻った。

楽しかったなあ。

返答に困っちゃう。だって大変だったからさ。もう一回やるエネルギーがないんだ り、少し怯えながら頑張ってきた。あれをもう一度やって?そんな事言われたら、 最後だからそう考えられるのかもしれない。やっている最中は大変で、苦楽あ

対にやる!その人たちのために頑張りたいから。 でも、 大好きな人たちから「もう一度」を、 お願いされちゃったら、やる!絶 ないエネルギーを他所から引っ

下大墳墓です。 それが至高の存在としての仕事だし、大好きな人たちがいる場所がナザリック地

ク地下大墳墓側

張

ってきてドバドバ注いで、

何よりも優先して頑張っちゃう!

よね。

ために、自分が生きていくために、どうか程々に頑張れますように。 ヘロヘロさんにも、これから大好きな仲間たちができるでしょう。その人たちの 頑張りすぎは

415 体にも精神的にも毒ですから、程々にですよ~。

「……みたいな事を言われた気がする」

ヘロヘロはぷるぷると体を揺らした。

況 「うう、ログアウトしたいのに画面に何も映ってない。ていうか、これは、 がが 目が覚めたら、アバター姿でゲームにログインしていました。しかもなんか、状 変です。 視界?

私一体どうなっているんだ」 ナ 、ザリック地下大墳墓、 円卓。 ログインすれば、まずここに来る場所だ。 なぜか

自分の椅子に 座ってい る。

私 は夢の中でパイン・ツリーという友人に引きずられていた。眼が覚めるとここ

に、 ユグドラシルというゲームにログインしていた。

だったりする? モモンガさんたちは俺を起こさないために、別室に移動してたり 「もしかして、サービス最終日なのか? 俺寝落ちしちゃって、ログインしたまま ヘロヘロはやけに冴えている頭ーこんなに調子がいいのは久しぶりーを抱えた。

妙にリアルなゲーム画面はユグドラシルⅡとかなんじゃないか?

する?」

ちを見納めておきたいですよ。それにモモンガさんにも会いたかったですしね。 「ペロロンチーノさんじゃないですか!こんにちは~」 「ヘロヘロさん、こんにちは。……いらしたんですね」 「そりゃサービス最終日ですから。自分が寝る間も惜しんで心血を注いだ、 言外に「以外だ」と言われている気がした。 数年前に引退した懐かしい仲間が現れた。思わず声が上ずる。

作品た

円卓の扉が開

いた。

すけど。どこに行っちゃったのかな?」 「モモンガさんなら自室ですよ~。一緒に会いに行きましょ……。いや、モモンガ ロンチーノさんはモモンガさんに会いましたか? 私は多分、さっき会えたんで

さんに連絡するので、ここで待っていてもらえませんか?」

417 「シモベ……?」 ゙シモベたちが混乱するからですね」 なんでですか?」

んだ

そんな名前のNPCいたっけ?

	4~	,

h	2	た	









「モモンガさん、ヘロヘロさんが帰還しましたよ」

考えている間に、ペロロンチーノはモモンガに〈伝言〉する。

418

〈おわり〉



感謝と謝罪とか言い訳とか。

王様のいないナザリック、これにて完結いたしました。

んじゃない? とも考えたのですが、無駄に増やしてしまうよりかは、今のスッキ

あまりにもあっさりと終わってしまった気がして、もう少し文章あった方がいい

リした文章で投稿してしまおうと、考えました。 スッキリさせすぎてませんよね?大丈夫かな?とか考えながら、投稿させてい

ただきました。

そして、はじめて連載作品を完結できてめちゃくちゃ嬉しいです。 これも読んでくださっ方、評価してくださった方、誤字脱字報告してくださっ

た方、ここすきを押してくれた方、感想をくださった方、お気に入り登録してくだ

さった方……たくさんの方々のおかげで完走できました。 心より御礼申し上げます。

感謝と謝罪とか言い訳とか。 した。ここまで頑張った作品を完結させたかったからです。 ので、ご存知 他作品になって申し訳ないのですが。次の連載は [F です。すでに投稿してある おかげで自分にとっては怒涛の更新祭りとなり、少し楽しかったです。 2020年に入ってからかな ? やる気がなくても頑張って書くようにいたしま の方もいらっしゃるかもしれません。

よろしければあちらも見てくださると、 いぞ下、増えろ⊠ たいへん嬉しいです。

†ココから謝罪と言い訳タイム †

CPについて語っております。腐要素含みます。

読んだ後の苦情は受け付けておりませんので、気をつけてください。 みにこれ†は、「ダガー」と打つと出てきました。十字架では出てきません。

面白

. . .

なあ。

↑では、どうぞ↓ ↑

ク地下大墳墓側 なんてこった。

帰ってきた年にはすでに、

熱が収まっておりました。

するとどうでしょう。

まあ、熱は収まっただけで、今も好きなCPです。

時2017年は、私「デミコキュ」にどハマりしておりまして、書く気満々でタグ

全く書けてませんね。すみません。「王様のいないナザリック」を書いてい

た当

*デミウルゴス×コキュートスのタグについて。

を入れました。

421 んで書かないんだ。書けなかったんだ。 う日常」で書いた、バーに向かう二人がそうです。あの時点で付き合ってます。な というか、表現できていないだけで、二人は付き合っているつもりでした。「失

感謝と謝罪とか言い訳とか。 と考えておりましたが。当初の予定通り、 この作品が原作 4巻まで進んでいたら、デミコキュの部分を少しは出せるな~ 3巻までで終わりましたので、デミコ

キュは書けませんでした。

今からでも書こうか悩んでおります。

422

もし「読みたい!」と仰ってくださる方は、ぜひ教えてくださると嬉しいです。 よろしくお願いします。

氏、

何

恋のススメ

こぼれ話

*モモンガさんたち帰還前

「はい、その通りでございます」

「私に恋愛相談?」

ナザリック地下大墳墓、スイートルーム。

パイン・ツリーの自室にて。執務室の応接用ソファにアルベドを案内した。 夫なんて存在はリアルで作れなかったからだ!良いアドバイスなんてできる の用事かと問えば、先ほどの言葉である。 私は冷や汗を流した。 なぜなら彼

るーアルベドに質問した。 気がしな 内心 の動揺を隠しつつー今日は魔法少女の姿なので、表情でバレる可能性があ

「どうして私なのかしら? 同じ女だから? それとも……」

「パイン様が、私とモモンガ様の恋のキューピッドだからです!!!」

っ こ の やっぱ ナザリ りー!!! ッ ク地下大墳墓が異世界へと転移する少し前、パイン様の御言葉に

よってモモンガ様は、新たな私へと変化させました。その時にされてい た お話 0) 内

容はよくわかりませんが、お二人に望まれている事はわかります。

私はモモンガ様

を愛しております!!!」

さんと二人で対処する予定だったのに。一人でやるなんて聞いてないよ! モモン ばっちり覚えてますよねー! フンスフンスするアルベドに微笑みかける内側で、頭を抱えた。これはモモンガ

いつかはアルベドと膝をつき合わせて話さなくてはならない事だった。 ならば今

ガさんどこ行ったの!帰ってきて!

修正できるはず。やってやろうじゃないの!友のために! !そう今!モモンガさんがいない内に、アルベドの暴走をやんわりと "普通』に

私は深呼吸して、己に冷静さを取り戻した!

「あのね、アルベド。それほど理解してくれているなら、お願いがあるの」

「お願いで、ございますか?」

「そう。それはね、二つあります。一つ、段階を踏むこと。二つ、モモンガさんを

「……なぜ、でございますか? 私はモモンガ様のお呼びとあれば、いつでも準備

惚れさせることです。なぜかわかりますか?」

「一方通行になってほしくないからですよ。一方通行では幸せになれません。二人

はできておりますのに」

変えておきながら、都合の良いことを言ってしまって、ごめんなさい」 にはちゃんと両思いになってから、結婚してほしいと考えています。……あなたを

425 こぼれ話 も長くも 頭を下げる。アルベドが「頭をお上げください!」と慌てはじめる。 な い時間を経てから、頭を上げた。アルベドと、部屋にいたメイドが明ら 私は

かに安心している。

止めとうございます。……私には、モモンガ様の愛を得られる可能性があるんです の。だから愛するように、お二人に変化させていただいたのです。頑張りますわ

「そういうことでしたら、パイン様の言う通り、段階を踏んでモモンガ様の愛を射

心が綺麗になった!心の更地にアルベドを応援する島(とう) ぐわー アルベドが屈託なく笑う。美女の美しい微笑みに私の邪な心は消え去った! が誕生した!

「相談でもなんでも乗るからね。言ってちょうだい」 パインは猛烈に、この可愛い悪魔を応援したくなっている。

ながら、もじもじと両手を擦りあわせる。 「でしたら、段階の踏み方を教えていただきたく思います」 心の中の滾りなど表に出さないように、にっこり笑う。アルベドは頰を蒸気させ

い 「段階 . の か の踏み方を? そんなに難しい事ではないと思うけれど、具体的に言えばい

「はい。どのようにして、ヘドラ・ファンタズマと段階を踏まれたのでしょうか?」

びしてただけだし。 あ ^ー、私とヘドラの場合ね。ゲーム時代の話なら、 相手の都合なんてないから、好き勝手にあちこち連れ回しただ 簡単だよ。ただ単にお人形遊

「私たちの場合は、そうですね。まず少しだけ話すところから始めました」 なんて回答はしちゃダメだ。ここは、あの時自分が考えていた設定を話そうか。

けだよ。

少しだけ、 でございますか?」

けでは りません。逆に、私はヘドラの創造主だとしても、ヘドラのすべてを知 「そうです。 ありません。他人なのですから、当たり前ですね。ですから、まずは相手が いくらヘドラが私の被造物でも、私のすべてを知っているわ って け では い る あ わ

何が :好きか知ることにしました」

「至高の御方は……皆様、我々の考えなどお見通しかと思っておりました」

こぼれ話 「私たちにも、 思わ ず笑みが深 知らないことぐらいありますよ」 くなる。

427 「相手の好きなものを知ったら、今度はそれらを試してみます。 ル ベドは 何度も頷 いてい た。

次、

喋るときにい

お互い

たり前だけど。 「長く話すようになると、一緒にいることが当たり前になります。そうなれば、デー 脳内でお人形遊びの会話だから、よく弾んだな。あの時はどちらも自分だから当

ら? お互い 誘 います。 います。 に緊張していて、口数も減っているから、そのぐらいが アルベドはモモンガさんを助ける秘書的な地位にいますから、外の視 はじめての時は短い時間を心がけてください。 二時間ぐらい ちょうどい か

「なるほど!その様に誘えば、自然ですね!」 い つの間にか取り出したメモ帳に書き込んでいる。ネットで得た知識だから、そ

察を兼ねて、

護衛付きで出かけることもできるでしょう」

やって持論として書き込まれるの恥ずかしいな。

トを重ねたら、段階を踏 みます。 一般的には手を繋 いだり、 キスをします

ね。ここで恋人関係になることが多いと思います。 私たちはしませんでしたけど

429

ね…」

「なぜ、なさらなかったのですか?」

「恥ずかしくてできなかったし、誘えなかったの」と、小声で話した。実際には、 ユグドラシルのルールで禁止されていたからです。とは言えないので、適当に

なったからだと、 ゲームがリアルになってからは、ヘドラをぐいぐい誘っているが、それは夫婦に 言い訳できる。

言 い訳すると、アルベドが「まあ」と微笑みを、浮かべた。美しい、笑みだ。 心

に朝日が差し込むようだよ……。

幸せ。

ちゃったけれど。たくさんデートしたのよ? 主に魔獣を倒す、実益を兼ねたもの 何十回もデートを重ねてから、 結婚ね。私たちは何十回目だったかなあ。忘れ

だったけれど、多くの時間を彼と過ごしたわ。とっても楽しかった」

「そう。ふふ、照れちゃうわね」「ほぅ……素敵ですわ。パイン様」

こんな惚気話なんてする事 がない からめちゃくちゃ恥ずか しい。

それに、これ以上話す事がないので、アルベドに最後のアドバイスを送った。

得られれば、

作戦を立てやすくなると思うの」

話を聞くといいと思うわ。私とは違う話が得られるでしょうし、男性からの視点を 「私からの視点もいいけれど、どうせなら同じNPCという立場のヘドラか

「それで訪ねて来たんだね」

魔女の館、 ヘドラの執務室にて、アルベドは歓待を受けていた。

つ食べてみた。歯ごたえは柔らかく、後味がすっきりしており食べやすい。出され パイン様からいただいた特製レシピだという茶菓子を振舞われる。クッキ

「あなたは、当時どうだったの? パイン様とたくさん話したのでしょう? 」 ^{*}ああ、話したよ。主に本の話とか、パイン様のリアルでのお話を聞いたよ。どれ

た紅茶によく会っていた。

も貴 わかってね。 重 な お話で、楽し 面白かった」 かったな。話せば話すほど、 お互いに違う生き物である事が せるようになった」 ピースのようにぴたりとはまれるから〟という言葉をいただいてからは、違いを愛 ⁻なりたかったよ。だが、パイン様に *"*私たちは違って良かった。まるでパズルの

「違う事が面白い ? 同じになりたいとは、思わなかった? 」

「……その日、その瞬間、相手に望まれているかなんて、聞いてみなければわから 「相手に望まれていても?」 「できるわけないだろう!!我が創造主に対してそんな、浅ましい!」 「ところで、あなたからキスとかしなかったのは何故なの?」 「ああ、パイン様。やはり素晴らしい御方だわ」 充分に祈りを捧げてから、二人は会話を再開する。 アルベドは祈るように両手を組んだ。 ヘドラは右手を胸に押し付けて、天井 を仰

431 こぼれ話 「どういうこと?なぜそんな事を言うの?」 ヘドラにとって恋人関係の期間は何か不都合でもあったのだろうか? ああ、あの頃には戻りたくない」

イン様の愛をいただく度に、その日の夜怯えていたよ。 わからないのか? 恋人関係のときはいつ切られてもおかしくなかっ いつ切られてもしまうんだ た。 私 にはパ

恋のススメ ろう、終わってしまうのかとね」

「そんな……」

432

り恐ろし

ルベドは い物物

両

腕

でその柔らかで頑丈な身を抱きしめる。

心が寒かっ

た。

「いつでも切れてしまう。それが恋人関係だよ」

幸せからの転落、絶望を想像して悪魔は震え上がる。

この世に至高の存在の死よ

があるなんて思いもよらなかっ

た。

温かな幸せだけを享受しているよ」

見せた。

結婚さ。

夫婦。

永遠を誓う愛。これをもって、私の悪夢は終わりを告げた。今は

「続きとは、なんなの?」

ドラが紅茶をすすめ

ر خ ه

「脅かして悪かった。さあ一杯飲んで落ち着いてくれ。この話には続きがある」

言われた通り一口飲み、心を落ち着かせた。ヘドラは長い指にはめられた指輪を

〈おわり〉

「……そうすれば救われるのね。途方もないように聞こえるわ」 そう考えて、左手の薬指をさすった。 自分はいつ救われるのだろうか。 その声は穏やかで、本当に救われているのだと理解できた。

魔女の館、メイドたちのメモ。

魔女の館内 (のメイドたちについてのメモです。 実は色々考えてい ました。

メイド長を含めて全十二名で館内を清掃したり、 館を訪れる客人をもてなす。

[設定]

ある。 1 魔女の館内のメイドのリーダーは、彼女たちが話し合い、投票した結果で

逃げるため、 メイドたちは緊急時 走ることに特化した「ランナーし・1」を修めている。 (ナザリックが侵攻をされるなど) の時は第十階層へ

*クレンチ

メイド長。名付け親はやまいこさん。プレアデス副リーダーのユリに憧れてい

前髪は左に分け目を作り、 全体を頭の後ろで三つ編みにしている。

る。

*ウォルポ

に使っている。 髪を後ろの下の方で二つくくりにしたメイドさん。パインがあげたリボンを大切

*ナットラン

美容師程の器用さがある。たまに細かい三つ編みを結って、お団子を作っている。 髪の左側でお団子結びをしているメイド。実は髪をいじることが趣味で、プロの

*パーレ

Ł 名付け親は餡ころもっちもちさん。セミロングの髪型。名付けてくれた、 ちもちさんの造ったNPCたちに会ってみたいと考えている。転移後は、パイ 餡ころ

ンのおつかいで館を訪れたペストーニャに会えている。

の右に出るものはいない。

ては彼女

* レ

スコ

1

ĸ

髪をすべて結い上げ、 お団子に結んである。 綺麗好きな性格であり、 掃除におい

436 姉 つ 妹。 か *エアレン お 会 エアレ いして、 ンが 姉。

名付け親はぶくぶく茶釜さん。 茶釜様のことが聞きたい。 アウラとマーレに勝手に親近感を抱 髪型はおか っぱ。 下記のエアハンとは いて V る。 い

名付け親はぶくぶく茶釜さん。前髪の右側を垂らし、 あとはまとめてポニーテー

米エアハン

の方に恐れ多いとも思っている。 ル にしている。 エアレンと同じくアウラとマーレに親近感を抱いているが、守護者 エアレンの妹。 姉妹仲は良好。

やっている。

* パライバ

髪を中央で分けた、セミロングの長さ。館のメイドたちの間では一番身長が高い。

*ドミル

間 たちのムードメーカー的存在。噂が好きでおしゃべりも好き。 3 ートカット。活発そうな見た目をしている。見た目の通り活発な性格で、仲 一番第九階層のメ

*オーサーンダ

イド

・たちと仲が良いらしい。

力している。 名付け親はモモンガさん。モモンガを尊敬しており、慈悲深く、賢くあろうと努 おかげで図書館に通うメンバーとは仲が良い。図書館に通うマーレ

とも仲が良い ため、エアレンとエアハン姉妹によく捕まっては、その時の話をして

*ディランダ

大人しい印象を受けるメガネっ娘。 髪はロングと長め。 食事 の時間が一 番

みという設定のため、ご飯が一番好き。

誰よりも美味しそうに食べる。

の楽

魔女の館、メイドたちのメモ。 名付け親はウルベルトさん。 *ノータル

髪型はハーフアップ。面倒見が良い性格で、

木

ーって

ギ ス

438 新人のツアレとよく話をするため、 いるメンバーは放って置けない。実は、いつか仲間になるツアレ みんな仲良し。 噂好きのドミルとよく話をするようになった。 の面倒も見ちゃう。

(おわり)

439

その

時から、

*デミ コキ . ユ 。

赤い君と青い君。

* ほ んの り 。

*短

め。

本編では表現できなかったので、番外編で。

アイスブルーの彼を意識し始めたのは、ナザリックが異世界に転移してからだと

思う。それまではただの仲間であり、 同僚だった。

パイン様に第六階層に呼び出されたとき。

久しぶりにコキュー

トスに会った。

彼

のだ。 の目に私が映って、彼の世界に私だけがいればいいのに、 なんて考えてしまったも

仲間たちとの会話の中で、 何度も彼を見てしまったものだ。

彼を強く意識し始めた。

赤い君と青い君。 休息さえあれば、いくらでも働きたかった。 ように命令が下った。休暇なんて、至高の御方に使える上で無用のものだ。 パイン様が休暇を私たちシモベに与えてくださり、第九階層の娯楽施設を楽しむ

440 スに会いに行けるのは悪くない。 パイン様は休暇を楽しめと仰られた。ご命令通り しかし、なんの理由もなくコキュ 1

たまに

動こうでは

ない

キュ 寒さは と、多少動揺されるが挨拶を返してくれた。彼らもコキュートスに似て、気のいい 第五 トスの部下たちとすれ違う。コキュートスの好感度上昇を狙って挨拶をする 感じない。 一階層を歩く。 というより、 白 い雪の中では、私の赤いスーツは非常によく目立ってい 耐性を得ているので自由に動けるの だ。 た。 コ

(私の考えなど知らず、 可愛らしい……)」

戦士たちなの

かもしれない。

か、それとも「悪魔だから」と受け入れてくれるだろうか。加虐心がそそられるが、 の笑みの裏側を覗 かせたら、どんな反応をしてくれるだろうか。 軽蔑 か、 恐れ

今は ない。私は、この薄暗いものが彼らに気づかれないように片手で口元を覆っ コ キュートスに会いに行こう。小物に手を出して、本来の獲物を逃してはなら

に用件を伝えると彼女たちのうちの一人が大白球の中へ消えた。 十分ほど進むと、彼の居城の大白球ースノーボールアースーに到着した。雪女郎

「少々、 お待ちくださいませ」

「ああ、

待つとも

入り口で数分待つ。 コキュートスが雪女郎を連れて出てきた。

「やあ、こんにちは。 コキュートス、会えて嬉しいよ」

める。表情はわかりにくく、計ることはできない。 同じ気持ちかい?とは言えず、自分よりも高い位置にある計六つの瞳を眺

「何ノ用ダ、デミウルゴス」 連れないね。君に会いにきたのさ。なんて、それだけでは児戯だ。最高の悪魔に

こぼれ話 造られた知恵者は、スマートに目的を達成する。 君を誘いに来たのさ。今日、私は休みでね。よければ私と第九階層へ出かけない

441 かい?もちろん、 君が良ければだが」

悪イガー人デ行ッテクレ」

君が鍛錬を趣味にしていることは知っているとも。私が対策を練らなかった訳が

442 赤い君と青い君。 な 悪魔 彼は i だろう? は いつも所持しているハルバードを軽く上げてみせた。 6仲間

仕方が そう か な い。 い?残念だよ。せっ に見せる微笑みを絶やさない。 また今度誘うとしよう」 かくパイン様のご命令が達成できると思ったんだが、

「何って、ついこの間パイン様が仰られただろう? 休暇を楽しめ、 待 何 ノ話ダ?」 と。 だから第

「ソレナラ、一人デ行ケバ良イデハナイカ? 何故、私ヲ誘ウノダ? 」

九階層の娯楽施設へ行こうと思ってね」

は 楽しむため、だね。楽しみは、一人よりも二人の方が数倍膨れ上がる。 私 と同 ...じ階層守護者で、男性だ。成人済みでもある。 共通点が多いため、会話 それに君 が

ŋ 弾 みやす 、より楽しむ。 ĺ١ んだよ。 ためには君の力が必要なのだよ。 つまり、 より楽しさが増すということさ。 君にとっても悪くない話だと パイン様のご命令通 リッ

クの

副料理長

であり、このバーのマスターである。

思うんだが、どうかね?再考してはくれな 共ニ第九階層へ行コウ」 いかね?」

「フム、ソウイウ理由ナラバワカッタ。 誘いは上手くいった。

悪魔はさらに笑みを深めた。

昼 蕳 .から飲む酒は美味い!」と言ったウルベルト様をならい、私たちは副料理

い ・らっ Þ いませ。 デミウルゴス様、 コキュー トス様。 私のバーには初めてでい

長

の

バ

1

へとやって来た。

らっ 「こんにちは、ピッ しゃ いますね キー。 お邪魔するよ」

「失礼スル」 ノコの頭部をした人型の異形種が、カウンター内に立っている。彼こそがナザ

443 高 い椅子だが、このくらいは滑らかに座れる。 バ に は私たちし か い ない。 私とコキュートスはカウンター席に座った。 彼は身長が高い分難なく腰を下ろし

少し

赤い君と青い君。 た。今のは紳士らしくない。反省すべき点だ。ぜひ改善するべきである。 デミウルゴスはそう考えてから、こっそり服の上から太ももを痛いぐらい指圧し

「(この小さめの椅子に座れるぐらいの大きさか……)」

444 「かしこまりました。……デミウルゴス様は、何になさいますか?」

その間にコキュートスは注文を終えたようだ。

「ナンダ、ソレハ?」

「そうですね。では、トリアエズビールデ」

杯にビールを頼むんだよ」

「至高 の御方々がよく仰っていた、そうだね、合言葉のようなものさ。はじめの一

「フム。ソンナ言葉ガアッタノカ。副料理長、変更シテ私モビールヲ頼メルカ?」

「かしこまりました。お二方ともビールですね」

が注がれたグラスだ。二人はそれを持ち上げて、掲げる。 ビールは三分もかからず、デミウルゴスたちの前に出てきた。五百 m ほど液体

「乾杯」

二人は静かにビールを飲んだ。 濃い苦味が喉を通っていく。

「いい喉越しだね」 「乾杯」

「ウマイナ」

「ありがとうございます」

と考えていた。

デミウルゴスは、これがウルベルト様が仰った昼から飲む酒の味なのだろうか、

しか 特別感はない。 至高 の存在はどんな気持ちで酒を味わっ たのだろう

酒の味自体はナザリックのバーに置くものとして相応

しく、

美味

「コキュートス、どうかな。 昼からお酒を飲む感想は?」

聞きたかった。その欲求をコキュートスに渡してみた。

か、

ダ?

- 普段ナラ稽古ヲシテイル時間ダカラナ。非日常的ナ特別感ガアル。ソチラハドウ

こぼれ話 445 「なるほど。 「パイン様ガ、 ル ト様はどんな気持ちだっ 私も昼から酒を飲んだりしないが、特別感はないね。さてはて、ウル ゴ存知デハナイノカ? 御方ハ多クノ至高ノ存在ト交流ガアッ たのか、聞 いてみたいよ」

タト

コキュー

へおわり〉

原作 :ナザリックとの違い。

·アルベドの姉であるホラー担当NPCが外に出られる&ホラー演出にプラスし

て、廊下へ出ても追いかけてくる演出追加された。やべえ。 →アルベドに自室がある。 9 階層にあるらしい。ギルメンよりの部屋。スイー

トルームほどでないが、守護者統括に相応しい広く豪華な部屋。ドレスなど服も多

→休暇について。

1人になりたくて週1回ほど休暇を作る。

暇とは ことである」と自由を求めた。というか、人間の精神で常に誰かに張り付かれるの セバスとメイド長、アルベド、デミウルゴスには伝えてある。反対されたが「休 いたせりつくせりに世話を焼かれる日ではなく、我が心の赴くままに過ごす

は 無理。マジで1人になれる日を作らないと爆発する。 心の赴くままを助けるためにメイドを~と反論されるが、1人でやってこそ意

447

味がある。 と、 キッ

パ

リ断る。

「ないよ」 我らに不備があったか?」

「ならば!」

「孤独を愛しているから1人になりたい。 お願い。」と頭を下げられて、 動揺した

NPCから休みゲッ

<u>١</u>

護衛 は召喚したシモベを使う。

図書館行って読書、 休 みの日は支配者ロ 映画、 ールの練習、 ヘドラへのラブレターを考えたり、ヘドラとデートした ナザリックの商業施設でリフレッシュ、昼寝、

り館で魔獣退治したり。

【もしも、パインが魔導国ができるまでいたら】

り余るアイテ そのうち、国造りのあとお金が必要になる。→より異世界のお金を稼ぐため、有 、ム……お茶とかお菓子などの新しいレシピを料理長、副料理長たちと

たまに、刺激のため他NPCが呼ばれる日もある。

考えている。

と

あまり悲観していない感じ!未来を信じているかも!

作ったお菓子は、たまに広場で有名になったウルベルトが食べて宣伝する。 すでにシャルティアとエクレア、ユリ、セバスがそれぞれ呼ばれている。

ピを見つけた香水、ナザリック及び魔女の館でポイント交換できる価値のない宝飾 商人チームのセバスとソリュシャンが販売するのはルーン武器とパインがレシ

品。事業拡大の一環として飲食業、紅茶も楽しめる、お菓子屋さんを考えている。

商品 る。 料 採用 理長 に なる。 ざれ 、たちと考えたレシピは、一般メイドたちに食され、高い評価を得たものが また、ナザリックの僕を含む者達からもレシピは応募することにな れば簡易的な賞が渡されるのと、発案者が発表され、 ちょ っとした物

がプレゼントされる。固有名詞がなければ名前をプレゼントされる。

【ところで、第1話で終末を迎えるって言葉使っているけど大丈夫か?】

ちがNPCに反映されるなら、設定変えたときのモモンガさんはナザリックがこれ からも続く幸せを願い、友人がいてよかったな~と喜び、これからも楽しくなるぞ パインが、アルベドとモモンガさん推しだけどどうかな。もし作ったときの気持

ならば、

アルベドも溜め込み過ぎない感じ?

450 性格明るいかも。 →NPCたちへのプレゼントについて。

2人でNPCたちに会いに行っている。恋人のときは、付き合った日を祝った。

十分にラブラブだと知っているので、NPCたちはパインがヘドラ以外の人物を

ドラシル時代に寝巻きやら私服を渡して、ギルメンとファッションショーしたり) が、プレゼント時にどんな反応をするか見たくて、アイテムを買いためてた。(ユグ

服を持っていないシモベたちに服をプレゼントする話。ゲーム時代にもしていた

プレゼントをしたい。私室を片付けつつ、やっていく。

パインは結婚してから、結婚記念日にはヘドラにプレゼントをしている。そして、

選ぶことがないと知っている。

噂され、何日も引きずった。ヘドラは数種類の人に変身できるので、勘違いされた

ちなみに、城下町となったエ・ランテルで「魔女王様には旦那が何人もいる」と

結果。誤解は少しずつなくなっている。

ドレスルームが倉庫部屋になっていて。クローゼットも物も溢れかえっている。 →パインの私室。

仕事を探していた。彼女たちにお願いする。

扉を開けると、アイテムが壁のように積まれていた。たしかプレアデスメンバーが

この部屋以外にも倉庫化しており、彼女たちの仕事はしばらくなくならない。

パインとメイドたちの日常。

ナザリックごと異世界転移して 1週間。

452 うか。時々、罪悪感に苛まれるが、考えてもどうしようもないし、体を動かそう。 を見る。 顔を横に動かして、ベッドサイドテーブルに置いた球体でピンクの目覚まし時計 ぴったり6時だ。文字盤の色が金色に淡く輝いているので、午前6時で

モモンガさんは見つからず。それでもぐーすかと 7 時間ほど眠る私は薄情だろ

身体中をぐっと伸ばしてから、ゆっくりと起き上がる。今日もナザリックの支配

ある。

者ロールを頑張ってやりましょう。

、ウェ ット生地の着心地良し、 動きやすさ良し、寝やすさ完璧なパジャマを

脱ぎ、 昨 夜 いから用意していた部屋着に着替える。

部屋着は白 l T シャツにジーンズだ。また後で着替えるので、 服装は適当である。

途中でアラームを消していなかった事に気づき、目覚まし時計に声をかけた。

こぼれ話

453

け、

「鳴るな」

「りょ」

今日の返事

はそれか。

ない だ。シンプルな外見なのに、塗装がピンク色で派手に感じる。このギャップは萌え ので好みのアイテムではないが、ある一点について大変便利なのだ。 の凹凸が はない美しい球体の目覚まし時計は、ユグドラシルで売られていた物 それは、

午前

と午後が一目

かること!文字盤の色が、午前ならば金色に淡く輝き、

午

後ならば

銀色に

輝く。目でわ

いし、 有難 ij ッ い。あと、この文字盤の色が金と銀に変わるっていうチョイスに萌えて ク地下大墳墓に住むなら、こういう時間が把握できるアイテ ムは 欲し

買った。いいぞ、金と銀はイイぞ。主に超人で兄弟的な意味で。

セッ な するなら「アラーム、午前 (または午後)、××時米米分にセット」と話 みに補足を加えさせてもらうと、この時計は音声認識 である。 アラー しか ムを

アラームを消したいならさっきみたいに「鳴るな」―「アラーム消去」でも可

能

―と命令すればい

い。

よ」と長台詞をはかれ、不意打ち胸キュンとなった。 返事 ・た昨日は男性の声で「セットしたぞ。 早起きなんだな…あんまり無理するな ù 毎回違い、今回は女性の声で「りょ (了解の略)」だった。アラームをセッ 無機物萌えが加速した。擬人

化?ありのままの君が好きです。性癖的にはね。

機済みだろう。早く済ませな 着替え終われば、ワクワクドキドキのくじ引きが待っている。そしてみんなも待 いと。

454

れた»洗顔セット»に手を伸ばした。これは、水が入ったピッチャー、桶、タオル、 寝室に唯一ある、硬めの革張り一人用ソファに座り、目の前の長テーブルに置か マは脱ぎ捨てたまま、ベッドメイクもせず身支度を整えるべく、移動する。

石鹸、化粧水など…まさしく洗顔、その後に必要な物が揃ってい 終わった後は髪に櫛を通す。この体になってからは寝ぐせなんてついたことがな る。

い ・ので、 お楽しみはこれからである。 簡単 上に済 ť 以上で、 寝室を出る準備はお終い。 ⁻左様でございます」

セリアーヌ、

正解は

?

「やっぱり!」

き終わるまで、君と同じ瞳をしていたよ。 する。 仕事机の前に整列し待機していた。 メイドさんのハズだが、目が猛禽類のように鋭く獲物を待っているような気が 「おはよう、 「今日の護衛メンバーは……魔女の館から来たのかな?」 「おはようございます。パイン様」 代表で、 他のNPCをぐるっと見渡す。 セリアー くじ引きでフルコース狙っているんだろう。 まずメイドのみが声をかけてくる。 ヌは第9、 セリアーヌ」 10階層の

メイドで、今日初めて私の世話役につい

た。

可愛い

昨日も、

一昨日のメイド達も引

寝室から扉を開けると、

、執務室に出る。

すでにメイドが一人、複数の護衛たちが

いてくれるの 「お はよう、皆さん。えーと、あなたは門番の一人……一体だよね? 今日は かな?」

だ。 「おはようございます、パイン様。今日は、ヘドラ様の命により御方の下へ参上す 最前 :列にいたクワガタ型の僕、その特徴から館から派遣されたのだとわかったの

全うする所存でございます。今日は何卒、よろしくお願い申し上げます。」

る幸運を頂戴しました。一日だけではありますが、この命にかけても必ずや使命を

456

「はい!」 「うん、うん!期待してるよ、 みんな宜しくね! 一緒に仕事頑張りましょう! 」

意気込みもやる気も充分だ。みんなが嬉しそうだと、私も嬉しいよ。

さてさて、士気が高まっている内に始めましょうか!

「では、朝のくじ引きからいきましょう! セリアーヌ、準備はいいか な?

張り上げる声、女性らしい細めの体から滲み出る闘気 ! くぅ~、 わくわくして

「もちろんでございます

!

きた

ある。 たっぷりと御奉仕させていただきます!」 で、心境はあまり穏やかではない。しかし、逆にそれ以上はされないので安心感が てメイドたちがどれだけ仕事できるかが書かれている。 三十センチ四方の正方形に、様々な内容の四十一枚の紙を入れている。内容はすべ 「はい! 私は必ずや朝のお世話ふるこーすを掴み取ります! そして、パイン様に 「今の意気込みを聞かせてくれるかな?」 「朝のくじ引き」とは、私がメイドたちとの交流を目的として考案した物である。 なるほど。…この朝のくじ引きを導入して、今日で 3日目。まだ誰も手に 彼 女たちの仕事内容が多くなればなるほど、私のプライベート空間がなくなるの

こぼれ話 ッ い 朝 メイキング»を手に入れたセリアーヌは、このまま幸運を掴みとれるかな のお世話フルコース。はたして、昨夜のくじ引きでは»パジャマの片付け

457 ?さあ、 いきましょう!目が離せない!この一瞬に!」

認する。目がぱあっと開いた。

「やりました!ふるこーすでございます!」

ドラムロールもそこそこに、セリアーヌはくじを掴み腕を引いた! すかさず確

自分の事でもあるので、彼女がくじを引く瞬間をしっかり見守る。

「おめでとう!セリアーヌ!」 セリアーヌは飛び上がって喜びを表現した。右手には四角い小さな紙にフルコー

朝の洗顔も、手入れも、セットも、着替えもすべて彼女がやってくれる。 つまり、今朝はパイン自身ができることは何もない、ということだ。 ありが

458

スと書かれている。

たい事だ。 「それじゃ、 洗顔からお願いしようかしら」

「はい!必ずや、素晴らしい働きをご覧にいれます!」

へおわり〉

ちょっと少なめですが、楽しんでいただけたら幸いです。 シリーズメモ第2弾。

シリーズメモ2 少なめ

料)(余りまくってる)が食べられる。 メイドたちへのご褒美。パインが死ぬほど集めた期間限定イベントアイテム(食

て良い評価を得ている。 期間限定イベントアイテムは伝説級のお菓子だと噂されているので、ご褒美とし

こぼれ話 別案で「パインは、実は別のギルドに所属していた。→それがなくなってAOG の別設定」

に加入した」というのがあった。 「別ギルドの設定」

459

「別ギル

ドの拠点」

いたら、パインは竜のひげのギルドメンバーと異世界転移していた可能性がある。 に殺されたくないので隠している。二十名前後所属している。このギルドが残って ルド名:竜の うひげ。 オバロであり、AOGファン (転生者たち)の集い。 アンチ

460 リアを移動できる。 拠点名:ウ オー・タートル。バカでかい亀。山のように大きい。亀を動かしてエ 亀は制御不能。海辺で小さい亀を千回以上助けると、 この亀と

バ

ŀ

ル

が ル

勝てば拠点を得られる。

別

ギ

ドの できる。

N P C

メ イ ・ドが十二名、ヘドラが最高責任者という設定だった。 あと他にもいるが、考

えて い な

「別ギルドが なくなった経緯

か ド、拠点ともに解体。 かけで、 他のプレイヤー、ギルドから嫌がらせを受けて、メンバーが辞めていった。ギル AOGメンバ AOGが嫌がらせしてきたギルドを滅ぼしてくれたのがきっ 一入りへ。

という感じの設定だった。

「どうやってNPCたちに休暇を取らせたか」

られないかな?」と説得した。 パインが「仕事を取り上げられる、とは考えないで。休暇を与えられた、と考え

^{*}あなたたちにね、贈りたいの。私たちが素敵だと思うものを、たくさん。渡した

いのよ

なぜ、休暇は素敵なのか

?

→リアルからユグドラシルヘログインできるから。ほら、 た。 素敵じゃろ?

なのでNPCたちにとっての休暇とは、至高の存在がナザリックに来る日、良い こんな感じで納得してもらっ

ものとして認識されている。

かし、仕事はしたい。彼らは今日もジレンマを抱えて休日を楽しんでいる。

「ユグドラシル時代、守護者たちがパインからプレゼントされていたもの」

アルベド:お菓子、装飾品、

コスメ

コキ

ュートス:お酒、蜜系、装飾品 わからなかったので、

好みが

転移してからは、

好みを聞いている。

適当に渡していた。

シリーズメモ 2 少なめ アウラ、 デミウルゴス:お酒、

シャルティア:紅茶系、香水、

マーレ:お菓子、ジュース系、

コスメ、

バス用品系、 装飾品

装飾品

おつまみ、

装飾品

王様のいないナザリック(完結)

著者 紅絹の木

発行日 2023年4月23日

ハーメルン -SS・小説投稿サイトhttps://syosetu.org/novel/115010/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。